

新書太閤記

第一分冊

吉川英治

青空文庫

序

民衆の上にある英雄と、民衆のなかに伍ごしてゆく英雄と、いにしえの英雄たちにも、星座のように、各の性格と軌道があつた。

秀吉は、後者のひとであつた。

生れおちた時から壮年期はいうまでもなく、豊太閤ほうたいこうとなつてからでも、聚楽桃山の絢爛けんらんや豪壘ごうらいにかこまれても、彼のまわりには、いつも庶民のにおいが盈みちていた。かれは衆愚凡俗をも愛した。

かれは自分も一箇の凡俗であることをよく弁わえていたひとである。かれほど人間に対して寛大な人間はなかつた。人間性のゆたかな英雄はと問えば、たれもみなまず指を秀吉に

屈するのも、かれのそういう一面が、以後の民衆の間に、ふかく親しまれて来たからではないだろうか。

おそらく秀吉への親しみは、この後といえどかわるまい。理由はかんたんである。かれは典型的な日本人だったから。そして、その同身感^{どうしんかん}から好きになる。わけてかれの大^{だい}凡^{はん}や痴愚な点が身近に共鳴するのである。

日本人の長所も短所も、身ひとつにそなえていた人。それが秀吉だともいえよう。かれの長所をあげれば型のごとき秀吉礼讃が成り立つが、その方は云わずもがなである。われわれが端的に長所をかぞえたりすれば、かえって彼という人間の規格は小さくなる。かれの大きさは、そんな程度のものではない。

わたくしのこの「新書太閤記」は、まだ秀吉の大往生までは書いていない。彼も英雄というものの例外でなく、晩年の秀吉は悲劇の人だ。大坂城の斜陽は「落日の莊嚴」そのものだった。私はむしろ、彼の苦難時代が好きである。この書においても、秀吉の壮年期に多くの筆を注いだのは、そのためだった。また、ひとり秀吉だけの行動を主とする太閤記でもありたくなかった。^{すくな}尠くも、信長出現以後、天正・慶長にまでわたる無数の^{けいせい}熒星、

惑星^{わくせい}の現没にも触れてゆきたい。特になお、家康が書けていなくては、太閤記は完^{まった}しといえないと思う。

むかしからある多くの類本、川角太閤記、真書太閤記、異本太閤記など、それから転化した以後の諸書も、すべてが主題の秀吉観を一にして、彼の性情を描くのに、特種なユーモラスと機智と功利主義とを以てするのが言い合わせたように同型である。

かつての太閤記作家もみな、秀吉の人間とは、なかなか、真正面に組みきれなかったことが分る。わたくしはそういう逃げ方はしまいと思った。わたくしの力不足はわかつているが、彼もまた、わたくしたちと同じ血と凡愚をもっていた一日本人であったという基本が、何よりも著者の力であった。

著者

にちりん げつりん
日輪・月輪

日本の天文五年は、中国の明の嘉靖十五年の時にあたる。

日本では、その年の正月に、尾張の国熱田神領の——戸数わずか、五、六十戸しかない貧しい村の一軒で——藁屋根の下の藁のうえに奇異な赤ン坊が生れていた。

後の豊臣秀吉である。

生み落された嬰兒は、母が貧しい物しか喰べていなかったので、五年樽の梅干みたいに、赤くて皺だらけだった。

藁廂の藁の先から、氷柱がさがっているような一月の寒さだったし、産褥を囲む小屏風一ツない家なので、嬰兒は、へその緒を切られても、泣く力すらなかった。

——死んで生れたか。

と、みな思った。

でも、父の弥右衛門やえもんだの、知己しるべの人たちが、産湯うぶゆから上げて、お襦袢むつのうえへ転がしてみると、突然、呱呱ここの声をあげた。

啼なくだけ啼きぬくと、この嬰兒あかこはまた、百年の眠りから覚めたように、大きな欠伸あくびを一つした。

——生きてるがなあ！

——何とか育とうによ！

襁たすきをはずした手伝いの女たちは、そういつて、せめて親の弥右衛門をなぐさめ、産婦を祝福したものだつた。

.....

その年の頃。

隣邦の中国では、大同だいどうに兵乱があり、遼東りょうとうが騒いだりしていたが、元の国号げんを革あらためて明みんとしてから、朱氏しゆし数百年の治世はまだ揺ぎゆるもしなかった。

いやむしろ、元の前時代、宋そうや唐とうの昔より、国運は漲りみなぎ、近代的に覚さめて以て、今や明

の盛代とさえ見えた。

黄河こうがの水。

揚子江ようすこうの水。

それも今と少しも変わらない——悠ゆうきゆう久きうとして黄色い濁流を、中国と日本のあいだの——
 大きな天地から観みれば一跨またぎの溝みぞに過ぎない海へ——不斷に吐き出していたのである。

×

×

×

天あまのはら

ふりさけみれば

春かすが日なる

みかさの山に

いでし月かも

遠く日本を出てから、五郎ごろだゆう大夫は、故国のこともいつか頭に薄れていたが、この歌だけ

は、忘れはしなかった。

阿倍あべのなかまろ仲麻呂の歌だ。

月を見、草を見、渡り鳥を見るにつけ、五郎大夫は、阿倍仲麻呂が歌ったような日本恋

しさの望郷に、どれほど駆られたことか。

だが、明日こそ帰るのだ！

十二年間も留まっていたこの江西省饒州府の浮梁（現在の景德鎮）を立つて。

「夜が明けたら……」

五郎大夫は寝ても眠れなかった。

「——日本に残して来た家の者たちは、わしが生きているとは夢にも思っていないだろうな。母はまだ達者かしら。弟妹たちは、どうしたろう」

更けるほど、頭は冴えてしまう。——明日の旅に、疲れを残してはならないと氣遣いながらも。

すると、同じ想いで、やはり寝つけないでいたものとみえ、日本から連れて来て以来、ずっと側に仕えてきた忠実な下僕の捨次郎が、

「旦那さま。お目ざめでございましょうか。お目ざめなら、ちよつと……」

と、寢室の扉を外から軽くたたいた。

五郎大夫は、臥床から降りて、榻（陶器製の腰掛け）へ腰を移しながら、

「おはいり。——おまえも眠れないのか」

「なあに、私は」

捨次郎は部屋の中へ進んで来て、主人の前に立った。

「宵にぐつすり寝ておりますが……ただあのことが一つ気になりました」

「あのことは」

「お子様のことです」

「……ウむ」

と、五郎大夫も、ずきんと、胸の傷む顔をした。

この浮梁ふりようにいる間に、五郎大夫はひとりの婦人との間に、子をもうけていた。

彼女は、廬山ろせんの向う側の星子せいしという土地から、この浮梁の窯業場かまばへ、働きに来ていた。

姓は楊よう、名は梨琴りきんといって、気のやさしい——その代り病身そうな細腰の美人だったから、激しい働きには、不向きだった。

話は、少し反れるが。

そもそもこの江西省の浮梁ふりようという土地は、日本まで遠く聞えている陶器の産地なのである。遠い唐の時代から窯かまが築かれ、宋元の頃には、宮廷の御用品を焼く官窯かんようが出来、

それに附随する役所だの、商家だの、職人町などで、当時、支那第一の陶府とうふといわれるほど殷賑いんしんを極めていた。

五郎大夫は、この陶器の製法を究めるために、実に、十二カ年の辛苦きくと郷愁きょうしゅうに耐えて、異国に暮して来たのだった。

日本から来るには。——海上六百里、長江を溯さかのぼつてから、なお四百余里もある。——そして、潯陽城じんよう（現在の九江キウウキヤン）の河港からまた、水路や陸路を経て、廬山をおおぎながら、鄱陽湖はようこをわたり楽平河をめぐり——文字どおり千里の旅を、半歳もかかるのだった。

その幾山河を、明日はまた、日本へ向つて帰るのだ。

五郎大夫も、捨次郎も、眠れないほど欣うれしい！

だが、宵から帳とばりを垂れて、顔も見せずに泣いてばかりいる者があつた。子を抱えた梨琴りきんであつた。

梨琴は、窯場で五郎大夫と親しくなつて、その妾めかけとも家婢かひともつかず、この家へ来たものだった。

五郎大夫の研究はその目的を達して、いよいよ曠はれて帰る日が来た。かねて覚悟してい

たことではあるし、彼の多年の苦心が、彼の本国で実を結ぶことを考えると、梨琴は悲しみ以上に、男のために欣よろこばなければいけないと思った。けれど、まだ三歳のあどけない男の子を、膝に見ると、

「この子をどうしよう」

と、思いみだれ、おとといの夜から泣きつづけて、顔も見せない程だった。

下僕の捨次郎が今——ふいに主人の寢室を訪れたのもその梨琴が迷っていた問題を、やつと彼女も思い決めたというので、取次に来たのであった。

「ただ今、梨琴りきんさんがいうには、きのうも一昨日も、あんなに云い張ったが、将来を考えると、やはり自分の手で育てるよりも日本へ連れて帰っていた方が幸福になるに違いない。——だから最初の相談はなしのように、子どもは、貴方にお頼みしたいと申すのですが」

「あ。……考え直したか」

五郎大夫は、彼女の氣持を思いやって、ほろりとした。

「ちよつと、呼んでくれい。——梨琴を」

「はい」

下僕の捨次郎は、部屋を出て行った。

大きい家ではない。

勿論、家も調度も、主従の服装も、すべてこの土地の風俗のままである。

「旦那さま。お連れしました」

捨次郎は、やがて梨琴の腕を抱いて、^{ささ}支えながらそこへはいって来た。

梨琴はすぐ床へ泣きくずれ、

「^{シヨンスイ}祥瑞さま！……」

と、^{むせ}咽んで呼んだ。

祥瑞というのは、五郎大夫の中国名であつた。陶器を焼く秘法を^{えとく}会得するためには、あらゆる習慣をすてて、この国の生活に、同化して来たのであつた。

「才……。今、捨次郎から聞いた。子どものことは、心配しないがいい」

こんな言葉では、慰めきれない気がしたが、五郎大夫は、そういうしかなかった。

梨琴は、やつと涙をおさめて、

「あなたにお別れする上に、子まで離すのは、死ぬより辛うございますが、よくよく考えてみると、わたしには身寄りもなく、体も弱いし、この子が大きくなるまでは、生きていられないと思います。そうすれば、この子はきつと、^{どれい}奴隷に売られるか、^{どひ}土匪に手なづけ

られるか、いい人間には成りつこありません」

もう彼女は、聡明な母の冷静に返っていた。

「——それにひきかえ、長年の間、あなた様のお生活^{くらし}ぶりや、御主従のあいだ柄を見てみると——知らない日本という国がうすうすでも分る気がいたしました。私の国では、あなたの国の人を、倭奴^{わど}だの、東洋鬼^{トンヤンキ}だのと、恐れています、それは南の海岸や、揚子江を溯^{さかの}つて来る、あの倭寇^{わこう}ばかり見て、それが日本人だと思いこんでいるからでしょう。……けれど私は、そうは思いません」

彼女は、泣いてばかりいた三日分の思いを一ぺんに晴らすように、云いつづけた。

「——日本には行ってみませんけれど、貴方のお心のうちには、何年か住まわせていただきました。貴方はいくら中国の着物を着、中国の女を持ち、中国の家に暮^たしても、血は驚くほど変らない日本人です。その日本の国は、情義に強く、武勇に長^たけて、しかも優美な国だということもよく分っているつもりです。——ですからこの子は、私の手に育てるより、貴方にお頼みしたほうが子の幸福だと考えたわけでございます」

「……………」

五郎大夫は 肅^{しゆくぜん}然^{ぜん}と、大きくうなずいて見せた。

捨次郎も傍らに立つたまま、頭を垂れて、聞いていた。

その時、がやがやと、家の外で声がしだした。

ふと見れば、窓は仄かな夜明けの光に染まりかけている。外の声は、きょう日本へ立つ五郎大夫を見送りに来てくれた窯場の人たちであろう。勿論がやがやいう言葉はみな中国音である。五郎大夫も、熟練した中国音で、

「やあ、皆の衆。お早くからありますがとうぞんじます。今すぐ支度しますから、茶でも喫^のでいて下さい」

扉をひらいて、挨拶した。

見送りの者たちは、

「いや、茶も朝飯も、途中の景色のいい所でやろうよ。支度がよかったら出かけようじゃないか」

と、いった。

浮梁^{ふりよう}は、丘に囲まれた、盆地の町だった。

土採り山や、薪山^{まきやま}や、無数の窯場^{かまば}が、目の下に見える。

窯の数力所から、暁の浅黄いろの空に向って、幾すじも、煙が立ちのぼっていた。

「祥^{シヨンズイ}瑞さん、もうこれが、お別れだな」

見送りの人々もいう。

祥瑞五郎大夫は、丘の上の道に立つて、

「ええ、まったく」

振り顧^{かえ}つて、しばらくじつと、眸^{ひとみ}をこらしていた。

言葉は、それだけしか出なかつたが、既往十二年のことが、一度に胸へ呼び起されていた。

わけて、後に残して来た梨琴^{りきん}の身が、不愍^{ふびん}であつた。

その梨琴は、今朝、

「わたしは、家の窓からお見送りさせて戴きます。生^{なま}なか途中まで行けば、もつともつと、日本までも、従^ついて行きたくなくなりますから」

といって、家に残つた。

飽くほど、頼ずりして、泣く泣く彼女が手から離れた子は下僕の捨次郎に今、負ぶわれている。男の子だ。

名は、楊景福^{ようけいふく}。

見送り人は、十五、六名もいて、荷物は一頭の驢馬ろばと、一台の鶏公車チイチャーとに積んだ。見送りの一人が途中で、

「捨さん、重いだろ。長い途みちだから、子どもはこれへ乗せたらどうだね」

と、いつてくれたので、捨次郎は背中の子を鶏公車へ移した。

車輪の大きな手押し車である。野や山坂のきらいなく押し通る小型の荷車だから、わざと齒の心棒には油を注ささない。車輪が廻るにつれて、キイキイと牝めんどり鶏が啼くような軋きしみ声をたてるので鶏公車という名があつた。

その荷物ねの間に挟はまって、嬰兒あかごは嬉々あかとしていた。時々、米の粉の搔いたのや、練飴ねりあめを舐ねぶらせて行く。

船で泊り、旅籠はたごに休み、幾夜を経てようやく、揚子江の畔ほとりの潯陽じんように出て来た。

見送り人もそれまで来る途中で、二人別れ、三人去り、ここの城内まで従ついて来た者も、やがてみな帰った。

船宿で、五郎大夫主従は、幾日か船の便を待っていた。

すると金陵きんりょう（南京）まで下江くだる船が今夜おそく、浦江ほんぽうの河口から出るという日

の——まだ明るい頃だった。

船宿の手代が、薄い紙包を持って来て、

「旦那にお上げしてくれと、瘦形やせがたの綺麗な女が、これを置いて、逃げるように行ってしまいましたか」

と、告げた。

容貌や年頃を糺ただすと、梨琴りきんにちがいないのである。

怪しんで、包を開いてみると、それは五郎大夫が長年のあいだ、手に入れようとしても、どうしても手に入れることが出来なかった陶製の秘本だった。

この本を所持していた者は、窯場かまばの職人頭いこじものをしている、依怙地者で、

「日本人には売らない」

といったり、途方もない多額な値を吹っかけたり、五郎大夫も遂に、断念するほかなかった物であった。

「どうしてそれを、梨琴が手に入れたらう？」

彼女が、姿を見せたのは、たつた今のことだという。五郎大夫は、子を宿の者に頼んで下僕の捨次郎と共に、城内の街を隈なく探しあつた。

見つからない。——梨琴のすがたは、とうとう見つからなかった。

日は暮れてしまう。

夜は深くなる。

かえつて、宿の者が、五郎大夫主従を探しぬいて、やっと追いつき、

「もう、船が出ますぞ」

と、いう。

あわてて、荷物や子どもを、ほんぼこう浦江の岸へ運んでもらい、ろてき蘆荻のあいだに繋いである

小舟に乗りこんだ。

便船は、江の中ほどに、いかり碇を下ろしている。そこまで小舟で行くのだった。

暗い水に怯おびえたのか、小舟が揺れ出すと、あかご嬰兒は、ひいツと泣き出した。

「泣くな、泣くな。何をお泣きやる。……よし、よし」

——すると何処からか、琵琶びわの音がながれて来た。この辺に水楼すいろうの灯は見えない。江

一面に、蘆荻と暗い水の戦そよぎであつた。

「ア、梨琴りきんじゃないか」

五郎大夫は、見まわした。

梨琴も琵琶が上手であつたからである。——だが、櫓を把とっている船頭は、少しも感情

のない声でいった。

「旦那、ご存じありませんか。この潯陽城しんようの船着きは、むかし白楽天はくらくてんとかいう詩人うたびとが、琵琶びわこう行つていう有名な詩を遺した跡だつていうんで、琵琶亭びわていがあるし、それから船で琵琶ひを弾いて、旅のお客さまに伽ときをする妓おんながいるんです。……お望みなら、舷ふなべりを手でたたいて、オーイと呼んでごらんなさい。すぐ漕ぎよせて来ますから」

五郎大夫は、聞き流して、闇をながめていた。

琵琶はやんだ。

そして、通りすがった蘆間あしまの蔭に、一艘そうの船を見た。竹で編んだ苦とまのうちから、薄い灯と火もしびの光が洩れ、その明りの中に、耳環みみわをした女の白い顔が見えた。

「……？」

もとより梨琴ではない。

けれど彼女の心と、五郎大夫の心とは、この星の下と、波間のうえとで、明らかに交流していた。

「日本に帰っても」

と、彼は独り思った。形の上の別れが、絶対の別れではないと思った。

一つの花が、他の一つの花へ、花粉を触れた時、それから生れ出た物は、永遠に地上から消えない芽を土から持つ。

その芽は、自然が手伝つて、繁茂する。花になりまた、結実する。

千里を隔てても、土と土とが、また——心と心とが、かくまで似ている二つの国では、そうした文化の交流は、雨と海水とのように、何千年も前から自然に行われて来た作用であつた。

深夜。長江の秋だ。

五郎大夫は、東へ東へと、揚子江を下つてゆく船の上でも、そんなことを想いつづけた。自分が、この江を溯さかのぼつて来たのも、その作用の一役を、自然が命じているのである。自分と濃い血液のつながっている数代前の祖先、伊藤五郎大夫は、道元どうげんぜんじ禪師かしずに侍いて、やはり支那へ渡つた人であつた。

臨濟りんざいの栄西えいさい禪師ぜんじも。

また、弘法こうぼうも。

ずっと以前の遣唐使けんとうしの若いたくさんな人々も。

同じに、支那からも、秦しんや漢代かんだいの人々が、無数に日本へ移り住み、それはすでに、こ

の国の民くさとなつて、血も立派に一つとなつて今日に流れて来ている。

野の子ども

「おらの蜂はちだぞツ」

「おらのだい」

「うそだいうそだい」

「見つけたのは俺おらだい」

この辺りいちめん、真つ白な大根の花と、咽むせるような菜の花の畑である。

その中を、棒でたたいて、七、八名の悪童連が、朝鮮蜂とよぶ尻に袋を持ったのを、一匹でも見出すと土旋風つちつむじでも駆けるように、われがちに奪い合ひだった。

弥右衛門やえもんの子、日吉ひよしは、ことし七歳になる。

胎内たいないにいた時、母が十分に食物を摂とっていなかったせい、五年漬の梅干みたいな顔を

をして生れ落ちたこの子は、七歳になつても、まだその不足が取り返せないと思え、他の子より小粒で、貌かおに小皺こしわがあつた。

だが、悪戯と乱暴は、この中村郷の童の中なかむらごう わらべでも、一といつて二と落ちない。

「阿呆ッ」

蜂を争いながら、日吉はどなった。

大きな子に、撥はねとばされたのである。

転んだ上を、またほかの子が踏んづけた。日吉は、その足を掬すくって、

「――捕とった者もンの蜂だぞ。捕とったら捕とった者もンの蜂だい」

と、宣言して、敏びん捷しょうに先へ駆けた。

そして、宙へ飛ぶと、その手の中に蜂をつかんでいた。

「やあい、おらの物もんだ」

日吉は、蜂を握てって、十歩ほど先へ行ってから掌てをひらいた。蜂の首と、羽を掬もいで、すぐ口へ入れてしまった。

蜂の腹は、甘い蜜みつの袋である。砂糖などの味を知らない少年の舌には、天地にこんな美味まい物があるかと思われるのだった。

「……アア、甘え」

日吉は、眼をほそくして、蜜みつが喉のどをながれ込んでも、何度も舌を鳴らしていた。

「……………」

ほかの連中は、羨うらやましげに、彼の表情を唾つばを溜ためて眺めていた。蜂はいくらも飛んでるが、朝鮮蜂は少ないのだ。その口惜さるしさがこみあげて、

「猿」

と、大きな童わっぱがいった。仁王と綽名あだなのある少年である。

仁王だけには、日吉も敵かなわなかった。それを知っているので、みな尾について、

「えて坊」

「猿やい」

「さる。さる。さる」

と、いちばんチビの於福おふくまでいった。

於福は、数え年九ツというが、七歳の日吉とそう違わなかった。しかし、色は白いし、目鼻立ちもよく、容貌では較くらべものにならない。

それに、村では、大尽子だいじんこの方で、小袖らしい着物を着ているのも、於福だけだった。

ほんとの名は、福太郎ふくたろうとか福松ふくまつとかいうのだろうけれど、男名でも、頭字に於おの字をかぶせて呼ぶことが、良家の風習となつているので、このお大尽子だいじんこも、そんな真似まねをし

て呼ばれているものとみえる。

「やい、いったな！」

日吉は、誰に猿とよばれても、怒った例しはなかったが、於福にいわれると、睨めつけた。

「いつも俺が、庇^{かば}つてやるのを、忘れたのか。白茄子^{しろなす}め！」

日吉にそう罵^{のの}られると、於福は何ともいえない、気の弱い顔をして爪を噛んだ。

白茄子と悪口をいわれたことよりも、恩知らずといわれたことが、子ども心にも、強く恥を感じたらしかった。

ほかの子供らは、もう眼を反^そらしていた。そして朝鮮蜂の代りに、畑の彼方を通る一筋の黄色い埃^{ほこり}に眼をあつめた。

「ア、兵隊だ」

「武者が通る」

「戦^{いくさ}から帰つて来た」

わあつと、両手を挙げて、彼らは歓呼^{かんこ}した。

領主の織田信秀^{おだのぶひで}と、隣国の今川義元^{いまがわよしもと}とは、両立しない二つの勢力だった。国境方面

では、絶えずどこかで小競り合いがあつた。或る年は、今川家の精銳が、この辺まで潜行して来て、ふいに民家に火を放つたり、田の稲を刈つたり、畑を荒したりして去つたこともある。

そういう時、領主の兵は、火の手を見るや、那古屋や清洲城から殺到して、眼の前で敵を蹴ちらし、敵を斬り、そして各所の砦や木戸の兵も出合わせて、これを殲滅した。

冬――

そんな年には当然、土民は、食物にも家にも困つたが、誰も、領主を怨まなかつた。飢えれば飢えるで、寒ければ寒いで、

(今に、一泡ふかしてやるで)

と、むしろ今川氏に対する敵愾心を昂めた。

この辺の童は、生れた時から、それを見、それを聞きして、育つて来たのである。

だから領主の軍勢とみれば、自分自身みたいに思った。また、子供らの生れながらの血も、兵馬を見ると、何を見たよりも強く昂奮した。

「行つてみる」

誰かがいうと、わつと皆、それへ向つて今も、駆け出した。

於福と日吉だけは、後に残つてまだ睨みあつていた。気の弱い於福は、他の者と一緒に駈けて行きたかつたが、日吉の眼に縛られて、去るに去れない姿だった。

「……ごめん」

於福は、恐々、こわこわ日吉のそばへ寄つて、彼の肩へ手をのせた。

「ごめんね。……ね」

日吉は、ぷつと赤い顔をして、肩を揺りうごかしたが、於福の泣き出しそうな眼をみると、急に、

「俺んことを、一緒になつて、悪ていいうからだい」

と、肩を柔らげた。

そしてまだ少し胸がすまないようにいつた。

「汝れのことを、何日もみんなが、唐人子、唐人子つて、からか揶揄うだろが。おらは揶揄つたことなんかあるかい」

「ない……」

「唐人子だつて、おら達のなかまになればおら達の国の者んだい。そういつてるだろ」
「うん」

「ほんとだぞ、於福」

「うん……」

於福は、眼をこすった。泥が涙に溶けて、眼のまわりにぶちができた。

「ばかやい。泣くから唐人子っていわれるだい。武者を見に行こう、ア、早く行かねえと行っちまうぞ」

於福を引ッぱつて、日吉も後から駈け出した。彼方の黄色い埃ほこりの中に、軍馬や旗差物はたさしものがもう近く見えていた。

二十騎ほどの侍と、二百人ばかりの歩兵だった。それに小荷駄の一隊が、ごつちやに交まじつて——槍も長柄ながえも弓持も、秩序なく前後になつて——熱田街道あつたかいどうから稲葉地いなばじの野づらを横ぎり、庄内川しょうないがわの堤どての上へと、今、一騎一騎、背のびするように登りかけたところだった。

「——わあッ」

畑から飛んで来た子ども達は、軍馬を追いつ越して堤へ駈けあがった。

日吉も、於福も、仁王も、ほかの洩はなつ垂たらしも、眼をかがやかして、そこらの野薔薇のばらや葎すみれや雑草の花をむしり取つて、両手につかみ、眼の前を勇しい武将や兵が通るたびに、

「八幡。^{はちまん}八幡」

「勝ちいくさ」

「華武者^{はなむしや}祝え。華武者祝え」

ふしをつけて叫びながら、手の花を、声と共に抛^{ほう}り合つた。

村でも、街道でも、領土の子ども達は、兵馬を見るとこう躁^{はしや}いで祝福した。——けれど

馬上の将も、足を引き摺^ずつて行く兵隊も、みな仮面のような強い顔を黙々と持つて、

(寄るな……)

とも叱らない代りに、彼らの歓呼に、ニコと一笑を酬^{むく}いてもくれなかった。

殊に今通るこの一隊は、三河方面から引き揚げて来た軍の一部らしく、前線でさんざんに戦い抜いて来たものとみえ、馬も人も疲れぬいていた。

馬の中には、腹を突かれて、腸をぶら下げている馬もいた。兵の中には、満身血になつて、戦友の肩にすがつてやつと歩いて行くような兵もいた。

槍の柄にも、具足にも、干乾^{ひから}びた血は、漆^{うるし}みたいに黒く光っている。——そして、どの顔もどの顔も、汗と埃^{ほこり}にまみれ、ただぎらぎらした眼のみが続いて行つた。

「水を飼^かえ。——馬に」

河原へ降りると、先頭の武将のひとりが云った。

側を囲んでいた騎馬の侍がすぐ、そのことばを大声で、隊に伝え、

「やすめ」

と、令を布いた。

騎馬の者は、ばらばらと馬を降り、徒歩かちの兵は、ほつと足を止めて、

ああ！

といわないばかりに皆、草の中に腰を落した。

清洲きよすの城は、川向うの彼方に小さく見えていた。隊の中には、この尾張四郡の領主、織お

田備後守信秀だびんこのかみのぶひでの弟にあたる織田与三郎よさぶろうがいた。——与三郎は床几しょうぎに掛け、五、六名

の旗本に囲まれ、黙然と、空を見ていた。

「……………」

旗本たちも、口をつぐみ合っていた。脚の傷や、籠手こての傷を、縛り直している者もある。

この人々の眉色から察するに、前線での戦いは、明らかに、味方の大敗であつたに違いなかった。

けれどもとより子ども達に、そういう観察はない。血を見れば、自分が血を流したよう

に勇み、槍や長柄の光を見れば、敵を殲滅^{せんめつ}して来たものと思いこんで、ただ昂^{たか}ぶり躁^{さわ}ぐのだった。

「八幡八幡」

「華武者^{はなむしや}、華武者」

馬に水を飼っていると、馬にも花を投^なげて嘸^{はや}した。——すると駒のそばにいた一人の侍が、日吉を見かけて、

「弥右衛門^{やえもん}の倅^{せがれ} おつ母さんは変りないか」

と、手招きして訊いた。

「あ? ……。おらけえ」

日吉は、彼の手の下へ歩いて行つた。黒い鼻の穴を上へ向けて、その人を正視した。

「うん……」

日吉を手招きした手は、日吉の汗くさい頭を押えて、大きく頷^{うなず}いた。

まだ二十歳そこそこの若い武者だった。この人も戦つて来た兵隊のひとりかと思うと、日吉は、頭に載^のせられている鎖籠^{くさりごて}手の重い手も、ぞくぞくする程、光榮なこちらがした。(どうだ、おれの家は、こういうお侍と知つてゐるんだぞ)

という誇らしさを、並んで此方こつちをながめている他の友達へありありと顔つきに示していた。

「弥右衛門の子。おまえはたしか日吉といったな」

「ああ」

「いい名だ。いい名だ」

若い武者は、彼の頭を一つ撫なでまわした。そしてその手を、自分の革かわ胴どうの腰帯のところにへ当てると、少し身を反そらしながら、日吉の顔を眺め直して、独りで何か笑い顔していた。

日吉は、大人おとなにでも、女の人にでも、すぐなつっこい顔つきを示すのだ。これは生れ性とみえる。まして知らないおじさんから——しかも離れてばかり見ていた武者から、直じかに頭に手を載せてもらったので、大きな眼は忽ち得意にかがやいて、いつものお喋しゃべりがすぐ出て来た。

「だけどなあ、おじさん。おらのことを、誰も日吉って呼ばないよ。日吉って呼ぶのは、おつ母さんとお父さんだけだ」

「似てるからな」

「猿にだろ」

「自分も心得ているのはなおい」

「だって、みんないうもの」

「はははは」

戦場暮しの侍の声は、笑い声まで大きかった。側にいた侍たちも同時に笑った。その間、日吉は無聊ぶりような顔して、ふところから黍きびの茎くきみたいな物を出してはポリポリ齧かじっていた。その茎の汁は青臭いなかに甘い味があつた。

「ベツ。……ベツ」

日吉は、噛むだけ噛んだ甘黍あまきびの糟かすを、そこらじゅうへ、行儀もなく吐きちらした。

「幾歳いくつになるか」

「おらの年け」

「ウム」

「七歳ななつ」

「もうそうなるかなあ」

「おじさん、何処の人」

「おまえの母親と親しい者だ」

「へえ？」

「おまえの母の妹は、ようわしの屋敷へは遊びに見える。帰ったら、母へよろしくいつてくれ。藪山やぶやまの加藤弾正かとうだんじょうが、お達者に——というていたとな」

一息やすんだ兵馬は、その時もう列を立て直して、庄内川の浅瀬を彼方へ渡り出していった。

振り向くと、弾正も急いで、馬の背に跳ねあがった。陣刀だの、具足だのが、その人の体で、羽ぶるいするようにガチャツと鳴った。

「戦いくさがやんだら、そのうち遊びに寄るぞというてくれ。弥右衛門どのへも」

云い捨てると、列から後れた弾正は、駒はやを速はやらせて、川瀬へ入れた。駒の脚から白い水が颯々さつさつと立つて行く——。日吉は、甘黍あまきびの糟かすを口に入れたまま、恍惚うつとりと見送っていた。

この一軒

彼の母は納屋^{なや}へはいるたびに、心が暗くなった。

漬物や穀類^{たきもの}や焚物^{たきもの}や——ここへはいる時は必らずそういう蓄えを取り出しに来るのであるが、その生命^{いのち}の糧^{かて}は、常に途切れがちだった。

（この先、どうして……）

と、胸がつまるのである。

子どもは、七歳^{ななつ}の日吉と、十歳^{とお}になる姉と、わずか二人に過ぎなかったが、どっちもまだ何の働きに出せる年でもないし——良人^{おつと}の弥右衛門^{やえもん}は、夏でも炬燵^{こたて}に坐ったきりで、湯沸^{ゆわか}の下を見ているだけのことしかできない不具^{かたわ}者^{もの}だった。

「——あんな物、いつそのこと薪^{まき}にして焚^たいてしもうたら、胸が癒^いえように」

納屋の壁を仰ぐと、真つ黒な櫓柄^{かしえ}の檜^ひと、陣笠と、切れ端のような古具足^{ふるぐそく}とが、吊^{つる}してあった。

以前、良人^{いん}が戦^{いくさ}に出るごとに、身に着けて出た晴着である。

それも今は、煤^{すす}だらけになったまま、不具^{ふぐ}の良人と同じように、納屋の隅に埋もれていた。彼女は、見るたびに、忌^{いま}ましい気もちに囚^{とら}われた。戦^{いくさ}というものに顛^{おの}きを覚えて、

（良人が何というおうが、日吉は、侍にはさせぬ）

と、思うのであった。

自分が木下弥右衛門へ嫁とつごうとした頃は、良人を選ぶなら侍と思ったものであった。自分が生れた御器所ごきその家も、小さいながら武家だったし、木下弥右衛門も足輕ながら織田信秀の家中だった。そして今、この納屋の煤すすに埋もれている具足も、夫婦になると同時に、（未来は千石取りに）

と、いう希望を賭けて、欲しい世帯道具よりも先に、無理工面して、新調したものではなかったか。

夫婦ふたりにとれば、懐かしい思いでの品でもある――。

だが、そんな若い頃の夢は、今の現実のまえには、一顧いつこの価もないし、むしろ呪のろわしい気がよけい胸を嘔むばかりである。良人はろくな手柄も立てないうちに戦場で足腰も立たないような不具者になってしまった。身分の低い足輕なので、御奉公を退ひくと、もう半年目から生活たつきにも困り、結局、百姓でもするしかなかったが、その百姓仕事さえ出来ない今の良人であった。

でも、女手で。しかも二人の子を抱いて、桑を摘つみ、畑を打ち、麦を踏み、数年の貧乏と闘つては来たが、

(この先? ……)

と考え出すと、さすがに、この細腕と根気がつづくかどうか、彼女の女ごころは、納屋の闇のように、凍^{こご}えてしまう。

晩の糧^{かて}に、乏^{あわ}しい粟と、大根の切干^{きりぼ}しとを、箆^{ざる}に入れて、彼女はやがてそこから出て来た。まだ三十前なのに、日吉を生んでは、産後^たが祟^{たた}つて、いつも青い桃のように見える彼女の顔いろだった。

「——おつ母」

日吉の声だ。

「おつ母ア……」

と、家の横を廻つて、自分の姿を探しているらしいのである。

彼女は、ニコと笑った。

そうだ!

自分にも一つの光明はある。あの日吉を育てることだ。はやく大きくして、あの気の毒な不具の良人に、一日一合のお酒でも上げられるような良い跡取り息子に仕上げることだ。彼女はそう思って、急に心も明るくなり、

「日吉やあ。ここだよ。——母はここにおるがのう」
と、大きく答えた。

母の声に、日吉は飛んで来た。そして、箆ざるを抱えた母の肩へぶら下がって、
「おつ母。今日なあ、おつ母の知ってる人に会ったよ、河原で——」

「誰にの」

「お侍だよ。藪やぶ山やまの加藤つていえば、おつ母が知つてるといった。——ああ、それから、
達者で暮しているかって、おらの頭を撫でて訊いたよ」

「じゃあ、弾だん正しょうさんじゃろ」

「戦いくさから帰つて来た大勢の武者の中に交じつてね、良い馬に乗つてたよ。——あれ、誰だ
い？」

「だから、今いうたでないか。光明寺の藪やぶ山やまに住んでいる弾正さんだよ」

「弾正さんて」

「御器所ごきその妹の——許い婚なずけじゃがの」

「許婚つて？」

「ま。執しつこい」

「だって、分んねえだもの」

「今に、夫婦になる、良人のことじゃがな」

「なアんだ。……じゃあ、おつ母の妹のお智むちさんのことけ」

日吉は、何と解したか、クツクツ笑った。彼の母は、その白い歯と、小ましくくれた唇を見ると、わが子ながら、早熟な——と小憎らしく思うのだった。

「おつ母。納屋ん中に、これつくらいな、刀があつたら」

「あるが、どうするのじゃ」

「貸してくんないか。どうせ、あんなボロ刀、お父とっさんも、もう使やしないから」

「また。戦いくさあそ遊びか」

「……いいだろ」

「いけません」

「なぜ」

「百姓の子が、刀など、持ち馴れたとて、どうなろうぞ」

「おら、侍になるんだい」

日吉は、駄々ツ子足を踏んで、一文字に唇くちをむすんで云った。——彼の母は、じつと睨ね

めすえているうちに、その眼を涙でいっぱいにしてしまった。

「……阿呆あほうっ」

突然、そう叱ると、母はあわてて涙を拭き、片手に、彼の手を拉ひっぱして、

「少しは、水など汲んだり、姉の手助けなどしなされ」

ぐいぐいと曳ひいて、土間口の方へ歩き出した。

「嫌いやでい。嫌いやでい」

日吉は、母と争って、手と手を引つ張り合いながら叫んだ。しかし、地に踵かかとを踏ふンばつても、彼の母は、彼の歩みを、自分の意志のほうへ引き寄せずにおかなかつた。

「——やだよウつ。嫌だつてえに。おつ母の馬鹿。嫌でい！」

すると、竹窓の中から、老人のような咳せき声こゑが、炬しけむりと一緒に洩もれてきた。

父の声を聞くと、日吉は首をすくめて黙ってしまった。父の弥右衛門はまだ四十がらみであつたが、長年、廃人同様な起おき臥ふしをしているので、咳せきの声まで、五十過ぎの人みたいに皺しわ喰くれていた。

「……吩咐いけてやりますぞ。余り母を困らすと」

母は、そつと手を弛ゆるめて云つた。

解かれた手を顔へやると、日吉は眼をこすって、しゆくしゆく泣き出した。母はこの駄々坊を持って余し顔に、

（この子はまア……）

と見つめているうち、自分も共に、泣いてしまいたくなった。

「——お奈加、お奈加。なにをまた日吉と喚き合っているのだつ。見ツともない。自分の子と争って、泣いているたわけがあるか」

暗い屋根裏の見える窓の内でもた——病人特有な、癩のたかい、弥右衛門の声だった。

「あなた。——少しこの腕白を叱ってください。今も今とて」

弥右衛門に嘯鳴られると、彼の母は、そこから窓越しに、日吉のいけないことを、一息に訴えた。

すると、家の中の弥右衛門は、げらげら笑って、

「何のこった、納屋の中に抛りこんである俺の古刀を、日吉が、持ち出そうというだけか」

「そうなんです」

「戦の真似事でもする気なのだろう」

「それがいけないんです」

「男の子だ。弥右衛門の子だ。いけないことがあるものか。出してやれ、出してやれ」

「……………」

お奈加は、まあと、呆れ顔あきを窓へ向けたまま、恨めしそうに唇を噛んで、眼に涙を溜ためていた。

（どうだ！）

日吉は、勝った気持を、高慢そうに眼にあらわした。——だが、ほんの瞬間だった。その眼は、母の青じろい頬をつたう涙を見るに及んで、すぐ萎しぼんでしまった。

「おつ母、泣くのお止しよ。おらはもう、刀はいらないや。——姉えに水を汲んでやろうつと！」

迅はしつこい日吉は、すぐ土間口のほうへ駆けて行つた。土間は広く、一方は炉部屋の上がりがまち框、一方は台所だった。

十一歳ばかりの女の子が、猫背を立てて、火吹竹で泥へつ竈づいの口をふいていた。

「姉え。水汲んでやろか」

日吉が、飛び込んで来ると、おつみは、びくつとした眼を上げた。——そして何をされるかと、恟々おどおどとして、

「いいがな。いいがな」

と、顔を振った。日吉は、水甕みずがめの蓋ふたをあけて見て、

「オヤ。水なんか、いっぱい汲んであるじゃねえか。味噌を搗すってやろか」

「味噌など搗すってくれんでいいわ。邪魔な——」

「邪魔だって、おらは、用をしたいんだ。用をさせろ。漬物出してやろか」

「今、母さんが、出しに行つたがな」

「じゃ、何するんだ」

「ぬしやあ、大人おとなしくしていたら、母さんも欣よろこぶによ」

「こんなに大人しいじゃないか。……なんだい。まだ竈かまどの火がつかねえでやがる。おらが

つけてやる。どけ、どけ」

「いいってえに！」

「どけつたら」

「あれ、そんなことするで、消えちもうた」

「嘘つけ。自分が消したくせに」

「嘘。嘘。ぬしが……」

「うるせい」

日吉は、燃えない薪まきに焦しれて、そこを離れるついでに、おつみの頬を、ぴしやりと、一つ打った。

おつみが、大きな声で、泣きながら奥へ云いつけた。弥右衛門のいる炉部屋とは近いので、すぐ父の声が、日吉の耳を痺しびれさせた。

「こらつ、姉を打ったな。男のくせに、女を打ったな。——日吉つ。ここへ来い。ちよつと、これへ来い」

壁の陰で、日吉は唾つばをのんだ。そして告げ口したおつみを睨みつけた。後からはいつてきた母は、またしても——と呆れ顔に、土間口で立ち止まっていた。

父親は怖かった。世の中で怖いものの第一が父親だった。

日吉は、畏かしこまつて、

「何ですか」

と、弥右衛門の顔を仰いだ。

木下弥右衛門は、炉の前に坐つて、麻箱に肱ひじをついていた。

うしろの壁には、起居につかう杖が立てかけてある。廁かわやへ通うにも、その杖にすがらな

ければ歩けない彼であつた。

常に坐っている彼の傍らにある麻箱は、そういう不具な体でも、いくらかの家計を助けるために、気が向くと、麻を紡つむいでは、それへ溜めておく内職道具の一つであつた。

「日吉」

「はい」

「あまり母おふくろ親に世話をやかすじやないぞ」

「え」

「姉に向つて、悪たいをつくのもよくない。男のくせに、女どもを相手に、何という体ていだ」

「何も……何もおらは」

「だまれ」

「……………」

「わしには耳がある。おまえが何処で何をやっているかぐらいのことは、坐つていても知つている」

日吉は、心のうちで顫おのいた。父のことばは、父のいう通りに思った。

だが弥右衛門は、この子が可愛くて堪らなかつた。——戦場で片輪となつた、この脚、

この手は、二度と前の体に回す^{かえ}ことはできないが、この子を通して、自分の血は百年先へも生かすことが出来ると信じるからである。

(……だが?)

と弥右衛門はまた、日吉を見ていると、情けない心地がした。

子を見ること親に如^しかず——というが、いかにひいき目に見ても、この見るからに奇異な顔した^{はな}洩^{はな}たらしの腕白が、親以上の者になって、親の名折れを雪^{そそ}いでくれようとは——考えても考えられなくなるからであつた。

とはいえ、これは一粒だねだ。弥右衛門は懸けられない期待を、無理にも日吉に懸けているのだつた。

「納屋の刀を、欲しいのか。——日吉」

「ううん……」

日吉は、首を振った。

「欲しくないのか」

「……欲しいことは、欲しいけど」

「なぜ正直にいわぬ」

「だって、おつ母^{かあ}が、いけないっていうんだもの」

「女は、刀嫌いだからな。よしよし、待っているよ」

弥右衛門は、坐ったまま、ぐるりと後ろを向いた。そして壁の杖につかまり、ちんばを曳いて奥へはいって行った。

この家は、貧乏百姓に似ず、間数^{まかず}はたくさんあった。日吉の母の縁者が住んでいた家だからである。弥右衛門の方には、ほとんど身寄りがなかったが、母の方の親類にはまだどうにか暮している家が何軒かあった。

（何しに行ったんだろ？）

日吉は、叱言^{こごと}をいわれないのが、かえって気味悪かった。

弥右衛門はやがて、一腰の脇差を取り出して戻って来た。それは納屋の隅に錆^さびている物とは違って、袋にはいつていた。

「日吉。これはおまえの物だ。欲しければ、いつでも持て」

「え。おらの……？」

「だが、まだまだ、今のおまえでは、この刀は差せまい。差しても、人が笑う。——これを差して歩いても、人が笑わぬようにはやくなれ。いいか、早くそうなってくれ」

「……………」

「この刀は、祖父^{おじい}さんが、鍛^うたせたものだ」

弥右衛門は、眼をねむつて、ぽつりぽつり語り出した。

「祖父^{おじい}さんは、百姓^{ひやくしやう}だった。その百姓から身を起して、一旗挙げようとした時に、これを刀鍛冶^{とうぐわい}に鍛^うたせなすった。その頃まで、木下家の系図という物もあったらしいが——^{いっち}一朝^{いちやう}にして、焼いてしまった。祖父さんは、事を起す前に、領主に襲われて、討死してしまいなすった」

「……………」

「そういう人が、わしの子供の時分には、たくさんあつた。乱世^{らんせい}の慣^{なら}いだ」

弥右衛門は、呟^{つぶや}くようにいう。

いつのまにか、隣の部屋には燈心^{ともし}が灯^{とも}つている。この部屋は、炉^ろの焰^{ほのお}で明るかった。

日吉は、赤い焰を見つめながら父親のことばに聞き入っていた。——弥右衛門もまた、日吉に分つても分らないでも、こういう真実を吐く相手には、妻でもないけないし、女の子のおつみでもないけなかった。

「——木下家の系図があればのう、おまえにも、分るように話せるが、……系図は焼けて

しまつてない。だが、生きた系図は、おまえにも伝えてある。……これじゃ」

弥右衛門は、手頸てくびの青い静脈じようみやくを撫でていった。

——血だぞ。

と教えたのである。

日吉は、頷うなずいた。そして自分の腕くびを握つてみた。自分の体にも、青い血管がある。はつきりと分つた。これほど確かな——しかも生きている系図はない。

「祖父さんおじいから先は、どんな人が御先祖だったか知れぬが、その遠い御先祖のうちには、偉い人もいたに違いない。多分、お侍もいたろう。学者もいたろう。——そういう方たちの血が流れ流れて、わしからお前にも、伝わっているわけだ」

「……ええ」

日吉はまた、頷うなずいた。

「だが、わしは偉くない。あげくに、この通りな不具者だ。……だから日吉、貴様は偉くなつてくれよ」

「……お父とっさん」

日吉は、円い目をあげた。

「偉くなるって、どんな人になったら偉いの」

「それやあ、限りがないが……。せめて、槍一筋の武士になればなあ。……この祖父さんの遺物^{かたみ}をさして歩けるようになってくれれば——わしは死んでも心残りが無いのだ」

「……………」

日吉は、当惑したように、黙ってしまった。自信のない顔つきである。父の眼から眼を反^そらして、きよときよとしていた。

七歳の子ともだ。無理もない——と思いながらも、弥右衛門は、その頼りない挙動を見ると、

（やはり血ではない、境遇かなあ？）

と、心のうちで嘆息^{ためいき}が洩れるのだった。

先刻^{さっき}から、日吉の母は、膳^{ぜん}ごしらえをして、良人^{おとと}の話がやむのを、隅の方で黙って待っていた。

彼女の考えは、弥右衛門の考えとは、あべこべであつた。

（侍になれ。偉くなれ）

と、子を励ます良人を、彼女は恨めしくさえ思った。そして密^{ひそ}かに、

（こんな子に、無理なことばかりを。……日吉や、お父っさんは、御無念なので、あんなことばかしいけれど、おまえまでが、お父っさんの轍^{てつ}を踏んではいけないよ。——愚か者なら愚か者でよいほどに、真面目に働いて、田の一枚でも持つような百姓になつてくだされや……）

胸いっぱい、子の行く末を、祈るのだった。

「さ、夜食にしようぞ。日吉もおつみも、寄つたがよい」

彼女は、子たちの父を中心に、炉のまわりへ、箸や椀^{わん}をくばった。

「飯か」

いつものことながら、弥右衛門は貧しい稗^{ひえ}粥^{がゆ}の鍋^{なべ}を見るたびに、さびしい顔になった。

妻にも子にも、満たしてやり得ない自責を——男親として、人知れず苦しむらしかつた。

だが、日吉もおつみも、一椀の稗粥に会うと、頬も鼻も赤くして、美味^{うま}そうに啜^{すす}り合い、貧しさなどは思わなかつた。これ以上の富貴は知らないからである。

「新川の茶わん屋様から味噌もいただいてあるし、乾菜^{ほしな}も乾^{ほし}栗^{ぐり}も、納屋に蓄えてあるほ
どに、おつみも日吉も、たと喰べたがよいぞや」

子達の母は、そう云いながら、不具の良人が、家計を心配しないように、氣^{つか}を遣つてい

た。

そして彼女自身は、二人の子が腹いっぱい喰べ、良人も十分に済ました後でなければ箸を取らなかつた。

夜食がすむと、間もなく寝てしまう。何処の家でもそうなのだろう。夜の中村は眞の闇だつた。

——ところが、闇夜になつてから、野や道を、人の蹻あしおと音がしきりとする。近国で戦いくさがある時ほど、そうだつた。

野武士の群れだの、軍馬だの、落おちゆうど人だの、密使の往来などが、夜を好んで動くのである——

「ウ、ウウム。……ウウム」

日吉は、よく魘うなされた。

眠りの中に、闇夜の蹻音が聞えるのか、天下の動乱が、彼の夢を、怯おびえさせて熄やまないのか。

或る夜などは、側に寝ていたおつみを蹴とばし、おつみがびっくりして、泣きだすと、
「八幡つ、八幡つ、八幡つ」

と呶鳴つて、いきなり寢床から跳ね上がり、眼ぎめて、宥^{なだ}めても、まだ寢^ね呆^ぼけて、何か昂^{たか}ぶり続けるようなことがまゐつた。

「瘡^{かん}の虫だ。この項^{うなじ}に、瘡^{やいと}の灸をすえてやれ」

と、弥右衛門はいう。

だが、日吉の母は、

「瘡^{かんやいと}の灸は、いくらすえたか知れませぬ。あんな子に、あなたが、刀を見せたり、御先祖のはなしなど聞かせるから、いけないんですよ」

と、いった。

×

×

×

そのうちに、この一軒にも、大きな変りが見舞つた。

翌年——天文十二年一月二日に、弥右衛門が病死したのである。

人間の死。

というものを、日吉は初めて、父の死顔に見たが、涙はこぼれなかった。葬式の中でも、飛んだり跳ねたり、遊んでいた。

その一周忌も過ぎて、翌年の九月頃。

日吉が九歳ここのつの秋だった。

この一軒にまた、人がたくさん集まった。餅をついたり、酒をのんだり、めでたいめでたいと歌ったりして夜を更ふかした。

親類の一人が、

「日吉、今夜のあの賀むこどのが、おまえの次のお父さんになる人だ。——弥右衛門どのとも、以前からの友達で、やはり織田家で同朋衆どうぼうしゅうを勤めている筑阿弥ちくあみどのだ。よいか、今度のお父さんにも、親孝行をせにやいかんぜ」

と、彼に云い聞かした。

日吉は、餅を喰べながら、奥を覗きに行った。いつになく、母がきれいに化粧して、知らない小父さんと並んで俯向うつむいていた。それを見ると、欣うれしくなって、

「八幡、八幡、花抛はなほうれ」

と、日吉は、その晩も誰よりもはしゃいでいた。

香炉こうろへん変

また、夏が巡^{めぐ}つて来た――

とうもろこしの背が高くなつた。日吉や村の悪童連は、毎日、庄内川^{しょうないがわ}で泳いだり、田で赤蛙を捕つて喰つたり、裸体^{はだか}で暮した。

赤蛙の肉はうまい。朝鮮蜂の尻^{しりぶくろ}袋とは比較にならない。疳^{かん}の薬という母に、喰べることを教えられてから味をしめた物である。

だが、そうして彼が遊びに熱していると、間もなくきつと、

「――猿ウ。猿ウつ」

と、探しに来る者があつた。

義父^{ちち}の筑阿弥^{ちくあみ}である。

弥右衛門の亡^ない跡^{あと}へ、聳^{むこ}として入^{にゅうふ}夫した筑阿弥は、ただ働く人だつた。一年たたないうちに、家計もだいぶ直つて、飢^うえる日はなくなつた。

その代り、日吉も、家にいれば、朝から夜まで、手伝いをさせられた。

ちつとでも、怠^{いたずら}けていたり、悪戯^{いたずら}でもしていようものなら、筑阿弥の大きな手は、すぐ日吉の顔^{はた}を撲いた。日吉は、嫌でたまらなかつた。仕事よりも、義父^{ちち}の眼から少しの間でも遁^{のが}れていたかつた。

毎日、筑阿弥はきつと午睡ひるねをした。日吉は得たりとばかり、その隙間に抜け出すのである。やがて筑阿弥が、畑や堤に姿を現わして、

「猿ウつ。うちの猿めは、何処へ行つたかあ」

と、探し来ると、日吉は、何ものも捨てて、とうもろこしの中へ滑り込んでしまった。探しあぐねて、筑阿弥がこのこ帰つて行くと、日吉は躍り出して、

「わあい」

と凱歌をあげ、晩に帰れば、夕飯も与えられず、仕置にあうことも、その時は頭にもなく、また、遊び狂うのだつたが——今日はそういうわけには行かなかつた。

「野郎」

筑阿弥は、とうもろこしの中を、彼方あつち此方こつち、恐い目こわめをして歩いて来た。

「こいつはいけねえ」

と、考えたので、堤をこえて、河原地の方へかくれた。

すると、一人ぼっち、於福おふくが堤に立っていた。夏でも於福だけは、ちゃんと着物を着て、水にも泳がず、赤蛙も喰べなかつた。

筑阿弥は、彼を見かけて、

「アア茶わん屋の坊っちゃんですか。うちの猿めは、何処へ隠れたでしょうか」と、訊ねていた。

於福は、

「知らない」

と、何度も首を振っていたが、筑阿弥が、

「そんな嘘をいうと、てまえがお宅へ伺った時に、旦那に吩咐けますぞ」

と、脅したので、気の小さい於福はすぐ顔いろを変えて、

「あの舟ん中へかくれて、苦をかぶっているよ」

と、指さした。

小さい河舟が河原に引きあげてあった。筑阿弥がそこへ駆け寄ると、河童のように、日吉が中から跳ね出した。

「ヤ。こいつ！」

筑阿弥は跳びかかって日吉を突きとばした。突ンのめった日吉は、河原の石に唇を打つて、齒から血を出した。

「痛えっ」

「あたりまえだ」

「ごめんよ。ごめんよ」

「猿め。今日という今日はもう……」

二ツ三ツ頭を撲いた末、筑阿弥は彼よりも何倍も優った力で、日吉の体を吊し上げ、わが家のほうへ駈けて行つた。

猿々と、憎悪して呼んでいるように聞えたが、筑阿弥は何も、日吉がそう憎いわけでもなかった。貧乏を直そうと焦心するために、誰へもやかましくなり、日吉の性質をも、強いて矯め直そうとするのだった。

「もう十歳にもなりおつて。……この野郎、この野郎」

引つ吊して、家に帰ると、また二つ三つ拳をくらわせた。

彼の母が止めると、

「おまえが甘いからいけないのだ」

と、どなりつけ、姉のおつみが一緒になつて泣くと、

「何を泣く。わしの折檻は、この拗ね猿を良うしてやろうと思うから撲るのだ。この世話焼かせめ」

と、また撲った。

日吉も、初めは、撲られる度に頭をかかえて、謝あやまっていたが、

「なんだい、なんだい、他所よそから来やがつたくせにして、お父さんみたいな顔して、威張つてやがら。……おらの、おらの、ほんとお父さんは」

と、囁うわごと言みたいに、泣き泣き悪たいを云い出した。

彼の母は、

「これつ……そんなことを」

と、真つ蒼になつて、彼の口を抑えたが、筑阿弥は、

「この早熟ませめ」

と、激怒して、今度はゆるさなかつた。裏の納屋の中へ抛ほうりこんで、晩飯もやつてはならぬぞと云つた。

納屋の中から、暗くなるまで、日吉の喚わめく悪あくたいが聞えた。

「出しておくれよつ。……ようつ。……出しておくれつたらつ。……ばか野郎つ。唐変とうへん木ぼくつ。……みんな聾つんぼづらしてけツかるな。出してくれなければ火をつけるぞう」

そして、わあん、わあん、と吠えるように泣いていたが、夜半よなか近くになると、泣寝入り

に寝てしまった。

すると、耳もとで、

——日吉や。日吉や。

と、呼ぶ声がした。

彼は死んだ実父の夢を見ていたので、うつつに、

「お父さん！」

と、叫んだが、眼の前に立っている姿を見ると、それは母のお^な奈加^かだった。

母は筑阿弥の眼をしのんで持つて来た食物を与えて、

「さ。これを喰べて、朝まで大人しくしておいで。朝になったら、お父さんにお詫びしてあげるから」

と、いった。

日吉は、かぶりを振って、母のふところへしがみついた。

「嘘だいい、嘘だいい。おらには、お父さんはねえやい。お父さんは、死んじまったじゃねえか」

「これ、またそんなことをいう。なぜおまえは、そう聞きわけがないのだろ。いつもいつ

も、私があんなにいつて聞かせておくのに」

彼の母は、身を切られるように、辛かった。けれど、母がなぜ身を慄ふるわせてそう泣くのか、まだ日吉には分らなかった。

夜が明けると、日吉のことで、筑阿弥は彼の母を朝から呶鳴りつけていた。

「おれの眼をぬすんで、夜半よなかに飯をくれてやったらう。そういう親馬鹿だから、いつまで、あいつの根性は直りやしないつ。おつみも、今日は納屋のそばへ寄つちやあならぬぞ」

夫婦の中で、小半日も、何か揉もめていた様子だったが、そのうちに日吉の母は、独りで泣く泣くどこかへ出て行つた。

陽が西になりかけた頃、お奈加は帰つて来た。光明寺こうみょうじの住僧がひとり一緒だった。

（何処へ行っていた？）

とも訊かず、筑阿弥はまずい顔して、おつみを相手に働いていた外の庭むしろに坐りこんでいた。

光明寺の僧は、

「筑阿弥ちくあみどの、きよう御家内が見えて、こちらの息子どのを、寺へお小僧に出したいとの頼みじゃが、御同意かの」

と、訊ねた。

筑阿弥は、黙ってお奈加のほうを見た。彼女は背戸の外で、両手を顔に当てて泣いていた。

「ふうむ。……それもよからうが、寺入りには、証人も要るが」

「幸い、藪^{やぶ}山^{やま}のすそに住んでござる加藤殿の嫁御は、こちらの御内儀とは、御姉妹^{ごきょうだい}じやということであるしな」

「あ。加藤へ行つたのか」

筑阿弥は、なおさらほろ苦い顔をしたが、日吉の寺入りには、反対しなかった。

「よろしいように」

と、ひと事のように、彼はおつみへ用をいいつけたり、農具を仕舞つたり、日暮を忙しげに働き出した。

その間に、日吉は納屋から出されて、母に懇^{こん}々と何か諭^{さと}されていた。

一晩中、納屋の蚊に食われどおしでいたので、彼の顔は大きく腫^はれ上^あがっていた。寺へ奉公に行くのだと聞かされた時、日吉はふと、涙を溜めたが、すぐ元気になって、

「お寺の方がいいや」

と、いった。

明るいうちにと、光明寺の住僧は、日吉に支度させて、連れて出た。

筑阿弥ちくあみも、さすがに少し、淋しい顔して、

「猿。お寺へ上がったら、心を入れ換えて、よう修行せねばいかぬぞ。すこしは、読み書きも習うて、はやく一人前の坊さんになって見せい」

と、いった。

日吉は、うんと一つ、頷うなずいたきりだった。けれど、垣の外へ出て、いつまでも立って見送っていた母の姿へは、何度も何度も振り返った。

寺は、村外れから少し先の、藪山やぶやまという丘ほどな高い土地の上にあった。日蓮宗にちれんしゅう

の小伽藍しょうがらんで、住職は老年で寝たきりだし、若い住僧が二人して維持していたが、戦乱つづきで、村は疲弊ひへいしているし、檀家だんかも離散するばかりなので、形こそ違うが、ここも貧乏の外ではなかった。

だが、少年日吉は、生活が変わっただけでも、刺戟になったとみえ、生れ変わったようによく働いた。機転はきくし、はきはきしていた。住僧たちも可愛がって、

「こいつは仕込んでやろう」

と、毎夜、手習させたり、小学や孝経を教えたりした。記憶力も至っている。

「おい。日吉。きのう途中でおまえのおつ母さんに会ったから、日吉もよくやっているといつておいたぞ」

住僧の一人がいうと、日吉も欣うれしそうににこりと笑った。――母の悲しみはよく分らないが、母の歎なげびは、そのまま彼にも歎なげびだった。

けれど、そういう神妙な状態も一年とはつづかなかつた。十一歳の秋頃になると、日吉には、この伽藍がらんも狭くなつて来た。

二人の住僧が近郷へ托鉢たくはつに出て行くと、日吉は、隠しておいた木剣や、手製の采配さいはいを腰に差し、

「やアい、敵の奴ども。どこからでも攻めて来い」

と、麓ふもとで待機している戦いくさ遊びの友達へ向つて呼び立てた。

時刻でもないのに、突然、鐘楼の鐘がごんごん鳴った。

寺の丘から、石が飛んでくる。瓦が落ちてくる。

麓ふもとの者は、驚いて、

「何じゃ、何じゃ」

寺の丘を仰ぎ合った。

畑に、働いていた百姓の娘に飛んで来た瓦が中^{あた}つて大怪我をしたりした。

「……光明寺のチビ僧めが、またおらどもの腕白をあつめて戦遊びをやりおるな」

麓の家の人たちは三、四人して登って行つたが、本堂の前に立つと、開いた口がふさがらなかった。

本堂は灰だらけだ。外陣も内陣も乱脈な態^{てい}である。

香炉^{こうろ}は割れて落ちている。

旗にでも使つたのか、金欄^{きんらん とぼり}の帳は裂いて棄ててあるし、太鼓の皮はやぶれている。

「庄坊やあい」

「与作やあい」

親たちは、子を探したが、チビ僧の日吉も見えなければ、腕白たちも、忽然^{こつぜん}とみな姿をかくして見当らない。

「この寺の猿と遊ぶと、もう家へ入れないぞ」

親たちが、麓へ降りて行くと、すぐにまた、わアっと、本堂が震動し、藪^{やぶ}がうごき、石が飛び、鐘が鳴り出した。

——日が暮れると。

わアん。わあん……

と、手を折ったり、瘤こぶをこさえたり、血だらけになって降りて行く子が、多勢の中にはきつと二、三人ずつ出来た。

一日中、托鉢に歩いている二名の住僧は、毎度尻をもちこまれるので、もうさじを投げていたが、その日は、本堂へ立つと、

「……あつ」

顔見あわせて愕然がくぜんとした。

内陣の前にある大香炉が真つ二つに割れているのだ。

この大香炉は、寺にとつて、今のところ唯一の檀家だんかである新川の茶わん屋捨次郎が、つい三、四年ほど前、

（これは伊勢松坂のさるお方から、特に焼いてくださった物。わしとは深い御縁があるの
で、生き遺物がたみとも思し召し、思い出の地の山水を絵付えつけして、特に丹精をこらして製つくられた
香炉じゃが、寺に納めておけば、末代まで長く什宝じゅうほうとして伝わるであろうから——）
と、云い添えて、寄進してくれた物なのである。

平常は、箱に納めて、珍重していたが、つい七日ほど前、その茶わん屋の御寮人様が、仏参に見えるというので、その折、出して用いたまま、つい仕舞いもせずにあつたのである。

それが割れているのだ。

「……？」

住僧は、顔いろを失った。老師の耳に入れたら、病^{やまい}が重るだろうと、そこまで心配は走った。

「猿じやな」

「そうだ。他にこんな悪戯^{わるさ}をする童^{わっぱ}はない」

「どうしてくれよう」

二人の住僧は、すぐ日吉を引き摺^ずつて来て、香炉を突きつけた。日吉は、この本堂で暴れたのは自分だけではないし、自分がした覚えはなかったが、

「ごめんなさい」

と、謝った。

謝られると、住僧はかえってかつと怒った。日吉の天性の顔つきが、平気でいっている

ように見えたからである。

「この外道め^{げどう}」

二人がかりで、日吉をうしろ手に、縛り上げてしまった。

本堂の丸柱へ、日吉はくくりつけられた。

「幾日でもこうしておいてやる。鼠にでも喰われてしまえ」

と、住僧は罵^{ののし}った。

だが、日吉には毎度のことだった。辛いのは、翌る日になって友達が来ても、遊べないことだった。

「やい、縄を解いてくれよ。解かないと、ぶん撲るぞ」

日吉は脅^{おど}したが、日吉さえ罰せられているのを見ると、みな逃げて行った。

たまたま、参詣にのぼって来る年よりや村の女たちも、

「あれ、猿が」

と、指さして、

「よい気味や」

と、笑い合ったり、からかつて逃げた。

いつとなく彼の小さいたましいは、今にみろ、今にみろ、とつぶやくことを独り慰めにしていた。

また、その小さい肉体は、伽藍がらんの太柱を背に背負つて、かえつて体じゆうに、沸たぎり立つような強い血をよび起した。

その二つのものを、唇にむすび、自分の憂うき目めへ向つて、

「なにくそ」

と、不敵な顔を作った。

柱によりかかつて、彼は睡つてしまった。——そして自分の涎よだれに目がさめた。

恐ろしく日が永い。

日吉は、退屈してきた。

そのうちに彼はふと、まだ眼のまゑに突きつけたまま置いてある——二つに割れた陶器の大香炉に眼をすえ出した。

香炉の底には、

ごろだゆう
五郎大夫

シヨンスイこれをつくる
祥瑞之製

と、小さい文字で作者の名が記してあった。

瀬戸村は近いし、尾張付近は陶器の産地である。そんな物はもとより何も彼の興味をひきはしないが、その大香炉の腰に描いてある藍絵あいえの山水が、

「どこだろう？」

と、退屈な眼に、想像をほしいままにさせたのである。

白磁はくじに藍一色で画かれている山や石橋や、楼閣や人物や——そして日本では見たことのない船の型や人間の着物が——ひどく彼の頭をなやました。

「どこの国だろう？」

日吉には、分らない。その分らないのを、少年の旺さかんな智慾は、飽くまで知ろうとし、想像を駆けめぐらした。

「……こんな国って、あるのかしら？」

思いつめているうちに、彼の頭にひらめいたものがある。それは何日、誰に、教えられたか、聞いたか、彼自身も忘れていたものであったが、苦しまぎれに飛び出した記憶であった。

「そうだ。唐からだ！……。唐の国の絵だ」

日吉はただ一人で、愉快だった。染付そのつけの絵を見ると、たましいは唐の国へ飛んで遊んでいた。

日暮れがた――

また、托鉢たくはつから帰って来た二人の僧は、日吉が泣きしおれているかと思いのほか、前へ行くと、にやりと笑ったので、

「もういかん。折檻せつかんもむだなことだ。こいつは未怖ろしい。親元へ帰したがようござろう」

と、嘆息してしまった。

寺入り証人の加藤家は、この藪山やぶやまのすそなので、晩になると、僧の一人は、日吉に飯を与えて、山から連れて降りた。

大鵬たいほう

加藤弾正かとうだんしょうは、短檠たんけいの灯を背にして、一間ひとまに寝転んでいた。

明け暮れ、戦いくさの中に身をおく武人は、たまたま、家に帰ってくつろぐ日も、身をつつむ

家居のすべてが、余りに和やかに過ぎて、かえつてこの平和や居心地に馴れることが恐かった。

「おえつ」

「はい」

と、返辞は遠く台所のほうです。つい一兩年前に、結婚したばかりの新妻であつた。

「誰か……枝折をたたいておるが」

「また、栗鼠ではございませぬか」

「いや、訪れらしいぞ」

「……ほんに」

おえつは、手を拭きながら、門口へ出て行つたが、すぐ引き返して、

「光明寺のお坊さまが、日吉を連れてお見えなさいました」

と、瑞々しい眉に、ふと愁いを見せながらいった。

弾 正は聞くと、

「ははあ、さては猿に、お暇が出たとみえる」

と、予期していたように笑つた。

この加藤家と、中村の木下家とは、当然、親戚の間であつた。妻の姉の息子ということで、寺入りの時、証人に立っているのも、事情を聞くと弾正は、

「僧侶に不向きとあれば、ぜひもないこと。当家から中村の親元へ帰すとしましよう。お世話がいもなく、御迷惑ばかりをかけて——」

と、夫婦して詫びを述べ、日吉の身は、その晩に引き取つた。

「では、親御へは、そちら様からどうぞ悪しからず」

光明寺の僧は、肩の荷を降ろしたように帰つて行つた。

日吉は、ぽつねんと置き残されたが、物珍らしげに、室内を見まわし、

「誰の家だろ？」

と、考えていた。

寺入りの時は、直に寺へ連れて行かれたので、ここへは立ち寄りなかつた。また、近くに親類があると知ると、辛抱がし難くなるであろうとおえつが嫁いで来ていることも、彼の耳へは聞かせてなかつた。

「小僧。晩の飯は喰べたか」

やがて、弾正が前へ来て坐りながら、にやにやいう。

「喰べた」

かぶりを振ると、

「菓子を喰え」

と、甘い物をたんとくれた。

日吉は、ボリボリそれを喰べながら、長押^{なげし}の槍を仰いだり、具足櫃^{ぐそくびつ}の紋を眺めたり――それから眼のまえに坐っている加藤弾正の顔を、穴のあくほど、じろじろ見つめたりした。

（この息子、すこし足らないのかな？）

弾正は疑った。なぜならば、余りに自分を見るので、試みに、彼も目をこらして、睨^ねめ返したところが、日吉の目は、横に反^そらしもしなければ、俯^{うつむ}向きもしないのである。――
——
というて、まったくの白痴ほど無反射でもないが、ただにやにやと愛嬌をたたえているからであつた。

「はははは」

彼の方が、先に目を反^そらしてしまいながら、

「いつの間にか、大きくなつたなあ。日吉、わしの顔を覚えてるか」

そういわれて、日吉はかすかに思い出した顔つきだった。——これは七歳の頃、河原で頭を撫でてくれた小父さんなのだ。

武人の慣いとはいえ、良人の^{おつと}弾正は、ほとんど、清洲^{きよす}の城内か、戦場で寝泊りしていた。結婚してから、まだ日も浅いが、妻とふたりで、家庭を楽しむような一日すら滅多にない。

その良人は、たまたま、きのうから家に帰って、休養していた。そして明日はもう清洲の城へ詰め、また幾月かは、この家で共に暮す日もない——と思っていた折も折なのである。

「……ま。困った子が」

と、おえつは当惑の眉をひそめた。

棟は離れているが、この小屋敷には、良人の老母もいるし、家族もいる。

（こんな童^{わっぱ}が、姉の子にいるのか）

と、思われるのも、嫁の身には、肩身の縮む気がするのだった。

だがその日吉は、良人の居間で、先刻から頓狂な声を出しつづけていた。

「あ！　じゃ小父さんは、いつか河原で、大勢のお侍と一緒に、馬に乗ってたろ。あのお

侍の中にいたんだろ」

「ウム、思い出したか」

「覚えてらい」

急に甘たれ声で――

「そんなら、おらの家と親類だもの。おらのおつ母さんの妹と、おじさんと、許婚だ

つたんだろ」

と、馴なれなれ々しくなる。

下婢かひを相手に、茶の間へ、食膳を出していた彼女は、日吉の言葉づかいや、野良で出すような大声に、冷々ひやひやしていたが、

「もし……お食事の支度ができましたが」

と、襖ふすまをあけて、良人と呼んだ。

見ると、良人の弾正は、日吉を相手に、腕角力を取っているのだ。日吉は顔を真っ赤にして、蜂のように尻を立てているし、弾正も子どもみたいにそれに応じていた。

「……あなた」

「飯か」

「汗が冷えますから」

「待て。……いや、おまえ先に独りで喰べてしまえ。この小僧、すぐ本気になるからおもしろい。はははは、どうもおかしな奴だぞ」

と、夢中である。

日吉の天真爛漫てんしんらんまんに、弾正はひき込まれている姿だった。馴れやすい日吉はもうこの叔父さんを手玉に取って遊ばせていた。指人形だの物真似だの、子ども仲間でする遊戯を、次々にやって、弾正に腹をかかえて笑わせた。

翌日、清洲城へ立つ時、弾正は鬱ふさんでいる妻へ云い残した。

「親どもが承知なら、屋敷へ置いて養つてくれてはどうだ。物の役には立つまいが、ほんものの猿を飼うよりは増しだろう」

——だが、おえつは欣よろこばなかった。枝折戸しおりどまで、良人を送り出しながら、

「……いえ、やはり中村の姉へ帰しましょう。もしお姑かあさま様などへ、粗相そそうがあるといけませんから」

「それやあ、どっちでも、其女そなたのいいようにするがよいが」

一歩、家庭を出れば、もう生きて帰るか帰らぬか、心は主君と戦いくさにのみあつて、妻には、

余りにも素氣なくさえ見える良人だった。

「あんなにも、男は、功名ばかりが、大事なものかしら！」

おえつは、後ろ姿を見送つて、また幾月かの淋しさを思つた。用事がすむと、彼女は早速、姉の子の日吉を連れて、中村へ出かけて行つた。

その途中。

「おう、これは」

と、向うから来て、おえつに丁寧なあいさつをした人がある。

商人だろう。しかし商人にしては、大家の主人にちがいない。きらびやかな短羽織みじかばおりを着、脇差わきざしを一腰ひとこしさし、小桜革こざくらがわの足袋たびを穿はいて、四十がらみのにこやかな人だ。

「加藤様の御寮人ごりょうにんではごきいませぬか。どちらへお越しなされますな」
懇意とみえておえつは、

「中村の姉の家まで参ります。この子こを連れて——」

と、日吉を抱かかえよせた。

「ホ……。その坊んちでござるかの。光明寺から追われたお小僧ぼというのは」

「もう、お耳にはいりましたか」

「いや今も実は、そのことでの、ちよつと寺まで行つて参つたので」

日吉は、何だか間が悪くなつて、眼をきよときよとしずにいられなかつた。坊ンちと呼ばれたのは、生れてから初めてである。顔が熱くなるほど恥かしかつた。

「オヤ。この子のことで、お寺へお出かけ下さいましたのですか」

「そうですよ。光明寺から宅へ謝りに来ましてな。——何かと、理を聞けば、わしが寄進した大香炉を割つてしもうたとか」

「ほんに、この悪戯坊が困つたことを致しました」

「何のさ。御寮人までがそういわせられな。陶器が割れるのはあたりまえじゃ」

「でも、稀れな御名器というおはなし……」

「ただ、惜しいのは、わしがお伴いたして、長らく明国に渡つておいでなされた松坂の

伊藤五郎大夫様のお作なのじゃ」

「祥瑞と仰つしやるのは、その方でございますか」

「ところがもう、御病氣でお果てなされた。近頃、染付ものの陶器に、祥瑞五郎大夫製とよく銘に書いてはあるが、それはその後の人々で、ほんとに明国へ渡つて、あの陶器の作法を伝えて来られたお方は今ではもうこの世にいませぬ」

「世間のうわさゆえ、どうか存じませぬが、お宅様に引き取ってお育てになつてゐる、於^お福さまという坊^{ふく}ンちは、その祥瑞様が、明国から連れ歸つて来たお子じやとやら……」

「はい。どうして知れたか、童^{わっぱ}たちと遊ぶと、唐人子^{とうじんこ}唐人子とからかわれるとかで、この頃は、ちつとも外に出ませぬわい」

茶わん屋捨次郎はそういつて、にやにや日吉の顔をながめた。友だちの於^{おふく}福の名を聞いたので、日吉はよいけいその人を、何だろうと考えた。

「ところが、この日吉のだけは、いつも於^{かほ}福を庇^{かほ}うて下さるそうな。その日吉どのが、寺を追放されたと聞き、於福までがわしへ詫^わびをいいますので、実は今、光明寺へ行つて、どうぞ宥^{ゆる}してあげてくれと頼^{たの}んだところ、先で申すには、香炉の罪ばかりではない、云^{しかじ}々^かのこともある、いやこれこれの事情もあると、受けつけそうもござらぬので、引き退つて来たところですよ。……はははは」

と、捨次郎は、胸をそらして笑い、そしてまた、こう附け加えて云つた。

「親御のお考えもおざろうが、もしまた、奉公に出す場合、宅^{おほ}みたいな所でもよい思^{おも}ひ召^めしなら、いつでも世話して進ぜます。どうして、なかなかこのお子は、見どころがありますよ」

また、初めのような丁寧なあいさつを交わして、その人は別れ去ったが、日吉は、おえつの袂たもとにつかまりながら、幾度も振り返った。

「おばさん。今のは誰」

「茶わん屋捨次郎といって、諸国の陶器やきものを捌さばいている問屋さんです」

「ア。それで茶わん屋っていうのか」

いちど黙って、おえつと共に、てくてく歩み続けていたが、また、

「明国みんこくって、どこさ。明国って——」

と、今の聞きかじりを思い出して、出しぬけに訊ねた。

「唐からのことでしょ」

おえつは簡単にいったが、日吉がたてつづけに、

「どっちの方？」

だの、

「どれくらいな広さ？」

だの、

「明国にも、城があつて、侍がいて、戦いくさをするか」

だのと訊き出すので、

「ま、うるさい。少しは黙って歩くもんですよ」

と、おえつは袂たもとを振った。

だが、この叔母さんの叱言こごとぐらいは、そよ風ともひびかない。日吉はぐんと首を仰向け、頻りに青空をながめていた。

彼は、ふしぎでふしぎで堪たまらなかった。どうして空はあんなに蒼あおくて深いのか。なぜ人間は地面ばかりにいるのか。もし人間が鳥みたいに翔かけられたら、香炉こうろの絵で見た明国へも、一足飛びに行かれるだろうに。

だから香炉の絵でみても、鳥のかっこうは尾張の国の鳥とちつとも変っていない。人間の着物も、船の型も変っているけれど、鳥は同じだ。鳥には国がない。いや天地がみんな一つ国だ。

「見たいなあ、方々の国を」

彼には、これから連れて帰されるわが家の狭さや、貧乏などは頭の隅っこにもなかった。やがて——眼で見て初めて、穴蔵あなぐらみたいに、昼間でも暗いわが家の奥をおえつと共に覗きこんだ。

用達ようたしにでも出ているのか、筑阿弥ちくあみは留守だった。おえつ話を聞いて、母は、

「困った子よのう」

と、つくづく溜息ためいきについて、日吉の暢氣のんき顔をながめたが、その眼は、彼を責めているのではなく、二年近くも見なかった間に、めつきり大きくなつた子の姿に、氣をとられて
いる様子でしかなかった。

日吉はまた、母の乳ぶさに吸いついている乳のみ児に、怪訝いぶかするような眼をすえていた。
いつの間にか、自分の家にまた一人子が殖ふえていたのだ。彼はいきなり、その子の顔を持
つて、乳くびから挽もぎ離してのぞき込んだ。

「おつ母、いつ生れたの、この子」

「おまえは、兄さんになつたんだよ。慥しっかりしなければいけませんよ」

「なんてえ名？」

「小竹こちく」

「変な名だな」

頓狂な声でいったが、しかし彼は痛切に、何か感じたらしかった。弟というものに押し
出された兄の意識だった。

「あしたから、おらが負^{おぶ}つてやろうね。ええ小竹^{こちく}や小竹や」

余り彼がいじくつたので、小竹は泣き出した。

おえつが歸つて行くと、入れちがい^ちに義父^{ちち}の筑阿弥^{ちくあみ}がもどつて來た。母がさつき妹のおえつに愚痴をこぼしていたのによると、筑阿弥はこの頃、貧乏の立て直しにくたびれて、酒ばかり飲んでいふとのことだったが、今も赤い顔して家にはいつて來た。

そして、日吉を見出すと、すぐ呶鳴^{なうめい}つた。

「野郎つ、また追^おン出されて來たか！」

家に歸つてから、一年の余はいつか経^たつた。日吉は十二になつた。

「猿^{まき}つ、薪を割^{まき}つたか、野郎、何でまだ、水手桶を畑^ほへ抛^なつたらかしておくか」

筑阿弥は、彼のすがたがちよつとでも見えないと、探し廻^{まわ}つて、呶鳴^{なうめい}りつけた。

「今、やりかけてるところだよ」

口ごたえでもしようものなら、

「えい。またつべこべ」

と、土荒れした頑固^{てのひら}な掌^{てのひら}が、すぐ日吉の横顔へびしりと鳴つた。

子を負つて、棉を摘んだり、麦を踏んだり、炊かしぎをしたりしている母は、そんな時は、強しいて背中を向けて黙っていた。しかし、自分が打たれるより、悲しい辛い顔であつた。

「もう十二にもなれば、どこの童わっぱでも、家業の手助けは当りまえだ。親の目ばかりぬすんで、遊びたがつてばかりいると、腰骨をぶち折つてくれるぞ」

そんな調子に、筑阿弥ちくあみは絶えず口ぎたなく日吉をこき使つたが、母の甘い慾目よくめばかりでなく、実際、寺から歸つて来た後の日吉は、生れ變つたようによく働いた。

（他人の御飯をたべると、こうも急に変わるものか）

と、母は傷いた々いたしくながめたが、生なまなか底かばい立てすると、かえつて、筑阿弥の荒い手や言葉が、日吉へ苛酷かこくに当るので、見て見ぬ振りをしているのだつた。

そのくせ以前とちがつて、筑阿弥は畑には減多に出ず、家にもいない日が多かつた。町へ行くらしいのである。そして酔つて歸つては、子をどなり、妻に當つて、

「いくら働いたつて、この家の貧乏は直リツこねえわ。喰いつぶしは多いし、年貢ねんぐは増すし。餓鬼さえなければ、おれも野武士の仲間にもはいつて、うまい酒も飲めるが、こう足手纏またしが多くつちやあ……」

と、口ぎたなく云いちらした末、なけなしの金を妻に算段させて、夜夜中よるよなかでも、おつみ

や日吉に酒を買いにやらせるのだった。

その義父ちちのいない時、

「おつ母、おらあまた、奉公に行きたい」

と、日吉が母に洩すと、お奈加なかはそういう日吉を抱きしめて、

「……いておくれ、今おまえが家にいなかったら」

と、後の言葉は、云い得ない涙になって、ホロリと一雫しずく、横を向いて眼を拭ぬぐうだけだった。

母の眼の一しずく――

それを見ると、日吉はもう、何もいえなくなつてしまい、家を飛び出そうかという考えも、不平も、辛さも、胸から捨ててしまった。

だが、そんな可憐いじらしい気持が起るかと思うと、少年の天性のうちには、遊びたい、喰くいたい、知識を得たい、遠くへ奔はしりたい――さまざまな欲望の芽が、雑草の伸びるように旺さかんになるのであった。そこへ義父ちちの筑阿弥が、母へいう無理だの、自分の頭にうける拳こぶしだのの衝動もあつて、

「くそをくらえ」

と、不敵なたましいが、彼の小さい体を燃やし、それが度重なって、

「お義父さん、おらを、奉公にやってくれ。おら、こんな家にいるより、奉公に行きてえや」

と、恐い筑阿弥へ、直にぶつかって云いきるほどな感情を、駆り立たせた。

「何。奉公に出たい。ようし、何処へでも行つて、他人の飯をまた喰つて来い。その代り、こんど追い出されても、家には入れぬぞ」

と、筑阿弥もむきになって云つた。子どもと思ひながら、性格のくい合わないせい、彼は十二の日吉と五分になつて、いつも怒りを激発させるのだった。

村の紅花屋へ奉公に行つた。紅花絞りの職人たちから、

「口ばかり達者で、小生意気で、日向で臍の垢ばかり取つてやがる」

と、排斥されて、間もなく、世話した者から、

「どうも役に立たないので」

と、日吉は家に帰されて来た。

筑阿弥は、睨めつけて、

「どうだ猿。汝のような穀つぶしは、世間様でも飼つてはくれまい。親のありがたさがわ

かったか」

と、いった。

日吉は顔を膨ふくらせて、

「おらが悪いんじゃねえや」

と、云いたそうな顔して、義父の睨む眼を見返した。

そして、かえって、

「お義父とつさんこそ、百姓もしないで、馬市でばくちしたり、お酒のんだりしないがいいよ。よその人がみんな、おつ母が可哀そうだつていつていっているぜ」

と、意見した。

「何をいう！ 親に向つて」

筑阿弥ちくあみは、一喝かつで日吉の口を黙らせたが、心のうちでは、

「だんだん摺すれからして来やがったわい」

と、日吉を見直した。

他人の中へ出て、家へもどつて来るたびに、子の姿は目立って大きくなっている。そして以前と違つて、親を覗る眼も、家庭を見る眼も、急に育つて来たように思われる。筑阿

弥は、その大人みたいな眼で自分を觀察されるのが、うるさいし、恐いし、嫌でならなかった。

「はやく奉公口を探して出て行け」

翌日、もう日吉は、次の雇主やといぬしの所へ行っていた。

やはり村の桶屋だった。

桶屋のおかみさんから、

「こんな末恐ろしい子は、わしが所ところへなど置けん」

というて、ひと月ばかりで帰された。

日吉の母は、何が末恐ろしいのか、世間の人のいう意味がわからなかった。

左官屋の手伝いにも行つた。馬市の弁当売りにも行つた。鍛冶屋かじやへも行つた。どこも三

月か半年だった。

身装みなりは、だんだん大きくなる。中村のうちではもう、

「ああ筑阿弥どんの家のせがれか、あの白痴猿こけざるときては、口巧者ばかりで、使いものになりやあせん」

と、定評がついて、もう世話してくれる人もない。

その世間へ、母のお奈加は、間が悪くて、肩身がせまくて、日吉のうわさを人がいえば、すぐ、自分から先に、

「あの子はもう、何にしたらよいやら、百姓は嫌うし、家には落ちつかないし……」
と、極道者の卵みたいな、自分から先に卑下して、人に謝ってばかりいた。

十五の春である。

寡れた母は、沁々と日吉を膝によせて、

「今度こそは、辛抱しやい。また出るようなことになる、お世話してくれた加藤殿へも、妹が顔向けならぬし、世間でも、またかと笑いますぞ。……いや今度、落度でもして、先様から出されたら、誰よりもこの母がききませぬぞ」

云い聞かせて、次の日、新川の大家へ、藪山の叔母に連れられて目見得に行った。

茶わん屋捨次郎の家だった。

そこには、幼友達の於福がいた。於福はもう、十七、八の色白の青年で、養父の捨次郎の家業を助け、茶わん屋の若旦那として、実直に手伝っている。

商家でも、主従のけじめは、厳しかった。

若主人の於福の前へ、彼がはじめて目見得に出た時は、日吉は板の間にかしこまり、於

福は座敷の中で、義父ちちの捨次郎だの、美しい御寮人などと、茶うけの菓子など喰べながら、話に興じているところだった。

「おや。弥右衛門とこの小猿だね、おまえ。ああお父さんは死んで、村の筑阿弥が、次のお義父とつさんになつたんだってね。——こんど家へ奉公に来たのかい。よく働かなくちやいけないよ」

於福のことばや物ごしはもう見違えるほど大人びていた。

「へい」

日吉はすぐ、下僕たちのいる部屋へ退さがった。茶の間で、主人の家族たちがその後で笑っている声がした。

友達の於福が、ちつとも友達らしい顔もしてくれないのが——日吉にはさびしかった。

日が経つと、於福は、

「おい、小猿」

使い馴れて、よけいに言葉なども、ずけずけいった。

「あしたは、早く起きて、清洲きよすまで行つといで。お役所へ御用の品を持って行くんだからいつもの手押し車へ荷を積んでね。——それから帰りは船問屋へ廻ひぜんって、肥前ひぜんから陶器やきもの

の荷が届いているかどうか、聞きあわせておいで。――また、道くさして、こないだみたいに夜おそく帰って来ると家へ入れないぞ」

日吉は、それに対して、

「はい」

とか、

「へい」

とかしかいえないのだった。古くから来ている奉公人ほど、

「かしこまりましたござります」

と、^{ひたい}額を板の間にすりつけていう程なのである。

那古屋^{なごや}や清洲の城下へは、のべつ使いにいった。その度に彼は、お城の白壁と高い石垣

を仰いで、

「どんな人があの中に住んでるのだろ。――どうしたらあんに住めるんだろ？」

と、^{ぼく}漠として考えた。

虫ケラのように小さな^{みじ}惨めな自分が、幼稚な心の中にも、口惜しく思われるのだった。

そして陶器^{やきもの}の荷を積んだ、重い手車を押しながら町を行くと、

「あれ。猿がゆく」

「猿が車を押して行く——」

などと被衣かぎぎした麗人だの、都めかした町娘だの、若いきれいな御寮人たちが、囁ささやいたり指さしたり、じろじろ眺めて行ったりした。

きれいな女と醜みにくい女との見分けはもう日吉にもついていた。少年の心にもつとも辛く思えたのは、そうした美しい女性の群れから、奇異な眼で眺められることだった。

その頃、清洲の城にはまだ、室町大名の斯波義統しばよしむねが城主として住み、織田彦五郎信友おだひこごろうのぶともがその家老だった。

城のお濠ほりと、五条川を中心にして、ここには古い足利文化あしかがのにおいと、戦乱の中にも持ち続けて来た繁昌こくぐんが、国郡第一の都府とふという名に恥じなかった。

さけは酒屋に

よい茶は茶屋に

女郎は

清洲のすがぐちに

その須賀口すがぐちには、妓楼ぎろうや茶屋が軒をならべていて、昼間は、禿かむろたちが鞠まりをつきながら、

往来で唄っていた。

少年日吉は、荷を積んだ手車を押して、鞠唄の中を、うつつに通った。

ぼんやりと――

「どうしたら偉えらくなれる？」

まだ、その解決もつかめていないのに、ただ一念に、

「今にみろ、今に」

と、漠ばくとした希望に、さまざまな妄想を描きながら行くのだった。

美味うまそうな食物、豊かそうな家、絢けんらん爛な武具、馬具、衣裳、宝玉などを売っている店

――彼には縁のないあらゆる物資がこの町には軒なみに積んである。

中村の家にいる姉のおつみの青い痩せた顔を思い泛べると、饅頭屋まんじゅうやの蒸籠せいろうから立つ

湯気を見ても、

（姉やにも買かってやりたいなあ）

と思しい、老舗しにせの薬屋の前を通とつては、

（おつ母に、あんな薬をいつもやれたら、もっと丈夫になるだろうに――）

と、その薬草囊やくそうぶくろに見み恍とれたりした。ただ筑阿弥のことだけは、べつにどうとも、

考え出されなかった。

(おらが偉くなれば)

と思う底には、世間の誰と見較べても、余りにみじめな、母とおつみとを、幸福にしてやりたいという気持も、多分にあつた。

——で、彼は城下へ来ると、ふだんの望みや空想が一ぱい大きく強く燃えて、

「今に！　今に！」

と心でつぶやき、

「どうしたら。どうしたら」

と、そののみ思つて、いつも歩きつづけるのだった。

「ばか者つ」

と、日吉はふいに、人ごみの中でどなられた。繁華な辻を曲りかけた途端である。

のりかえうま
乗換馬を曳かせ、槍を持った供の者を、十人以上もひき連れた馬上の侍に、手車をぶ

つけてしまったのである。

わら苞づとに巻いてある鉢だの皿だのは、くずれ落ちて粉々に碎けたし、日吉の体も、手車と一緒に蹠よろめいた。

「盲かッ」

「うつけ者めが」

馬も、従者も、砕けた瀬戸物の上を、そう罵りながら、ばりばり踏んで行ってしまう。

往来の者も、誰ひとり、寄つて来てはくれなかった。

割れた欠片かけらを、拾いあつめ、また、手車を押して歩きながら、彼は人中まの間のわるさと、憤りに血を熱くして、

「どうしたら彼奴あいつらを、おらの前に土下座させてやれるだろうか」

と、幼稚な空想のなかで——しかし真剣に思いつめた。

だが、少し経たつと、主人の家に帰つてからの叱言こいごだの、於福の冷たい顔などが目に見え出し、大鵬たいほうの翔かけるが如き大きな空想も掻き消えて、けし粒みたいな小さい心配にも、囚とらわれてしまうのだった。

群盗ぐんとう

とつぷり日が暮れていた。彼は手車を小屋の中へ押しこみ、井戸端で足を洗っていた。

この近郷で、陶器やきものやしきとよばれているだけあつて、茶わん屋の構えは、大きな土豪の家ほどあつた。

母屋は広く、棟は幾つにもわかれ、倉も並んでいた。

「小猿う。小猿ッ」

於福おふくが、近づいて来た。日吉は石井戸の蔭から身を起して、

「おい」

と、返辞した。

於福は、何が気に障さわったのか、持っていた細竹で、日吉の肩を打ちすえた。日吉は拭きかけていた足をよろめかせて、また泥によごしてしまった。

「主人に向つて、おいという返辞があるか。いくら云つても、言葉の直らない奴だ。わしの家は百姓じゃないぞ」

雇人の長屋を見廻る時だの、倉で働いている者へさしずに来る時は、この若主人はいつも、細竹を持って歩いている。日吉がそれで打たれたことは、きょうばかりではない。

「なぜ黙つてるのか」

「……………」

「これ、はいといえ」

「……………」

「いわないな。こいつ」

日吉は、また一つ打たれるよりもと、喉^{のど}を宥^{なだ}めて、

「はい」

と、云い直した。

「清洲からいつ帰ったんだい」

「今帰りました」

「うそをいえ。台所の者にきいたら、もう御飯をたべたというじゃないか」

「眼がまわって、仆れそうになったんで」

「どうして」

「腹が減^へつちまって、やっと歩いて来たもんだから」

「なんだ、腹が減ったぐらい。帰って来たら、すぐ主人に帰りましたとなぜ挨拶^{あいさつ}に来ない」

「足を洗ってから」

「言い訳するな。そのうえ今勝手元の者に聞いたら、清洲のお屋敷先へ届ける陶器を、途中でたくさん欠いたというじゃないか」

「ええ」

「正直に詫びようともせず、わしへ何と嘘をいったらいいだろうと、勝手の衆へ、げらげら笑いながら訊いていたろう。今夜は、堪忍しないぞ、やい」

於福は、日吉の耳たぶを引張つて、歩き出しながら、

「さ。来い」

「御免なさい」

「くせになる。うんときゆうめい糺明してやるから来い。お父さんのところへ来い」

「かにん、かにん」

於福は手を離さない。井戸端にいた二、三人の雇人も、日吉の謝る声が猿の啼き声そっくりだといつて見送っている。

父の捨次郎へ告げ口する気であろう。広い家の横を廻って行つた。倉の前から庭口へと行く道はもうそうだけ孟宗竹が茂っていて、裏からも母屋からも見通せなかった。

そこまで来ると、日吉はふいに踏み止まつて、

「やいッ」

と、於福の手を払い、また、

「やいッ」

と何度も云つて、

「話があるから聞け！」

と、於福の驚いた顔を、大きな眼をして睨みつけた。

「こら、何するんだ」

「なにが何だ」

「主人に向つて、お前は——」

と於福は、青ざめて、顫おのきながら、

「わ、わしは、主人だぞ」

「だからいつも、従順すなおにしてるが、きようはいつてやるぞ。やいッ」

「……………」

「やい於福。てめえは、以前のことを忘れたか。おらとお前とは、友達だったろ」

「そんなことは、前のことだ」

「前のことは、何でも、忘れていいものか。唐人子、唐人子って、皆からてめえが虐められていた頃に、誰がいつも、庇^{かば}つてやったか、覚えてるだろう」

「覚えてるさ」

「覚えてたら、その時の恩も少しは考えろッ」

小さい日吉は、ずっと自分より大きな於福を、こう睨^ねめすえて、どっちが年上だか分らないように威張った。

「ほかの雇人でも、みんな云ってるぞ。大旦那はいいけれど、若旦那の於福は、生意気で、人情なしで思い遣^やりがないって」

「……………」

「てめえみたいな、御苦労なしの坊ンちこそ、貧乏して、困ってみて、他人の家の飯をちつと喰べてみるといいんだ」

「……………」

「この先も、奉公人いじめをしたり、あんまりおらに辛くあたると、どうしてくれるか知れないぞ。おらの知っている小父さんは、御厨^{みくりや}の野武士で、千人も手下を持つてるんだから、その小父さんに来てもらつて、こんな家、一晩で踏み潰^{つぶ}してしまうからそう思つて

ろ」

と、日吉は口から出放題にいつて、脅おどしたに過ぎないのであったが、生来氣の小さい於福は、日吉の眼光と、口吻くちぶりに氣をのまれて、慄ふるえ上あがってしまった。

——母屋のほうで、

「於福様あ」

「若さつきだんな。若さつきだんな」

と、先刻さつきから、召使の男や女がさがしていた。——けれど於福は、それに答える勇氣も失うせて、日吉の眼に縛りつけられていた。

「呼んでら」

日吉は、教えるように呟つぶやいて、

「もう行つてもよし。だけど、今いったこと忘れるな」

云いすて、彼は先に、元の裏口の方へもどってしまった。

だが日吉は、後では胸がどきどきしていた。

——今に奥から、呼びに来はしまいかと虞おそれて。

しかし、何事もなかった。

いつかそんなことも忘れているうち、年が暮れた。彼は十六の年を迎えた。

百姓は百姓なみに、町人は町人なみに、十六となれば、元服のまね事をし、若い者の仲間入りをするのであったが、彼には、そんな祝い事はおろか、扇子せんす一本、くれる者もなかった。

ただ、正月なので、広い台所の板敷の隅つこで、ほかの下男たちと共に、水ツ漬みずばなをすりながら、粟あわの雑煮餅を、めずらしく喰べただけだった。

それでも彼は心の裡うちで、

「おつ母や、おつみは、このお正月、餅を喰べているかしら？」

と、ふと思いやった。

粟を作る百姓でいながら、餅もなく送った正月を、何度も覚えているからである。

彼が、そんなことを思い出しているうち、他の下男たちは、

「今夜はまた、旦那さまの客呼びで、おらたちまで、お末かしこまに畏こつて、長談義を聞かねばならぬ晩だぞ」

「嫌だのう。せつかくのお正月を」

「腹いたでも起して、寝ているとするか」

などと、何かこぼし合っていた。

年に二度か、三度。

初春とか、えびす講とか、何ぞの折というところ、茶わん屋捨次郎はよく客を呼んだ。

瀬戸^{せと}の職人たちだの、那古屋^{なごや}や清洲^{きよす}のとくい先の家族だの、武家だの、親類先のまた知りあいの者だのと——ずいぶんな客が夕方からそろそろ集まった。

「ようこそ。……ようお越し」

捨次郎はその日、とりわけ機嫌よく、そして腰ひくく、自身で接待したり、日頃の疎遠^{そえん}など詫びあうのである。

彼の美しい妻女はまた、茶席をもうけて、珍らしい器や、心入れの花など挿^さし、

「御所望ならば」

と好む者へは、茶をたてて清雅なもてなしもした。

東山殿^{ちやじ}が茶事^{すき}の数寄^とを称えられてから、その余風が、いつか民間にも移っていた。その影響がまた、民家の畳とか障子とか、床の間とか、箸茶碗の好みにまで、自然と変化^{うなが}を促して来て、知らず識らず茶は生活の中へはいっていった。

わけて瀬戸村一帯で焼かれる特色のある陶器^{やきもの}は、その淡雅な味が、茶の用器に多く需

要されだしてきたので、職人たちでも、茶をのむことを知っていた。——また、狭い小部屋の中で、一輪の花と、一服の茶だけで、その間、戦乱の世の中も、苦悩の人生も、ふと忘れて、濁^{じよく}世のなかにも気を養うという術^{すべ}を、理窟なく覚えていた。

「これは、お内儀どのか」

四十がらみの骨太な武士であつた。次々と集まる客の中に入り交^まじつて来ていた一人なのである。茶席へはいつて来ると、茶わん屋の妻へいんぎんに挨拶をして、

「てまえは御親類の米野の七郎兵衛どのの知合でござる。七郎兵衛どのの御案内で参る約束でござつたが、生憎と、その七郎兵衛どのがお風邪^{かぜ}氣とやらのため、不勝手ながら、一人でお招きへ寄せてもらいに参つた」

と述べ、

「御^{みくりや}厨の渡辺天蔵で」

と、辞儀ていねいに、後から名を云い添えた。

もの腰もやわらかい。郷土くさい武骨さもあるが、茶を一ぷくと望むので、妻女は、黄瀬戸の茶わんに、茶を立てて出した。

「作法はわきまえませぬ」

と、いうことは弁えたもので、天蔵は氣らくに服みながらそこらを見まわし、

「さすがは、評判なお物持ち、結構なお道具ぞろいだ。失礼なれど、そのお水挿に用いておられるのは、世にいう、赤絵とやらではござらぬか」

「お目にとまりましたか。そのような物だそうでございまする」

「ふーむ」

と、感じ入った眼をそれにすえて、

「赤絵とあれば、堺の商人の手にでもかかれれば、千金もいたすであろうに。……いや値などとはとにかく、近頃、眼の保養をいたした」

などとなかなか腰を上げないでいたが、そのうちに、奥の支度ができましたから——という迎えに、

「どうぞ、あちらへ」

と、妻女は案内して、共に広間のほうへ出て来た。

ぐるりと何十人前の膳が、広間の襖や壁に沿って輪になって並んでいた。亭主役の茶わん屋捨次郎は、その真ん中に坐ってあいさつを述べ、妻女や女童の酌で酒がすむと、捨次郎はいつものように、

「では、てまえもお裾^{すそ}をいただいて——」

と、自分の席につく。

そしてそれから、彼が壮年時代に見聞して来た「明^{みん}国^{こく}ばなし」の長談義がはじまるのだった。ほとんど、その頃の日本では、何^{なん}人^{にん}と知らない明国の知識を話したために、彼は客呼びをして、こんな馳走もするのだった。

家内中をあげて、接待したり、馳走をしたり、暇をつぶしてまで、茶わん屋の主人捨次郎が、こうした客呼びを年に幾度かする気もちの中には、自分のもっている明国の知識とか、渡洋した体験とかを、世間へ誇ろうとすることよりも、実はもっと痛切に、べつな意味があつたのである。

それは、わが子として——いや生みの子以上に、可愛^{おふく}がつて育ててきた於福^{おふく}への、大きな愛の一つなのであつた。

なぜかというに——

於福がもともと彼の実子でないことは、誰でも知っているが、同時にまた、純粋な日本の生れでもない素姓を、いつか世間では、めずらしい噂にしている。

で、幼少から、遊びに出ても遊び仲間の子どもから、

（唐人子。唐人子！）

と、からかわれたり、泣かされて帰つて来たり、内気な於福は、よけい内気になる傾きがみえた。

捨次郎は、そのたび胸をいためて、亡き五郎大夫の依いしよく嘱にすまない気がするのだった。於福の生みの母は、明国の産で——梨りきん琴という氏素姓もひくい一中国婦人であつた。長年、日本から景德鎮へ陶業の留学に渡つていた伊勢松坂の人で——祥シヨンズイ瑞五郎大夫とのあいだに生なした子が於福なのである。

楊景福

それが、於福の幼名なのだ。

五郎大夫が、いよいよ日本へ帰るとなつた時、下僕の捨次郎は、その楊景福おぶを負つて、長江や玄海の千里の船路を、日本まで連れて来たのであつた。

ところが祥シヨンズイ瑞五郎大夫は、日本へ帰るとまもなく病やまいにかかつて亡くなつてしまった。多年、明国で研究してきたものを土台に、祖国の陶器やきもの工芸に一生面を拓ひらこうとした理想も中途で終つてしまつたし、梨琴とのあいだに生なした子の育つのも見ずに逝いつてしまったのである。

（於福はそちに頼む）

と、その主人から、捨次郎はいまわの際に、託されたのだ。

日本へ来てからは、もちろん「楊景福」ではおかしいので、福太郎と名を改めてはいたが、松坂あたりの人々のあいだでは、

（あれは、唐人子や）

と、隠れもないこととされていた。

と、隠れもないこととされていた。
祥 瑞の亡き後、捨次郎はその松坂を去って、郷里の尾張へひき移り、この土地の瀬

戸村で産出する陶器をはじめ、諸国の窯の製品も扱って、那古屋、清洲、京、大坂あたり

まで手びろく商いをしていたのであったが、於福の生い立ちと、その母が、日本の女でな

いということは、諸国へ往来の繁しい土地がらだけに、ここでもいつか人の耳へ伝えられていた。

（世間の衆が、明国の事情をよく知らないからだ。また生半可、隠しだてするから奇異な目で見たがるのだ）

捨次郎は、こう考えた末、

（世間へ、明国とは、こういう国だということを、教えてやろう。……そしたらかえって、

於福も自覺をもつて、自分のうけた血に、恟々おどおどせず、内気がなおるかもしれない。

——彼の客呼びと、彼の得意にする明国ばなしは、そういう心理からも起っていたわけであつた。

さて。

それはとにかく、当夜の来客たちも、如才なく、酒がすすむにつれて、

「御主人。ひとつまた、明国のおはなしでも」

と、客のほうから促うながした。

天竺てんじくとか、唐からとかいうと、夢の国のように思っていた民衆も、近ごろは、鉄砲が渡来されたり、自鳴鐘じめいしょうという物を知ったり、縞しまや更紗さらさなどの織物を見たりして来て、この天地のうちには、日本のほかに、そういう大きな国々もほんとに在るあのだということを——漠然とではあるが——一般に知られかけてきた時代である。

捨次郎は、一座の客に向つて、

「ぽるとがるとか、すぺいんとか、おらんだとか、そういう紅毛人の国々と明国とを、同じように考えてはいけませんよ。なぜならば明国と日本とは、東洋というて、国こそちがうが、皮膚の色から、髪の毛、文字や宗教や道徳や——また、血までがまったく似ている

国がらなのでしてな」

と、まず話した。

それから。

秦^{しん}の時代や、漢^{かん}や唐^{とう}の頃にも、かの地から日本へ、多くの者が移住して来て、日本に帰化していること。その帰化人たちは、日本人の妻をもち、子を生み、そして日本の文化にも、いろいろな功績を残して来ていること。

また、日本からも、そのむかしは遣唐^{けんとう}使をのせた船が、頻りに、海を往来して、知識や物産を交易し、ほとんど、ふたつの国のあいだがらは、齒と唇のような関係であつたということ。

たとえば日本で、日常よく喰べる豆腐みたいな物にしても、かの地の土産^{みやげ}ものだし、食物ばかりでなく、山川風物も、人情も道徳も、また美術でも文学でも、すべてが不思議なほどよく似通っている国がらなので――。

ただ、まったく違っている点といえば、日本は、上に、一系の皇室をいただいて、連綿とかわることがないのにひきかえて、かの国では、余りな大国のせいもあるうが、何千年来、王霸^{おうは}の争いがたえず、興る者がみずから帝王を称えて、民心の帰一するところがない

ために、その歴史は乱脈で複雑で、従って、国情というものが、大きに異っている。

ひと口にいえば、はしやう覇道の国。

乱れても、戦い合つても、日本において、朝廷という御中心は確固として、幾千代までも御中心である。民の心のなかにも常に中心となつてゐる。そういう安らかさは明国にはない。

「——思えばありがたい国にわたしたちは生れたもので」

捨次郎は、そんなふうに、日本と明国とを、比較して話したりした。

そしてそれとなく、於福に向つては、卑屈ひくつな氣を持つなど教え、世間に向つては、明国と日本との密接な關係を論さとした。

だから於福も、近頃は、内氣どころではなくなつた。奉公人も世間の者も、決して彼をからかわなくなつた。

「いや、ご馳走になりました。こん夜もいろいろと、耳新しいお話をうかがつたりして」

「もう十分に、頂戴ふいたしました。夜も更ふけましたれば、この辺で」

「ぼつぼつ、お暇いとまを」

「そうじゃ、おひらきといたそうかの」

無事——その晩の招き事も終つて、客は次々に歸つて行つた。

奉公人たちは、その後がまた、一しきり忙しい。

「やれ、やつと仕舞つたか」

「お客には、珍しいかもしれぬが、明国のはなしも、わしらには年中なのでな」

などと欠伸^{あくび}まじりに、大勢であと片づけにかり出すのだった。もちろん日吉も、追いまわしに使われて、その中でぐるぐる働いていた。

ひろい厨^{くりや}の灯も、広間や主人たちの部屋の灯も、やがてみな消されて、茶わん屋の家を囲む土塀の門にも、頑丈なかんぬきが横に懸けられた。

武士の屋敷はいうまでもない、町人の住居でも、少し財産家と見られるほどな家なら、必ず土塀をめぐらすとか、濠^{まわ}で周りをかこむとか、そして門の内にも、二重三重に、盜賊に備える要害をしていた。

そういう夜の不安は、応仁^{おうにん}の乱^{らん}あたりから後は、都会でも地方でも、もう当り前のことになって、誰も怪しもうとはしない。

日が暮れたら寝る。

それが習性になつていた。

寝るのが、ただ楽しみのような雇人たちは、各の寝小屋へもぐりこむと牛のように正体もなかった。——下男部屋の片隅に、木の枕をかつて、薄い藁わらぶとんをひきかぶっている日吉のほかは。

「……オヤ？」

日吉は、眠られぬままに、ふと首をもたげた。

彼も、今夜の客呼びのお下しものほうで、主人の捨次郎の大明国のはなしを熱心に聞いていたが、さなくても空想の多い彼のことなので、大きな感動をうけた後はいつも、軽い熱病のようになかなか眠りの中に落着けないのであった。

「何だろ」

身を起すと、日吉はふとんの上に坐ってしまった。

たしかに今、裏のほうで、木でも折れるような響おびきがした。——その前もぴたぴたと人間の登あしおと音のような気配がしたと思つて、耳をたてているうちにである。

台所から日吉はこっそり戸外をのぞいてみた。大瓶おおがめの水も凍り、板いた廂びさしから剣のよ
うな氷柱つららが垂れている寒空の冴えた夜半だった。——ふと、裏の巨おおきな木のうえを仰ぐと、それへ攀よじのぼっている人間がある。今の大きな響おびきは、その人間が足をかけた梢の一つ

が裂けたものとみえる。

日吉は体じゆうを眼にして、樹の上の人間の奇怪な行動を見つめていた。

その男は、^{ほたる}螢ほどな小さい火を、くるくる宙に振っていた。それは火縄にちがいあるまい。赤い渦巻から微かな光の粉が風にふきこぼれ——何かの合図でも外へしているらしく思われた。

「あッ、降りて来る——」

日吉はとび出して、^{いたち}鼬のように物蔭へかくれた。木から^{すべ}迂り降りた男は、とたんに大股な足を移して、表のほうへ廻つて行く。それをやり過して、日吉は後から尾^つけて行つた。

「や。宵に見えたお客さまの一人だぞ」

彼は、ありえないことのようにつぶやいたが、やはり覚えのある人間だった。

それは、この近郷の^{みくりや}御厨の渡辺某であると名のつて、御寮人の茶席へも通り、主人の捨次郎のはなしも始終、熱心に聴いて帰つた郷士の客にちがいない。

客はひとり残らず帰つたはずなのに、今頃まで、どうして、どこに残っていたものだろう。しかも今見れば、^{みこしら}身拵えも宵とはちがって、^{わらじ}草鞋をはき、^{はかますそ}袴の裾を巻き^{くく}括り、大太刀を横ざまに帯びて、^{つのたか}角鷹のような^{けわ}険しい眼をあたりへ払っている様子——見るからに

殺伐^{さつぱつ}な血のにおいをすぐ思わせる扮装^{いでたち}なのだ。

「待て、待て。——今、かんぬきを外すから、静かにしろ」

云いながら、その奇怪な人間は、門の内側へ寄つて、そこを開けにかかったが、その間も、外にひしめいている大勢の囁き^{ささや}や手が、門をがたがた揺^ゆがしていた。

どひ
土匪の襲来？

そうだ。野武士の頭^{かしら}が、いなごの群れのような数多の手下を闇から呼んで、掠^{かす}めにやつて来たのだ。

日吉は、物蔭で、

（泥棒！）

と感じると、とたんに自分の血しおの沸^{たぎ}りで、自分が分らなくなっていた。

だが、その忘失も、その恐怖も、自分の仕えている主家の大事——という観念の以外に——である。いや、それだけが、彼の頭を占めてしまったので、他の考えも危険もまったくなくなっていたという方が正しい。さもなくしては、その時、日吉が取った行動は、余りに豪胆^{ごうたん}すぎるし、白痴^{はくち}の所作^{しよさ}というしかなかった。

「おじさん——」

のこのこと、物蔭から歩き出して行くと、どう思つてか、彼が、こう呼んだものである。今、——その門を開いて、大勢の手下を迎え入れようとしていた野武士の渡辺天蔵の背なかへ向つて。

「……？」

ぎよツとしたような顫え^{ふる}が、天蔵の足から背すじへ、明らかに走つた。まさか十六歳のこの家の童僕とは思えなかつたに違いない。

「……………」

見れば、猿のような顔をした不思議な少年が、妙に馴^{なつ}ツこい眼をして近づいているのである。野武士の天蔵は、ややしばし穴のあくほど見つめていたが、

「何だ、汝^{われ}は？」

と、どう考えても、解釈しようのない顔つきで、やがて訊ねた。

日吉は平然と——いや平然と見えるほど、危険を忘れていたのだろう。ニコともしない代りに、格別、どうという顔色もせず、

「おじさんは、何だい？」

と、訊きかえした。

「なに？」

天蔵は、いよいよ自分の智恵と取り組んで解釈に苦しんだ。そして、

（馬鹿かな？）

と、疑ってみたが、気のゆるせない眸ひとみを感じるし、その眸が、子どものくせに、妙に此方を圧して来るのだった。

で、天蔵は、日吉のその視線を払い退のけるように、つよく睨ねめ返して、

「知れたこと、おれたちは、御厨みくりやの野武士だ。声をたてると、ぶツた斬るぞ。餓鬼いのちも生命などを取りに来たのではないから、踏みつぶされないように、薪小屋まきごやにでも引っこんでいろ」

抜く手まねでもしたら横ツ飛びに消えてゆくであろうと、天蔵が、大太刀のつかを一つたたいて見せると、日吉は、にやつと白い歯を出して、

「じゃあ、おじさんは泥棒なんだね。——泥棒なら、欲しい物さえ持つて行けばいいんだろ」

「うるさい。彼方あつちへ行け」

「行くけれど——その門を開けたら、おじさん達は、一人のこらず生きて帰れないぜ」

「なんだと」

「知らないだろ。誰だって知らないけれど、おらだけは知ってるんだ」

「小僧、汝^{われ}はすこし、気が狂っているな」

「自分のことをいつてら。おじさんこそ頭が悪いぜ。こんな家へ泥棒にはいつて来るなんて——」

門の外では、かかることも知らないのです、その開くのを待ちしびれて、天蔵の仲間が、

「まだか、まだか」

と、扉を鳴らしていた。

野武士の渡辺天蔵は、

「待てよ。ちよつと待て」

と、門の外の者を、制しておいてから、また、日吉へ向って、

「この屋敷へはいると、生きて帰れないと今てめえがいったが、ほんとか？」

「ほんとさ」

「それは、どういうわけだ。いい加減なことをぬかしたら、素^そツ首^{くび}をひき抜くぞよ」

「ただは教えてやらないよ。おらに何かくれなければ嫌だ」

「ふう……ム」

天蔵は呻^{うめ}いて、日吉に向けていた疑心暗鬼を、茶わん屋の家全体に向け直した。星の空は吹き研^とがれて、明るいばかりだったが、土塀にかこまれたこの家の一劃は、屋の棟も下がるという丑^{うし}溝^{みつ}の闇に沈んでいた。

「――何が欲しい」

試みに彼がいうと、

「物なんか、欲しくない。おらを手下にしてくれれば」

と、日吉はいつた。天蔵は、眼をみはつて、

「じゃあ汝^{われ}は、おれ達の仲間にはいりてえのか」

「うん」

「盗賊になりたいのか」

「うん」

「幾^{いく}歳^つだ」

「十六」

「なぜ盗賊になりたい？」

「この主人は、おらをこき使つてばかりいるし、この奉公人は、おらを猿々と虐めてばかりいるから、おじさんみたいな野武士になつて、仕返ししてやりたいんだ」

「よし。手下にしてやつてもいい。——だが、それは汝が証を立ててからだぞ。さあ、前に云つたことの理をいえ」

「この家へはいると、みな殺しになるといつたわけかい」

「そうだ」

「おじさんの謀事がまずいからさ。おじさんは宵のうち、お客に化けて、大勢の中へ交じつて来ていたろ」

「うむ」

「誰だか、おじさんの顔を、知っていた者がいたよ」

「そんな筈はない」

「ないツていつたつて、御主人がちやんと知つてたもの。——だからおら、宵の口、まだお客さんがいるうちに、御主人の吩咐で、藪山の加藤清忠様のおやしきまで走って行き、きつと夜半におしかけて来るにちがいないから、お願いしますと、知らせてあるんだ」

ぜ」

「藪山の加藤？……アア、織田の家中の加藤弾だんじょう正か」

「弾正さんとうちの御主人とは、親類づきあいだから、すぐ近所に住んでる侍衆さむらいしゅうを十人以上も集めて、みんなここのお客に拵こしらえ、宵のうちに来て、家の中で待ちかまえてるんだ。嘘じゃないよ」

真実ほんとうらしい。——いや信じきった様子が、渡辺天蔵の狼狽うろたえた顔いろに見て取れた。

「ううむ、そうか……。してそいつらは、どうしている」

「車座になって、今し方まで、お酒をのんで待つていたけれど、もう襲って来ないらしいぞといって、思い思いに寝ているよ。——おら一人、こんな寒い中に、張り番に立たせておいて」

「では汝われは、見張りをいいつけられて、立つていたのか」

日吉が頷うなずくと、同時に、天蔵は飛びかかつて、

「喚わめくと、生命いのちがないぞ」

と、大きな掌てで、彼の口をふさいでしまった。日吉は、もがいて、

「おじさん、おじさん。約束がちがうよ。騒ぎはしないからこの手を放しておくれよ」

賊の天蔵の手に、爪を立てながら、塞がれている口でわめいた。

天蔵は、首を振って、

「いや、おれも御厨みくりやの渡辺天蔵だ。汝われのはなしを聞けば、この家にも備えがあるそうだが、そうかといつて、空手で引き退つては、手下の者へも、顔向けがならねえ」

「だから……だからさ」

「どうするというのだ」

「おらが、おじさんの盗みたい物を、持ち出して来てやるから——」

「汝われが取つて来ると」

「ああ。……そんならいいだろ。斬つたり斬られたり、危ないことをしなくてもすむし」

「きつとか！」

日吉の喉のどをぎゅつと締めつけて天蔵が念を押した。

門のあくのが遅いので、門の外では、天蔵の手下たちが、不審を抱いて、恐れたり疑ったりしながら、

「頭かしら。……頭」

「どうかしたんですか」

「門は、どうしたんで？」

などと頻りに、その扉をまた、ごとごと揺り出していた。

天蔵は、かんぬきを半分ほど抜いて、その隙間から外へ、

「すこし模様が悪いから静かにしている。そして、てめえたちはかたまっていねえで、そこらへ影をかくしていたがいいぞ」

さては——と疑いの怯み^{ひる}を衝かれて、手下たちは、さつと群れを解き、草むらや木蔭や、思い思いの闇をさがして、身を潜^{ひそ}めてしまった。

日吉は、渡辺天蔵から吩咐^{いひつけ}けられた品を、家の中から持ち出して来るために、元の下僕部屋の口から、そうつと、母屋のほうへはいつて行つた。

見ると、いつも夜半はついていない筈の主人の居間に、灯^{あかり}がさしていた。

「旦那さま」

日吉は、板縁^{かしこま}に畏つて、声をかけた。——返辞はなかったが、主人の捨次郎も、御寮人も、そこに起きて坐っている気配がする。

「もし、御寮人^{ごりょうにん}さま」

もいちどいうと、

「……誰？」

と、御寮人の声である。——明らかに顫えをおびている。さつきからの微かな物音や人声に、主人か妻女かが、眼をさまして、一方をゆり起し、土匪の襲来を覺つて、観念の眼をふさいでいたところにちがいない。

そこへ、日吉が障子をあけてはいつて来たので、主人の捨次郎も御寮人も、眼をみはつてしまった。——恐怖のさめきらない不安の顔いろのうちに、啞然と、彼を見まもる眼を大きくすえていた。

「野武士がやつて参りましたよ——多勢して」

日吉は、告げた。

主人夫婦は、ごくりと唾をのんだだけで、何もいわない。——いや云い得ないほど白々と齒の根を嚙んだ顔しているのである。

「——踏みこまれたら、それこそ大変です。旦那さまも、御寮人さまも、縛り上げられてしましましょう。五人や六人の人死や怪我人は、きっとできるにきまっています。……ですから、私が計りごとを考え、野武士の頭を、外に待たせておきました」

賊の渡辺天蔵にいった通りのことを、日吉は、主人夫婦へそのまま告げて、

「——ですから、旦那さま、野武士の頭が、欲しいっていう物を、出して遣やつてしまおうとようございますよ。私が持つて行つて、渡してやれば、それで帰つてしまいますから」
と、いった。

——ややあつて。

「日吉。いったい、野武士の頭は、何をよこせというのだね」
捨次郎が口をひらいた。

日吉は答えて、

「はい。賊の渡辺天蔵が目をつけて来たのは、御当家で御秘蔵の——赤あか絵の水みづ挿さしだといつていました」

「えつ。赤絵の水挿を」

「それを渡せば、帰つてやるといっています。こんな安いことはございませんから、渡してやろうじやございませんか。……といつても、それは此方の計略ですから、私がこつそり、持ち出して渡してやる振りをして」

日吉は、得意げに、主人夫婦へすすめたが、捨次郎は固もとより御寮人の眉のあたりは憂いと恐怖に、黒ずんでしまっている。

「赤絵の水挿つていうのは、きょうのお招きに、蔵から出して、茶席でお使いになつていたあの陶器やきものでございましょう。……野武士の頭なんて、ばかな奴でございますよ。何を欲しがるかと思つたら、あんな物を持つて来いっていうんですから」

日吉は、くすくす笑いたいほどな顔して、そういつたが、御寮人は化石してしまったように無言だし、捨次郎は、大きな吐息をついて、

「弱つたのう」

と考え込む。

「旦那さま、どうしてそんなに考えるんですか、陶器やきもの一つで、血を見ずにすむことを」

「あれは、わしが商売に扱つているような、ざらにある陶器ではない。明国みんこくにももう滅多シヨンにない品だ。その明国から、苦心して日本まで持つて来た物だ。また亡くなられた祥

瑞ズイ様のお遺品かたみでもあるし」

捨次郎がつぶやくと、御寮人も一緒になつて、

「堺さかいあたりの茶道具屋では、千金もするという高価なものだよお前……」

恨みがましく、云いはしたものの、殺伐な野武士はなお恐かった。抵抗して皆ごろしに遭い、家屋敷まで焼かれてしまった実例など——何処の国々でもめずらしくない今の世の

中だった。

やはり、男はこんな場合、ふつりと思いきりがいい、捨次郎もしばらくは、断ち難い愛着を断ちかねていた様子だったが、やがて、

「ぜひがない！」

同時に、少し生気を取りもどして、塗筆笥ぬりだんすの小ひきだしから、土蔵の鍵かぎを出し、

「持つて行つてやれ」

ことばと共に、それを日吉の前へ、抛り出した。

年に似げない才覚、よく計つたと——日吉の仕方を、心では思いつながら、むぎむぎ失う赤絵の水挿みずさしへの執着に、忌々いまいましさがこみあげて、賞められもしなかった。

日吉は、一人で蔵をあけた。そして一箇の箱を抱えて来て、鍵は主人の手へ返し、
「もう灯あかりを消して、そつとお寝やすみになつていたほうがようございますよ。心配はありませんから」

とまで、注意をして、再び外へ出て行つた。

どうか？——と半ば、疑いながら待つていた渡辺天蔵は、日吉の手から、赤絵の箱を受け取ると、品物の容態あらたを極めて、

「ウム。これだ」

と、顔の筋を解ほどいた。

「じゃ、おじさん達、はやく引き揚げたほうがいいぜ。今、蔵から探し出す時、蠟燭ろうそくをつけたもんだから、加藤様やほかのお侍たちも、眼をさまして、一廻り屋敷のまわりを見廻ろうかといつてたから」

追い立てると、天蔵は、急にあたふた、門の外へ飛び出して、

「小僧、いつでも御厨みくりやへたずねて来いよ。手下に使つてやろう」

云い捨てて、闇へと、影を消してしまった。

猫ねこの飯めし

怖ろしい一夜は明けた。

——あくる日の真昼間ごろ。

まだ松の内なので、御慶ぎよけいの客はちらほら絶えないが、茶わん屋の奥には、妙にしいんと冴えない陰ただよが漂ただよっていて、主人の捨次郎もむっさり顔しているし、いつも陽気な御寮人

の姿も見えない。

その義母ははの部屋へ、息子の於福おふくは今、そつと来て坐っていた。彼女は、ゆうべの悪夢の怯えおびからまだ醒めさないように、青白い顔して、病人のように寝籠ねこもっていた。

「義母かあさん、今、お義父とうさんにも話して来ましたから、もうご安心なさいまし」

「そうかえ。そして、何と仰つしやったえ？」

「初めは、私のいうことを、半信半疑でいらつしやいましたが、私が日吉の日頃の素振りから、いつぞや私をつかまえて、家の裏で——御厨みくりやの野武士をよんでくるぞ——と現に
あいつが、脅おどし文句もんくをいったことまでお聞かせすると、ウームそうかと、びっくりしたご様子でした」

「すぐに、暇を出すといつておいでたかえ」

「それもなかなか仰つしやらないで——見どころのある小猿だが——と思案していますから、泥棒の手先を家の中に飼っておく気ですか——私が云つて上げたんです」

「第一、わたしは、最初からあの日吉の眼つきが嫌いなんだよ」

「それも云いました。そしたらやつと、そんなに皆しやうが性に合わないというなら、暇を出すしかあるまい。けれど、藪山やぶさんの加藤殿からおひき受けた手前もあるし、自分からは云い

にくいから、お前たちで、何とでも談合して、あたさわ当り障りないよう、暇を出してくれと云い残して、お義父とうさんは、出かけておしまいになりましたよ」

「ああそれでよかった。わたしはもう半日でも、あんなお猿の妖怪ばけものみたいな子を、使っておくのは嫌で嫌でたまらない。……日吉は今、何している？」

「蔵で荷造りを手伝っています——何ならすぐここへ呼んで来て、云い渡しませうか」
「よしとおくれ。顔を見るのも嫌だから。お義父とうさんがそう仰つしやったなら、おまえから、きよう限り暇を出すといつて、帰してしまつたらそれでいいではないか」

「はい」

於福は、内心ちよつと、ひる怯むようであつたが、

かしこま「畏りました。——手当のことは、どうしてやりませうか」

「元より給金など遣る約束で抱えたのではなし、ろくな働きもできないのに、喰べさせたり、着物を着せたり、それだけでも、あの子の分には過ぎていきます。けれど……：……そうだね、今着ている着物をくれてやつて、塩の二升もほど施しておやり」

於福は、自分一人で云い渡すのは、何だか日吉に対して不気味な気がしたので、ほかの雇人を連れて、一緒に外の陶器蔵やきものぐらへ歩いて行つた。

蔵の中を覗いて、

「小猿。いるかい」

呼ぶと、頭から藁わらゴミをかぶって働いていた日吉は、

「はい。何ですか」

いつもより元気な返辞をして飛び出して来た。

人にいつてはよくないと考えたから、誰にも話していないが、ゆうべのことは、彼自身で、心のうちに、得意に思っていたのである。きつと今に主人から、改めて、賞ほめてくれるにちがいないと、密ひそかに待っていたほどだった。

於福のそばには、雇人のうちでも、腕ぶしの強い——日吉がふだん一番怖れている手代が、突つ立っていた。

「小猿」

「へ？」

「おまえな。もう今日から、帰ってもいいよ」

於福のことばだった。

日吉は、怪訝けげんな眼をして、

「どこへです？」

「どこって、自分の家へさ。——家はあるんだろ。今でも」

「家はあるけれど……？」

何故？——と日吉が云い出さないうちに、於福は、云いかぶせた。

「きよう限り、お暇が出たんだ。今、着ている着物はくれてやるから、すぐ出ておいで」
すると、側にいた手代が、日吉の寝衣ねまきの包に、二升の塩を添えて、

「これも、御寮人さまのお情けで、おまえに下さるとのことだ。お礼はいわなくてもいいから、ここからすぐに出て行きなさい」

「……？」

日吉は、茫然としていた。

かつと熱いものが顔にのぼって来る。その眼は、於福へとびつきそうな怒りをあらわした。

「……分ったかい」

於福は、後ずさりながら、手代の手から寝衣ねまき包と、塩の袋を取って、地へ置くと、あわてて行ってしまった。

日吉はなお、その姿へ、飛びかかつて行きそうな眼をやっていたが——その眼には涙が
いっぱいにあふれて来て、何もかも見えなくなってしまう。

野火のように暴れ狂つてやりたい憤りと——同時に彼の頭には、すぐ母の悲しげな顔が
泛^{うか}んでいた。

（こんどまた、奉公先から出されたら、藪山の加藤殿のお顔にもさわるし、この母も、世
間へ恥かしゆうて、誰へも顔向けがならぬぞよ——）

茶わん屋へ来る前に——そういつて涙ぐんだ母の顔が——あの貧乏と、子を生むたびに、
目立って窶^{やつ}れてくる母の姿が——彼の憤怒する血の中に、脆^{もろ}い涙と、情痴な涙^{はな}を啜^{すす}らせて、
その身を、どうしていいか分らないように、しばし棒立ちにさせていた。

「猿」

「どうしたい」

「何かまた、しくじったな。お払い箱だつていうじゃないか」

「もう十六だ。どこへ行つたつて、御飯ぐらいは喰わせてくれるさ。男だ。ベソ搔くな、
ベソ搔くな」

笑いながら、他の雇人だの、居合わせた人々が、彼を真中に、あつちこつちで、働いて

いながら云った。

日吉の耳には、ただ笑つて囁はやされたような覚えしかなかった。けれど彼は、誰にだって泣き顔などは見せもしなかった。かえつて白い歯を見せて、そこらを振り向き、

「誰が、ベソなんか搔くもんかい。——おらはもう、茶わん屋奉公など飽あきあき々だ。こんどは侍屋敷へ行つて、侍奉公をするんだよだ！」

寝衣ねまぎ包づつみを背なかに背負い、そこらに落ちていた細竹に、塩の袋を差して、ひよいと肩かたに担いだ。

「侍奉公するとよ」

「あははは。あんな捨てぜりふをいつて行きやあがる」

憎めないが、誰ひとり同情の眼で、彼の出てゆく背を見ていた者はなかった。日吉もまた、一步その土堀を出ると、青空の碧あおさに心を吸われて、解ほぐれた気持のほか何もなかった。

——去年の八月、小豆坂あずきざかの合戦で、敵の今川勢のなかへ駆け入り、功をあせつたために、弾だんじょう正は重傷を負つて、やつと帰つた。

それ以来は藪山やぶやまの家に寝たつきりで——妻のおえつの看護みとりをうけていたが、年暮くの寒さをこえて、この正月になつては、腹部にうけた槍傷が毎日痛むらしく、苦しげな呻うめきがのべつ洩れていた。

——その血膿ちうみに汚れた良人の肌じゅばんを、おえつは、屋敷の中を通つてゆく流れで洗つていたが、ふと、

「誰であろう？ ……暢気のんきらしゆう……」

と、腹の立つように、身を伸ばして、声のする方を見まわした。

光明寺山こうみょうじやまの中段にある屋敷なので、土塀の外へ顔を出すと、麓ふもとの道も見える。中村の耕地も見える、庄内川しょうないがわや尾張の平野もひろびろと眺められる。

寒々と、正月の陽は、平野の果てにうすずいて、きょうも暮れかけていた。

糸を繰くるのも

よるといい

日の暮るるをも

よるといい

くるくるしくも何かせむ

くるより待つこそ

久しけれ

ヤヨ

久しやな

大きな声であつた。今の社会のけわしさも人間苦も知らない者の声だつた。室町末の
人々に謡^{うた}い飽^{うた}かれた歌が、この尾張あたりへ伝つて来て、農家の娘の糸繰^{いとくり}歌などに詠^{なま}
てよく謡^{うた}われている。

「……おや。日吉じゃないかしら？」

おえつは、麓から今、そう謡いながら登つて来る者を遠くから見てびっくりした。

弾正から頼んで、おとし頃、茶わん屋へ奉公にやつてある姉の子の日吉にちがいない。
何か、汚いふろしき包を背なかに背負い、竹の棒にも何やら差して肩に担^{にな}いながら暢^{のんき}気そ
うにやつて来るのだ。

「まあ、すこし見ないうちに、大きゆうなつて……」

それにも眼をみはつていたが、その大きな身なりになつても、相かわらずらしい暢^{のんき}気さ
に、呆^{あき}れていたのだつた。

よしや辛^{つら}かれ

なかなか

人のなさけは

身の仇^{あだ}よ

ヤヨ……

「やあ、叔母さん、そんなところに立っていたんですか。……今日は」

日吉はそこへ来るとぺこんとお辞儀をした。歌をうたいながら歩いて来た心身の弾^{はず}みが、わざとする気もなく、ひょうきんに挨拶をさせるのだった。

だが、若い叔母は、笑いを忘れた人のように、晴れない顔をしたまま、

「めずらしいこと。——上の光明寺さまへもお使いに来たのかえ」

と、いった。

「いえ」

日吉は、とたんに、頭を搔いて、少し云い難^{にく}そうに、

「茶わん屋から、お暇が出てしまったんで……。叔父さんに知らせなければ悪いと思って、寄ったんで」

「え。……また？」

おえつは眉をひそめて、

「またおまえ、追い出されて来たんですか」

「だって……」

日吉は、理^{わけ}を話そうと思つたが、何だか面倒くさくなって、

「叔母さん。……叔父さんはいるの。いたら、会わしてくんない。おねがいがあるんだから」

と、甘えた調子でいった。

とんでもない——良人はそれどころか、小豆坂^{あずきざか}の戦^{いくさ}で深傷^{ふかで}を負つて、きょうかあすかを案じている重態。おまえなどに会つていられるものではない。

若い叔母は、つけつけと、

「ほんとに、おまえみたいな辛抱なしの子を持つて、中村の姉さんも、かわいそうだね」と、沁々^{しみじみ}という。そう聞くと日吉は悄気^{しよげ}で、

「じゃあ、叔父さんに、お願いしてみようと思つたけど、だめだろうなあ」

「何をだえ」

「叔父さんは侍だから、こんどは何処か、侍屋敷へ奉公に、入れてもらおうと思つて」

「いつたい、おまえは今年、幾つになつたんですか」

「十六さ」

「十六にもなつたら、少しは世間が分りそうなもの」

「だからもう、つまらない家には奉公しないんだ。叔母さん、どこか口がないだろうか」

「いい加減におし」

と、野放図もないと、たしなめるように、おえつは、女の眼で睨めて、

「侍屋敷では、侍の家風に合う者でなければ、使いはしません。おまえみたいな野育ちの暢氣者のんきものを何処で——」

そこへ下婢かひが来て、彼女に告げた。

「ごしんぞ様。ちよつと急いでお越し下さいませ。旦那様がまた、お苦しみの御様子ですから」

おえつは、聞くとすぐ、日吉の姿など眼のうちにないように、何もいわず家の中へ駆け入ってしまった。

置き捨てられた日吉は、ちよつとぽつ然ねんとして、尾濃びのうの平野に暮れてゆく雲を見ていた

が、やがて土堀口からはいりこんで、加藤家の台所の外に佇^{たたず}んでいた。

すぐ中村の家へ帰って、母の顔を見たかったが、義父^{ちち}の筑阿弥^{ちくあみ}を思うと、わが家の垣^{いばり}にも、茨^{いばら}が感じられる。

（次の奉公口を、先にきめてから――）

というその辺の思慮と、藪山のこの家へは一度、耳に入れておくのが順序だとも考えたりして、来てみたのであるが、その弾正は、重態だというし……。

「どうしよかなあ？」

飢^{ひも}しい腹を思いながら、日吉は漠然と、今夜からの寢床を思案していた。すると彼の冷たい足に、何か柔らかなものが絡^{から}みついた。ふと見ると愛らしい小猫なのだ。日吉は、抱きあげて、台所の端に腰かけた。

「汝^{われ}も、腹^へが減^へつてるのか」

夕方の薄ら陽が、彼と小猫のまわりに寒げに映^さしている。小猫は、日吉のふところにがたがた顫^{ふる}えていたが、少し温^{ぬく}んでくると、彼の顔をペロペロ舐^なめだした。

「よせやい。よせやい」

日吉は顔を逃げながら猫へいった。彼は、猫はあまり好きでなかった。けれど今、彼に

こんな親しみを示してくれるものは猫しかなかった。

「あら……？」

ふと、日吉は耳をそばだてた。小猫の眼も、びつくりしていた。そこからすぐ向うに縁先の見える部屋から、病人の痼^{かん}だかい呶^{なう}鳴り声^{こゑ}がふいにしたからである。

——と、やがて台所へ、おえつが眼を泣き腫^{はら}した顔^{かほ}して退^{さが}つて来た。何か、良人の氣を損ねたのであろう。煎^{せん}藥^{やく}の土瓶^{どびん}をこん炉^ろへかけながら袖口で涙をふいていた。

「叔母さん……」

氣を遣^{つか}いながら、日吉は猫の背をなでながらいった。

「この猫、腹が減^へつて、顫^{ふる}えているよ。ご飯をやらないと、死んじまう……」

実は自分の空腹をも、訴えているのであった。けれど彼女は、猫の御飯どころか——と、「おまえ、まだそんな所にいたのかえ。陽が暮れても、家には泊めておかれないのですよ」といつて、また、袖に涙の目をかくした。

藥を煎^{せん}じながら、つきつめた胸をひとり抱いて、泣いている若い叔母のすがたには、二、三年前の幸福そうな、新妻の美しさはもう、雨にたたかれた花みたくに褪^あせている。

猫を抱いて、猫と共に、飢えと寢床に行きはぐれていた日吉は、

（泣いてるんだから、叔母さんも、何か心配があるんだろうな）

と、相手の身にもなって、まじまじと彼女のすがたを見ていたが、ふと、その若い叔母の体つきに、或る異様なものを感じて、何気なしに、

「叔母さん……叔母さんはお腹なかが大きいんだね。妊娠にんしんなのけ」

と、訊ねた。

泣いていたおえつは、自分がいちばん悲しんでいることを、いきなり突拍子もないことばで、訊かれたので、頬でも打たれたように、はつと顔を上げたが、

「男の子のくせに、そんなませたこと、いうものじゃありません。いやらしい子！」

と、よけいに悲嘆をいらだたせられたように、

「はやく、陽のあるうちに、中村へでも何処へでもお帰りよ。……わたしは今、そ、それどころではないのだから」

と、咽むせびかける声をのんで、部屋のうちへ隠れてしまった。

「……帰ろ」

自分で自分へつぶやいて、日吉は立ちかけたが、小猫はなお、彼の温かなふところから離れたがらなかった。するとさつき彼が云ったので、下婢が気がついたものとみえ、小皿

に冷飯を盛り、汁をかけて、それを見せながら外で呼んだ。

飯を見ると、小猫は、日吉のふところを捨てて、そのほうへ飛びついて行った。日吉は、口にいつぱい唾液つばをためながら、猫の飯と猫に見惚みとれていた。

「……………」

彼には、飯が与えられそうもない。中村の家へ行こうと心に決めた。そして空腹の身を起して、庭先を歩きかけると、閉じこめてある病人の居間から、耳ざとくその足音を咎とがめて、

「だれだッ」

と、呶鳴る声をした。

はっ——と立竦たちすくみに、日吉はすぐ、それが弾正と知ったので、日吉でございますと答えた。それから、ちようどよい折とも思ったので、茶わん屋から暇を出されて帰って来たことも、ついでにそこから告げた。

「おえつ。そこを開けろ」

と、弾正の声が内でする。

けれど彼の妻は、夕方の風がはいって冷えるとまた、傷口が痛むからと、しきりに宥なだめ

ているらしく、その障子は開こうともしないのである。

すると、弾正が、

「ばかッ、十日や二十日、生きのびたとして、何になる。開けろッ」

と、ふたたび癩癩かんしやくを起したので、おえつは、泣く泣く障子をひらいて、

「日吉、御病氣にさわるから、ごあいさつしたら直ぐ帰るんですよ」

「はい」

日吉は立ったまま、病室へ向ってお辞儀をした。弾正清忠は、蒲団ふとんを重ねてそれへ重症の体を凭もたせかけていた。

「茶わん屋を出されたか。——日吉」

「はい」

「むむ。よかろう」

「……………」

「暇を出されたことは、少しも恥辱ではないぞ、不忠、不義さえしなければ」

「ええ」

「そちの家も、以前は武士だ。武士はな、日吉」

「はい」

「飯のため、飯に使われてあくせくせんのが武士だ。天職のために、御奉公の本分のために、生涯する。飯はつき物、人間の天禄だ。——頼むから、貴様あ、飯を追って一生うろうろ送るような人間になつてくれるなよ」

塩しお

もう夜半よなかに近い。

疝かんのつよい、そのくせ体のひよわい小竹こちくは、泣きぬいていたが、やつと藁わらぶとんの中で、乳を離れかけた。

「母さん。——起きたら寒こごうて凍こごえてしまふがな。そのまま寝やすんでいなされや」
姉娘のおつみは、母を労いたわつて止めたが、お奈加は、

「何の、父さんも、まだ帰らぬのに」

と、起き出して、おつみと共に、宵よいから仕残してある夜業よなべ仕事を、炉のそばで、せつせとやりだした。

「父さん、どうしたのやろ。今夜もまた、戻らぬのかしら」

「お正月じゃほどに」

「でも、家の者は、母さんはじめ——餅一つ祝うでなし、こうして寒々、夜業よなべして暮して
るに」

「男は、交際つきあいというものもあるしのう……」

「いくら主あるじだからというて、働きもせず、お酒ばかり飲んで。——帰ってくれば、母さん
ばかり虐めいじ、わたし、腹が立つ……」

おつみも、もう年頃だった。ふつうなら嫁にも行く年だったが、この母を残しては嫁とつげ
もせず、この家計を知っているのは、春着一枚はおろか、紅白粉などさえ、夢にも思えな
った。

「いうてくれるな」

と、母は涙もろい。

「父さんは、ああいう人じゃでな、あてにはならぬが、日吉もやがてよい若者になる程に、
そしたら其女そなたも、嫁入りさせよう。……だが、この母を見ても、良人おっとはよくよく選ばぬと」
「母さん、あたし、お嫁にゆくことなど、まだ考えていませぬ。いつまでも、母さんの側

にいて」

「女子おなこはのう……そうもゆくまい。今の父さんには内密じゃが、前の良人弥右衛門様が、戦いくさで傷を負うた時、御主君からいただいたおかねのうち、青ざし一貫文だけは、其女そなたが嫁入りの代しろにと思つて取つてある。心がけておいた屑糸くずいとも、鞆まりにして七つも溜たまつた。あれで小袖の一つも織つてやりましょうぞ……」

母のことばを遮さへぎつて、

「あッ。母さん。……誰か土間へはいつて来たようですよ」

「父さんか」

おつみは、そこから、身をのばして、土間の方を覗きながら、

「……いいえ」

「では、誰じゃ」

「誰だろ？ ……黙つて」

気味わるげに、おつみが、声を嚙のんでいると――

「おつ母かあ」

日吉の声だった。

暗い土間に立ったままで。——そしてじつと、いつまでも、上がって来ようとしないのであった。

「おやツ。日吉じゃないか！」

「……うん。おらだよ」

「ど、どうして、今頃」

「茶わん屋から暇が出たから帰って来たんだよ」

「えッ、お暇が出た……」

「かにんして。なあ、おつ母さん。かにんして……」

土間の闇に、すすり泣きがする。——お奈加も、おつみも、そこへまろ転ぶように出て行つた。

「お暇の出たものを、今さらどうしようぞ。さ、お上がり。……なぜいつまで、立っているのじゃ」

手を取ると、日吉は首を振って云った。

「いや、上がらずに、おらはまた、すぐ行くよ。一晚寝たらまた、おつ母のそばを離れるのが嫌になるから……」

この貧苦と、事情の複雑なところへ、日吉がふいに、暇を出されて帰って来たことは、彼の母には、胸にこたえる当惑だったが、上がりもせずすぐにまた、この夜の夜中^{よるよなか}、出て行くという彼の言には、なおさら胸を傷めて^{いた}、驚きの目をみはった。

「どこへ行くのじや。——今から？」

「分ないけど、こんどは、侍奉公して、きつとおつ母にも、姉さんにも、安心させるよ」
「侍奉公に」

「おつ母は、侍にはなるものじやないといったけれど、おらはやっぱり侍になりたい。藪^{やぶ}山^{ぶやま}の叔父さんもいった。——今だぞといった。——おらは侍になる」

「それにしても、まあ上がって、あしたの朝、よう義父^{とう}さまにも、ご相談してみやい」
「会いとうない」

日吉は、かぶりを振って、

「——おつ母、おらつてえ子を、十年ばかり、ないもんだと思つてな。体を丈夫にしといてよ。いいかな。……姉ちゃん、おまえもお嫁にも行かないで、悪いけど、辛抱してなあ。……その代りおらが偉くなったら、おつ母には絹を着せ、姉ちゃんには、縹^{しゅちん}珍の帯を嫁入りに買うてやるでな」

「……………」

「……………」

母も、おつみも、嗚咽おえつしているだけだった。——日吉がこんなことをいうようになった！———そう思うだけで、胸は涙の湖になって、身も溺れる心地だった。

「ここになあ、おツ母、茶わん屋から貰うて来た塩かが二升あるで、置いて行くぜ。おらが二年働いて稼かせいだ塩だ。姉ちゃん、後で台所へやつといっておくれ」

「……あ、ありがと」

母は、日吉がそこへ置いた塩の袋を拝しみんだ。そして沁しみ々、

「おまえが、世間へ出て、初めて働いて取ったお塩——」

と、見入って云った。

日吉は、満足した。

母の歎ようれぶすがたを見ると、彼も体が浮くように欣うれしかった。そして、また何かで、この母を、これ以上にも、歎ようればせてやりたいと心に誓う。

———そうだ、塩になろう！

我が家の塩だ。いや我が家ばかりでなく村々の塩に。いやいつそのこと、天下の塩だ。

日吉は、肚はらの中で、そんなことを呟つぶやいた。だがいつも、何気なく思うことを、思うまま
いうと、世間の者から、すぐほら吹きといわれる。そのせいで、この頃彼は、いわない癖
がついていた。

「——じゃあ、おつ母、姉ちゃん。当分、帰らないよ」

日吉は、土間の口まで、後退あとじきりに退った。その間も、眼は、母とおつみの姿から離れ
なかった。

おつみは、いきなり伸び上がって叫んだ。——日吉の片足が、土間の外へ、跨またぎかけた
からである。

「あつ、お待ち……日吉や、待つて」

そして、母へ縋すがつて、

「母さん、さつきいった青ざしの一貫文。あたしは、お嫁入りにも、何もいらぬ。いい
え、お嫁になんか、行かいでもよいから……日吉に、その金を遣やつて」

咽むせびかける唇を袂たもとに抑えて、母は奥へはいつて行った。そして一さしの銭を日吉に渡し
た。

「いらぬ。いらぬ」

日吉は、首を振ったが、おつみは姉らしい思いやりを声にこめて、これから世間へ出るのに、おかねがなくてどうするかと叱った。

日吉は、かねよりも、も一つ欲しい物があつた。

「おつ母、これよりも、おらにお父さんの持っていた刀をくんないか。お祖父^{じい}さんの時からあるあの刀を——」

七歳の頃、実父の弥右衛門が見せたあの伝来の刀を、日吉は、忘れてなかったとみえる。
——が、彼の母は、どきつと胸を衝かれたように、

「刀よりは、おかねの方が、身の護りになる。刀は、思い止まっておくれ」と宥^{なだ}めすかした。

日吉は、すぐ察して、

「ないの」

と訊ねた。

「……ああ。ないよ」

云い辛そうに、母はいった。筑阿弥^{ちくあみ}の酒の代^{しろ}に、それはとうに売り払われてしまったのである。

「じゃあ、あれでいい。——おつ母、物置小屋の中の錆さび刀がたなならあるだろう」

「あ……。あれなら」

「いいかい。持って行っても」

日吉は、母の顔いろに、気がねをしながら、念を押した。

やはり七歳の時だった。そのボロ脇差を見つけて、どうしても欲しいと駄々をこね、さんざん母を泣かせたことをも……。彼は覚えていたからであろう。

「……………」

お奈加も、その時のことを、今ふと思い出していた。侍になるな、戦いくさする身になるな――

――と、あの頃は、日吉の行く末に祈ったものであったが、自分で生んだ子も、成長するにつれて、どうにもならないものだということを、今はもう観念していた。

「持っておいで。……だけど日吉や、おまえはあれを、決して人様へ向って、抜いたりなどしまいね」

「えッ、いいの？」

「おつみ、持って来ておやり」

「いいよ。おらが取って来る」

日吉は、裏の物置小屋へ駆けこんだ。そして、そこらの物を踏台ふみだいにして、壁の梁はりに吊つてある一腰のボロ脇差を取り下ろした。

すぐ腰に差した。

七歳の時に泣き喚わめいた自分のすがたが——遠い以前に振り返られた。急にすつくと、背の伸びたような成長感が、彼の胸を通りぬけた。

「日吉や、母さんが、もいちどおいでつて」

おつみが、穿はきもの物をはいて、物置の方へ告げた。戻つて見ると、母は壁の神棚へ、燈明を上げ、小さい木皿へ、一つまみの粟あわと、それから日吉の齋もたらした塩とを盛つて、掌てを合わせていた。

「そこへお掛け」

上がりがまち框へ、日吉を腰かけさせておいて、母は神棚から、剃かみそり刀を下ろした。

日吉は、それへ眼をまろくして、

「おつ母、何するんだい」

「元服して上げるのじや。形ばかりではあるけれど、おまえの門出を祝うて」

と日吉の髪へ剃刀を当てた。そして新らしい藁わらを水に浸ひたし、切り上げた根もとを結び直

して与えた。

生涯、忘れることの出来ない感銘が、そうしている間に、日吉の血へ沁み入っていた。頬に耳に、時折触れる母の荒れた手を、傷ましく思いながらも、彼は、

（おらも、もう人なみだぞ）

と、自覚を持った。

野良犬の声が、どこかで頻りとしている。戦国の深い闇に、殖えてゆくのは、犬の声ばかりだった。日吉は、外へ出た。

「おつ母。……じゃあ」

達者に——というべき後も、喉のどにつまんで、それしか出なかった。母は神棚の前へ、背を曲げていた。泣きだした小竹こちくを抱いて、おつみは外へ追いかけて出て来た。

「……あばよ、あばよ」

日吉の影は、黒く小さく、後も見ずに駆けて行つた。霜のせいか明るい夜だった。

まんじ
正月の一族

清洲きよすから数里。那古屋なごやからでも西へ十里とはない。

その蜂須賀村はちすかむらへはいると、すぐ何処どこからでも目につく笠形かさがたの丘がある。夏木立なぎだての鬱う蒼そうとしてゐるこの頃の昼間はただ蟬せみの声こえだった。夜は、大きな蝙蝠こうもりの影が月をかすめてまま飛び交う。

「おうういッ」

何者か、闇でこう呼んでゐる。こだま 飴のように丘の木立の中でも、

「おういッ……」

と、同じ調子に答えている。

よほど近づいてみないと、ちよつと気づかないが、丘の崖や大樹めぐを繞めぐつて、蟹江川かにえがわの水を引いた濠ほりが、自然の古池のように蒼い水草がいつぱいなのだ。

その水草はまた、古い石垣と、土塀どべいを抱いて、何百年かの間、ここあるじの主の地位と勢力と子孫とを、守り続けて来たものである。

丘一帯の宅地は、何千坪か、何万坪あるものか、外からはちよつと想像もつかない。勿論、邸の主は、この海東郷かいとうこう蜂須賀村はちすかむらの土豪で、姓名も代々、蜂須賀はちすかといい、小六ころうくと称している。

ここへ土着した中興の祖は、小六正昭まさあき。

今の当主小六正勝まさかつ。

彦右衛門ひこえもんともいう。

応永年間おうえいに、足利あしかがの姓を改めた家系だともいうし、応仁おうにんの大乱をうけて、この地

方へ土着したのだともいわれているから——その是非はとにかく、何しろ古い家すじであることに間違いはない。

「おうウイッ。開門ツ……」

濠の外で、再び四、五人の人影が呶鳴っている。

何処からか今、立ち帰って来た主の——小六正勝と、その家来。

といつても、小六は今も、またその先代からも、正しい主筋も持っていないし、領土の権も、領政も施しいていない——いわゆる一土豪に過ぎないから、その家来といつても、主といつても、どこか粗野な風がある。

家長と家の子、といったような親しみぶかいところもある代りに、頭目とうもくと手下てしたと呼び合つてもおかしくない、野人ぶりもあつた。

「何をしておるか」

小六が、つぶや呟くと、

「まだかッ。門の者」

と家来がまた呶鳴った。

すると、

「おううい」

と、三度も同じ返辞がしてから初めて、その木戸がどーんと開いた。

同時に、左右から、

どなた「誰方だ？」

と、燈火を向ける。

うすがね薄金で作った吊鐘形つりがねがたの——それに把手とつてが付いているので——戦場にも雨の夜行に

でも持ち歩けるがん燈どうとよぶ燈具だった。

「小六だ」

がん燈の光を浴びながら、木戸を固めている者へ、小六は尋常にそう答える。

分り切っている筈だが、たとえ主でも、これほど厳密でなければならぬ四隣の現状だった。

「お帰りなさいまし」

初めて、一斉に礼儀をする。その小六に従^ついて、供の面々も、

稲田大炊助いなだ おおいのすけ

青山新七あおやましんしち

長井半之丞ながいはんのじょう

松原内匠まつばらたくみ

といちいち名乗つて、がん燈の検^{あらた}めを浴びながら、門の内へ通った。

小六と、その一族四人はずしずしと跼^{あしおと}音重く、暗い大廊下を、奥へ通つて行つた。

「お帰り」

「お戻り遊ばせ」

廊下の角々で、従僕の顔、女の顔、妻子達の顔——どれほどいるのか分らない大家族の中に住む一部の顔が——外から戻つて来た家長を出迎える。

「うむ。……うむ」

小六は、いずれへも一樣に、一瞥^{いちべつ}を与えながら、広間へ来て、円座の上へどかと坐つた。

——機嫌が悪い？

短檠たんけいの明りが、明らかに、小六の顔の筋を、横から照らしている。

白湯さゆ。それから茶、黒豆の菓子など、そこへ次々に持ち運ぶ女達も、恟々きょうきょうとして、
つけていた。

「大炊おおい」

とやがていう。

四名の端にいた稲田大炊助を振り向いてである。

「はあ」

「いい恥をかいいたな。今夜の招きでは」

「……さればで！」

と、四人とも、苦にがりきる。

小六の不機嫌は、やり場がなかった。

内匠たくみ。半之丞。——おぬしらの考えはどうだ？」

「どうと仰せられるのは」

「こよいの恥をだ！——蜂須賀の一族として雪すすがずばなるまいが」

四人はまた、沈黙にふさぐ。

蒸暑い夜だ。そよ風もない。蚊やりの煙が、徒らに眼に沁みて立ち迷う。

事情はこうだ。

今日。

織田一家のさる大身から、茶事の招きをうけた。小六は元より、そういう趣味は全くない。だが、同席の客は、この尾張ではみな歴々な人物なので、顔つなぎにもよい折だし、また欠席したがため、

（土豪といえ、ていはいが、いわば野武士の頭目。茶の招きには恐れたのだろう）
などと嘲笑あざわらわれるも心外と——一族四人を連れて、特に威儀を張って、出向いて行ったのである。

——ところが、その席で。

端はしなくも、主あるじが自慢の、赤絵の水挿みずさしが、客の目をみはらせたはいいが、話のはずみから、

（はて？ この品は、茶わん屋捨次郎すてじろうの宅で、見たことがある。同家で野武士に盗まれたという名品と同じじゃが）

と、つい口^{くちすべ}にらせた客がある。

主は驚いて、

（滅相もない。これは近頃、^{さかい}堺の茶道具屋から、千金に近い値で手に入れた物——）

と、書付まで示すと、客もことばの手前、

（では、盗んだ野武士が堺の商人へ売りとぼしたのが、転々して、御当家へ廻つて来たのでござろう。茶わん屋へ押し入った野武士は、御^{みくりや}厨の渡辺天蔵と、名まで知れておることで、間違いはない）

と明らさまにいったので、席はいとど白けてしまった。

なぜなら、そういった客は、もちろんそこに居合わせた蜂須賀小六の、どんな存在か、また、どんな係^{けいるい}累を持つている者か、などということとは、知らなかつたに違いないが、御厨の渡辺天蔵といえ、小六の甥^{おい}にあたる者で、同時に、彼の土豪的勢力を構成している一族の、その一人であるということは、主も客の大部分も、かねがね^{わきま}弁えていたからである。

（いづれ後日、小六から改めて、ごあいさつ致すであらう）

と、彼は、自分の汚名のように主へ誓つて、その恥^{いきてお}と憤りを、眉に抱いて帰つたのである。

る。

どうだ？

おぬしらの考えるところは。

と、小六から今、沈痛に問われはしたが、さて、稲田大炊助にも、青山新七にも、半之丞や内匠にしても、

(こうなされては)

と、すぐ答えられるような名案もなかった。

これが、自分たちのような、家来筋ならば、何とでもいえる。また、どうにでも、処分はつく。

だが、その処分すべき人間が、主人の小六とは、血のつながっている甥おいの天蔵なのだ。
御厨みくりやむら村に住んで、蜂須賀一族のわかれとして、常々、飼かいさむらい侍の二、三十人は家に置いている渡辺天蔵である。

だが、小六はかえって、血のつながっている人間だけに、
「不埒ふちちな——」

と天蔵の悪事を、心から憎んで止まないのだった。

「迂闊^{うかつ}だが、思いあわせれば天蔵の奴、近ごろ身に綺羅^{きら}をかぎり、女など幾人も蓄^{たくわ}えてい
るとか、不審なかも目に見えてあつた。——家の名にかけても、彼奴^{きやつ}を、捨ててはおか
れぬ」

すこしの間^まをおいては、こう憤^{うめ}りの呻^{うめ}きのように、小六はひとり呟^{つぶや}いた。

「……さもなくしてさえ、土豪という家門のかなしさには、蜂須賀一族もまた、野盜の野武
士ずれや、破廉恥^{はれんち}な浮浪人^{うらんじん}どもと同視されて、この小六正勝の耳にすら——あれは野武士
の頭目と——世上の聲が、まま聞えてくる折も折」

「ご推察いたしまする」

松原内匠^{まつばらたくみ}が云つた。

半之丞も大炊助も、俯向^{うつむ}いた。——ふと、小六の眼がしらに光つた悲涙を見て、はつと、
胸を打たれたのだった。

「聞けよ。おぬしらも」

小六は、顔を向け、

「——この邸の屋根瓦には、卅^{まんじ}の紋^{こけ}が苔^{こけ}さびてあろう。遠祖^{みなもとよりまさ}源頼政公が、義兵をあ
げられた時、高倉宮より賜つた家紋と伝え聞いておる。その末が、足利將軍に仕え、蜂須

賀太郎以来、失脚して野に下り、今のわしという者にまで——土豪とよばれて来ておるものの、これは時だ」

「……はい」

「血までは、野に朽果くちはてておらぬ」

「……………」

「土豪よ、野武士の頭かしらよと、いわれればいわるる程、小六正勝は、ひそかに誓うて、今に！——と、この血を、この家名を、世人に示し直す日を待っていたのだ」

「いつも、伺っているお言葉にございまする」

「……さればこそ、おぬしらにも平常、野には住むとも、武ぶを怠るな、身いを戒いましめよ、弱きを扶たすけよと、厳やかましく沙汰してあるに……。何ぞ知ろう、血のつながる甥おいめが、今なお、性根を改めずに、町人の家へ襲よせて、夜盗を働いておろうとは！」

屹きつと、唇を噛むと、その時もう小六の肚は、決っていた。

「おおいのすけ
「大炊助。新七」

「はい」

「二人して、すぐ行つて来い。御厨みくりやまでだ」

「はっ」

「わしの命をもつて、天蔵めを、ひき連れて来い。だが、騙だまして呼びよせて来いよ。手飼の者もおるし、武力では、一すじ縄なわではゆかぬ天蔵のことだ」

「心得ました」

主人の肚に、その決意がすわれば、何の造作もないことと、稲田大炊助と青山新七のふたりは、すぐ御厨村へ立つて行つた。

森の丘は、鳥のさえずりに暁あける。——土豪蜂須賀の砦とりでづくり造の中の一棟に、早くから朝の陽があたっている。

「松。……松ッ」

小六が、眼をさましたらしい。

妻の松まつなみ波が、

「お目ざめでございますか」

寢所をのぞくと、紙蚊帳かみかやのうちで、小六は横になったまま。

「ゆうべ御厨みくりやへ遣つた使いの両名は戻つて来ないか」

「まだ立ち帰りませぬが」

「……ふむ？」

と、案じ顔に呻く。^{うめ}

悪い事をする奴だけに、頭のするどい甥の天蔵。まずくすると、感づいたかな？――

ちと遅いが――と独り思う。

妻は、その間に、紙蚊帳のつり手を外^{はず}しかけた。その蚊帳のすそに戯れていた亀^{かめ}一^{いち}は、まだ満^{まる}二^{ふた}歳にもならなかった。

「亀よ。来い」

小六は抱きよせて、高々と差しあげた。絵に描いた唐子^{からこ}のようによく肥えた亀一は、若い父の腕にも重かった。

「どうした。瞼^{まぶた}が赤う腫^はれておるが――」

と、小六は、亀一の眼を舐^なめてやる。亀一は、父の顔を引っ搔いて膝の上であばれた。

「蚊に喰べられたのでございましょう」

「蚊ならよいが」

「寝ても暴れて、蚊帳の外へ、ころげますので」

「寝冷えさすな」

「はい」

「ほうそう庖瘡に気をつけよ」

「仰せまでもございませぬ」

「ふたり夫婦が仲の初の児。いわばおぬしと俺との、これは初陣ういじんの賜物」

「ホ、ホ、ホ」

開けひろげた寢所へ、夏の朝風が吹き流れてくる。カーン、カーン、と何処かで鍛冶かじの鎚つち音がたかく響くのも、寢覚ねざめの耳には、快かった。

その鎚音を聞くと、

「どれ」

小六はもう、わが児を膝から捨てて顧かえりみなかった。妻の笑顔も、眼になかった。

風雲うちの裡へ。

動流の中へ。

今や、麻のごとく乱れていると知る天下の一角へ。

小六の若い血、逞しい体は、大きな野望を期しているもののように、和なごやかな一時を振り棄てて、その室から出て行つた。

書院に坐つて、朝の茶を静かに啜^{すす}るでもない彼である。衣服をかえ、顔を洗うと、もう外庭へ出て、大股に歩いてゆく。

鋤^{つち}の音が近くなる。

小道をはいつて行くと、森の中に、祖先以来、斧^{おの}を入れなかった大木を伐採^{ばっさい}して、新しい平地を拓^{ひら}き、そこに二棟ほどの鍛冶小屋が並んで建つていた。

小六が泉^{せんしゅう}州^{しゅう}堺^{かい}から密^{ひそ}かに呼びよせた、鉄砲鍛冶の国^{くに}吉^{よし}が、弟子と共に、仕事して
いた。

「どうだな？ 仕事は」

彼が立つと、国吉や弟子は、仕事場の土間に、平伏した。

「まだ、巧くゆかぬな。——見本の鉄砲と同じような物が、何とか出来ぬものか」

「ああしたら、こうしたらと——寝食もわすれて、苦心は致しておりますが」

——無理もない。

小六がそういうように頷^{うなず}いていると、母屋^{おもや}使いの小侍が追つて来て、

「お頭^{かしら}様。ただ今、御厨^{みくりや}へ行つたお使いの御両所が、戻られましたか」

と、告げた。

「なに。帰つて来た」と

「はい」

「して、大炊と新七は、天蔵めを連れて来たか」

「甥御おいごさまにも、御一緒にお越しなされました」

「よし！」

うまく誘い出したな——と小六はまず、首尾を心で領うなずきながら、

「待たせておけ」

と、いった。

「いつもの御書院へ」

「そうだ。直ぐ行くから」

「はい」

小侍は、駈けて戻つて行く。

奇策縦横の人物——と一族からは信頼されているが、小六の半面にはまた、ひどく気の弱いところもあった。

義には強いが、涙には勝たれないという弱さなのだ。わけて骨肉の情には脆もろい小六なの

である。粗野で兇暴で荒削りな——土豪の家長として睨みも押しもきく骨太い性格の中に、それだけに本能的な涙と、また、怒つたら野火のように止らない血を持っていた。

その彼が、

（——今朝は甥^{おい}を斬らねばならない！）

と今、胸をすえている。

だが決して、気のすすむ顔色ではなかった。告げに來た小者が去つても、彼は鍛冶小屋の前に立つて、いつまでも、国吉と弟子の仕事ぶりをながめていた。

「——無理もない。何せい、鉄砲が渡來したのも、天文^{てんもん}十二年、つい七、八年前のこと

だからな。それ以来、諸国の武家豪族どもが争つて、この新武器の製作を計つてみたり、

或いは、蜜船^{ばんせん}から買い入れようと競^{きそ}っているが——この尾州^{びしゅう}あたりはまだ地の利を得

ておるものの——甲州^{こうしゅう}、越後^{えちご}、奥州^{おうしゅう}あたりの山武士^{やまざむらい}のうちには、鉄砲とはどん

な物か、まだ見たこともない者が多からう。——職人にしても、手馴れぬのは当りまえだ。

急がずともよい、みつしり工夫を積んで、つくり出したら、いくらでもつくれるよう、他日の備えに間に合えば——」

そこへまた、さっきの取次が、

「お頭様」

と、小道の露に身を屈めて、彼の足を促しに來た。

「もう御一同、書院にお揃いなされて、お待ち申しておりますが」

小六は、振り向いて、

「今、行く」

「は」

「すぐ参るから、待たせておけばよい」

「はい」

取次の小者は、多くをいうことも出来ず、引き返して行つた。

小六の胸には、馬謖ばしよくを斬るの氣もちで——甥おいの成敗せいばいを決心していながらもまだ——情と正義とが、割りきれずに、乱れ合つていた。

で、彼は去りがてに、

「国吉」

とまた、小屋の中へ話しかけた。

「……だが、年内には、使える鉄砲が、十挺ちようや二十挺は出来るだろうな」

「左様で——」

と、鍛冶の国吉は、責めを問われたように、職人氣質かたぎな苦痛を、煤すすまみれな顔にあらわして、

「ただ一挺でも、これでよいと思う物が出来さえいたせば、後は四十挺でも百挺でも、一つ物をつくるのは、やすいことでございますが……」

「その一挺だな。——難しいのは」

「お手当ばかり戴かぶいていて、心苦しゅう存じますが」

「よけいな氣遣きづかいはするな」

「ありがとうぞんじまする」

「来年、さらい年、また、来る年も、来る年も。合戦はやむ間もなからう。大地の冬草がみな萎しぼみ果て、新しい芽に萌もえ代るまでは。——で、鉄砲も急ぐのだ」

「この上とも懸命に、やってみまする」

「しかし、密ひそかにだぞ」

「心得ております」

「鎚つちおと音が少し高過ぎるな。濠ほりの外まで、聞えはせぬか」

「それも、気をつけまする」

「むむ」

小六は、去りかけたが、またふと、鞆ふいごのそばに立ててある一挺の鉄砲に目をとめて、

「それは」

と、指して訊ねた。

「見本の物か、出来た品か」

「新品にございますが」

「どれ、見せい」

「いえ、お目にかけるまでには、まだなかなか」

「いやいや。ちようど、試ためし物があるのだ。——撃てぬことはあるまい」

「弾たまは飛びますが、関せき金の噛がみ合わせが、どうやっても、原品のようにつくれませぬ。

もう一息、工夫いたせばと思っておりますが」

「試すのも、工夫の一つだ。よこせ、その鉄砲を」

小六が国吉の手からそれを取って、銃の腹を肱ひじに乗せ、物を狙うような姿勢をしていた時である。

三度目の迎えが来た。

が、今度は、小者の取次ではなかった。ゆうべ御厨みくりやへ行つて帰つて来た稲田大炊助おおいのすけなのである。

「まだ、御用はおすみになりませぬか」

大炊の声に、小六は、鉄砲の台尻ろっこつを肋骨ろっこつに当てたままふり顧かえつて、

「おお。稲田」

「お早くお越しねがいとう存じます。弁口べんこうをもつて、天蔵殿を召し連れては参りました
が、妙な？——と氣どられたか、落着かないご挙動。悪くすると、檻おりを破る虎になるや
も知れませぬ」

「よしッ、参ろう」

大炊助おおいのすけに鉄砲を持たせて、小六は、森の小道から書院の庭のほうへ、大股に歩いて行
った。

成敗せいばい

何の急用か？

——疑うように、渡辺天蔵は、書院の端に坐つて、落着かない目をしていた。

青山新七。

長井半之丞。

松原内匠。
たくみ

それに今、叔父を迎えに立つた稲田大炊助おおいのすけといい、揃いも揃つて、蜂須賀党の腹心たち、自分のそばに坐りこみ、自分の眼のうごき、手の微動にも、監視をそそいでいるらしく思えるのだ。

——はてな？

変だわえ、と天蔵はここへ通るとすぐ感じていたのである。口実をもうけて、帰ろうかとさえ考えたが、その間に、庭のほうに小六の姿が見えてしまったので、

「おう。叔父御で」

と、彼の方から、強しいて笑顔を作りながら、迎えかけた。

小六は、鍛冶小屋から今、持つて来た鉄砲を、地に立てて持ったまま、

「天蔵。庭へ出ぬか」

と、外から呼んだ。

その様子は、常の小六と変ったところもないので、天蔵はいつもの狎なれ癖ぐせをすぐ出して、
「何か、急にてまえに、御用だというお迎えで参りましたが」

「うむ」

「何の御用で」

「まあ、降りて来い」

「はあ」

沓くつぬぎの藁わら草履ぞうりをはいて、天蔵は庭へ出た。半之丞や内匠たくみも、彼について出た。

「そこに立て」

小六は、甥の天蔵へ、そう命じてから、自分は庭石の一つへ腰をかけた。手の鉄砲を立てて持ったなりに——である。

天蔵はとたんに、叔父の眸から自分を射て来た或るものを直覚して、はつとしたが、もう遅かった。

叔父の腹心たちは、碁石ごいしのように、四方に立って、囲みの形を取っていた。——天蔵の顔は見ているまに、蒼あおくなつた。

「……………」

「……………」

小六の体から、目に見えない憤りの炎が立っている。日頃、狎^なれやすい天蔵にも、その眉は、むだ口ひとついわせなかった。

「天蔵ッ」

「は。……」

「おぬし、小六が日頃、いつてある言葉を、よも忘れはしまいな」

「覚えております」

「人と生れてだ——今の世の乱国に生れてだ——最も恥すべきことは徒衣^{といとしよく}徒食と良民いじめだ」

「……………」

「諸国の土豪という輩^{やから}が、みなそれなのだ。野武士という奴^{やつ}が、みなその類^{たぐい}だ。——だが、小六正勝の一家は、それではならぬぞ。……と堅く、戒^{いまし}めてあるはずだが」

「はい」

「おれの身内だけは、志を大きいところへ持とう。百姓いじめや、野盗のまねはやるまい。

そして一国一城を持ったら、お互いに栄えよう。……そう誓ってあるな」

「あ、あります」

「それを破ったのは、誰だ」

「……………」

「天蔵！ おのれは、そのためにおれが養わせておく武力を悪用して、夜盗を働いたな。茶わん屋へ押し入って、赤絵あかえの名器を盗んだな！」

「……………」

逃げかかる天蔵へ、小六は、大喝だいかつをあびせながら突ツ立った。

醜みにくしいッ！ 坐れッ」

「坐れッ。それへ！」

と、もう一度、小六は呶鳴りつけて、天蔵の気を吞んでしまってからまた、

「逃げる気か。おのれは」

と、責めた。

「に……にげなどは、いたしませぬ」

芝の上へ、腰をついたように、べたと坐って、天蔵は顫え声ふるごえで云った。

「縛れ——」

小六は、四方に立っている四人へ向つて命じた。

松原内匠たくみと、青山新七とが、すぐ左右から飛びかかつて、

「おことばでござる」

と、うしろ手に捻ねじあげ、刀の下緒さげおで腕くびを巻きつけた。

はつきりと身の危険と、事の露頭ろけんを覚さとると、天蔵は蒼白な顔に、奮然と、太々しい反抗をあらわして、

「あッ。お……叔父御。なんだつてこの天蔵を！ ……。いくら叔父御でも、無体むたいだッ。余りといえば」

「やかましい」

「覚えはないッ。この天蔵には今叔父御がいったような、盗みをした覚えなどは」

「やかましいッ」

「誰に……。誰がそんなことを、告げ口したのかッ」

「まだ黙らぬか」

「叔父御も、叔父御じゃござらぬか。なぜ一応、うわさがあるならあると、天蔵に仰つし

やつた上で」

「女々しい言い訳を」

「でも。——多くの身内を抱えている一族の頭目が、ひとの告げ口などに惑わされて、よく吟味もせずにく吟味もせず」

吠えたけるのを、小六は、耳に嫌いながら、手についている鉄砲を、^{ひじ} 肱へ上げて云った。
「こやつ。国吉の鍛ったこの鉄砲の試しには、ちようどよい生き物だ。彼方の^{むこう} 墻のそばへ引き立て、木に縛^くつて立たせておけ」

新七と内匠^{たくみ}は、天蔵の背を突いたり、襟がみを持つたりして、庭の果てまで連れて行つた。弓矢では、よほどな射手でもない、矢の届かない程な距離であつたが、

「叔父御ツ。いうことがあるツ。もう一言、いわしてくれーツ」

と、そこから死にも狂いでなる天蔵の声は、よく聞えて来た。

「……………」

が、小六は耳もかさない。

^{おおいのすけ} 大炊助が持つて来た火縄を取ると、^{たま} 弾ごめして、直ぐそう叫び狂っている甥^{おい}の姿を狙い澄^{すま}しているのだつた。

「わ、悪かった。叔父御一ツ。白状するツ。もういちど天蔵のことを聞いてくれい。いうことがあるツ」

的に立またせられて喚わめいている者の声をよそに、四人は、小六の鉄砲の手元を、しいんとして、唾つばをのみながら見まもっていた。

刻。一刻……

彼方に狂っている天蔵の声はかすれてしまう。

そして、

(だめだ!)

と死を観念したか、がくりと天蔵が首を垂れたと思うと、

「大炊」

と、小六は鉄砲から眼を逸そらして、うしろに控えている彼を呼んだ。

「――関せきがね金を引いても、弾たまが出ないぞ。どこかこの鉄砲にはまだ狂いがあるらしい。ちよつと小屋へ走って行って、鍛冶の国吉を呼んで来い」

鍛冶の国吉は、小屋からすぐ飛んで来た。

小六は鉄砲を示して、

「今、撃ち試してみたが、どこかまだ、不出来な箇所があらう。弾が飛ばぬのだ。すぐ直せ」

と、いった。

国吉は、あらた検めて、

「すぐには直りかねまする」

「いつまで」

「夕刻ごろまでは」

「もっと早くいたせ、試しにかける生き物が、待っておるのだ」

「えッ？」

国吉は、そういわれて初めて、木へ縛くしつけられている渡辺天蔵が、まと的に立っているのに気づいて、

「……あッ、甥御様を」

「余事よじを申すな」

と、小六は耳を逸そらして、

「そちは鉄砲鍛冶。一日も早く、ただ鉄砲の製作に成功するよう、しょうねん精念すればよいの

だ。——この一挺は、そちに取つても、それが成就するか否かの、大事な試作であろうが」

「はい……」

「悪人とはいえ、天藏も身内の一人、犬死さすより、せめて鉄砲の試しにでも、役立たせてやれば、幾分でも世の多足^{たそく}になろう。はやくして来い」

「へ。……へい」

「何を渋つておる！」

炬^{きよ}のような眼で、くわつと睨まれた心地がしたのである。その眼すら仰げないで、国吉は、

「はいッ、急ぎまする」

と鉄砲を抱えて、鍛冶小屋の方へあたふた戻つて行つた。

「内匠^{たくみ}。——的^{まと}の生き物には、水でも与えておけ。鉄砲の直るまで、小者三名ほど、見張につけておくことも、いうまでもないぞ」

云い残して、小六は、母屋へ上がってしまう。それから、彼の朝飯であつた。

内匠^{たくみ}、大炊助^{おおいのすけ}、新七たちの腹心も、それぞれ庭面から姿をかくした。

長井半之丞は、その日、自分の郷土へ帰ることになつていたので、間もなく暇^{いとま}を告げ、

松原内匠も、用事で出かけ、後には稲田大炊と青山新七のふたりだけが、丘のやしきに残っていた。

陽が高くなる。

きょうも暑い。

丘は蟬せみの声につつまれ、庭石は焦やけて、動いているものは蟻ありだけの炎天になった。

鍛冶小屋のほうから時折、烈しい鋤つち音おとがひびいてくる。必死に、鉄砲の関金を作り直しているのだろう。天蔵の耳には、それがどんなに聞えて行くか。

二、三度。

「まだか。鉄砲」

と、小六の部屋から、催促の声がした。そのたびに、控部屋から青山新七が炎天を駈けて行って、やがて、

「もうしばらく……」

と、縁先へ戻って来ては、鍛冶小屋の仕事ぶりを伝えていた。

その間に、小六は、自分の部屋に大の字なりになって昼寝していた。新七も、夜来のつかれが出て、ついうとうとと居眠っていると、突然、

「にッ、にげたッ。新七どの！逃げたッ。き、来てくれッ」

と、庭先から、誰か喚わめいた。新七はびっくりして、裸足はだしのまま飛び出すと、番に付けておいた小者の一人が、

「お、甥御様が、後の二人を斬り伏して、に、逃げ出しましたッ」

と、まるで粘土ねんどのような青い顔して、舌の根もうわの空に、告げるのだった。

「えッ。逃げたと」

のめるように、新七は、その番人と共に、駈け出して行きかけたが、振り向いて、

「お頭目かしらッ。お頭目かしらッ。——甥御おいごの天蔵どのが、番の者を斬りすてて、逃げたと申します

ぞッ。天蔵どのが逃げましたぞ」

ふた声ほど、呶鳴なめった。

蟬せみしぐれに包まれた母屋の一室で、快こころげに昼寝していた小六は、

「なに！」

がばと、起き上がるなり、眠る間も抱いていた刀をそのまま小脇に、横縁から飛び下りて、もう新七のすぐ後に続いて駈けていた。

——来てみると。

さつき天蔵を縛り付けておいた木に、天蔵のすがたはなく、ただ木の根がたに、一筋の麻縄が、解き棄ててあるばかり。

足数にして、約十歩ばかり先に、一箇の死骸が、朱になつて俯つ伏しているし、ずっと土塀へ寄つた際にも、頭を柘榴割りにされた番の者が、塀の根へ倚りかかったまま死んでいた。

そこらは、ぶち撒いたように、血がこぼれていた。炎天なので、土や草に乾いた血は、すぐ変色して、漆みたい^{うるし}に黒くみえるが、生々しい臭いに羽虫が寄りたかつて、面も向けていられない。

「番の者ッ」

「へ。……へい」

生き残つて、今知らせに駈けて来た男は、小六の声を浴びただけで、それへひれ伏してしまった。

「両の手くびを、下緒で縛り、そのうえにもなお、麻縄をかけておいた天蔵が、どうして縄を抜けたのだ？ ……。この縄を見れば、断ち切つたようでもないが」

「はいッ……。と、解いて上げたのでございます」

「だれがッ？」

「あれに、殺されている、番の者の一人がで」

「何で解いた？ 誰のゆるしをうけて解いたか」

「もとより、初めは、耳にもかさずにおりましたが、甥御様が……尿いはりがしたい、尿をする間……と余り苦しがって仰つしやいますので」

「ば、ばかな！」

と小六は、地だんだをふまないばかり、罵ののつて、

「なぜ、そんな知れきった手に乗つて——ええ！ たわけがッ」

「お頭目様かしら。おゆるし下さいまし……。ですが、甥御様が番の手前どもへ仰つしやるには

——あの情にもろい叔父が、どうして甥のおれを、ほんとに殺すものか。これはおれを意見するために、仕置しているのだ。糺きゆうめい明いだから、晩にはゆるされる。——それを貴様おどたちが、おれのいうこともきかずおれを苦しめるなら苦しめてみる。……と、こう脅おどかしなさるので、一人がつい解いて、彼方の木蔭へ、尿いはりをしに連れて参りました」

「そして……」

「ギヤッ——という声がした時はもう二人とも、殺されていましたので、手前は、後も見

ずに、お知らせに」

「くだいッ。——天蔵はどう逃げたか、それを先にいえ！」

「土塀へ手をかけていましたから——多分そこを越えて、外へ飛び下りたに違いございませぬ。どぼーんと、濠の水音が、その時したように思います」

小六は、聴く間も、もどかしそうに顧みて、

「新七。追討ちしてしまえ。村の道へも、すぐ手配をしろ」

いいつけると、彼自身も、その手配のために、表門の方へ恐ろしい勢いで駆け去った。今が今——というように、小六から性急せっかちにいいつけられて、鍛冶小屋へ飛んで戻るなり、鉄砲の関金を鍛うち直していた国吉は、邸のうちに何が起ったのも、時が経ったのも、物音も一切知らなかった。

ただ鉄砲。それしかない。

汗にまみれ、鞆ふいごの火塵を浴び、そしてようやくヤスリ掛けから仕上にまで来て、

「さあ。出来たか？」

と、ほっと一汗、肱ひじでこすったが、果たして弾たまが思うように飛ぶか否か——は、まだ十分に自信がない顔だった。

空銃^{からづつ}を壁へ向けて、

ばしッ——

と、関金の調子を試し、

「うむ！ 良さそうだ」

初めて、呻^{うめ}いた。

だが、小六の前へ出てから、また不備があつたりしては面目ない。

国吉は、念のためと、それに弾^{たま}ごめして、銃口を地へ向けて一発撃ってみた。——ぶす

ツ、と勢いよく地面へ小さい穴が掘れた。

「しめたッ」

待ちかねている小六の顔を思いながら、国吉はすぐ、小屋から飛び出した。

そして、庭の方へ。——樹木のふかい小道づたいに、急いで行くと、

「おい。おい」

誰か呼んだ。——木蔭に人影がちらと見えた。

国吉は足を止め、

「……誰だ？」

「おれだよ」

「おれとは」

「渡辺天蔵だ」

「えッ……。甥御様で」

「何をびつくりした眼をするのだ。……ははあ分った、今朝おれが、木に縛し付けられて、鉄砲の試しになろうとしていたのに、ひよいと出て来たから仰天したのか」

「ど、どうなされましたの」

「どうもこうもないさ。叔父甥の仲だ。脅かされたのよ。とんだ折檻を喰わせやがった」

「……へエ？」

「ところで。たつた今、村の白旗しろはたの池で百姓と隣村の地じぎむらひ侍とが、喧嘩を起した。

叔父御も、大炊おおいも新七も、すぐ駈けつけて行つた。おれにも直ぐ後からつづいて来いとの

こと。——鉄砲は仕上つたか」

「出来ましたが」

「よこせ」

「お吩咐いいつけでございましょうな」

「もとよりのこと。はやく出せ。相手が逃げたら試されぬ」

天蔵は、引つ奪^{たく}るように、国吉の手から鉄砲も火縄も奪つて、森の間に走りこんだ。

「……はてな？」

手ばなしてしまつてから、国吉は変に感じて、彼の後を尾行^{つけ}てゆくと、天蔵は、表門のほうへは行かず、殊^{こと}さら樹々の梢^{こすえ}でうす暗い裏手の土塀をのりこえて、外の濠ぎわへ跳び下りた。

そして、濠の腐つた水の中に、胸の辺まで、体が浸^{つか}つてしまうのもかまわず、野獣のよ
うに、じゃぶじゃぶと渡つて行くではないか。

「やツ？ 逃亡だツ、出合いなされ！ 出合いなされ！」

国吉は、土塀の上から、大声で呶鳴つた。その時もう泥鼠のようになって、向うの岸へ
這い上がつていた天蔵は、一発、彼の顔を狙つて撃つた。

ぐわアツン！

水のそばのせい、凄まじい音がした。国吉の姿は土塀から転げ落ちた。すぐわらわ
らと駆けつけて来る蹻^{あしおと}音が彼へ迫つた。だが、天蔵の影は、まるで豹^{ひょう}が跳ぶように、畑や
野の土を蹴つて、やがて消えてしまった。

やはきがわ
矢矧川

ふれ
布令がまわった。

はちすかこころく
家長の蜂須賀小六の名をもつてである。

——集まれ！

というのだ。

晩方までに、土豪蜂須賀の丘の住居は、門の内外、野武士で埋まった。

「合戦か」

「何事だろ」

「何が起ったのか」

集まって来た者はみなこれ、物の具を取れば、一くせある面だましいの者ばかりだったが、平常は、野に住んだり、畑を打ったり、繭買いをしたり、馬を飼って市へ出したりなどしている、ただの農民や商人と変りがない。

ただ彼らは、根からの農民や商人ではなかった。血のなかに、多分にまだ、祖先の勇武

と、現代への不満を抱いて、時しあらばふたたび、弓箭ゆみやのなかに運命の風雲を捲き起そうと——かねてから結びあっている家党ともがらの輩なのである。

そのうちに、

「お庭へまわれ！」

「静肅に——」

「中門をくぐって」

と、小六の腹心、稲田大炊助おおいのすけ、青山新七たちが出て来て、指図した。

その腹心たちは、すでに武装していた。もとより土豪の一族なので、本鎧ほんよろいではないが、籠手脛こてすねあて当あてをつけ、差料さしりょうも大振りな陣刀に代えていた。

「さては、出触でぶれだな」

と、一同は早くも察していた。

どこからどこまで、という確しかとした領土もない代りに、どこの城に所属しているとか、誰に隨身しているとかいう、明瞭な味方も敵もないのが土豪である。

だが、——それにしても時々、合戦には出る。

同じ土豪から、自分の一族の勢力圏内を犯されたとか、或いは、国主から味方に頼まれ

るとか——折入って遠国の大名からでも、通謀つうぼうを依頼されるとか——などの場合。

しかしそれは多く、金や報酬に依つてうごくのだが、小六はまだかつて利のために動いたことはない。

それはこの近国の織田家おだけでも認めていた。三河の松平家まつだいらけでも、駿遠すんえんの今川でも知っていた。だから、土豪とはいえ、自然重きをなしていたし、蜂須賀党を土地から除こうとする者もなかった。

その家長からの触れなので、すわとばかり、一族は駆けつけて来たが、広庭へむらがつて、ふと築山つきやまを仰ぐと、小六正勝は、折から、薄暮の空に見える二日月の下に、黒革くろかわの胴を着こみ、大太刀を横たえて、軽装ながら、どこか家党の頭目らしい貫禄をそなえて、石像のように、黙然と突つ立っていた。

そして、水を打ったように、数百人の一族が、ひそまり返ると、甥おいの渡辺天蔵を、きょう限り義絶する旨を宣言して、その始末を、明白に述べた末——

「が、これは、家長たるおれの不行届でもある」

と、不徳を謝し、

「天蔵は、逃げうせたが、草の根を分けても誅罰ちゅうばつせずにはおかん。もし、彼を生かし

ておいたなら、土豪蜂須賀は、百年の後も、野盜の徒と過あやまられるだろう。お前らは、お前らの面目のために、祖先のために、子孫のために、天蔵めを、打ち殺せ。——おれの甥だなどと思うな。彼奴は蜂須賀一党の賊だぞ！」

云い渡しているところへ、物見にやった者が駈け戻つて来て、告げることには、

「……御厨村みくりやむらのほうでも、渡辺天蔵とその一類が集まって、一戦をも辞せずと、物々しく固めている由にござります」

と、あつた。

敵が、渡辺天蔵と聞いて、彼らはすこし張合いぬけした様子だったが、事の顛末てんまつと、

——一族の名のためだ！

と小六から聞かされると、奮い立つて、真つ黒に、武器蔵ぶきぐらへなだれて行つた。

武器蔵には、驚くばかり多量な武器が、貯蔵してあつた。

源平げんぺい、建武けんむ、応仁おうにんの乱とつづいて、何百年かにわたって作られて来た武器は、合戦

のたび、山野にも捨てられたが、その数は、夥おびただしいものに違いなかった。

わけて、近頃では、国々の合戦はやむまもなく、人の住む所には、不安と暗黒みなぎが漲つていたので、その心理が、武器を大切にした。どんな百姓の家にも、武器があつた。また、

槍や、刀なら、食物の次に、すぐ金にもなって売れた。

蜂須賀党の武器蔵には、先祖以来の物もずいぶんあったが、急激に殖えたのは、小六の代になってからであつた。——しかしまだ、その中に鉄砲は一挺もなかったのである。

が、せつかく成功しかけたその鉄砲は、天蔵が盗んで行つた。小六の憤怒は、絶頂に達していたといつていい。

「この上にも、一戦をも辞せぬなどとは、八ツ裂きにしても飽きたらぬ人非人。彼奴の首を見ぬうちは、この革胴を解いては寝ぬぞ」

小六は、門出に云つた。

そしてすぐ、人数を率い、御厨村へ向つて殺到したが、村近くまで来ると、

「あッ、火の手だ」

と、一同は、足を止めて、夜空を見まもり合つた。

水田の彼方に、土橋が見える。赤い夜空に、点々と人影がうごいている。さては敵か——と先鋒から一人放つて見せにやると、

「天蔵の徒が、火を放つて、掠奪を始めたので、逃げ惑うて来た村民だそうでございます」

と、いう報告。

人数を進めて行くと、なるほど、嬰兒あかごの声などもヒイヒイ聞える。村民たちは、家財や、病人などを担になつて、逃げて来たところへ、さらに、

「蜂須賀村の人数」

と聞いたので、ふるえ上がっていたが、小六の腹心青山新七が行つて、

「おれ達は、掠奪に來たのではない。一族の渡辺天藏とその手下どもを誅ちゆうばつ罰に参つたのだ」

と、諭さとすと、ようやく鎮しずまつて、口々に、天藏の暴悪を怨んで訴えた。

彼らの泣訴きゆうそするところを聞くと、天藏の悪事は、茶わん屋へ夜盜にはいっただけの一事には止とどまらない。国主へ年貢ねんぐを納めるほかに、私に法を立てて、村民から田や畑の「守し護ご錢せん」と称して、二重の税を取つたり、池や川の堰せきを、自分の手に奪つておいて、「水み錢せん」を取つたりしていた。そして、不平を鳴らす者があれば、手下をやつて、田や畑を荒してしまう。

もし、領主へ密告すれば、その一家をみなごろしにすると脅おどしていた。国主は、戦備と戦争に追われているので、年貢の取立てには見廻つても、平常の治安にまでは手がまわら

ない。

天蔵の一味は、よいことにして、博奕場ばくちばを開いたり、神社の境内で、牛や鶏を屠殺とぎつして喰つたりしていたらしい。また、邸やしきには、女をあつめ、神社の拝殿は、武器の隠匿場いんとくばにしていたという。

「して、その天蔵の人数は今夜、どんな配備をしているか」

新七が糺ただすと、村民たちはまた、口を揃えていった。

「神社から槍や長柄ながえを持ち出して、酒をくらい、戦つて死ぬと吠えておりましたが、遽にわかに、家々へ火を放つけ廻り、荷駄にだの背に、金目な物や、武器や喰べ物など、積めるだけ積みこむと、一団になつて、逃げ落ちてしまいました」

戦つて死ぬ——と云い触れさせたのは、逃げのびるための、天蔵の策であつた。

「また、後手ごてを喰つたか」

と小六は地だんだを踏んだ。

が、彼は、

「村民どもを先へ、家へ帰せ」

と、下知した。

協力して、消火に努めた。そして天蔵が、博奕場ばくちばにしたり、人獣の血をながしたりしていた神社の拝殿を明け方までに浄めきよさせて、小六は、そこに額ぬかぎ、

「一族の端くれたりといえども、天蔵の悪行あくぎようは、やはり蜂須賀一党の罪。後日必ず誅ち罰ゆうばつを正し、村民をなぐさみ、神帛しんぱくを捧げて、お詫び仕るでござろう」

と、祈念した。

そのあいだ彼の一族と手兵は、肅として両側に整列していた。この秩序と、彼の敬神の行をながめて、

（野武士の頭目かしらが？）

と、村民たちは、むしろ怪訝けげんな顔して、ながめていた。

渡辺天蔵は、蜂須賀の名をもつて、何事も振舞っていたし、小六の甥ということも知れ渡っていたので、その頭目かしらと聞いただけでも、戦慄していたのであろう。

だが、小六は、神と民とを味方に持たなければ、世に立てないことを知っていた。やがて物見が帰って来た。

それによると、

「天蔵の一味は、手下を加えて約七十人ばかりの同勢。東春日井ひがしかすがいの山道へかかって、美

濃路^{のじ}へ逃げ越えてゆくらしい足どり」

と、ある。

小六は、そこで、

「人数の半数は、蜂須賀村へ帰って、留守をまもれ。残る半数の半分は、この村に止まって、焼け出されの村民を救護したり、治安に当れ。——後の人数は、おれに尾^ついて来い」と、命じた。

——で彼の手兵は、わずか四、五十人しかなかった。

その小勢で、小六は、天蔵を追いかけた。

小牧、久保^{くぼ}一色^{いしき}を経て、ようやく先の敵勢に追いつきかけると、道々、物見を残して歩いている天蔵の方でも、

(来たな！)

と覺^{さと}つたらしく、急に山道を迂回^{うかい}して、瀬戸峠^{あすけ}から、足助の町のほうへ下って行くとの報^{しり}せ——それが、山中ばかり追い歩いた四日目の午頃^{ひるごろ}だった。

夏だし、道は嶮^{けん}岨^そだし、具足着ではあるし、追う方も追うほうだったが、逃げまわる天蔵の同勢も、逃げつかれて来たものとみえ、道々、荷を捨て、馬を捨て、だんだん身軽に

なつて百月川どうづきがわの谿谷けいこくで、空腹すきばらへ川の水を入れ、ぐったり一汗ふいていた。

——ところへ。

わつと、小六の人数が、両側からなだれ落しに、挟撃した。

人間のかかる前に、無数の岩石が降つて行つた。谷川はもう血の脂あぶらを流していた。

「うぬッ」

「おのれッ」

「退ひくな」

「何の！」

突く。

斬りなぐる。

取つ組む。——川へ墜ちる。

同じ一族と一族との撃突であつた。敵の手下と、小六の手兵のうちには、血のつながる叔父と甥、従兄弟いとこと従兄弟、日頃は仲のよい友達の顔もあつた。

が——ぜひもない！

同じ五体の者なればこそ、その病根は断たなければならないのだ。小六は、わが血にひ

としい敵の鮮血をかぶりながら、

「天蔵ッ。天蔵ッ出合え」

と喚きながら、誰よりも勇壮に駆けまわった。

どうづきがわ 百月川の谿谷は、一瞬でまっ赤になった。

小六の手兵も、十人ほど死んだが、敵はほとんどみなごろしにした。

しかし、小六はなお、

「あの峰。あの道を」

と、血眼だった。

肝腎の天蔵の姿は、死骸のなかになかった。彼は逸はやく、手下を捨て、峰づたいに、恵那山脈のふところへ、逃げ去ってしまったらしいのである。

「彼奴！ 甲州領へ目ざして行つたな」

歯がみをして、小六が、峰に立っていると、突然、四方の山の罅を呼んで、グワーン！と一発の弾音がした。

鉄砲だ。

彼を嘲笑うごとき鉄砲の音だった。

「……………」

小六の頬に、涙がながれた。無念はいうまでもないことだ。しかし、彼は悪鬼のような甥を、その時になつても、自分の五体以外のものとは思えなかった。自分の不徳に、悔いの涙がわいたのである。

慚然^{ぶぜん}として――

そのの、峰に立つて考えてみた時、小六は、まだまだ自分が、いかに野望を抱いても、土豪の位置を脱して、一箇の国持^{くにもち}となるには、日の遠いことを知った。その資格がないことを覺つた。

（――身のひとりすら治めることを知らないでは）

（武力ばかりではだめだ。治策がなければ。……また、日頃の庭訓^{ていきん}がなければ）

とも、考えた。

翻然^{ほんぜん}と、彼は、涙の目から、苦笑を光らした。

「畜生めが、おれを訓^{おし}えて行つたわえ！」

小六は、峰から呶鳴つた。

「おういッ。引き揚げろ――」

その日。

三十余人に減^へつた人数をまとめて、百月川^{どうづきがわ}の谿谷^{ころも}から拳母^{こころも}の宿場へと下った。宿場の外れに野営して、翌日、岡崎^{おかざき}の城下へ使いを立て、通行の許しを得、そこを立ったのがすでに遅かったので、岡崎の城下を通ったのは、もう夜半^{よなか}近くだった。

街道すじへかかると、国々の出城本城などのほかに、柵^{さくとり}や砦^{とりで}も、鼻のつかえるほどある。人数を率いて、通行のできない要所もあるし、日数もかかる。

で、矢矧川^{やはきがわ}を舟で下り、大浜から半島の半田へ上がる。そして常滑^{とこなめ}からふたたび舟便で海をよぎり、蟹江川^{かにえがわ}を溯^{さかのぼ}つて、蜂須賀村まで帰ろうという道どりを取ったものである。

ところが。

矢矧川まで出てみると、夜半^{よなか}でもあつたが、舟は一艘もなかった。

橋もない。

水瀬は早く、川幅は二百八間とかいわれている。建武^{けんむ}の年の新田足利^{にったあしかが}の合戦をはじめ、岡崎の要害として、ここはいくたびか古戦場となつて来たし、今も——つい数年前には、織田信秀^{おだのぶひで}と、松平家の軍とが、大戦の血をながし、天文十四年から十六年にわたる合戦の

果て、織田の尾州勢が大敗して退いた所である。

太平記印本には、

Ⅱ 矢矧川の橋を引き、^{たて}楯を搔^{かい}てふせぎ戦ひける

と、あるから、遠い昔や、江戸の治世になつては、諸人往来のため、二百八間の大橋が架^かつていたものとみえるが、その年、天文二十一年の夏の頃には、まだまだこの地は、乱世乱麻の合戦の真ッただ中。矢矧の大河は、とうとうと押し流れてはいたが、矢矧の大橋はなかつたのである。

小六と、一党の者は、当惑顔に、附近の木蔭^{たむろ}に屯^{たむろ}していたが、

「下る舟がなければ、渡しに乗つて、対岸へあがろう」

と、一人がいうし、

「いや、もう夜が更^ふけた。朝を待てば、舟があるう」

と、いう者もある。

だが、ここで屯するには、もう一度また、岡崎の城へ届けに行かなければなるまい——と、小六が分別を与えて、

「渡舟^{わたし}を探せ、渡舟一艘さえあれば、かわるがわる越えて、夜明けまでに、舟で下る道^{みち}」

程^りほどは歩けよう」

と、指図すると、

「いや、お頭目^{かしら}。その渡しの小舟さえ、どこにも見当らないので」

と、誰かがいう。

「ばかな！」

小六は、叱りとばして、

「一艘の小舟さえないと。そんな筈があるものか。——これほどな大河、昼中は、何で往來するか。戦^{いくさ}のため、河止めというような、非常な時にせよ、そこらの蘆間^{あしま}や、河原草のなかに、物見舟は隠してあるものだ。よく眼をあいて、探し直して来い」

と訓^{おし}えた。

呶鳴^{なうめい}られた勢いで、彼の手兵は、河の上下へわかれて、五、六人ほどばらばらと駈けて行^いった。

その中の一人が、

「あッ。あつた！」

と、さげんで足を止めた。

洪水の時にでも、土を濡さらわれて行つたらしい断岸きりぎしに、楊柳かわやなぎの巨おおきなのが、根を露

出して、水のうえへ屈かがみ腰に枝を垂つなれている――

その樹蔭に、一艘そうの舟が、繋つないであつた。

こんもりと茂つた夏柳の葉蔭は、川の水も、漣とろのように穏やかで、そして暗かつた。

「……手頃だ」

小六の部下は、すぐそれへ跳び乗つて、一同のいる下流の岸まで、流して行くつもりでもあつたか、そう眩つぶやくと、柳の根に巻いてある舟のもやいを解きかけた。

――すると。

「……?」

その兵は、ぎよつとしたように、眼の下の舟を見すえてしまった。

舟は、荷足にたりぶね舟ぐらいな、脚の浅い舟であつたが、もう壊れかけていて、水あかに浸ひたれているとみえ、危かしないほど傾かしいでいる。

それでも、渡しに使えないこともないが、見ると、腐つた苔とまを敷いて、舟の端に、高い
びきで眠っている男があるのだ。

「何者……?」

と、その兵は、眼をみはってしまったのである。

なぜならば、ふしぎな服装と、ふしぎな容貌と——そして余りに不敵なほど——快げに

眠っているからだった。

袖も短い、裾も短い、^{すそ}白晒布のよごれぬいた着物ひとえに、^{さらし}手甲^{てつこう}脚絆^{きゃはん}をつけ、素足

にわらんじを穿いた^は——^{おとな}大人かと思えば大人でもなく、子供かと思えば子供でもない男が

——虚空へ向つて身を仰向け、眉や睫毛^{まつげ}に、夜露を置いて、まったく放心の姿で寝ている。

「……おいッ」

兵は、呼び起してみたが、覚めようとしなないので、槍の石突で、その男の胸のあたりを、

「おいッ！」

と、もう一度、呼び起しながら、軽く小突いた。

眼をあいた男は、槍の柄をにぎって、くわツと、兵の顔を睨^ねめかえしながら、

「なんだッ？」

と、寝たままで云った。

蜩

流れる水のすがたにも似ている今の境遇を、矢矧^{やはぎがわ}川の柳の蔭に寄せて、腐^{くさ}れ苦^{とま}を被^{かつ}いで一夜を舟に過していたその男は、中村の家を出たきり、便りも知れなかった日吉であつた。

去年の一月、霜の夜――

母に、一袋の塩をのこし、自分は父が遺産の錢一貫文をもらつて、

(偉くなつて帰る)

と、姉にも、母へも、そう誓つて家を出た彼だつた。

もう今までのように、商家や工匠^{たくみ}の徒弟になつて、転々とする気もちはない。

(侍奉公を！)

と、一途に求めた。

けれど、氏素姓^{うじすじょう}も定かでない――また、見るからに風采の貧しい彼を、侍屋敷では、

どこでも抱えてくれなかつた。

清洲^{きよす}。那古屋^{なごや}。駿府^{すんぷ}。小田原^{おだわら}――と歩く先ざきで、

（紺屋の手伝いなら）

とか、

（馬飼^{うまかい}の厩掃除^{うまや}なら、世話してやるが）

などと、いわれるだけで、たまたま、勇をふるい起して、侍屋敷の門前に立ち、

（わたしを使つて下さい）

と、自分の身を、押売りしてみても、笑われたり、呶鳴られたり、乞食あつかいされて、竹^{たけ}箒^{ぼうき}で追われたりするだけだった。

わずかな銭は、すぐなくなりかけた。世間の實際は、藪山の叔母がいったとおりであつて、日吉の考えは、夢にすぎないものだった。

しかし日吉は、その夢を離さなかった。なぜならば、自分の望んでいるものは、誰に聞かれても、恥かしくない立派なことだと、かたく信じているからである。

草に寝、水に枕しているまも、その望みは忘れない。――世のなかでいちばん^{ふしあわせも}不幸者^{しあわせもの}と彼の思っている母を、どうしたら、いちばんの^{しあわせもの}倖^{しあわせもの}者^{しあわせもの}にしてやれるだろうか。

また、嫁にも行けないでいる可哀そうな姉を、どうやって喜ばしてやろうか。

勿論、日吉にも、たくさんな欲望がある。殊に、もう十七歳の若者だ、胃ぶくろは、喰

つても喰つても食い足りない氣持だし、大きな屋敷を見れば、あんな屋敷に住んでみたい
と思ひ、豪華な武家の身装みなりを見れば、自分の身装かえりが顧みられ、美しい女達を見れば風のな
かにおいの香を強く感じる――

とはいへ、どんな慾望を思うよりも先に、母を幸福に――という念願が、常に前提とし
て彼にはあつた。だから彼は、その第一の希望が達しられないうちに、自分の慾望を先に
満たそうとは思わなかつた。

それにはまた、彼には彼のみの、べつな楽しみがあつたから、物の慾には我慢も出来た
ということもいえよう。その楽しみというのは、流浪の行く先々で、飢えを思ういとま違もなく、
|| 識しらないことを識る。

と、いう楽しみだつた。

世間の機微、人情、風俗。――それから時勢の相すがただの、諸国の武備だの、百姓町人の生く
活らのさま様だの。

武者修行する者は、応仁頃から室町の末になるほど、流行はやりもののように、多くなつて来
たが、日吉も、ここ一年半ばかりは、ちょうど、それと同じような辛苦と生活をして歩い
て来た。

けれど彼は、武術を目がけて、長剣を差して歩いて来たのではない、わずかな金で、問屋から針を仕入れ、木綿針や絹針を小さなたとうに包み、それを行商しながら、甲州、北越のほうまで歩いて来たのだった。

（――針はいらんか、京の縫針ぬいばりじや。買うておかんか、木綿針、絹針、京の縫針）

日吉は、諸国の町を呼び歩きながら、わずかな利で、生きて来た。しかし。

零細な針売りの利益で口は喰べても、針の穴から世の中を見るような、小さい人間にはならなかった。

小田原の北条ほうじょう。

甲州の武田たけだ。

駿府の今川いまがわだの、北越の城下城下などを、ずっと見て来て感じたことは、

（今に、世のなかは、大きく揺れだして、大変な変り方をするぞ）

と、いうことだった。

今までの、小さな、内輪揉めうちわもみたいな戦乱とちがって、日本全体の姿勢を立て直すような、正しくて大きな戦争が、これから起るという予感だった。

(——すると、俺だつて)

と、密かに、彼は思つた。

(俺は若い、これからだ。——世のなかは、足利幕府の、年寄の仕事にだれてしまい、混乱してしまい、老衰してしまっている。若い俺たちを、世のなかは待っている！)

漠然と、そんな考えを抱いて、針イ——、針イ——と呼びあるいて来た。

北陸から、京都、近江とまわつて、一わたり世間の風にふかれて、元の——尾張を過ぎて岡崎へ来たのは、ここの城下に以前、父の弥右衛門の身寄りがいたと聞いていたので、それを頼つて来たのであつた。

といつても、決して、日頃は親類や知るべを頼つて、衣食の方法を受けようなどと、さもない考えを出す彼ではなかつたが、この夏の初めから、食中にかかつて、ひどい下痢をわずらいながら歩いて来たつかれと、かたがた、中村の家の様子を聞きたいために——であつた。

ところが。

尋ねる先は見つからないし、きのうも今日も、照りつける炎天をさまよい歩いて、生胡瓜を喰つたり、井戸水をのんだりしたため、また腹が洩り出して、黄昏、この矢矧

川の畔に辿りつくと、その痛む腹をかかえたまま、舟の中に寝入ってしまったものであった。

……腹がごろごろ鳴る。

微熱のせい、口が乾く。茨の棘を頬ばっているように、口の中が、熱に刺され、そして唾がなかった。

そういううちにも。

母――

彼の瞼は、母を描き、彼の眠りには、母が訪ねて来ていた。

が、――いつのまにか、昏々と深く眠り落ちていた。その母もなく、腹の痛みもなく、天地もなく。

ところへ不意に、

おいッ！ と呼びさまされたと思うと、誰か、自分の胸を、槍の石突で小突いた者があつたのである。

――だれだッ。

日吉は、無意識に、槍の柄をつかんで、体に似げない大声を出した。

胸は、男のたましいの有り所である。五体のなかの神棚にひとしい所だ。槍の石突で、そこを小突かれたことは、相手の誰であるにかかわらず、日吉を、むつとさせたに違いなかった。

「小僧ツ。起きろツ」

小六の部下は、つかまれた槍の柄を、引きながら云った。

日吉は、槍をつかんだまま、舟のなかに身を起して、

「起きろツて？ この通り、起きているのが分らないかッ。どうしろというのだ」と、云い返した。

「おや。この野のぶせり伏め」

槍の柄を通して、日吉の力と、その反抗を感じると、小六の部下は、恐い顔を見せて、頭おどから脅しつけた。

「出ろというのだ。——立てッ、その舟から！」

「この舟から、立てだッて」

「そうだ。その舟が要いるのだから、とつとと空あけて、消きえ失うせろ」

すると日吉は、なおさら、つむじを曲げたらしく、舟の上に落着き直して、

「嫌だッ」

と、いった。

「な、なに」

「嫌だ！」

「嫌だと？」

「おお。嫌なこツた」

「こいつ……」

「何がこいつだ。——人がよく眠っているのを、いきなり槍の先ツぽで小突き起して、——

——その上、舟が要用いりようだから、立てとは何だ。消きえて失うせろとは何だ！」

「ちいッ……。小理窟をこねる奴だ。やいッ、風来」

「なんだ」

「われわれを、誰だと思う」

「人間である」

「知れたことを！」

「訊く奴があるか」

「口の達者な小僧め。後で、その口を曲げて、縮みあがるなよ。われわれは、蜂須賀村の土豪。お頭目かしらの小六正勝様について、一党数十名で、こよい矢矧やはぎへかかったが、舟がない。そこで渡舟わたしを探し求めているうち、おのれの舟を見つけたのだ」

「舟を見ながら、人間は見えなかったのか。ここは俺の住居すまいだぞ」

「見えたればこそ起したのだ。四しの五ごをいわずに立て。出て失せろ」

「やかましいッ」

「何を。もう一度いつてみろ」

「何度いつても同じことだ。嫌だッ、嫌だッ。この舟は、くれてやれぬ」

「いったな」

小六の部下はぐツと檣えの柄を引いて、檣の柄ぐるみ、日吉を岸へ引きずり上げようとして踏ん張った。

頃を計って、日吉が手を離れたので、檣の柄で、柳の葉を、払いながら、小六の部下は、後ろへよろめいた。

かッ、としたらしく、

「おのれッ」

と、槍を持ち直すと、その兵は白い穂先をひらめかして、日吉の影へ、突いて行つた。腐つた舟板だの、アカ汲みだの、苦^{とま}などが、舟の上から飛んで来た。——その間に、

「ばかッ」

と、二度ほど日吉の罵^{のの}る声も、飛んで来た。

すると、そこへ仲間の誰彼が、わらわら駈けつけて来た。そして、

「待てッ」

「何だ」

「何者だッ」

口々に云い合いながら、そこへ立ちむらがつた時、さらに、小六とその部下のあらましも、後から後から駈け続いて来た。

「舟があつたのか」

「あるにはあつたが……」

「どうしたのだ？」

がやがや噪^{さわ}ぐ部下の者を退けて、小六正勝は、静かに前へ出て、柳の蔭の暗い舟へ眼をそそいだ。

小六の影を仰ぐと、日吉も、これはこの者どもの頭目かしらだなど覺さとつたらしく、やや居住いずまいを改めて、じつとその顔を正視した。

「……………」

「……………」

小六の眼は、いつまでも、彼へそそいだきり、ものもいわなかった。

小六は、日吉の容貌やその身なりを不思議がったのではない。——自分の眼を射てくる、彼の眼に、愕おどろいたのである。

で、小六は、心中、

（こいつ、身なりに似あわぬ不敵もの）

と思つて、殊さらに、眸ひとみをこらして見つめたが、見つめれば見つめるほど、日吉の眸も、闇夜に見るむささびの眼のように光つて、反それようともしないのであつた。

遂に——小六は眼を紛まぎらして、同時に、当りまえな音おんじょう声で呼びかけた。

「子ども」——と。

「……………」

日吉は答えない。

まだ口を結んでいる。

そして、射るようなその眼も、小六の顔から離さなかった。

「……これ。子ども」

すると、日吉は、

「おらか」

膨れ返った顔していった。

小六がいう。——そうだ、おまえよりほかには、舟の中には誰もいないではないかと。

——すると、日吉は、肩を少し昂^あげて、

「おらは、子どもじゃない。元服しているッ」

と、いった。

突然、小六は、肩をゆすぶって笑い出した。

「——そうか。汝^{われ}は大人^{おとな}か。……だが、大人だとすると、その扱いをするが、いいか」

「大勢で取りまいて、おら一人をどうする気だ。野武士だな、おまえらは」

「貴さま、いうことがなかなかおもしろい」

「おもしろくない。おらは、いい気もちで眠っていたところだ。おまけに、腹^{はら}がいたい。」

誰が来て、何といおうが、ここを動くのは嫌だ」

「ふム。……腹が痛いか」

「痛い」

「どうしたのだ」

「水^{みず}あたりか、暑^{あつさ}気あたりだろ」

「故郷^{くに}は何処だ」

「尾張の中村だ」

「中村か。——して中村の何という者だな」

「親の名はいえない。おらの名は日吉という。……だが待て待て。ひとの眠っているところを起して、ひとの素姓を洗いだてばかりしていいものか。おぬしは何処の何という者だ」

「汝^{われ}と同じ、尾張の海東郷^{かいとうこう}、蜂須賀村の蜂須賀小六正勝というものだが、汝^{われ}のような大
人が村の近くにいたとは知らなかった。何か、商^{あきな}いでもして歩いているのか」

——それには答えないで。

「あッ。おじさん達は、海東郷の衆か。そんなら、おらの村からも遠くない」

日吉は急に、人なつかしい顔を示して、早速、中村のうわさでも聞きたそうであつたが、

「じゃあ、同じ故郷くにかの衆だ。さつきは、いやだといったけれど、舟を空あけてやろう」と、枕にしていた商い物あきなの包を、斜めに背負つて、岸へ上がつて来た。

その様子——一挙一動を、小六は黙つてながめていた。

物売りの世間摺せけんずれ——旅ずれた小童こわっぱの、減へらず口ぐち——と、小六も初めは見たのであるが、心が解うけて領うなずくと、少しも悪わるびれた様子はなく、舟を去つて、日吉はさすが立ち去ろうとした。

「待て。日吉とやら、汝われはこれから、何処へ行くのか」

「舟を奪とられたから、寝る所はない。草の中へ寝れば、夜露にぬれて、病んでる腹がよけいに洩はるで、仕方がないから、夜明けまで歩くんだ」

「ならば、おれと一緒に来い」

「どこへ」

「蜂須賀村へ。——屋敷において飯も食わそう。病やまいも手当してつかわそう」

「ありがとう」

日吉は、神妙にお辞儀したが、自分の足もとを見ながら考えているふうだった。

「……すると、おらを、屋敷へおいて、抱えてくれるというのかね」

「汝^{われ}の面^{つら}だましいに見どころがある。この小六に随^{ずい}身^{しん}する気があれば使うてやる」

「ない」

顔を上げた。そして彼は、はつきりいった。

「おらも、侍奉^{さむらい}公^{こう}したいと、心がけているんで、諸国の侍の風や、大名たちの威勢ぶりを見て来たから、侍奉公^{さむらいこう}するからには、主人を選ぶのが第一と分つて来た。うかつには、主は持てぬ」

「はははは。いよいよ面白い。この小六正勝では汝^{われ}の主人には不足か」

「使われてみなければ、それも分らないことだけど、蜂須賀村の蜂須賀といえ、おらの村では、良くいわない。また、おらが仕えていた前の主人の家へ、泥棒にはいった男も蜂須賀の一族といった。おらが泥棒の手下になったら、おッ母さんが悲しむから、そんな者の屋敷へ、奉公はできない」

「では、汝^{われ}は茶わん屋捨次郎の家^{うち}にいたことがあるのか」

「どうして分つたかね」

「茶わん屋へ押し入って、悪事をした渡辺天蔵は、いかにもわしの一族の者だが、わし自身は、そういう不埒^{ふちちもの}者は捨ておかん。天蔵は逃がしたが、その一味どもを成敗して、蜂

須賀村へ帰るところだ。汝^{われたち}達の耳にまで、小六一門の名が、そのように過^{あやま}られているか」

「……うむ。おじさんは、そういう人間じゃないらしいな」

日吉は、十七にしても、ませた口吻^{くちぶり}で、彼の顔を見ながら云った。そして、ふと思ひ出したように、

「じゃあおじさん、何の約束なしに、おらを蜂須賀村まで連れてってくれるかね。——もしたら、二^{ふたつでら}寺の親類の家まで行きたいが」

「二寺といえは、すぐ蜂須賀村の隣村だが、そこに知るべがおるのか」

「ああ。桶^{おけだいく}大工の新左衛門という人は、おつ母さんのほうの縁つづきだ」

「桶大工の新左は、侍の果てだ。では汝^{われ}の母は、侍の末だの」

「お父さんだつて侍だった。おらはこんな事をしてるけれど」

いつの間にか、舟の中には、乗れるだけの者が乗り込み、舟^{ふなざお}棹をさして、頭目の小六が乗るのを、待ちうけていた。

「日吉、ともかく乗れ。二寺へ行きたくば二寺へ行け。蜂須賀村にいたければ、蜂須賀村におるもよし」

肩を抱えて、舟の中へ伴^つれて下りた。

日吉の小さい体は、林のように立ち並んだ槍と大きな男どもの間に隠れた。舟は大河の流れを横切つていったが、流れが迅いので手間がかかった。

日吉は退屈顔に立ち泳いでいたが、ふと、小六の部下のひとりの背に止まっている螢を見つけ、手を籠にして捕えると、その明滅を無心に見ていた。

天高し

蜂須賀村へ引き揚げてから後でも、小六正勝は取り逃した甥の天蔵を、そのままに放つてはおかなかった。

或いは、部下を変装させて、刺客として放ち、或いは、遠国の土豪と、聯絡を取つて、その後の彼の行方をさがすなど、やがて秋の頃となつてもなお、手を尽していた。

しかし、効はなかった。

うわさによれば、渡辺天蔵は、恵那の山づたいに甲州へ落ちのび、例の小六が苦心して製作させた鉄砲を献物として、武田家へ取り入り、甲州の乱波者の組（しのび・攪乱隊の称）へはいったということであった。

「甲州へ潜り込んで——」

と、小六もさすがに、諦め顔につぶやいたが、しかし、無念そうであった。すると、その噂の聞えた日頃。

「主人が参るべきでござるが」

と慇懃な使者が、門を叩いた。

この事件が起るまえに、小六が茶会によばれた織田一族の者の家来だった。

その折、問題になった「赤絵の水挿」を携えて来て、主命として使者がいうには、

「この一品より、同族の間に、御騒動があつたとやら承る。ついては、この名品も、買い求めたものとはいえ、家蔵といたしおくのも心苦しいゆえ、御当家より茶わん屋へおもとどし遣わされては如何。——小六どのの御一分も、それにて立つことと存ぜらるるが」

とのことであつた。小六は、好意を謝し、

「後日、ごあいさつ申すでござろう」

と、受けておいた。

そして、答礼の使いをやる折に、水挿の価に倍する黄金と、見事な鞍などを持たせてやった。

その日である。

使いを出した後で、また、松原内匠まつばらたくみをよんで何やらいいつけていたが、やがて自身、縁へ出て来て、

「猿ッ。猿ッ」

と、庭へ向つて呼んだ。

日吉は、

「おいッ」

と答えながら、木蔭から小迅こばしッこく走つて来て、

「お呼びですか」

と、膝をついた。

ここへ来てから、一一ふたつでら寺へも行つたらしいが、直ぐ歸つて来て、その後、何とはなしに居着いていた。

機転がきく。何でもする。人は彼を小馬鹿にするが、彼は人を馬鹿にしない。口が達者なほど心は決して軽薄でない。——で、小六は、庭使いにして愛していた。

庭使いは、ほうき箒持ちの小者の仕事のようではあるが、事實はそうでない。主人の身近に働

いて、朝夕主人の眼にふれるし、夜は夜の守り役をもすることになるので、決してよそ者などとは使わないものである。それを小六は、庭へ飼った。猿々と呼んではいるが、愛している証拠であつた。

「新川の茶わん屋の宅へ行って来い。内匠たくみについて、道案内をいたしながら」

「茶わん屋へですか」

「なんで、迷惑そうな顔するのじや」

「でも……」

「汝われが二の足あしをふむのは分つておるが、きようの使いは、茶わん屋の旧蔵だった水挿みずさしを、無事に戻して遣つかわすので行くのだ。で、汝われを付けてやれば、汝われの顔かおもよかろうと思つていつけるのじや。行つてこい」

日吉は、そう聞くと、土の上に坐り直して、両手をついた。

「ありがとうございます。御恩は忘れません。欣よろこんで行つて参ります」

茶わん屋へ着いた。

彼は、供として来たので、家の外で待つていた。

以前の朋輩ほうばいが、

「猿が来た」

と、怪訝^{けげん}がつて、かわるがわる、覗^{のぞ}きに來た。

日吉がこの家を追い出された時、笑ったり、打ったりした奉公人の顔も見えたが、日吉は忘れてしまったもののように、

「こんにちは。——今日は」

と、その顔のどれへも、笑顔^{えがお}を見せながら、陽なたに蹲^{うすくま}つて、松原内匠が歸るのを待っていた。

やがて、内匠は、使いをすまして奥からもどつて來た。思いがけない盜難の「赤絵の水挿」が返つて來たので、茶わん屋の夫婦は、夢かとよろこび、使者の草履をそろえたり、夫婦して、門脇^{もんわき}まで走り出て、なお、礼を繰り返したり、下へもおかない待遇だった。
於福^{おふく}もいた。

チラと、日吉の顔を見、ぎよつとした顔つきだったが、それへ向つても、日吉はにやつと白い齒を見せただけだった。

「蜂須賀様へは、いずれ日を改めまして、お礼に参上いたします。何とぞよろしゅうお伝え上げねがいまする。また、わぎわぎ今日のお使い、ご苦勞さまでございました」

茶わん屋夫婦、その子、奉公人たちが、一同頭を下げる中を、日吉は松原内匠の後について、手を振って出て行つた。

(……藪^{やぶ}山^{やま}の叔母さん。どうしてるだろうな。叔父もあの大病。もう死んだかもしれない)

光明寺^{こうみょうじ}の山を仰ぎながら、日吉はそんなことを考えながら歩いた。

中村は、もうそこだ。

当然彼は、母やおつみの顔を、さつきから胸に思い出して、ちよつと駈け出して行つてみようかとさえ思うほどだった。

けれど、霜の夜、誓つて出たことばがある——。今行つても、母を欣^{よろこ}ばしてやる何ものもまだ自分の手にはなかった。

その中村の方へ背を向けて、うしろ髪をひかれながら、彼は内匠について歩いていく。すると途中で、

「おや、弥右衛門^{やえもん}どのの伴^{せがれ}じやないか」

足軽ていの男が声をかけた。

「どなた様でしたっけ」

「日吉だろ。お前は」

「はい」

「大きくなつたなあ、わしは弥右衛門どのの友達の乙おとわか若だよ。織田様に仕えていた頃、同じ足輕組にいた者だ」

「思い出しました。そんなに私は大きくなりましたか」

「見せたいなあ。……死んだ弥右衛門どのに」

「そういわれて、日吉は、ほろりと涙をこぼしかけた。

「私のおふくろに、近頃、お会いになつたことがございましょうか」

「つい無沙汰しているが、中村へは時折行くので、よそながら噂は聞いている。相変らず、よく働いていて結構だの」

「じゃあ、病気もせず、丈夫で暮しておりますか」

「お前こそ、どうして家へ行かないのだ」

「偉くなつたら帰ります」

「顔だけでも、見せてやれよ。女親にはな」

「ええ……」

熱い^{まぶた}瞼^めが、堪らなくなつて、日吉はもう顔を^{そむ}外^{そむ}向^むけていた。——気がついてみると、乙若^{おなた}の姿も、もう彼方^{あな}へ歩いてゐるし、松原内匠も先の方を歩いてゐた。

残暑も、薄らいで来た。朝夕は秋を覚える。芋^{いも}の葉^はが目立って大きくなつた。

「この濠^{ほり}は、五年も浚^さ渫^せつてないぞ。檜^{ひの}や馬^{うま}の稽^{せき}古^こばかりしてゐたつて、足もとに、こんな泥を溜^{ため}めてゐるようじゃあ……だめだ」

今。

村^{しん}の篠^の刈^{かり}の家へ、使^しいに出^でて、戻^もつて来^きた日吉は蜂須賀家の古い濠をのぞいて独^つり^づ呟^やいてゐた。

「なんのために、濠があるんだ。小六様にひとつ云つて上げよう」

竹竿を突つ込んで、水深をさぐつて見た。水草でいちめんなので誰も気づかないが、日吉が察した通り、底は何年となく、落葉や泥の堆^{たい}積^{せき}に埋^うまつて、何尺もなかった。

二、三カ所でそうして、竹竿を抛^{ほう}り捨てて、横門の橋へかかろうとすると、

「御^お小^こ人^{びと}」

呼^よぶ者がある。

日吉の身なりが小さいから御^お小^こ人^{びと}といったわけではない。大家に仕える小者のことをそ

ういうのである。

「誰だい？」

橋の上から、日吉は振り向いた。

見ると、濠ほりのそばの、椎しいの木の下に、薦こもを敷き、鼠色の着物を着て、尺八を差した男が、ひもじいような顔して、膝を抱えていた。

「ちよつと……」

と、男は手招きした。

この村へも、時々、はいつてくる虚無僧こむそである。薦僧こもそうとも呼んでいる。

ずっと後の、江戸時代のそのように、その頃の薦僧には一定した宗しゅう服ふくもなかったし、掛絡からや袈裟けさなども、あんな美々しい粧よそおいはしていなかった。どれもこれも、薄ぎたなくて、不精髻ふしょうひげを生やして、負お薦こもに尺八一本持つて歩いていた。——中には本格的に鈴を振つて、普化ふけ禅師ぜんじをまねて凜々りんりんと遊行ゆぎようしていた者がないこともなかったが。

今、日吉へ、手招きした薦僧こもそうもまた、汚よごれ腐くった着物に、不精髻ふしょうひげを生やしている組だった。

「お布施ふせかい。……それとも、お腹が減へつて、動けないのかい？」

日吉は、小馬鹿にしながら、戻って来たが、苦しい旅の味はよく知っているので、腹が減っているなら飯を、体でも病んでいるなら薬を、貰ってやろうと直ぐ頭の中では思いつていた。

「……ちがう」

薦僧は、顔を横に振った。

じつと、日吉を見上げて笑う。そして、敷いている薦こもの席を、半分譲ゆずって、

「ま、お坐り」

「いいよ。立っていても。用事は何さ」

「おぬしは、御当家の召使か」

「ちがう」

今度は、日吉が真似まねして、顔を振った。

「おらは、ここの懸かかり人ゆうどだ。小六様に飯はいただいているが、まだ奉公人にはなっていない」

「ふむ。……でも何か働いてはいるのだろう。台所か、お表か」

「庭掃除さ」

「庭番か。そうか。それでは小六殿にも、目をかけておられるな」

「どうだか」

「今は、お在いでか」

「お留守だよ」

「御不在か。それは生あいに憎にくな……」

と薦僧は、落胆したように呟つぶやいて、

「今日中には、お帰りじやろうか」

と、訊ねた。

日吉は、それだけの会話のうちに、この薦僧の様子に不審を見出し、急に、口数を控え
てしまった。

「お帰りはいつだな」

重ねて、訊くと、日吉はそれには答えず、

「薦僧さん。おまえは、お侍だろ。薦僧なら、なりたての、新米だろ」

非常な驚きを顔にあらわして、薦僧は日吉の顔を見つめていたが、やがて、

「どうして、わしが侍か、また新米の薦僧と、おぬしに分ったか」

日吉は、事もなげに、

「分らなくツてき！ ひどく陽に焦やけているけれど、指の股が、白いじゃないか。耳の穴が、まだ割合にきれいじゃないか。侍という証拠には、そうして菰こもの上に坐まつていても、具足を着て、胡坐あぐらを組んでる恰好だよ。癖だから、どうしても膝頭たいざが上がって大坐になる。——物乞ものごいや薦僧こもそうなんかは、背骨を曲げて、ぺたんと坐るものだから、直ぐわかるさ」

「ウウム……その通りだ」

薦僧は、菰のうえから起き上がったが、立ち上がりながらも、日吉の顔から眼を離さなかつた。

「おそろしい爛眼けいがんだ。これまで敵地の木戸や関門を通つて来る間にも、それ程までに、わしを見抜いた者はなかつた」

「盲千めくらせん人だからな。——だけど薦僧さん、何の用だい。お頭目かしらに」

「実はな」

と、声を密ひそめて、

「わしは美濃みのから来た者だ」

「美濃」

「斎藤秀龍さいとうひでたつの家中で難波内記なんばないきといえ、小六殿には分つておる。人知れず、このままだとお目にかかつて直ぐ引き返したいのだが、御不在なれば仕方がない、昼間のうち村々を流たそがれして黄昏たそがれにでもまた、出直して来るといたそう。——もしお帰りになったらそつと、お前から耳打ちしておいてくれ」

云い残して、薦僧が歩きかけると、日吉は呼び止めて、

「嘘だよ、薦僧さん」

「え？」

「留守といったのは、そっちの素姓が分らないからだ。実は、馬場にいらつしやる」

「あ。いるのか」

「うん。もう見届けたから、案内して上げよう。おらに尾ついて、此方こつちへおいでなさい」

「飽くまで、おぬしは、抜け目がないのう」

「弓矢の家にいるからには、これくらいな氣くばりは当り前だよ。美濃衆みのしゅうは、こんなことぐらいに感心するほど皆、ぼんやりしているのかね」

「そんなことはない」

薦僧は、舌打ちした。

濠ほりを繞めぐつて、畑を通つて、森のうしろへ廻ると、広い馬場があつた。乾いた土が、空へ揚つていた。

小六以下、蜂須賀衆の人々が、駒を曳き出して、猛烈な騎馬の練習をやっていた。騎乗ばかりでなく、鞍と鞍とを寄せ合つて、棒で撲なぐり合つていた。——激戦の場合の突撃きざを擬ぎしているであろう。

「ここで待つておいでなさい」

日吉は、薦僧をおいて、一人で駈けて行つた。

しばらく、様子を見ていると、小六が汗の顔を拭きながら、休息所の小屋へ、湯を飲みに来た。

「お湯ですか、お頭目かしら」

日吉は、すぐ湯を汲んで、熱くない程に、水を割つて加減し、盆に乘せて、小六の床しょう几ぎの前ひざまずに跪ひざまずいた。

「汝われも見えていたか」

「はい」

答えながら寄つて、

「美濃家の密使を案内して参りました。連れて来ますか。お頭目かしらからお運びになりますか。密使は、森の蔭に待たせておきましたか」

と、早口に告げた。

「なに。美濃から……？」

斎藤家の密使と聞くと、小六はもう、多言を待たず、床几から立って、

「猿」

「はい」

「案内せい」

「ここへですか」

「いや、おれの方から出向く。どこへ待たせておいた」

「森の向うがわに」

指さしながら、日吉は先に立って歩いた。

美濃の斎藤家と蜂須賀とは、おおよけ公な関係ではないが、かなり長年の間、一つの密盟を結ん

でいた。

美濃に事ある時は、蜂須賀から手を貸して援け、たす蜂須賀に事あらば、美濃の勢力が後か

ら援護しよう。

また、経済的には、年ごとに二百貫の領を、美濃から貢ぐ。

そういう条約だった。

おたのぶひで織田信秀や、三河の松平や、駿府の今川家などの、ぼっこうせいりよく勃興勢力のなかに挟まれて、ぼ

つねんと、島のような存在でありながら、そのどれからも併呑へいどんをまぬがれて、蜂須賀党

が蜂須賀党として、土豪ながらも四隣に屈せずにいられるのは、遠く、稲葉山の居城から、

齋藤道三どうさんひでたつ秀龍というものの睨みがきいているお蔭でもあった。

地の理を隔てながら、どうして蜂須賀党と、道三秀龍とが、そんな条約の下に結ばれて
いたか——ということについては、ひとつの話が聞えている。

それは、小六の先代、蔵人正利くろうどまさとしが頭目かしらに立っていた時代のことであるが——

或る夜。

蜂須賀家の門前に、行ゆきだお仆れていた病人がある。武者修行ていの侍だった。正利が憐あわれんでやしきへ引き入れ、医療を尽して恢復を見た後、路銀まで与えて立たせてやった。

(……御恩は忘れおかぬ)

やつ寡れた武者修行は云った。そして別れて立つ日にもまた、

（いつか、自分が志を得た後には、消息いたして、今日の御芳志にきつと酬^{むく}いる）と、誓った。

その時、云い残した名は、松波^{まつなみ}莊九郎^{しょうくろう}と聞いていたが、やがて年経てから、その莊九郎からよこした書簡には、齋藤^{さいとう}山城守秀龍^{やましろのかみひでたつ}としてあつた。

（あの人が）

と、後では驚いたことだった。

そういう旧縁から、小六の代になつても、秀龍との盟は、依然結ばれていたのである。その秀龍からの密使！

何事かと、小六がすぐ立つて行つたのは当然だった。

薦僧姿の密使、難波^{なんば}内記^{ないき}は、森かげに待っていたが、小六を見て、

「おう」

と、礼儀をした。

小六も礼を返し、そして双方が眼と眼とを、正しく交^てわしながら、片方の掌を、拝むように胸に当て、

「てまえが、小六正勝」

「それがしは、稲葉山の家人、難波内記にござる」

名乗り合ってから、もいちど低く頭を下げ合うのだった。秀龍は幼少の頃、妙覚寺みょうかくじに入り、顯密けんみつを学び、前身は僧であつたこともあるので、美濃衆の合い言葉にも、顯密の語が用いられたり、こういう隠し作法にも、どこか寺院臭さがあつた。

作法を交わして、お互いが、

(この者は、間違いない)

と見極めると、初めてうち寛くつろいで、何でも話し合うのだった。

「猿。——誰が参つても、森へ入れるな。おれが許すまでは」

小六は、いいつけて、内記と共に、森の中へはいって行つた。

森の中の二人の会見に、どんな密談が交わされたか、密書が開かれたか、日吉には知るよしもなかったし、知ろうとする気もとよりなかった。

彼はただ、忠実に、森の外に立って、張番していた。

使いに行けば使いに。庭掃除になれば庭掃除に。張番に立てば張番に。——彼は持つた仕事の人間になりきつた。

彼に限っては、どんな仕事でも仕事を愛することが出来た。それは、貧しく生れたから

ばかりではない。現在の仕事は、常に、次への希望の卵だったからである。それを忠実に抱き、愛熱で孵かえす時に、希望に翼が生えて生れることを、彼は知っていた。

（今の世のなかで、身を立てるには、何がいちばん大事か）

日吉は、考えてみたことがある。

それは、系図だ。家がらだ。

しかし、彼には、それが無い。

家がらの次には、いうまでもなく、金と武力だが、その二つも、彼は持たない。

（では、何をもって、おれは世に出たらいいか）

と、自分に訊ねてみると、悲しいかな、肉体は、先天的に矮わいしょう小だし、健康も人並より優すぐれていないし、学問はないし、智慧は当り前だし……一体、何がある？

忠実。

それしか、考え出せなかった。それも、何を忠実に、などと考え分けてするのでなく、何でも忠実にやろうと決めた。忠実なら、裸になっても、持てると思った。

だが、その忠実を、どういうふうに行おこなってゆくか、と自問自答して、

——なりきる！

というところへ、彼の肚が据^{すわ}つた。どんな職業でも、与えられた天職に、なりきつてやろう。庭掃除でも、草履取りでも、厩^{うまや}掃除でも、なりきつてする！

将来の抱負をもつていても、その希望のために、現在の足腰を浮かすまい。

現在から遊離して、将来のあるわけではない。希望は、なりきっている下っ腹において、上^{うわつら}面に出すものではない。

ピピ、チチ、チチ……

森の小禽^{ことり}は、日吉の上で、囀^{さえず}っていた。だが日吉の眼は、小禽^{ことり}の啄^つんでいる木の実を見なかった。

「——やあ。御苦労」

やがて、小六が、森の奥から出て来て云った。

機嫌がいい。野望的な眼がかがやいている。そしてどんな重大なものを齎^{もたら}されたのか、緊張した後の醒^さめた面^{おもて}が、まだいくらか上氣していた。

「すみしましたか」

「すんだ」

「薦^{こもそう}僧さんは？」

「もう帰った。べつな道から森を出て——」

小六はそういつてから、ふと日吉を顧みて、

「他言するな」

と戒め^{いまし}めた。

「はい」

「難波内記が——あの薦僧が、ひどく汝^{われ}を賞^ほめちぎっておったぞ」

「そうですか」

「いずれ一かどの者に取り立ててやる。いつまでも、蜂須賀におれよ」

その日、美濃の密使が齎^{もたら}した問題^{もたら}についてに違いない。夜になると、小六の邸には、一族の重立^ふった者のみが寄つて、更^ふくるまで密議をしていた。

その晩も、日吉は、星の下に立ちきりで、忠実な張番役だった。

稲葉山城

稲葉山の齋藤道三^{どうさん}秀龍の密使は、いったい、どんなことを齎^{もたら}して来たのだろうか。

もとより厳秘だ。

一族の者でも重立った者にしかその内容は洩らされていない。

だが――

密かな評議があつた夜の翌日頃から、蜂須賀党のうちでも腕がきくとか、頭がするどいとか、敏捷びんしょうだとかという特質のある者が、次々に変装しては、蜂須賀村から消えて行つた。

岐阜へ。岐阜へ。

誰となく囁かれていた。

小六の舎弟に、蜂須賀七内という者があつた。その七内も、何か一役持つて、岐阜へ忍んで行くこととなり、日吉は、その七内の供をして行けと吩咐いいつけられた。

「何か、戦いくさでも始まるんで、その探りにでも行くんですか」

日吉が、訊ねると、

「よけいなことをいうな。黙っておれにくつついて来ればいいんだ」

と、七内は、何も話してくれなかった。

この人のことを、邸の小者でも、台所の者でも、「あばたの七内様」と蔭口して、誰も

煙たい——というよりも憎悪していた。兄の小六のような情味が、このあばたの七内様にはちつともないからだった。大酒呑みで生意気で、すぐ腕自慢するといったふうな人間だった。

「……嫌だなあ」

日吉も、正直そう思った。

だが小六から、

「ほかの小者では、心こころもと許ない。先頃、難波内記も賞ほめておったし、そちらならばと、思われるので」

と、いわれたので、嫌も文句もいえなかったのである。

一飯の恩、一宿の義理である。蜂須賀党の端くれに加わって、働くまでの決心はまだつききらないが、

かしこま
「畏りました」

——云ったからには、七内様でも、あばた様でも、飽くまで誠意をもって、供をして行こうと、日吉は思いきめた。

さて。

出立の日となると、蜂須賀七内はすっかり髪容かみかたちまで変えて、清洲きよすの油問屋の註文取という旅たび拵ごしらえをして出かけた。

日吉は、この夏、着て歩いていた、針売りの行商着をそのまま着て、少しばかりの荷を背中に負い、油屋の七内とは、道中の道づれという態さまで、美濃路みのじへ向った。

「猿、往来調べの木戸へかかったら、おれの側を離れて通れよ」

「はい」

「てめえは一体、口達者で、口数が多いから、何を訊かれても、なるたけ黙っているんだぞ」

「へい」

「ボロを出すと、おれは知らん顔して、捨てて行ってしまうぞ」

街道の木戸は、次々にあった。尾張おわりの織田家と、美濃みのの斎藤家とは、聶むこしゅうとと舅との親密な関係にあつて、味方同志のはずだが、なかなかそうでない。

いや、尾張美濃の間には、国境もあるから、そうした警戒をどっちがしていても、そう不自然ではないが、美濃へはいつてみると、美濃一国の内にも、お互いを疑い合うような眼が、どこにも光っていた。

「なぜでしょ？」

日吉が、七内に訊くと、

「知れたことを訊く奴だ。斎藤道三様と、その子の義龍よしだつとは、もう何年も前から、睨み合っている仲じゃねえか」

一国の中で、二つの勢力が反目し、一族のなかで、父と子とが闘っていることを、七内は何のふしぎとも思わずにいうのだった。

日吉は、七内の頭を疑った。

武門の上では、源平げんぺいの頃でも、父と子とが、弓矢のあいだに、敵味方に立った例もないが、そこにはそれ以上の苦悶と理由があつてのことだ。

「どうしても、斎藤道三様と、子の義龍様とは、仲が悪いんですか」

腑ふに落ちない顔して、そこでまた、彼が訊くと、

「うるせえな」

七内は、舌打ちして、

「そんな事あ、人に訊け」

と、相手にもしてくれない。

日吉が、美濃の国の土を踏む前に第一に抱いていたものは、彼の氣持に反く、その疑問だった。

だが、岐阜の里は、山水明媚な城下だった。町並びも麗しかった。

紅葉した稲葉山は、小雨に濡れたり、陽に映えたり、折から秋も更けた頃だったので、

朝夕に見ても見飽かなかった。

べつの名を「金華山」とも呼ぶように、まるで錦の崖だった。町と田野と長良川の

水の際から、突兀と急に聳え立っている絶頂に、一羽の白鳥でもうずくまっているかと

見まごう白壁が、ポチと小さく見える。

「高い山城だなあ」

日吉は眼をみはった。

城下からそこへ登るのには、七曲、百曲、水の手の要害堅固であるとも聞かさ

れ、難攻不落というのは、こういう城地をいうのだらうと感心したが、日吉は直ぐ、

「城ばかりで国は持たない」

と、胸の中で呟いた。

七内は、繁華な町の辻の商人宿に、宿を取ったが、日吉には、

「おまえは、この裏の木賃宿へ泊れ。そのうちに、用を吩咐^{いいつ}ける。遊んでいては、人に疑われるから、用が出来るまで、毎日、針売りに出て歩いていろ」

といって、わずかばかりの錢をくれた。

「はい」

日吉は、神妙に、錢にお辞儀して、すぐ裏町の汚い木賃へ行つて泊り、結句、独りでこの方が氣樂だったが、

（そのうちに、用が出来るといったが、一体、何の用事だろう？）

今もつて、分らなかつた。

木賃には、旅芸人だの、鏡^{かがみとき}磨^{とぎ}だの、木挽^{こびき}だの、雑多な者が泊つては入れ交わつて行つた。日吉の皮膚は、蚤虱^{のめらみ}にも鍛^{きた}えられていたし、そういう人種の持つ特有なにおいにも馴^なれていた。

日吉はそこから、毎日、針売りに出て、帰りには塩物と米を買つて歸つて来た。木賃暮らしは皆、自炊^{かまど}だつた。竈^{かまど}だけを借りて、薪^{まきだい}代と屋根代を払えばいいのである。

七日ほど過ぎた。

だが、七内からは、何にも云つて来ない。七内も毎日、ぶらぶらしているのだろうか。

彼は自分だけ捨てられたような気がしていた。

——と。或る日。

彼が屋敷町の小路を、針はいらんか、京針はいらんか——と商^{あきな}いして歩いていると、向うから、羽^{うつ}壺^ぼの革^{かわ}袋^{ぶくろ}を脇に掛けて、二^{ふた}張^{はり}三^み張^{はり}の古弓を肩^{にな}に担^にった男が、日吉よりはよく徹^{とお}る声で、

「弓の直しイ。弓の直し——」

と、呼びながら歩いて来た。

そして近づいて来ると、オヤと眼をみはりながら、弓直しは立ち止って、

「あ。猿じゃねえか。何^{いつ}日、誰と此方へ来ていたんだ？」

と、訊ねた。

日吉も驚いた。

その「弓の直し屋」は、小^こ六^{ろく}正^{まさ}勝^{かつ}の部下で、仁^に田^{ただひ}彦^{こじゅう}十^{しゅう}といい、ついこの間まで、蜂須賀村のひとつ邸にいた男なのである。

「彦十様。あなたこそ、どうしてそんな商売をして、この岐^ぎ阜^ふにいるんですか」

「おればかりじゃない。仲間の蜂須賀党が、少なくとも三、四十人はもう入り込んでいる。

——だが、猿まで来ているとは思わなかった」

「わたしは、七内様について、七日ほど前にやって来ましたが、用が出来るまで、針売りをして歩いていこうというので、こうやって針売りをしていますが、一体全体、これは何のためにやっていっているんですか」

「まだ聞いていないのか」

「七内様は、何も話してくれないので。——人間、目的あての分らないことをやっている程、苦しいことはございません」

「そうだろう」

「彦十様には、その目的めあてが、分っているのでございませよ」

「分らなくて、弓の直しなんかして歩けるか」

「お願いですから、一つ聞かせて下さいませんか」

「こんな所で、立話はできぬ。……だが、七内殿も意地悪な。何のためかも知らず、うろついていたりしたら、汝われの生命いのちも危ない」

「へエ。生命にかかわりますか」

「汝われが捕つかまれば、この地へ入り込んでいる一党の密計ろけんが露見ろけんしてしまう。……そうだ。仲

間一同のためでもあるから、汝も呑みこんでおくように、説いてやろう」

「ありがとうございます」

「だが、ここでは人目につく」

「あの社の裏ではどうですか」

「うむ。……ちようど腹も空いた。弁当でも喰いながら」

彦十は先に歩いた。日吉も従って行った。何神社か、森に囲まれて、ひっそりしていた。

二人は、携たずさえている弁当を解といて、喰くべ始めた。銀杏いちようの葉が舞っている。真っ黄色な梢こずえを仰ぐと、木立の彼方に、秋の名残を燃え旺さかっている紅葉の稲葉山と、絶頂の城廓けいらくとが、くつきりと碧あおぞら空に聳そびえて、斎藤一門の覇権を誇っていた。

「目的めあては、あれよ」

彦十は飯粒のついている箸はしの先で、稲葉山の城を指した。

「はあ……？」

日吉は、口を開いて、わざと、ぽかんとした顔をしながら、箸の先に眼をやる。

彦十が見る稲葉山の城と、日吉の眼に映じたそれとは、一つ対象ではあるが、心は大きな相違をもつて、しばらく眺め合っていた。

「——じゃあ、あの城でも、蜂須賀党で乗っ取ってしまおうという算段ですか」

日吉がいうと、

「ばかアいえ」

と、彦十は、彼の馬鹿馬鹿しい質問に、箸を折って、竹の皮と共に地へ抛^{なげう}ちながら、舌打ちした。

「あの城には、斎藤道三殿の子、新九郎義龍^{しんくろうよしなつ}がいて、この要害の地に、四隣^{おき}を抑え、京都と関東の通路を扼^{やく}して、内には兵を練^ねり、新しい武器を蓄^{たくわ}えて、織田も今川も北条も、所詮^{しよせん}、齒が立つものじゃあない。まして蜂須賀党などが、どうなるものか。——馬鹿も休み休みいえ。せつかく、話してやろうと思うことも、張合いぬけして、嫌になるから」

叱られて、日吉は、

「へい。もうよけいなことは云いません」

素直に口をつぐんだ。

弓直しの仁田彦十は、

「……誰も来やまいな」

拝殿の横から、境内を眺めまわして、さて、唇^なを舐めた。

「おれたち蜂須賀党の者と、斎藤道三秀龍様との深い関係は、汝もいつか、聞いているだろうが」

「……………」

日吉は、前に懲りているので、返辞もただ領いてするに止めておく。

「ところが、その道三秀龍様と、養子の新九郎義龍とは、ここ数年、互いに不和になっている。なぜといえばだ——」

彦十は、日吉に分る程度に、斎藤一門の内訌と、美濃の紛乱している実状とを、ざつと、次のように掻いつまんで語った。

道三秀龍は、前名を長井利政ともいい、西村勘九郎といった頃もあり、松波莊九郎と名乗ったこともあるし——また、名もない油売りであつたり、武者修行に歩いたり、寺にいたこともあるという——何しろ経歴の混入っている人物で、その強か者ということは、彼が美濃一国に蟠踞してから、まだ、一尺の地も、外敵に譲らないのを見てもわかる。

だが、肚は黒い。

何しろ油売りから身を起して、空手で美濃一国をわが物とした男だけに、最初に仕えた

主人士岐政頼ときまさよりを殺し、次の主人頼芸よりなりをまた、国外へ追つて、その妾しやうを奪つたりなど——殘忍酷薄な数々の経歴は、挙げて語つたら限りもない。

ところが、酬むくいか。怖ろしいのは宿命である。

彼が奪つて自分のものとした——主人士岐氏の妾が生んだ子は、今の新九郎義龍で、道三秀龍は、多年、それが自分の実の子か、主人士岐氏の子か、悩んでいた。

子は長じて行き、彼は老いてゆく。悩みは、深くなる。

すでにその義龍は、身長みのたけ六尺余り、膝長ひざたけ一尺二寸という堂々たる青年となり、稲葉山城の主君として君臨し、道三は、長良川ながらがわ向うの鷺山さぎやまの城へ、隠居の身とはなっている。

鷺山と稲葉山と、川を隔てて、業ごうのふかい宿命の父子は、今や睨みあつていた。——時めく義龍は、やがて自分の素姓を悟るに及んで道三を怨み、道三をないがしろにした。老いゆく道三は、義龍を疑い、義龍を呪のろい、遂には義龍を廃はい嫡ちやくして、二男の孫四郎を立てようと計つた。

だが、その企ては、義龍のほうで逸いはやく知ってしまった。

義龍は、癩らいびよう病で「癩殿らいどの」と蔭口をいわれたりしているが、宿命の子だけに、性格

はつむじ曲りで、智謀も勇もある。

（その儀ならば）

と、鷺山へ向つて、防寨^{ぼうさい}を堅固にし、一戦をも辞していない。

道三のほうでも、勿論、

（あの癩殿を除かねば）

と、浅ましくも、おのが五体に等しい義龍に向つて、いつでも、流す血を覚悟している。

「——そんなわけだ」

と、彦十はひと息ついて、

「そこで、先頃、蜂須賀村へ密使が来たわけだ。で、道三様からの頼みというのは、鷺山の家来方^{がた}では、顔も知れているから、おれたち蜂須賀党の手で、この城下に、火を放^つけてくれというのだ」

「え。——火を」

「といったって、いきなり放火^{つけび}したって役には立たない。その前に、種々^{いろいろ}なことを云いふらし、稲葉山城の義龍や家来が、不安な兆^{きざし}しを起した頃、風をつよい夜を計^{はか}つて、この城下を火の海にする。——そこへ道三様の兵が長良川をこえて一挙に襲^よせようという計略

なのだ」

「ははあ……」

と日吉は、大人びた^{うなず}顔きをして、感服したような、しないような表情で、

「では何ですか、わたし達は、この城下へ、流言を放ったり、火つけ役をするために、頼まれて来たというわけ？」

「そうだ」

「つまり、乱波^{らっぱ}ですね。人心を攪^{こう}乱^{らん}し、その機に乗じて、事を謀^{はか}る——」

「ま。そんなものだ」

「乱波といえど、下賤の者がやる仕事でしょ」

「仕方がない。道三秀龍様からは、多年、貢^{みつ}がれている蜂須賀党だからな」

彦十は、単純であつた。何といつても、やはり野武士は野武士だなど、日吉は、その顔を見てしまう。

が、彼には、そう単純になれないのだ。その野武士の家の台所で、冷飯を喰べても、自分の身は、珠^{たま}とも思っているのである。これから世に出す身を、そうぞんざいに分別はできなかつた。

「——で、七内様は、何しに来てるんですか」

「指図役だ。何しろ三、四十人もちりぢりばらばら入り込んでいるから、誰か締めくくりをつける者がいなくてはならないからな」

「なるほど」

「もう、あらまし分つたろう」

「分りました。——だが、もう一つ分らないのは、てまえ自身ですが」

「ム。お前か」

「わたしは一体、何をする役目なんでしょ。七内様からは、流^{りゅうげん}言^{ごん}を放てとも、何を探れとも、吩咐^{いっぷ}かつておりませんが」

「多分、汝^{われ}は、迅^{はし}こくて小粒だから、大風の晩に、火でも放^つける役の方に置いてあるのだろう」

「ははあ。火^ひ放^つけですか」

「何しろ、そういう密命をもつて、この城下へ来ているわけだから、寸分も油断はならぬ。弓の直し屋をして歩くにも、針売りをして歩くにも、よくよく気をつけて、言葉の端にも、気どられぬことだぞ」

「知れたらすぐ捕まいますか」

「あたりまえだ。道三様の方では知っていることだが、もし義龍の方の侍にでも、嗅ぎつけられたら、すぐ血祭だ。いや捕まったら汝だけですよ、俺たちにとつても、大事だぞ」

何も知らぬのは不愼ふびんと思つて、こう打ち明けはしたものの、彦十は、もし、猿の口から秘密が漏れたら——と、急に不安を覚えてきたらしいのである。

日吉は、彼の顔色を察して、

「だいじょうぶです。旅には馴れていますから」

「拔かりはあるまいが」

彦十はなお、だめを押して、

「敵地だからな。ここは」

「よくわかりました」

「どれ……。そういつている間にも、人目に怪しまれるといかねえ」

腰が冷えてきたと見え、彦十は立ち上がつて、二、三度腰ぼねを叩きながら、

「猿、……汝われの泊わっている宿屋はどこだ」

「七内様がいる旅籠はたごの、ちようど裏にあたる横丁の木賃で」

「そうか。じゃあそのうち、おれも一晚泊りに行くが、合宿あいやどの人間には、特に気をくばれよ」

破れ弓やゆみを担になつて、弓直しの仁田彦十は、その一言を合言葉に、町の方へ立ち去った。

日吉は、残っていた。

「……………」

そしてなお、拝殿の横に腰かけたまま、ぽかんと、銀杏林いちようばやしの梢越こすえしに、城の白壁を、遠くながめていた。

今。——彦十の口から、この国土の主たる斎藤家の内争と、その悪行ぶりを聞いてから、ふたたび、城を仰ぎ見た時、その鉄壁も、嶮崖けんがいの要害ようがいも、日吉の眼には、何の權威にも見えなかった。

むしろ、彼は、

（——誰が次には、この城の主となって坐るだろうか）

などと考えて、また、

（鷲山さぎやまの道三もだ！ ろくな末路まつろを遂げまい）

と、信じた。

君臣の道もないところに、国土の堅固がどうしてあろう。父と子とが謀^{はか}りあい、猜疑^{さいぎ}し合っているような領主の下に、どうして民の信望があろう。

文化的には、ここは沃野^{よくや}をかかえ、嶮山^{けんざん}を負い、京都諸地方への交通路^{やうとく}を扼^{やく}して、天産^{てんさん}に恵まれ、農工も旺^{さか}んだし——水は麗^{うるわ}しく、女もきれいだが、日吉は心のうちで、

(腐^すえている！)

と、觀^みた。

信じて疑わなかった。

だから彼の頭は、その腐^すえたる文化の中にうごめく蛆^{うじ}についてなど考えている違^{いとま}がなかった。一足跳びにすぐ、

(次の城主は誰か?)

に、思い至っていた。

同時に。

彼は一つの滅失^{めつしつ}にぶつかつた。それは今、自分が飯をもらっている蜂須賀小六にである。

野武士、野武士と、世間とはかくよくいわないが、小六その人を直接に知ってみると、彼は正義の男だし、遠い家系の血をひいて卑いやしくないし、人物もまず一ひとかどといってよいし、日吉も日常、彼に頭を下げて、吩咐いいつけを受けることを少しも恥としなかったが——さて、ここで少し考えさせられる。

斎藤道三とは、多年、貢みつがれもし、交誼こうぎも深い間がらには違ちがいなかろうが、道三の人物を知らぬはずはない。悪逆非道な行いを見ていないことはない。

だのに、その道三と結び、父子の内争に、乱波らんぱの役をひきうけてやるなどは——どう考えても、日吉には与くみせなかった。

(盲めくら千人せん人にん。小六もまず、盲のひとりか)

と、嫌気いやけがさして来ると共に、急にその小六の仲間からも、この城下からも、逃げ出したくなった。

じゅうべえみつひで
十兵衛光秀

それは、十月末の、から風の強い日であった。

日吉が、いつもの木賃から、行商に出て行こうとすると、裏町の辻に、鼻を赤めて佇ん
でいた弓直しの彦十が、

「猿、これを」

と、側へ寄つて来て、彼の手に一通の廻かいじょう状を握らせ、

「——読んだら直ぐ、噛みつぶして、河の中へでも吐き捨ててしまえよ」

と、注意するなり、もう素知らぬ振りして、右と左に別れて行ってしまった。

「何だろ？」

およそ仲間の廻文という見当はついていたが、日吉は、気にかかつて、いやな動悸どうきを打
つていた。

この仲間から去ろう。この土地から逃げ出そう。それは何度も、考えてみたが、ここに
踏みとどまつているよりは、逃げる場合のほうが、遥かに、生命の危険があつた。

なぜなら、自分は自分ひとりで、この木賃に泊っているつもりでいたが、自分の出這入ではい
りや行動には、絶えず、蜂須賀党の仲間の眼が、どこかで見張っているからだつた。

その見張にもまた、見張が付いているのだ。つまり鎖くさりの一環いっかんのように、単独に脱ぬける
ことは許されない仕組にできていることを、近頃、彼も知つたのである。

「いよいよ、やるのかな？」

かねて、彦十から聞いてはいたが、いざとなると、日吉は、気持が暗くなった。

気が小さいのか、兇悪な乱波らんぱとなつて民衆を惑わし、城下を攪乱こうらんし、火の海を魔みた
いになつて活躍することなど——どうも出来そうもない気がする。

第一、それを聞いてから、小六への尊敬を失ってしまったし、斎藤道三に利益する気にもなれないし、なおのこと、稲葉山城いなばやまじょうの義龍よしたつにも味方する情熱など少しもない。

もし、味方すれば、城下の民に味方したい。どこに同情をもつかといえ、やはりそんな場合には、真つ先に戦禍せんかをうける、町人百姓、わけても、子のある母親へ、彼は痛切に、同情をもつ！

「なんの、まだ開けてもみないうちに、取越苦勞をしておつた。……とにかく、読んでみてからだか」

針イいらんか——京針イ——いつもの声で流しながら、日吉はわざと、屋敷町の人目のない横丁へ曲つて行つた。

と、小川がある。行き止りだ。

「おや、こいつはいけねえ」

わざと聞えよがしにいつて、見廻すと、折よく、人影もなかった。

でも、念のため。

彼は、小川へ向つて、尿いばりをしながら、しばらく悠々と、附近の様子を見とどけ、さてと、おもむろに懷中ふところから廻文を取り出して読んでみると――

こよい、戌いぬの下刻げこく

風。西か南なれば

常在寺じょうざいじうらの森に集合のこと

風。北に變ずるか

風やむ折は、集合もやむ事

「……………」

予想はやはりあたっていた。日吉は読み終ると、細かに裂いて、口のなかに丸めこみ、紙団子かみだんごになるまで噛んでいた。

「――針売りッ」

ふいに、何処かで呼ばれたので、日吉はうろたえ、口の中の物を、川へ吐き捨てるいとももなく、掌てのひらへ吐いて握った。

「へい。どちらですか」

「ここだ。針を買ってつかわすから、はいって来い」

声は聞えるが、誰か、何処か、一向その人の姿は見当らなかつた。

——いくら見廻しても、姿の見えない筈。

声の主は、彼方の侍屋敷らしい構えの中だつた。低い堤^{どて}の上へ、二段に繞^{めぐ}らしてある築^つ土^{いじ}のうちから、その声はしたのである。

「針売り針売り。こっちへ廻って来い」

築土の横手の、小さい潜り門が開き、そこから若党らしい者が、首をさしのべていた。

「……へい」

日吉は答えたが、ちよつと、様子を計っていた。

この界^{かい}隈^{わい}の侍屋敷なら、問わずとも、斎藤家の家中とは知れきっている。それも、道三方の家臣ならよいが、義龍の直臣でもあつたら、小気味がわるい。

「針売り、針を求めてつかわすと仰っしゃる。こっちへはいって来い」

求めてくれる人は、その若党ではないらしいのだ。いよいよ、気が進まなかつたが、ぜひなく近づいて、

「ありがとうございます」

後にあと従ついて、日吉は、潜りの内へはいった。

そこは裏庭らしく、築山の後を巡めぐつて従ついて行く。かなり大身の屋敷とみえ、母屋おもやは幾棟にもわかれ、建築の宏壮、泉石せんせきの清楚、日吉は足を竦すくめた。

誰だろう？ 針を買ってくれるという当人は。

若党のことばでは、主人筋らしいが、これ程な屋敷に住む大身が、奥方であろうと、御息女であろうと、自身、針など求めるはずはない。また、外を呼び歩く物売りなどを近づけるわけもない。

「針売り」

「はい」

「暫ざんじ時、そこで待つておれ」

若党は、彼を庭の一隅へ残して行つてしまった。——見ると、母屋からは、かけ離れた一棟がある。

その一棟は、下が書齋、上が書庫にでもなっているらしく、荒壁で塗り廻した中二階造りになっていた。若党は、その中二階を仰向いて、

「十兵衛様、呼び入れて参りましたが」

と告げた。

狭間はざまのように、壁を四角く切り抜いた窓がある。十兵衛と呼ばれたのは、二十四、五歳の白皙はくせき明眸めいぼうな青年で、書庫の書棚から、本でも索さがし出していたところか、数冊の書を手にかかえながら、その窓口に、半身を見せていた。

「む、今参る。——階下したの縁先にでも待たせておけ」

十兵衛は、下の若党へ、そう返辞して窓口から姿をかくした。

遠くから、日吉は見ていた。なるほど、あんな所に人がいたのか、とその時気づいた。彼処あそこからなら築土つじの外も見える——

先刻さつきからの自分の挙動を見ていたに違いない。何か疑って自分を調べるつもりだろう。すると、此方こつちもその覚悟でいないと飛んだ目に遭うかも知れない。

日吉が、そう臍はぞを決めていると、若党は彼方から手招きした。そして、

「今すぐ、御当家の甥御様おいこさまが、そこへ見えられるから、お縁先を離れて、謹んでお待ち申しておれ」

と、いった。

いわるるまま、日吉は、その家の縁先から少し離れた所に坐っていた。勿論、土へじかにである。

そしてしばらく手をつかえていたが、なかなか出て来ないので、そつと首を擡もたげた。

日吉は、目をみはった。

室内は、書物で埋まっていた。机のまわり、壁の書棚、二の間まも二階も、書物の庫くらになつてゐるらしく思われる。

(ここの主人か、その甥か。よほどな学者だとみえる)

日吉には、書物など、見るのも珍しかった。——しかし、長押なげしを仰げば、そこには見事な檜、床の間をのぞけば、そこには鉄砲が立て懸けてあつた。

やがて、その人は出て来た。

静かに、机の前へ座を占め、頬杖をついた。そして、庭前に屈かがまつている日吉の方を、書物の文字を見るような叡智えいちな眼で、しげしげ見ていた。

「はい。今日は」

——それとは、まるで正反對な、開けツ放しな顔を上げて、日吉は、
「ありがとうございます。てまえが針売りで——。針をお求め下さいますか」

十兵衛は頼杖をついたまま、机の上からうなずいて、

「うむ。求めて遣わすが、その前に、ちと訊ねたいことがある。——そちは針を売るのが目的か、それとも、御城下を探るのが目的か」

「もとより、針さえ売ればよいので」

「ならば、こんな屋敷小路などへ、なぜはいつて来たか」

「抜け道かと存じまして」

「嘘を申せ」

十兵衛は、少し身をねじ向け、

「見るところ、旅摺れした面構え、行商も今日やきのうのことではあるまい。およそ

侍屋敷などで、針など売れるものか否か、心得ておる筈」

「そうとばかり限りませぬ、稀には……」

「稀に——ではあろうが」

「でも、売れることは、売れますので」

「では、それはまず措いて。——かような人気のない所へ来て、何を読んでいたのか」

「へ？」

「辺りに人がおらぬと思うて、そちは密かに紙片かみきれを手にしていたが、およそ天地草木の生々と生きづく所、神の眼のない世界はない。声のない物象はない。……何を見ていたか」

「手紙を見ていました」

「何の密書を」

「おつ母さんから来た手紙を読んできました」

意外な答えだった。

そしてけろりとしていた。

勿論、十兵衛は、その理性的な眼ざしで、

(こやつ、言葉巧みに)

と、なお、疑いを濃くしたが、わざと優しく、

「そうか。母の手紙か」

「はい」

「しからば、その手紙を、見せい。御城下の掟おきてとして、不審の者は、見当り次第、縛からめて、問注もんちゅう所へ突き出す定めになつておる。明らかにせねば、不愼ふびんでも、役所へ引き渡すぞ。
証立あかしだてのため、その母の手紙とかを、これへ見せい」

「喰べてしまいました」

「何」

「生憎あいにく、読んだ後で、喰べてしまったので」

「喰べた？」

理をもつて、優しく、しかしするどく、徐々に責めていた十兵衛も、常識負けした形で、呆れ顔あきがおしてしまった。

「はい」

日吉は、なお、真面目に、

「わしにとれば、おつ母さんは、神様より仏様より、生きているだけになお、尊いおつ母さんでござります。ですから……」

「だまれッ」

一喝かつを投げて、十兵衛は、後はいわさぬ顔を示した。

「秘密の手紙ゆえ、噛み捨てたのであろう。それだけでも、不審な奴、さてこそ！」

「いえ、いえ。お考え違いをしては困ります」

日吉は、あわてて、手を振って云い足した。

「神仏よりもありがたい、おつ母さんの手紙を、持っていて、つい洩はなをかんでしまったり、往来へ捨てて、人の足に踏まれたりしたら、勿体ない、罰があたる。——そう思うので、いつも私は、喰べてしまうのが癖なんです。嘘ではございません、遠く離れている母の文字、喰べてしまいたいほど、懐かしいのは当り前でございます……」

嘘だ。虚言だ。

十兵衛は見ぬいていた。

しかし、嘘にせよ、人並すぐれた嘘をいう男もあるもの——と思った。

それと——

十兵衛にも、故郷に遺のこしてある母があつた。郷里、美濃みののくに国恵那郷えなごう明智あけちノ庄しょうの明智城あけちじょうにひとりの老母が待つてゐる。

（嘘も、根からの嘘はいえないものである。母の手紙を喰べてしまったなどということは、出たら目でも、この猿に似た小男にも、親はあるにちがいない）

十兵衛はまた、そうも考えて、相手の無教養らしい野性をも、かえつて、慫あわれに思った。しかしまた、得えてかういう、無知であどけない顔をした男が、いったん策士に利用されて、騷そうじょう擾じょうの火でも放けると、野に出た野獣のような兇暴に変わるものである。

わざわざ、問注所へ突き出すほどの者でもないし、斬り捨てるには慍^{あわ}れ過ぎる。——と
 いて、このまま、放つのもどうかと思う。

「……………」

黙って、日吉の挙動を、細かな眼で見ている間、十兵衛はそんな観察をしたり、処理に
 迷っていたらしかったが、やがて、

「又^{またいち}市、又市」

と、以前の若党を呼んで、

「奥^{やへいじ}に弥平治^{やへいじ}どのは、お在^いでられるかな」

「いらつしやると思いますか」

「恐れ入るが、ちよつとお顔を拝借したいと申して来い」

「^{かしこま}畏りました」

又市は、駈けて行つた。

程なく、その弥平治は又市を伴^{ともな}つて、大股に奥から歩いて来た。

十兵衛よりは、もつと若い青年だった。十九か、二十歳ほどであろう。この大きな屋敷
 の主人、明^{あけ}智^ち光^{みつ}安^{やす}入^い道^{どう}の嫡^{ちやく}子^しで、弥平治^{やへいじ}光^{みつ}春^{はる}とよばれていた。

十兵衛とは従兄弟仲である。

十兵衛も、姓は同じ明智で、名のりは、光秀みつひでといった。叔父光安のやしきに寄食して、ひたすら學問に没頭していた。

故郷くにもとには、母もおり、明智城もあつて、食客をしなければならないような境遇では決してなかったが、何分にも、惠那郷えなごうの山地では、読みたい書物を手に入れるのもままにならないし、それに、刻々と進みつつある文化に遠かった。

いや、そういうよりも、十兵衛光秀の内に燃えている青年の慾望に、惠那えなの明智城は、余りに小さく、余りに文化の光や、時勢のうごきに、遠すぎたのである。

叔父の光安も、よく、わが子の光春に向つて、

(ちと、十兵衛を見習え)

というほど、彼は謹嚴で、勉強家だった。

ここへ身を寄せる前にも、すでに十兵衛光秀は、京畿けいきのあいだから、山陰、山陽の地方など、隈くまなく旅して来た。——近ごろ多い武者修行の群に伍して、知識を求め、時代の流れを見、生活の中に、進んで苦しみを迎えることもして来たのである。

わけて、泉州堺さかいに止まつて、鉄砲を研究して来たことは、逸いはやく、この美濃の国防と

兵制に多大な貢献をしていた。だから叔父光安始め、誰もが、年はまだ若いが、すでに老成の風を備えている新知識の秀才として、尊敬を払っていた。

「十兵衛どの、何か、拙者に御用だそうですが」

「お、弥平治どのか。お呼び立てするほどのことでもないが」
「何ですか」

「あなたに、ご処置をお願いするのが、よかろうと思うて」

と、光秀も外へ出て来た。そして、日吉のぽかんとしている側で日吉の処分を相談していた。

弥平治光春は、十兵衛から仔細を聞いて、

「ほ。この下人げにんですか」

と、日吉に一瞥べっをくれ、

「怪しいとお認めになるものなら、又市に申しつけて、一責め、弓の折れで撲なぐらせてみたら、泥を吐きましょう。何の造作もない」

といった。

「いや」

と、十兵衛は、弥平治の眼と共に、もいちど日吉の姿を見直して、

「なかなか、そんなことで、有様ありように口を開く男とも見えませぬ。しかし、不愼ふびんなところもあるのだ」

「不愼をかけておつては、口を開かせることは出来すまい。ならば拙者が、四、五日預かつておいて、物置小屋にでも押し籠こめておきましょう。自然、飢ひもじさに、実を吐くやも知れませぬ」

「お手数だが」

十兵衛が同意すると、

「縛くり上げましょうか」

と、若党の又市は、すぐ日吉の側へ立ち寄つて、その手を捻ねじかけた。

と、日吉は、

「あ、待つて下さい」

あわてて、身をかわしながら、十兵衛と弥平治の顔を仰いで、

「今聞けば、撲つても、有様ありようにものをいわぬ男——と仰つしやいましたが、訊いて下されば、何でもいいです。訊きもせず、幾日も、暗い所へ抛ほうり込まれては堪りません」

「申すか」

「申します」

「然らば問うぞ」

「はい。どうぞ」

「……いかん」

と、弥平治は、日吉のけろりとした顔に、力負けしたように、

「こいつ、どうも、おかしな奴ですな。少し頭脳あたまが悪いのかも知れぬ。人を弄なぶっておるよ

うな」

と呟つぶやいて、十兵衛の顔を見ながら苦笑した。

十兵衛は、笑いもしなかった。むしろ惧おそれに似たものを日吉に抱いた。

で——十兵衛と弥平治とが、駄々な子をあやすように、こもこも何かと質問すると、日吉は、

「それなら、今夜大變が起ることを、教えますが、私はその仲間でも何でもありませんから、私の生命は、保証してくれますか」

「よろしい。そちの一命などは取るにも足らん。大變とは、何事か」

「火事があります。今夜の風次第で——」

「火事。……何処から」

「それは分りませんが、わたしと同じ木賃に泊っていた野武士たちが、密談していました。——今晚風が西か南だったら、常在寺じょうざいじの森に集まり、手分けして、城下へ火を放つけようと」

「えっ」

弥平治おもしろも愕おもしろき、十兵衛も息をのんで、日吉の顔を見まもった。——半ば、信じ難いような面持おももちで。

が、日吉は、二人の顔いろなど気にかけているふうもなかった。自分はただ合宿あいやどの野武士が囁ささやき合っていたのを、チラと聞いただけで何も知らない。自分の願いは、早く針を売り上げて、故郷の中村へ帰り、一刻も早く、母親の顔を見たいことしかない——というような意味を、より以上真顔まがおになつて述べた。

愕おどろきの色を、顔に醒さまして、十兵衛と弥平治とは、しばらく、黙り合っていたが、やがて、

「よし。そちの身は、きつと放してつかわすが、夜までは出すことならぬ。——又市、こ

の小男を、どこぞへおいて、飯でも与えておけ」

と、十兵衛は命じた。

風は、相かわらず、吹き募^つっていた。——しかも風向きは、西南である。

急に、その風が、耳について、二人は胸騒^きがしくなった。

日吉の身を、若党の又市にあずけて、そこから追い立てると、弥平治はすぐ、すり寄つて、

「十兵衛どの。この風に乗じて、野武士どもが、何を謀^{たくら}むのでござろうか」

と、不安を湛^{たた}えた眼で、雲脚^{はや}の迅い空を見あげた。

十兵衛は默^{もく}然^{ねん}と、書斎のぬれ縁へ腰を下ろし、緻密な思慮をこらしているように、じつと、一所を見つめていたが、

「光春どの」

「何か」

「叔父上から、何ぞ、この四、五日中に、変ったことでも、聞いておいでなさらぬか」

「さ。……べつに何も、父から耳にしたこともないが」

「はてな？」

「ただ……。そういわれば、今朝、父が鷺山さぎやまのお城へ出向く前に、こんなことをいわれた。——御主君道三様と、義龍様との御不和、近頃、わけでもお険けわしい事情にあるゆえ、いつ何時、いかなる事変が起ろうも測り難い。常時、備えは怠りあるまいが、郎党どもも、不意の変に当つて、武具馬具の用意など、あわてふためかぬよう、くれぐれも、早速の合戦に構えおれよ——と」

「叔父上がか」

「父が」

「今朝だな」

「いかにも」

「——それだ！」

十兵衛は、膝を打って、

「叔父上は、それとなく、今夜にも合戦があるぞと、暗あんに其許そこもとへ、注意して行かれたのだ。兵の謀略はかりごとは、肉親にも洩らさぬが常。……しかし、叔父上だけは、すべてをご承知のことにはがいない」

「え、今夜にも……合戦が？」

「こよい、常在寺の森に集まる野武士というのは、道三様が、外部から引き入れた、乱波^{らつぱ}の輩^{やから}かと思われる。——恐らくは、蜂須賀村の衆であろう」

「では、いよいよ、義龍様を、稲葉山からお取除^{とりぞ}けと、ご決意を遊ばして」

「そうだ」

と、十兵衛は、自分の判断に、自信をもって、強く領^{うなず}いてみせたが、暗澹^{あんたん}と、唇を噛んで——

「……だが、道三様のお考えどおりに、巧くは運ぶまい。義龍様にも、かねて期しておらるることだ。……それに、御父子のおん仲で、戈^{ほこ}を把^とつて、血みどろに戦うなど、人倫の道がゆるさぬ。必ずや、天道のお罰があろう。いずれが勝つも負くるも、流されるのは骨肉、同族の血。——そしてしかも、斎藤家の領地は尺土も殖^ふえはせず、かえって、隣国に虚^{うかが}を窺^{うかが}われ、それが動機となつて、さしもの御城地も崩壊^{ほうかい}に瀕するであろう」

彼は、そういつて、長嘆をもらした。

「……………」

弥平治光春も、沈黙して、ただ、暗い乱雲と風の翔^かける空を見ていた。

主君と主君との争いである。臣下の身にはどうしようもなかった。そして弥平治には父、

十兵衛には叔父にあたる明智光安入道といえど——これは鷺山の山城守道三方の腹心で、義龍廃嫡はいちやくの急先鋒であつた。

「……そうだ。どうあつても、さような、人道に外れた御合戦は、お止めせねばならぬ。臣下の道は、それしかない。——光春、其許そこもとは、すぐ鷺山へ馳せつけて、死をもつて、

父光安殿にすぎり、光安殿とふたりして御主君道三様の思い立ちを、御諫止ごかんし申せ」

「はいッ。心得ました」

「わしは、日暮を待つて、常在寺の森へ行き、野武士たちの謀拳ぼうきよを喰い止める。——死をもつて、きつと、喰い止めるから。よいか！」

火の粉・風の子

おおかまど
大竈が、三つも並んでいた。

すいじ
炊事小屋である。

何俵という米も一度に炊いてしまいそうな大釜が、三つも懸かっている。

その釜の蓋ふたが、持ち上がりそうに今、糊のりと湯気を噴きこぼしていた。

これだけの飯を、一度に喰べてしまうのかと思うと、静かなようでも、この明智家の築^つ土^{いじ}の中に生活している奥侍や、郎党や、その家族らの人数は、百人以上にものぼるのではないかと、日吉はさつきから、眼をみはつていた。

——そして密^{ひそ}かに。

「こんなに豊富にある米が、中村にいる母や姉には、どうして、腹のはる程も、手に入らないのだろう」

と、不審になった。

母を思うと、飯を思い、飯を思うと、母の飢えを思うのが——今彼の習性のようになっていた。

「ひどい風だのう」

台所頭^{がしら}の老人が、すぐ向う側の厨^{くりや}からやって来て、竈場^{かまば}の火をのぞき、飯炊^{めしたき}仲間^{ちゆうげん}や小侍の仕事ぶりを見まわして注意した。

「日が暮れても、風はやまぬようじやから、火の元をよく気をつけてくれよ。——それと、一釜あがったら、すぐ後釜をかけての、手の空^すいておる者は、側から飯を握りにかかれ」
「心得ております」

「抜かりはあるまいが、夜明けまでは、一切、帯紐おびひもゆるめて、懈怠けたいはならぬぞ」

「はい。その儀も」

「確しかとな——」

云い残して、老人は、ほかへ行きかけたが、ふと、足を引き返して竈場かまばの竈かまどの前につく
なんで、火にあたっている小男を見て怪しみながら、

「これこれ」

と水屋仲間を顧みて、訊ねていた。

「そこにおる、猿のような顔した町人は、どこの何者じゃ。見馴れぬ男だが」

「十兵衛様からのお預り人だそうでございます。——あれに若党の又市どのが逃がさぬように、番に付いておいでなさいます」

「ほ、甥御おいごの十兵衛様から？」

と、老人は、竈場かまばの中へはいつて来た。そして、隅の薪置場まき置きばに腰かけている又市の姿に気づいて、

「やあ、御苦労で」

と、何の理わけも分らず、世辞をいつてから、

「あれにいる男は、何か、不審でもあつて、捕えたものでござるか。それとも何か……？」
と、訊ねはじめた。

又市は、

「いや、仔細のほどは、何か知らぬが、ただ、十兵衛様のおいひついで」

と、のみ答えて、多くをいわなかった。

台所頭がしろの老人は、それきり日吉のことは忘れてしまった。そして、頻りと、主人の甥にあたる十兵衛光秀の人物を、称たたえ始めて、

「——実に、お年に似合わず、思慮分別のそなわったお方だな。ああいうお方を、俗に出来ている人間——というのじやろうな。とかく学問はないがしろになり、ただ、何貫目の棒を使うとか、悍馬かんばに乗ってよく槍をつかいこなすとか、どこの戦場で何人斬ったとか——そんなご自慢はなを華としてござるが、十兵衛様はそうでない。いつあの御書斎をのぞいても、しいんと、湖水のように静かに学問してござられる。しかも、火術や兵法などにも、人一倍の実力をお持ちでいながら……。何とも、ゆかしい、末頼もしいお方であらうな」と、口を極めていった。

又市は、十兵衛付の若党であつた。直接の主人である十兵衛のことを賞ほめそやされると、

悪い気持はしなかった。

で、台所頭の老人の口に、彼も合あいつち槌を打って、

「いや、仰せの通り。手前などは、ご幼少から、十兵衛様には、身近に仕えておるが、あんなお優しい方はない。しかも、母君にはご孝行だし、こうして当地にご遊学中も、諸国をご遍歴中も、母君へのお便りは欠かしたことがない程で」

「総じて二十四、五といえ、剛直なれば大言壮語。おとなしければ柔弱で怠け者。木の股から生れたように、親の恩など忘れて生意氣ぶるものだが」

「——では、お優しいばかりかと思うと、あれで、恐ろしく強いご気質もあるので、それは滅多に色にはお出し遊ばさぬだけに、怒つたら、きかないご気性ですよ」

「そうじやろう。おとなしいといわれる者ほど、一たん忪こらえがつかぬとなると」

「今日なども、感じました」

「ム。今日な……」

「事に当って、是か非か、じつと考え込まれる時には、考えておられるが、決すると、堰せきを切ったように、従兄弟いとこ様の光春様へも、すぐ指図して、こうなさい、ああなさいと、きびきび指図してしまう」

「将器じやの。いわゆる大将の器うつわというものじやろ」

「光春様も、十兵衛様には、心服しておられるので、お指図どおりに、すぐ肚をきめて、早馬で鷺山さぎやまのお城へすぐ駆けつけて行きました」

「一体、どうなるのじやろ」

「さ。その儀はな？」

「飯をうんと炊たけ、兵糧として握っておけ。ひよつとしたら、夜半にも、合戦となるやも知れぬから——と、光春様は云い残して、あわただしゅう、早馬でお出ましになったが」

「万一の準備にな」

「万一ですめばよいが、鷺山と稲葉山城との御合戦では、わしら奉公人は、いずれへ弓を引いてよいやら——いずれへ引いても、友や骨肉がおるしのう」

「ま、そんなことは、万が一にも起りますまい。十兵衛様にも、何やらご決心もあり、喰い止める策をお立てになっておるらしいから」

「神かけて、わしらも禱いのる。——これが隣国となら、真っ先に、白髪首しらがくびを、投げ出して
もよいが」

——外はもう暗い。

そして、空は真つ暗だった。

吹き入る風に、大きな竈かまどぐちの口くちの火は音をたてて、燃え熾さかっていた。

その前に、しゃがみ込んでいた日吉は、大釜の飯の焦こげつく匂いに、

「あ、飯が焦げる。お小人衆、釜の飯が焦げつきますぜ」

と、飯炊めしたきちゅうげん仲間たちへ教えた。

教えてくれた礼も忘れて、

「退どいた退いた」

と、仲間たちは、大竈の火を落し、やがて、梯子はしごを懸けて、桶へ飯をうつし取ると、手の空いた者はみな寄つて来て、饅たすきはちまき鉢巻はちまきでにぎり飯を、無数にこしらえ始めた。

日吉も、その中に交まじつて、握り飯をにぎっていた。勿論、自分の口へも、二つや三つ頬張ったが、誰も、何ともいう者はない。

ただ夢中で、飯を握りながら人々のいつていることは、

「戦いくさか」

「戦にならずにすむか」

であった。

そして、自分たちの握っている兵糧が、むだになることを、そのうちの大部分の者が、願っていた。

やがてもう戌いぬの刻頃。

十兵衛光秀が、又市の名を呼んでいた。又市は外へ出て行つたが、すぐ戻つて来て、
「針売り。針売り」

と、大勢の中に交まじつて、一緒に兵糧の飯を握っている日吉を、呼び立てた。

日吉は、指の飯つぶを舐なめながら、飛んで来た。

一步、炊事小屋の外へ出ると、相かわらず風は烈しく、暗い夜を翔かけまわっていた。

「はい。お呼びですか」

「あちらだ」

「え」

「十兵衛様がお待ちだ。つづいて来い」

又市は、先に立つて行く。——見ると、その又市は、いつの間にか、身軽い武装をして、
足あしこしら拵しらえも、そのまま、戦場へ出るように固めていた。

何処へだろう？ 日吉には行き先も分らなかった。何しろ暗い。

やっと、中門へ出て、見当がついた。広い邸内の裏庭をずっと廻って、表へ来たのだ。表門を出ると、誰か、騎馬の人影が一つ、烈風のなかに立って待っていた。

「又市か」

十兵衛の声である。

昼間のままの服装で、鞍の上に在^あった。手綱を片手に、長槍を小脇にして。

「はッ。又市です」

「針売りの男は」

「召し連れしました」

「そちと一緒に、先へ駈けろ」

「心得ました。——針売りッ」

と、振り向いて、そこからまた、タツタと闇の中を駈けた。

その歩速に合わせて、後からは十兵衛の駒と、槍の穂先が背を追って来る。そして辻へかかると、

——右へ。

——左へ。

と、後ろの十兵衛が、馬上から声をかけた。

常在寺の門前まで来て、日吉はやつと気がついた。蜂須賀七内をはじめ、岐阜^{ぎふ}に入り込んでゐる乱波^{らんぱ}の衆が、戌^{いぬ}の下刻^{げこく}に集まることになっている場所だった。

ひらりと、駒を降り、

「又市、そちはここで、待つておれ。何、大事はない」

と、手綱を渡して、

「戌の下刻までに、弥平治どのが、鷺山^{さぎやま}からこれへ見えるはずだが——もし約束の時刻までにお見えなければ、万事は休すだ。御城下^{しゅら}は修羅^{しゆら}の巷^{ちまた}……どうなるか、人間の智慧では臆測^{おくそく}もつかぬことになるであらうが」

語尾は、憂いに消えて、十兵衛の眉には悲壮なものが漲^{みなぎ}っていた。

「針売り」

「はい」

「案内に立て。——先に歩いて」

「へ。どこへで？」

日吉は、烈風^{れつふう}に立ち泳^{こら}えながら、十兵衛のその悲壮な顔を見まもった。

「森へ。——蜂須賀村の乱波どもが、こよい集まるといふ裏の森へだ」

「さ？ ……私も、どの辺だか、場所は存じませぬが」

「場所は初めてでも、そちの顔は、先の者がよく見知っておるであらう」

「えッ」

「かくすな」

「……………」

日吉は、うまく彼を騙あざむいたつもりでいたが、十兵衛の叡智えいちの眼は、何もかも観みぬいてい
ることを、明らかに示していた。

（これはいけない。騙だまされた顔していても、騙しきれない人だ）

日吉はすぐ覺さとつたので、もう言い訳も口答えもせず、はいといつて、先に歩き出した。
一点の灯も見えない。ただ伽藍がらんの大屋根を、木の葉の疾風はやてが、舷ふなべりを洗う飛沫しぶきのように打
つけていた。

その——常在寺裏の林は、まるで荒れ狂う海原わたつみだった。木々の唸りうな、草の嘯うそき、耳も
眼も、奪うばわれてしまう。

「針売り」

「はい」

「森の中に、もう仲間が集まっているか」

「分りません。何しろ、このひどい風では——」

「いや、来ている」

「そうでしょうか」

「ちようど、時刻もはや、戌いぬの下刻に近かろう。——そち一名が、いつまで、見えぬので、仲間の者が皆、案じているにちがいない」

寺裏の大きな五輪ごりんの台石に腰かけて、十兵衛は云った。

小脇に持つている槍の穂先が、日吉のすぐ足の先で、風に研とがれていた。

「仲間へ、顔を出して来い」

十兵衛は、先手先手と打つように、日吉の考えを、始終、先を越して云った。

「——明智光安あけちみつやすの甥おい、十兵衛光秀じゅうべえみつひでが、これにて待つておると申せ。そして、蜂須賀衆のうちで、誰ぞ、重立った者一名に、折入って、談合したいことがあるから、これまで来てもらいたいと伝えて来い」

「畏かしこまりました」

日吉は、頭を下げた。

しかし、すぐ行こうとはせず、

「集まっている一同の者へ、そう伝えればよろしいので？」

「そうだ」

「そのために、私を、これまで先に立たせて来たわけですね」

「はやく行け」

「参ります。——けれど、これきりお目にかからないかも知れませんから、私にも、ここで云い分をいわせて貰いましょう」

「何、云い分を」

「いわずに去るのは、口惜しゅうございます。何となれば、あなたは飽くまで手前を、蜂須賀一類の手先と見ている様子です」

「それに相違あるまいが」

「あなたはお賢いが、あなたの眼は、鋭すぎて、み観る物を、突き抜いてしまします。釘を打つにも、止るところで止っているからよろしいので、過ぎたるは及ばざるが如し、とまというのは、お前様の智慧のことです」

「……………」

「なるほど、あなたが観破みやぶつているとおり、私は、蜂須賀村の仲間と共に、この岐阜へ流れて来た一人にはちがいありませんが、しかし、心はあの衆と団体ではありません。中村の百姓に生れ、針売りなどして、未だに志を得ませんが、土豪の冷飯に飼われて、生涯終る気もなし、乱波らっぱを働いて、けちな恩賞にありつこうとも思っていないせん」

「……………」

「もし、御縁があつて、次にまた何処かで、お目にかかる時があつたら、あなたの眼が行き過ぎで、手前の云い分が、嘘でないことが証拠だてられましょう。——では手前は、約束どおり、これから蜂須賀七内様へ、お言伝ことづてだけ致しまして、そのまま、当地を退散いたしますから、あなたさまにも、ご機嫌よう。ずいぶんお大事に、ご勉強なされませ」

生来、口の達者な日吉が、思い切つてそう述べ立てている間、十兵衛は遂に、一言も吐かなかつた。

——気がついて、

「針売り、待てッ」

と呼んだ時は、日吉の姿はもう、木の葉の暴風を衝ついて、真つ暗な木立の奥へ走つてい

たため、十兵衛の声も届かなかった。

駈け抜けて行くと木立に囲まれた少しの平地がある。風も、ここは池のように、強くは当らなかった。

——見ると。

牧^{まき}の野馬^{のうま}のように、寝そべったり坐ったり、漫然と立ったりしている、一団の人影が黒々とあつた。

「誰だツ？」

立って、四方を睨^ねめまわしていた一人がいった。——日吉の蹺^{あし}音^{おと}へである。

「おらだ」

「日吉か」

「うむ……」

「はじめ。寝呆^{ねぼ}けたような返辞をして何処をまごついていたのだ。汝^{われ}一名が見えぬため、皆で心配していたところじゃねえか」

まず、頭から叱られて、

「すみません。どうも、遅くなりましたして」

と、日吉は、一同の側へ、おずおずと見える足つきで、近づいて行った。

「七内様は」

「あれにいる。あやま謝つて来い。ご立腹だぞ」

「へい」

その日吉の声に、周まわりの四、五名と何か首を集めていた蜂須賀七内が、

「猿か」

と顔を向けた。

日吉が、そこへ行つて、遅くなつた詫びを云いかけると、

「何していた？」

「昼間から、斎藤家の御家中の邸に、捕まっていましたので」

「えッ。捕まっていた？」

七内の眼ばかりではない。辺りの眼は皆、愕がくぜん然と、日吉の顔に集まって、

（すわ、大事が洩れたか）

と、動揺どよめきかけた。

七内は、いきなり、

「この間抜け」

と、日吉の襟えりがみをつかんで、手元へ寄せ、荒々しく次を質ただした。

「どこで、誰の手に、捕まったのだ。——捕まったとあるからには、俺たちの企くわてを、喋し舌やべつたであろが」

「話しました」

「なにッ」

「話さなければ、生命いのちがありません。ここへ戻つて来ることも出来ません」

「こいつ」

と、小突き廻して、

「忌々いまいましい馬鹿だ。生命いのち欲しさに秘密をもらしたとみえる。——野郎、こよいの血祭も

のだ」

七内は、突放つっぱなして、足蹴にかけようとしたが、日吉はひよいと、飛び退といて、その足

先を躲かわしていた。

だが、左右の仲間は、彼の両手を把とつて、捻ねじ上げていた。日吉は、その手を振りのけながら、

「慌あわてないで下さい。話はよく聞くものですよ。捕まっても喋しゃべ舌ぜつつても、それは大事な屋敷なのです。……なぜなら、稲葉山の斎藤義龍の家臣ではなく、蜂須賀党とは同腹の道三秀龍様方の御家来ですから」

と一息にいった。

一同は、ややほつとした面持おももちだったが、なお、疑いは霽はれない眼いろで、

「いったい、その屋敷とは、どこの何者の住居」

「明智入道光安様とか聞きました。けれど、おらが手にかかった人は、その主あるじではなく、甥おいの十兵衛光秀とか申しました」

「ア、明智の居い候そうろうか」

と、呟つぶやく者があつた。

「そうです」

日吉は、そこへ顔を向けたが、また、一同の上へ眼を移して、洒然しゃぜんといった。

「その十兵衛様が、誰かこの中の、頭かしら分ぶんの者に会いたいということ、おらと一緒に、そこまで来ておりますが……七内様、行つてお会いなさいますか」

「明智光安の甥おい、十兵衛光秀が、一緒に来たというのか」

「へい」

「ほんとか」

「ほんとです」

「十兵衛へは、こよいの企てを、残らず話したか」

「いわないでも、観^み抜^ぬいていました。怖ろしく頭^{あたま}脳^まのいい人ですから」

「何しに來たのだ」

「それは分りません。おらはただ、ここへ案内しろといわれたただけなんです……」

「で、案内して來たわけか」

「仕方がございませんから」

「ちえッ」

「ああ。——まだ風がひとい」

日吉と。

一方は七内と。

そう二人が問答を交わしている間、周^{まわ}りの仲間^{仲間}は、唾^{つば}をのんで聞いていたが、七内が最後に、ちえッと舌打ちして口を結んだのをきっかけに、

「どこにいる。その十兵衛とかは——」

と、急に脚を動かし、七内一人で会うのは危険だから、われわれも共に行こう。いや、七内殿と十兵衛と会っている周囲を、蔭にかくれて、遠巻きに警戒していよう。——などと口々にざわめき立った。

——すると、後ろで、

「あいや、蜂須賀衆。人目にふれてはなるまい。十兵衛からこれへ参った。七内殿にお目にかかろう」

と、いった者がある。

驚いて、振り向くと、それは問わでも知れている人影だった。いつの間にか、十兵衛は近くに來て、その静かな眼で、この物々しい動揺を見ていたのである。

「あ、……おぬしが」

七内は、やや慌^{あわ}て気味だったが、一同の頭^{かしら}に立つ者として、ずんぐりした体に、草鞋裁^{わらじた}付^{つつけ}を着けた身装^{みなり}を前へ進めた。

「蜂須賀七内どのか」

「左様」

七内は、急に、頭を高く持った。仲間の見ている手前もあるが、平常でも、主持ちの士とか、少し身分のある武士に対すと、下風にはつかぬぞ、諂いはせぬぞ——と殊さらに態度を持して示す——野武士たちの通有性でもあった。

それに反して。

一筋の槍こそ小脇にしているけれど、十兵衛光秀は、頭も低く、ことばも慇懃に、
「初めて、お目にかかるが、かねて小六殿の尊名と共に、お名は承知いたしています。――

――それがしは、道三秀龍様の幕下、明智光安が宅における懸人――甥の十兵衛と申す若輩にござります」

相手の丁寧のあいさつに、七内は少し痺れ気味だった。

「で、――御用とは」

「こよいのことで」

「こよいのことは、はて、何だろう？」

空　　嘯くと、

「そこにおける針売りから委細承って、驚きのあまり、馳せつけて来たのです。こよいの暴拳は――暴拳といつては失礼だが、兵法から按ずるも、道三様のお企てとも思えぬ下策。

思い止まっていただきたいが」

「ならぬ」

七内は傲然と、

「わしの指図をするのじゃない。道三様のお頼みをうけた小六の指図でいたすことだ」

「ごもつとも」

と、逆^さわずに、十兵衛は、語調も常のとおりにいった。

「当然、ご一存では、見合わせもなりますまい。――で、従兄弟^{いとこ}の弥平治光春^{やへいじみつはる}が、鷺^{さぎや}山^まのお城へ参つて、一方、道三様をお諫^{いさ}め申しあげ、追ッつけ、これへ参り合わせることになつておる。それまで、一同ここを去らず、お待ち願^{ねが}ひとうござるが」

丁寧^{ていねい}も、慇懃^{いんぎん}も、相手の常識に依ることである。かえつて、相手を思いあがらせてしまう場合は、往々に多い。

――が、この構えは、その人間の個性にあることで、臨機応変にゆける者は稀^{まれ}だ。

十兵衛光秀は、性格的に、誰へも丁寧で慇懃^{いんぎん}だった。剣道でいうならば、いつも下段に構えて人に対する方だった。

しかし、肚は、別問題である。

（ふふむ。程の知れた小冠者。少し学問をかじって、理窟だけは達者な青二才の手輩だろう）

七内は、そう観みたので、

「待てぬ！ 要らざることだ」

と、呶鳴にべった。そして、膠にべもなく、

「十兵衛殿とやら、よけいなどころへ、出しやばるものじゃない。おぬしは、まだ部屋住へやずみ同様な——しかも明智入道の懸かかり人の分際ではないか」

「分を顧いみる違とまはありません。主家の大事です」

「大事と思ったら、具足兵糧の用意でもして、おれらが揚げる火の手を待ち、道三様の敵義龍の稲葉山へ、まつ先に、攻めかかるがいい」

「いや、それが出来ぬゆえ、臣下として、われわれは苦しむのだ」

「なぜ」

「義龍様は道三様の立てた御嫡子ごちやくしではないか。道三様が御主君なら義龍様も御主君であらせられる」

「でも、敵となれば」

「浅ましい。御父子のおん仲に、左様な弓矢が交わされてよいものか。天が下、鳥獣の類すらだに」

「面倒だ。帰れ、帰れッ」

「帰らぬ」

「なに」

「弥平治が、これへ来るまでは帰らぬ」

慇懃だとはかり思っていたこの青年の声に、七内は、その時初めて断乎とした力を耳に聞いた。

また、小脇に引つ提げている一槍の鋭い気ぐみを、その眼に見た。

ところへ。

「十兵衛どの、そこにか！」

と、息を喘つて、駈けて来た若い武士がある。待ちかねていた弥平治光春だった。

「おうッ、これにおるッ。弥平治どのだの。御城内の決定、如何になったか」

「残念だが……」

弥平治は、肩で喘ぎながら、従兄弟の手を握つて、唇を噛んだ。

「御主君には、何としても、お聞き入れはないのだ。道三様のみかお父上もまた、部屋住へやずみの分際で、お汝ことらが知ったことではないと——」

「叔父御までが」

「かえつて、ひどい御立腹。——でも、死を賭して、今まで頑張っていたが、やがて鷺さぎや山ま一円では、密かに、出兵の備えらしく、凡ただならぬ様子が見えたに依つて、御城下に火の手が揚つては、もはや大事と、駒を急がせて、戻つて来た。十兵衛どの、何としますか」

「ウウム。では、どうあつても道三様には、稲葉山を焼き立てるお心か」

「ぜひないこと。……この上は、われわれも、ただ一死をもつて、臣下の道を尽すほかはありませんまい」

「嫌だツ……。いかに御主君であろうと、左様な、非道の軍いくさぐみに与して死ぬことは、人として口惜しい。犬死に等しい」

「では、何とするか」

「火の手さえ揚らねば、鷺山の兵は動くまい。——その火元を、火にならぬうち、消し伏せる！」

別人のような、十兵衛の語気なのである。——そういったかと思うと、彼はふいに、蜂

須賀七内や、その他へ向って、小脇の槍をぴたと付けた。

柔弱な青侍とのみ思っていた十兵衛が、突然、自分たちへ、槍を向けたので、七内も蜂須賀党の輩も、驚いて、さつと輪を開いた。

「何とする！」

七内は、ひとりその槍の正面に立つて、吠える風にも負けない声でいった。

「おれ達に、槍を向ける気か。そのへろへろ槍を」

「いかにも」

十兵衛は、凜りんという。

「ひとり残らず、この場は去らせぬ。——だが、汝ら、よく理をわきまえて、それがしと言葉を素直に容れ、こよいの暴挙を思い止まって、蜂須賀村へ帰るとあれば、生命も助けよう。また、それがしから出来るだけの手当もして遣わそうが、どうじゃ、いずれを選ぶか」

「なんだと。では俺たちに、この場からすぐ引き揚げろというのか」

「斎藤家御一門の崩壊の危機。稲葉山、鷲山、共に亡びんとするこよいの大事を防ぐ

ためには——」

「ばかなッ」

七内ではない。周^{まわ}りの誰かが怒つて叫んだ。

「そんなことができるかッ。青二才の分際で、要^いらざる喙^{くちばし}、大事^{さまた}の妨げすると、うぬから先に血まつりに捧げるぞ」

「一死、元より覚悟の前」

と、十兵衛の血相は、戦わないうちからすでに、白面の夜叉^{やしや}かのように眉を昂^あげ、

「弥平治どの。弥平治どのッ」

と、後ろの従兄弟^{いとこ}に、その構えのまま声を投げた。

「斬死だぞ。よいか」

「おお。ご懸念なく」

弥平治光春も、もう大刀を抜いて、十兵衛と背なか合わせに、大勢へ備えていた。

でも、十兵衛は、なお、一縷^{いちる}の望みを七内らの理性につないで、

「空^{むな}しく、その方^{むな}どもが、蜂須賀村へ帰るのは、一分^{いちぶん}が立たぬというなら、不肖^{ふしょう}十兵衛の身を、擒人^{とりこ}として、連れて行くもよい。拙者^{しゅ}が直^{しか}に、蜂須賀村の小六殿へお目にかかり、よく理非をわけてお話したそう。——どうじゃ、さすれば、こよいの地獄も見ず、

「ここも互いの血を流さずにすむが」

彼の諄々じゆんじゆんと説く、道理なことばは、かえつて蜂須賀党の輩やからには、彼の弱音よわねとして聞えた。

殊に、味方は二十余名。相手はわずか二人のことである。

「うるせえッ」

「耳を藉かすな。もう、戍いぬの下刻げこくは過ぎてゐるぞッ」

二、三の者が、群れの中から叫んだのをきっかけに、わっと、鬨ときの聲が沸く。

途端に、十兵衛と弥平治のすがたは、狼軍の牙きばにつつまれた。牙にも似たる長柄、槍、

刀——。それらの武器と喚おめきが、轟々ごうごうと吹きうなる風の音と一つになって、すさまじい

乱戦の渦をそこに描き出した。

「や、鬨ときった——」

日吉は、見ていた。

刀の折れが飛んで来る。逃げる血まみれを、槍が追いかける。——そこらにいてはあぶないので、彼はあわてて、樹の上へ登った。樹の上から眺めていた。

一人や二人の斬合は、これまでに、出会ったことはあるが、こういう小戦争は初めて

目撃したのだった。しかも、この結果によつては、今夜のうちに、岐阜ぎふの里いちめんが火の海になるかならぬか？ また、鷺山城と稲葉山城との、大乱が起るか否かの——大きな分れ目と思えば、日吉の胸も、生れて初めての大きな昂奮を覚えずにいられなかった。

「——弥平治ッ」

「十兵衛どの」

呼び交わす声が、二度ほど、喚わめきの中で聞えた。

だが、その小戦争は、二、三名の死者ができると、忽ち、その死骸だけを残して林の中へ移つてしまった。

「や、逃げたのか」

また、引き返して来ては、危険と考え、日吉は用心ぶかく、なかなか木の上から下りずに様子うかがを窺つていた。

十兵衛、弥平治のわずかに二人に突き崩されて、逃げたものとすれば、蜂須賀衆も口ほどもない雑ぞうひよう兵級の者ばかり——と密かに蔑さげすみながら、なお、耳を研といでいた。

彼のよじ登つていた木は、栗の木でもあろうか、手や顎くびすじへ何か針さが触る。ばらばらと実や小枝が地へ落ちてゆく。——そして彼の体と、木全体は、暴風にゆさゆさと大きく

揺れていた。

そのうちに、

「あッ、何だろ」

日吉は慌^{あわ}てた。

火山灰のような火の雨なのだ。勿論、日吉の周りにも――。

驚いて、梢^{こずえ}から伸び上がった。蜂須賀村の者が火を放ったに違いない。森の二、三カ所から熾^{さか}んな火が立ちはじめている。常在寺の裏の棟^{むね}にも火がついたらしい。今、逃げ崩れた蜂須賀の者が、一人一人、火を放って逃げたのだ。

「たいへん！」

日吉は栗の実の一粒みたいに、梢から跳び下りて駆け出した。この暴風に、この火の手、一刻を争わねば、森の中で黒焦^{くろこ}げはきまつている。

夢中で、町まで駆けつけた。

町も火だ。

空も、火の粉、火の鳥、火の蝶々。

――稲葉山城の白壁が、赤く映^はえて、昼間より近く見えた。そこには、赤い戦雲が、鮮

やかに動いていた。

「戦争だッ」

日吉は、どなつて町を駈けに駈けていた。

「戦争だ。お仕舞しまいだッ。——鷺山も稲葉山も、亡んでしまえ。焼けた跡には、また草が出る。こんどの草は真ッ直ぐに——」

人にぶつかる。人が転ぶ。

空馬からうまが跳んでゆく。

辻に、避難民がかたまつて戦おののっている。

そんな中を、日吉は——恐らくは無我夢中なのだろう——つつまれた昂奮のまま、予言者のような、また、童謡でも唄うような声を放ちながら、一目散に駈けて行つた。

——何処へ。

などという的あてはなかった。

ただ、もう二度と、蜂須賀村へ帰る意思のなかったことは、明白である。

また。

彼の性格が、最も忌み嫌うところの、陰鬱いんうつな領民、暗黒な領主、骨肉の相剋そうこく、清新

のない文化など、腐^すえたる土壤の国に、何の未練もなく、そこを後に国外へ急いで去ったことも確実であろう。

そして、それからの一冬を、木綿^{ぬの}布子一枚の彼が、寒空に針など売って、何処^{どこ}をどう彷徨^{さまよ}った果てかは知れないが——年も明けて、翌^{てん}天文の二十二年、桃の花のさかり頃。

「針を買わんか。——京針。——京の縫針イ」

浜松の町端れを、至つて暢^のびりと、相変らずな顔して歩いている彼のすがたが見出された。

松^{まつ}下^{した}屋敷^{やしき}

松^{まつ}下^{した}嘉兵衛^{かへえ}は、遠^{えん}州^{しゅう}の産で、根からの地^じ侍^{むらい}であつたが、今川家から封^{ほう}を受けているので、駿河^{すまがは}旗本の一人であり、禄^{ろく}三千貫、頭陀^{ずだ}山の砦^{とりで}を預かつてゐる。

天龍川の流れは、その頃、大天龍、小天龍の二大脈に岐^{わか}れ、彼の邸は、頭陀山から五、六町東にある馬込^{まごめ}川——大天龍の岸にあつて、馬込橋を中心とする、その宿駅の代官役をも兼ねていた。

その日。

嘉兵衛之綱ゆきつなは、馬込からそう遠くない浜松の曳馬城ひくまじょうに、飯尾豊前守いとおぶぜんのかみをたずねて帰る途中だった。

飯尾豊前ぶぜんも、彼と同じ今川家の被官ひかんなので、この地方の民治警備には、たえず連絡をもち、また、四隣の国、——徳川とくがわ、織田おだ、武田たけだなどの侵略にも、常に備えなければならなかった。

「——能八のうはち」

嘉兵衛は、供を振り向いた。

馬上からである。

供の郎党は、三人いた。長柄ながえを持った髯面ひげづらの郎党が、

「はッ」

と、駈け寄つて、主人の顔を見上げた。

ちようど曳馬ひくまなわて嚮むかから馬込まごめの渡舟わたしへ出るあいだの街道だった。並木の松や雑木のほかは、見通しのよい畑や田だった。

「……はて。百姓でもなし、行者ぎようじゃとも見えぬが」

嘉兵衛は、^{つぶや}呟いて、駒の上から頻りと一方へ眼をこらしていた。

主人が眼をやっている方角へ、郎党の^{たがのうはちろう}多賀能八郎も眼を放った。——だが、^さ咲^{ただ}爛れ
た菜の花や、青い麦や、^{なわしろた}苗代田の浅い水のほか、何も見当らないのである。

「殿、……何事でございまするか。何ぞ、御不審な者でも？」

「うム。あれに——あの田の畦^{あぜ}につくなくて、^{さぎ}鷺とも見える白い人影。何をしているのじやろうか」

「え、鷺？」

能八は、主人のことばを、おうむ返しに受け取って^{つぶや}呟きながら、主人の指さす先を見まもった。

なるほど、人がいた。

田の畦^{あぜ}に^{かが}屈みこんで——。

「^{ただ}質して来い」

と、嘉兵衛がいう。

能八は、はつと、駈け出して行つた。

およそ、今は、どこの国々でも、少し不審と見られれば、すぐ調べられる。それ程、一

国一國が、国境に対して、また、見馴れない人間に対して、神経が尖り立っていた。

「行つて参りました」

能八は、すぐ戻つて来て、嘉兵衛の馬前にこう復命した。

「あれは、針売りの旅商人で、尾張の者とか申しました」

「針売るか」

「垢じみた白木綿の腰切を着ていますので、ここから見ると、鷲のように見えますが、側へ参つて近々と見ると、猿によう似た顔をした小男にござります」

「はははは。鷲でも鳥でもなくて猿だったか」

「口達者な猿で、物を質すと、あべこべに、おぬしは何者だなどと大言を吐きますから——
——当地の御被官、松下嘉兵衛様でいらせられると、申し聞かせましたところ、ふーむと、
怖れ気もなく腰を伸し、此方を無遠慮に見ておりました」

「そして、畦に屈んで、何を一体しておったのか」

「それも、質しましたところ、馬込の木賃に泊るので、晩の飯の菜に、田螺を採っているのだ——という返辞にござりました」

馬上のまま、能八の復命を聞いている間に、松下嘉兵衛が、ふと眼を移すと、その針売

りの後ろ姿は、田の畦から街道へ上がって、もう先の方へ歩いて行く。

嘉兵衛は、それに眼を止めながら、また、能八へいった。

「では何も、不審なかどはない者だの」

「べつに、怪しい節ふしも見うけられませぬ」

「そうか」

と、手綱を持ち直し、

「下賤の者らに、些細ささいな無礼咎ふれいめなどはなるべくするな。さ、参ろう」

と、他の郎党へも、鞍の上から願あこをすくう。

駒の脚は、やや早目――

またたく間に先へ歩いている日吉に近づき、彼の側を、埃ほこりをたてて駈け抜けた。

（猿に似た小男）

と、さつき能八郎から聞いていたので、松下嘉兵衛は、何げなく振り向いた。

日吉は、勿論、道をよけて、並木の下にぼんやり土下座していた。――と、嘉兵衛が馬上から振りかえったので、日吉も顔を上げて、じっと見送っていた。

「ア、――待て」

嘉兵衛は、急に駒を締め、うしろ向きに、郎党たちへ、

「今の針売り、これへ召し連れて来い。……異相だ！ 何とも異相な男ではある！」
と、半ば、独り語のような嘆声でいった。

郎党の能八は、主人の物好きな——とは思ったが、すぐ駈け戻って行き、

「こら。針売り」

「へい」

「御主人がお召しだ。ちよつと、御馬前まで来い」

と、引ッ張つて来て、嘉兵衛の前にひきすえた。

嘉兵衛は、じつと鞍の上から日吉を見ていたが、それは顔が猿に似ているなどという興味ではなかった。

そんなことは念頭になく、

（……異相だ！）

と、再びしげしげ見入ったのであった。

しかし、嘉兵衛が、日吉を一瞥して、直感したものは、それだけの嘆声では、まだ尽きていない。もつと複雑で無形な、霊感的なものが、彼を引き止めたのだった。

垢^{あか}じみた木綿布子^{ぬのこ}につつまれた小男の——一体どこに、そんな魅力があつたかといえ、黙つて、大地から嘉兵衛を見上げている日吉の眼だった。

眼は、心の窓という。

この萎^{しな}びた小男のどこに取柄^{とりえ}というものも見出されなかつたが——何というすずやかな、そして意志^{たくま}の逞しい、無限に広い視力をもっている眼だろうか。

しかも、その眼は、小皺^{こじわ}をつくつて、ニコと笑っているようなのだ。

(愛嬌がある！)

嘉兵衛は、好きになつた。

彼が、もつと専門的な観相に詳しかつたら、真つ黒な旅垢^{たびあか}の下にかくれている、鶏^{けいけ}血石^{つせき}のような鮮紅^{せんこう}を持つている日吉の耳だの、若いくせに、一見、老人みたいに見える額^{ひたいしわ}の皺に、後年の大器がすでに顕^{あらわ}れていたことをも見出して、驚嘆したに違いないが、嘉兵衛の眼光は、その辺までしか、届かなかつたのである。

——でも彼は、一見、日吉に対してふしぎな愛着と期待をもつた。で、このまま、放し難い気持ちに囚^{とら}われたのであろう、そこでは何も問わず、能八郎を顧みて、

「ついでのことに、邸^{やしき}まで連れて参れ。——邸^{やしき}まで」

と、云いすてて、馬首をあげて、先へ駈けた。

大河にむか対つた門前に、家臣小者たちが四、五名、

「ア、お帰りなされた」

もんぴ門扉を開いて待つていた。

こまつな駒繋ぎで、空馬が跳はねている。誰か、留守中に、客とみえる。

「誰方どなたじゃ」

嘉兵衛は、そこへ来て、鞍から降りると、すぐ尋ねた。

「駿府すんぷのお館やかたさま様よりお使いにござります」

「そうか」

聞きすてて、嘉兵衛は、つつと邸内へはいってしまふ。

駿府といえ、主筋の今川家。使客はめずらしくはないが、その日、曳馬城ひくまじょうの飯尾豊いとおぶ前ぜんとのあいだに議した問題もあり、嘉兵衛の頭は、とたんに忙せわしかったとみえて、日吉のことも、忘れ果てたか、或いは後でというつもりだったか、とにかく黙つて奥へかくれてしまつた。

「こら、待て」

郎党たちに従いて、一緒に門内へ流れ込もうとした日吉は、早速、門番に発見されて、
「なんだ、その方は」

と、咎められた。

日吉は、泥だらけな手に、泥だらけな藁の苞を下げていた。

顔にも、泥のハネが、乾きかけているのでムズ痒い。門番は、嘲弄されているよう

に、その動く鼻を見たのか、

「何だツ、こらツ」

襟がみへ、手をのびしかけた。

日吉は、少し退つて、

「針売りだよ、おらは」

「針売りなど、みだりに入るところではない。掴み出すぞ」

「御主人に聞いてからにおしなさい」

「なにを」

「来いというから従いて来たのだ。今、奥へはいった騎馬のお侍が——」

「殿が、そんなことを、仰つしやるはずはない。うろんな奴だ」

すると、郎党の能八が、思い出して、日吉を拾いに戻って来た。

「おいおい、門番。そいつはいいのだ。分つておるのだ」

「へ、よろしいので」

「猿、こつちへ来い」

能八が、猿と呼ぶと、門番たちはそのことばに笑つて、

「なんだあいつあ。白い腰切こしきりを着て、泥苞どろづとを提げて、妙見様みょうけんさまのお使いみたいじゃないか」

能八に連れられて行きながら、日吉は背中に、門番たちのどツという声を聞いた。しかし、彼はもう、生れてから十八年、あらゆる人中の嘲罵ちょうばに馴れている。

感じないのか。麻痺まひしたのか。

そうでもないらしい。

なぜなら、そういう嘲罵を背に聞く時は、やはり誰もと同じように、彼の赤ら顔が、なおいくぶんか充血する。殊に、耳は一層赤くなる。——裡うちに感情がうごいている証拠である。

だが、感情のうごきによつて、彼の動作は変らない。馬の耳の如く平然たるところがあ

る。むしろ少し愛嬌をふくむ。——みずからこういう逆境に歪められまい、自己を卑屈に育てまいと——心の茎に添竹の支えをもつて、静かに嵐の過ぎるのを待っている草花のようにである。

「猿」

「はい」

「あそこに、空いているお厩がある。目触りにならぬように、その辺で控えておれ」

能八にも、用があるとみえ、云いすてて行ってしまった。

黄昏かかると、お膳番の働いている台所の竹窓から料理を煮るにおいが桃の夕月へ流れていた。

使者との公式な対談もすみ、やがて、遠路をねぎらう饗応に、燭が増されたのであらう。

邸の奥からは、鼓の音が流れてくる。笛の音もはいる。猿樂でも舞っているとみえる。自体、駿河の今川家は、名門の誇りが高く、歌道といわず、舞楽といわず、総じて京風な華奢の好みが、たとえば侍たちの装剣の具にも、女房たちの襟の下重にも見えていた。

「この松下嘉兵衛などは、根が地侍だし、嘉兵衛自身が素朴な人だったが、それでも、清洲あたりの尾張侍の邸宅とは、そのたたずまいからして違っている。どこことなく豊かなのだ。」

「まずい猿樂だなあ」

空あきうまや 厩わらに藁わらをしいて、馬の代りに、日吉はぽつねんと、遠い囃子はやしを聞いていた。

舞樂はすきだった。いや音楽がわかるのではなく、彼は、樂から醸かもされる陽気なうつつの世界が好きなのだ。

何ものも忘れるからである。

が、忘れ得ないものを、今、彼は思い出した。空腹すきばらを満たすことだった。

「そうだ。鍋なべと火を借りれば……」

泥の藁わら苞つとを下げて、御膳所ごぜんしよの口を覗のぞいた。

「すみませんが、鍋と焔炉こんろを貸してくれませぬかなあ。飯を喰べようと思いますが」

台所方の小者たちは、異様な男がいきなり覗き込んだので、びっくりして、一応みな日吉の顔を見まもった。

「何だ。どこから一体、降って来たのだ」

「こちらの殿様が、来いと仰つしやるので、途中からお供して来た者でございます。田圃^{たんぼ}で採った田螺^{たにし}を煮て、それを菜に喰べようと思いますので」

「田螺かい、その苞^{つと}は」

「腹のくすりだそうで。毎日、田螺は喰べることにしています。生れつきか、ややともすると、すぐ下痢^{げり}をやりますので」

「味噌^{みそ}煮^にだろ。味噌はあるのかい」

「持っております」

「玄米^{こめ}は」

「玄米もございます」

「では、小者部屋の炉^ろに、鍋も火もあるから、そこでやれ」

「ありがとうございます」

毎夜、木賃でやる通りに、少量の玄米^{こめ}を炊^たき、田螺^{たにし}を煮て、飯をすました。

腹がはると、眠ってしまった。厩^{うまや}よりは寝心地がいいので、そこに寝た。するとやがて、夜半近くに、御用のすんだ小者たちが帰つて来ると、

「この野郎。誰に断つて、こんな所へ寝ていくさるか」

と、蹴とばして、忽ち、戸外に抓おもてみ出された。

で、元の厩へ行つてと思つたら、そこには、使者のお馬が、
(その方などの家ではない)

と、いつているように、威張つて眠つていた。

もう鼓つづみの音もしない。白桃の花に、薄い残月があつた。

宵に快睡かいすいしたので、眠くもなかった。日吉は、ただ漫然と、時を空費していられなかつた。働くか、さもなければ、楽しむか、どっちかにはつきりしていないと、すぐ欠伸あくびが出た。

「この辺でも、掃はいているまに、夜が明けるだろう」

竹たけ箒ぼうきを持つて、厩のまわりを掃き始めた。主人の眼が届かないところ程、馬糞や落葉わらや藁わらくずが溜ためっていた。

「誰だ、今頃。……箒を持つている者は」

誰か、どこかで、そういつた者があつた。

箒を休めて、日吉は辺りを見まわした。

すると、再び、

「ここじゃ。そちは昼間の針売りだの」

日吉は、ようやく見つけて、

「あ、殿さま」

口の裡うちで答えた

橋廊下はしろうかの角にある雪隠せっちんの手洗所の窓からだった。嘉兵衛の顔がそこに見えた。

酒のつよいお使者を相手に、量を過したらしく、嘉兵衛は、醒め際さぎわを、つかれ気味に、

「もう、夜明け近いか」

嘉兵衛は、窓から消えると、縁の雨戸をあけて、残月を見ていた。

「まだ、鶏にわとりは啼きませぬで、夜明けには、ちと間がございましょう」

「針売り、いや、猿と呼ぼう。汝なんじはそも、夜も明けぬうちから、何で庭を掃いているのか」

「することがございませんで」

「眠ればよからう」

「もう、寝てしまいました。手前は、きまった時刻だけ眠ると、どうしても体を横にして
いられません」

「履物はきものがあるか」

「ございまする」

日吉は、一走り、どこかへ走って行き、すぐ土のつかない草履を取って揃えた。

「これ、これ」

「はい」

「そちは、夕刻、邸内へ来たばかりで、その上、もう人並に眠りも摺^とつたと申すが、どうして、邸の勝手を左様に心得ているのか」

「恐れ入ります」

「何を恐れ入るか」

「決して、怪しい者ではございません。けれど、これくらいなお邸^{やしき}なら、物の在^{あり}所、御地内の広さ、下水口、火の元、およそのことは、寝ていて物音を聞いていても考えられます」

「ふむ……なるほど」

「お草履も、どこにあるか、先ほど見届けておきました。なぜなら、床^{ゆか}より下がって、地面に眠っている者は、てまえと馬しかございせん。戸が開けば、すぐどなたでもお草履と、お声がかかると思っていました」

「そうか。悪かったの。何も申しつけずにおいたので、そちは厩^{うまや}に寝たか」

「……………」

日吉は、笑って、何も答えなかった。無邪氣らしい眸だが、嘉兵衛の人物を軽く見たようでもある。

が、嘉兵衛は、それから真面目に、日吉の身の上や生しょうち地を——そして奉公の望みがあるかないかなど熱心にたずね出した。

日吉は、

「あります」

と、答えた。

その望みを持って、十六の年から諸国を歩いたと云った。

「侍奉公したいたために、三年も諸国を歩いたというか」

「はい」

「今なお、針売りして歩いているのは、どういう仔細じや。三年もさがして、奉公口につけぬからには、何かそちに、欠点があるのではないかな」

嘉兵衛が、わざと問うと、

「人間ですから、てまえにも悪い性しょうがあるかもしれません。けれど、最初はどんな主人で

も、侍屋敷でさえあればいいと思いましたが、世間へ出てから、そうでないと気がつきました」

「そうでないとは」

「善^{ぜん}大^{だい}将^{しょう}、悪^{あく}大^{だい}将^{しょう}、国々の武将や、武門のお端^{はし}を見て歩くと、主を選ぶほど大事なものはないと考えさせられました。そこで、めつたに針売りは廃^よされないぞと、ついつい、三年も経ってしまったので——」

おもしろい。利口者かとみれば、馬鹿みたいな節^{ふし}もある。

話しぶりにも、真実さがあるかと思えば、なかなか山^{やま}気^けもいう。まともにそのまま信じきれない言葉が往々出る。

だが、とにかく、どこか異っている。人^{ひと}凡^{なま}ではない。

嘉兵衛は、そう観^みた。

で、その朝から、日吉を、邸の小者として、召使うことにきめた。

「仕^{つか}えるか」

念を押すと、

「働いてみます」

平凡な返辞だった。

案外、欣ばない顔いろが、嘉兵衛にはすこし不満だった。

しかし、この木綿布子もめんぬのこ一枚の放浪児の主人として、自身が不足であろうかなどとは、考えられもしなかった。

松下家もまた、当時のどこの武家とも同様に、軍馬の訓練が厳しかった。

夜が明けると、邸内のお長屋から、槍とうや（革のしない）を持った侍たちが、ぞろぞろともみぐら蔵の前の空地へ出て行った。

——えやあッ。

——うおう！

——ヤ、ヤ、ヤッ。

槍は槍なぐと撲りあい、とうは とたたき合っていた。

台所番の小侍から門を守る小者の末にいたるまで、朝は一度、ここへ来て、交代に皮膚を赤くして行った。

嘉兵衛から云い渡しがあつたとみえて、日吉が、小者の端に召し抱えられたことは、もう皆知っていた。

厩うまやちゆうげん仲間は、新参と見て、

「おい猿。これから毎朝、おれたちがお厩の馬を、草を喰わせに曳き出したら、その後、すぐ厩を掃除して、馬糞を向うの竹やぶの坑あなへ埋いけるのだぞ」

と吩咐いいつけた。

「はい」

馬糞掃除を担当すると、

「猿、ちよつと来い」

と、老侍が、

「担桶にないに、水を汲んで、方々の大瓶おおがめに漲はつておけ」

と、いうし、

「薪まきを割れ」

と、いうので、薪を割っていると、何をしろ、かをしろと、召使ばかりが重宝に召使う。

「あいつ、膨ふくれたことがないなあ。何をいいつけても怒らぬのが取柄とりえだよ」

若侍たちは、一面、彼を玩具的に愛して、時々、物など投げ与えた。

だが、そのうちに、邸内でもその若手から先に、日吉に対して、

「あいつ、生意気だ」

「小理窟をこねる」

「殿へ諂^{へつら}う」

「ひとを小馬鹿にする」

などという反感が、次第に昂^{たか}まつて来た。

そういう若輩が、小さい落度を大声でいうので、松下嘉兵衛の耳にも、時々、猿の誹^ひ謗^{ぼう}がきこえた。

が、嘉兵衛は、

「今に、あれは使える。まあ見ておれ」

近臣へいつて、取り上げたこともなかった。

嘉兵衛の妻、嘉兵衛の子達は、猿よ猿よ、と気に入りだった。それがまた、邸内の軽輩には、よけいに快くなかった。

「なぜだろ？」

日吉は、爪を噛んで、考えた。

忠実に働きたがらない人間の中に交^まじつて、ひとり忠実たろうとすることは、実に難し

いと思つた。

いまがわおうらい
今川 往来

奉公人と奉公人との間の、小さい感情に取り巻かれて、そこに人間を学ぶと共に、日吉は、この松下屋敷を中心として、海道かいどうの大勢と、今川、北条ほうじょう、武田、松平まつだいら、織田おだなどの実力や趨勢すうせいにも、だいぶ通じることができた。

(やはり奉公してよかった)

と、思う。

針売りして歩いていたのでは、容易に分らないような内情も、ここでは、時折、知ることが出来た。

もつとも、彼が、ただ喰うため、生きる世渡りのための、碌々ろくろくたる奉公人に過ぎなかつたら、そういうことに触ふれても、深い実態が小者にまで知れるわけもないが、彼の眼、彼の耳、彼の頭脳が、常に何ものかを求めて、敏感にそれを感じ受するので、

(ははあ、そうか。……さてはこうだな、ああだな)

と棋客きかくと棋客との対局を、盤の横から観ているように、一石一石の手が、日吉には分るのだった。

駿府すんぶの今川家の使者がここや岡崎や、小田原おだわらや甲府こうふなどへ頻繁に往来しているのでも、或る筋が読めた。

それは。

駿河するがの今川義元よしもとに、天下の覇権をにぎろうとする大望があることを示すものと、彼は観みていた。

いや、その実現は、遠い将来であろうが、とにかく、理想をそこに置き、他日、京都に入あしかがつて、足利將軍家を擁ようし、自身、天下に臨のぞもうとする——その下工作が、ぼつぼつと始まっているに違いない。

だが、地形から判じると、駿河の今川の背後には、強国北条が小田原にある。

また、側面には甲斐かいの武田。——京へ伸びんとする足の先には三河みかわの松平まつだいら。

こういう国々のあいだにあつて今川義元の工作は、まず前面の、松平家を属国化してしまふことに成功していた。

三河では、松平清康まつだいらきよやすが、今川家へ降つて、その与国よこくに甘んじてしまつて以来、不幸

つづきで、清康の死後、子の広忠ひろただも早逝し、嗣子ししの竹千代は、人質ひとじちとして今、駿府に養われている有様だった。

しかも、その城地の岡崎には、義元の直臣じきしんが派遣されて、領政税務すべてを管理しているし、松平家の譜代の家来は皆、今川家の軍役に、追いつかわれている状態。

三河の収入も軍糧も、経営費を余すのみで、全部が駿河の義元の居城へ運ばれて行った。
(あれで、どうなるのだろうか?)

日吉は、三河の将来を暗澹あんたんとなつて考えたりした。

けれど、三河にはまだ、三河人の強韌きょうじんな意思がある。日吉は商いあきなして歩きながらよく知っていた。このままで屈伏してしまふ三河武士ではないと思う。

より以上、彼が常に、心をとめて見ていたのは、尾張の織田であつた。母のいる土、生れた故郷ふるさと、当然、どこの国より、その盛衰が気にかかる。

今そこの土を離れて。

この駿河の一被官ひかん、松下屋敷から眺めていると、三河の松平を除いては、国の貧乏も、領土の狭さもどこの国より惨めみじに見えた。わけて今川領内の華美な文化と、豊かな経済の中から見ると、よけいにはつきりとそれがわかる。

（中村も貧しいわけだ。おらの家も貧乏なわけだ……だが？）

と、日吉はそれが、絶対な国運とは考えられなかった。貧しい尾張の土に、何か未来の芽ばえを感じ、貴紳きしんの礼風まねを真似て、上下とも華奢きゃしやな今川領の風俗に、むしろ軽い反感と、危うさをいつも思わせられた。

また、近頃、頻りと使者の往来がはげしいのは、今川家を中心に、駿すん、甲こう、相そう三カ国間に、不可侵協定の下した談はなしが、結ばれようとしている気配だった。

主唱者は、勿論、今川義元で、将来、覇業の大軍を率ひきいて、上洛するためには、駿河の背後にある北条と、側面の強国たる武田の二家とは、善隣よしの誼よしみを厚うしておく必要がぜひともある。

で、義元は、甲斐の信玄の嫡男ちやくなん太郎義信たろうよしのぶに、自身の息女むすめを嫁がせ、信玄の息女を、北条家に嫁がせることを、かねてから策していたのであった。

その婚姻は、ようやく成功を見、同時に軍事、経済の協定も成ろうとして、今川家の勢力は、東海の大重鎮として、動かし難がたいものとなったかの観がある。

それは、随身の侍の、一人の姿にも、いわゆる羽振りとなって、光っていた。松下嘉兵衛かへなどは、義元直参じきさんの旗下はたもととはちがい、地侍の被官ひかんだったが、それでも、日吉の知っ

ている清洲きよすや、那古屋なごやや、岡崎あたりの邸とは、比較にならぬ程、どこか豊かだし、客足も多く、奉公人たちは皆、わが世の春を顔に見せていた。

「猿——」

と、若党の能八郎が、中庭に立つて、探していた。

「はい」

「おや？」

能八郎は、屋根を見上げ、

「何をしているか。そんな所へ上がって」

「屋根を繕つくろっております」

「屋根を？」

と、呆れ顔に、

「こんな暑い日盛りに、ご苦労なやつだ。何で屋根屋のまねなどしておるのか」

「土用照りがつづきました。こんどは大雨です。雨が来たら屋根屋を呼んでも間にあいませんから、板のハゼている所だけ見つけて繕つくろっています」

「だから貴様は、朋輩ほうばいに憎まれるのだ。日盛りの一刻は、皆、木蔭やそこらで、昼寝し

ているのに」

「眼につく所で働いていると、皆様の昼寝を邪魔しますから、屋根ならよいと思って」

「嘘をいえ。実は、貴様あ、そこで、お邸の地形を見ているのだろう」

「さすがは能八様、よくお氣が付きました。それをのみ込んでいないことには、いざという時、護るに即座の手配りがつきません」

「物騒なことを、大きな声で申すな。殿のお耳にでもはいると、御機嫌を損じるぞ——降りて来い」

「はい。何か御用で」

「夕刻、お客が着く」

「またですか」

「またとは何じゃ」

「どなた様が御到着で」

「こんせき今夕のは、お使者ではない。諸国を遍歴してあるく武芸者だ」

「ははあ。大勢で——」

日吉は、屋根を下りて来た。能八郎は おぼえがき 覚書を ふところ 懐中から出して、

「されば、武芸者は、上州大胡の城主上泉伊勢守が甥で、足田小伯という者を頭に、門下の同勢十二名。騎馬一領、荷駄三頭、槍七筋を持ったお客じやて」

「それは、えらい数でございますな」

「武道鍛錬の元氣者ばかりだし、それに、一行の馬や荷物も多いから、倉方の者がいる一棟を空けて、そこに当分、お住居のつもりだから、夕方までに、万端、掃除をしてお迎えるように」

「へエ。そんなに大勢で、よほど長く御逗留になるのですか」

「まあ。半年じやろうな」

と、能八郎は、懶そうに、汗をふいて云った。

やがて、夕方になると、

「足田小伯殿の御一行、御到着にござりますぞ」

先触れが告げた。

程なく、足田小伯以下、十三名の一行が、門前に、駒を止め、塵を払って立った。

松下家の若侍や老臣は、恭しく出迎えて、

「この度は、当家の乞いをいれて、諸国武者修行の御途次を、お立ち寄り下され、忝

うぞんずる。主人嘉兵衛儀は、折ふし、公用中にござれば、後刻、改めてご挨拶申すのことにござります」

「ご丁寧に」

と、受けているのが、疋田小伯であろう。まだ三十歳前後の人物である。

「――必ずご斟酌^{しんしやく}くださるまい。今般は、伯父伊勢守が心入れにて、若輩のわれら、世上の修行なすべしと、遍歴の途にのぼり、先頃までは、今川殿のご好遇に甘んじ、今度はまた、同勢召し伴^つれて御当家のお世話になりにつめた。もとより武辺者、逗留中は、何かの失礼も、偏^{ひと}えにご寛大に」

と、双方の挨拶。

門前の礼が一応すむと、

「お通りを」

と、出迎えが、列を開く。

「御免」

と、曳馬や荷をあずけ、十三名はそろそろと、邸内へはいった。

日吉はぼんやり眺めていた。そして、今の双方の挨拶を聞いて、

(兵法が^{おおはやり}大流行だから、兵法者もだんだん^{いかめ}厳しくなつた)
と、感心していた。

近頃、武者修行武者修行という声をしきりに聞く。それから、今まではそういわなかつた剣術だの、槍術だのという言葉もよく聞く。

武田家の与族で、上州大胡^{おおご}の城主、伊勢守上泉秀綱^{いせのかみかみいずみひでつな}の名は、わけて有名であつた。また常陸^{ひたち}の塚原土佐守ト伝^{つかはらとさのかみぼくでん}の名も、それに劣らないものだった。

武者修行の中にも、行脚^{あんぎや}の雲水^{うんすい}よりひどいものもあるし、また、塚原ト伝の如きは、道中、常に六、七十人の供人を連れ、家来に拳^{こぶし}に鷹をすえさせ、侍臣には、乗換馬^{のりかえうま}を曳かせて、威風堂々と、諸国を遊歴してあるくような、武者修行もいた。

だから日吉は、きょうのお客の人数には驚かなかつたが、これから半年もいることだつたら、随分また猿々と追い使われて、眼をまわすことだろうと思ひやられた。

案のじよう。

四、五日もたつとすぐ、

「やあ、猿^{はだぎ}。肌衣が汗くさくなつた。洗つておいてくれ」

「松下殿のお猿。すまんが、膏藥^{こうやく}を求めて来てくれぬか」

などと、自分らの下男のように日吉を追いつた。

お蔭で、夏の短夜^{みじかよ}を、日吉の寝る間は、なお僅かだった。

梧桐^{あおぎり}の下に、倚り^よかかつて、日吉は居眠っていた。

夏の真昼の陽^ひが、そこだけを僅かな日蔭にしていた。乾ききった地面に、松葉牡丹^{ぼたん}がぱらりと、そこここに赤く、動いているものは、蟻^{あり}の列だけだった。

「……………」

だらんと首を横に、腕ぐみしたまま、眠っているのである。連日の寝不足で、やがて正体もない。

日頃、日吉を、何かと目触^{めふわ}りにして、憎悪していた若侍の二、三名が、稽古槍を持って、そこを通りかけた。

「猿だな」

足を止めて、

「よく眠っておるわ」

と、呟^{つぶや}いた。

「どうだ、この寝顔の、横着^{つら}そうな面は。——それでいて、お奥向や殿には、猿々と、至

つて氣受けがよい。こういう態^{てい}を、ご承知なさらぬからだ」

「起してやれ。すこし油をしぼってやろう」

「どうするのだ」

「猿ばかりは、まだ一度も、武芸の稽古をしておらんじやないか」

「日頃、憎まれているのを、自分でも知っているせいだろう。撲^{なぐ}られるのを怖れて、どうしても、稽古せぬそうだ」

「それがいかん。およそ武家の奉公人たる者は、門番、お台所の末の者まで、必ず武芸を励むべし——とあるのは、御当家の御家憲だ」

「おれにいつても仕方がない。猿にいえ、猿に」

「だから起して稽古場へ、引っ張って行こうと思うが」

「うむ。おもしろい」

「よかろう」

一人が、稽古槍の先で、日吉の肩の辺りを、とんと突いた。

「こらッ」

それでも、眼を醒^{さま}さないので、

「起きろッ」

一人はまた、足を掬った。

日吉は、梧桐あおぎりの幹から、背を横へすべにらして、びっくりした眼をひらいた。

「あ、なんですか」

「何ですかじゃない。白昼、お庭で大おお軒いびきをかいて、眠っている奴があるか」

「眠っておりますか」

「わからんのか、自分で」

「では、眠るつもりもなく、眠ってしまったものとみえます。もう起きています」

「当りまえだ」

「はい」

「自体、そちは、横着だぞ。聞けば一度も、武芸の日課すら、勤めたことがないと申すではないか」

「武芸は下手ですから」

「ろくすッぽ、稽古もせぬに、下手も上手もあるわけはない。小者といえど、武芸鍛錬、怠るべからず、とは御当家の御家憲だ。——さあ、来い。きょうからわれわれが、稽古を

つけてつかわす」

「いえ。それには及びません」

「ならぬ」

「でも」

「拒む^{こば}か、貴様あ、奉公人の身でありながら、御家憲を守らぬのか」

「ではございませんが」

「ならば参れ」

合法的に、撲りつけるつもりであるから、嫌も応もいわせない。

若侍たちは、日吉を拉^{らっ}して、遮^{しゃ}二無^む二、^{もみぐら}糺藏の前の空地へ引っぱって来た。

そこには今日も、逗留中の武芸者の一団と、家中の者どが、炎天の下に、各 槍を持って、喚^{わめ}き声^{こえ}をあげていた。

無理に、彼を拉^{らっ}して来た若侍たちは、そこへ来るといきなり、

「それッ、木剣でも、槍でも持つて、かかつて来い」

と、日吉の背を、突き放した。日吉は、前へ泳いで、辛くも踏み止まったが、そこらにある稽古槍^{とう}にも にも手を出さなかった。

「なぜ持たんツ」

ひとり、槍の先で、彼の胸をわざと小突いた。

「稽古をつけて遣わすから、貴様も得物えものを持て。……それ、それツ、突き倒すぞ」

日吉はまた、蹠よろめいた。

しかし、強情に突つ立つたまま、唇を嚙んでいた。

——ちようど、その一方では。足田小伯の門下の、神後じんご五六郎や、榊市之丞さかきいちのじようやらが、松下家の家来たちの求めに応じて、真しん槍そうで力試しをしていた。

汗止めの鉢巻した神後五六郎が、真槍しんそうを把とつて積み重ねてある五斗入りの米俵を、槍にかけては、鮮やかに、宙へ刎はね上げて、怪力を見せていたのである。

「なるほど、その御手練では、戦場で人間を、槍にかけて飛ばすくらいは、易々いたるものでござろう。恐れ入った力だ……」

驚嘆している人々へ、神後五六郎は、

「これを、力ちから技わざと御覧あるは、お考えがいでござる。力を入れたら、槍の柄えが折れる。また、すぐ腕が疲れてしまう。——それでは、戦場を馳ち駆くして、何ほどの働きがなりましようや」

と、槍を休めながら、傍ら、劍の理あいも、槍の理あいも同じであることを説き、そしてすべての武道が、ただ丹田の氣にあること、力なき力——力を超越した心力でなければならぬ——などと講義の弁をふるっていた。

「なるほど」

皆、感銘して、それに聞き入っていた——すぐ後ろでのことだった。

「強情な猿めツ」

若侍は、槍の柄を、横に振って、日吉の腰ぼねを撲りつけていた。

「痛いッ」

日吉は、半ば、泣き声でさげんだ。実際痛かったとみえ、顔をしかめながら、腰を曲げ、その辺を撫でまわしていた。

「どうしたのだ？」

後ろの一団は散らかって、日吉の周りに集まった。

「いや、どうにも、箸にも棒にもかからん横着者だて」

と、日吉を撲った若侍は、何といつても、日吉が武芸の稽古を拒むということを、武家奉公の異端者であるとして、口を極めて、悪ざまに人々へ披露した。

すると、また、

「いや、それは、わしも勧めた^{すす}ことがあるが、不器用だとか、何とかいって、どうしてもこの猿は稽古に来んのじゃ」

と、云い足す者もあつたりして、武家の奉公人として、不心得な奴、末の見込みのない奴、横着も直るまい——という判決を、日吉は、衆の中で口々から云い渡された。

先刻から、黙つて、神後五六郎の後ろに佇^{たたず}んでいた疋^{ひきたし}田小伯は、

「まあ、まあ」

進んで、人々を宥^{なだ}め、

「見うければ、まだ、どこやら乳くさい小冠^{こかんじや}者。生意氣ざかりという頃だ。しかし、御家憲^{そむ}に反くのみか、武家奉公しながら、武道を嫌うては、この者の不幸でもある。穩やかに、わしから訊いてやろう。一同はお鎮^{しず}まりなさい」

そういうと、小伯は自身で、日吉の氣持をたずねてみた。

「小冠者」

疋田小伯は、日吉へ、呼びかけた。

日吉は、小伯の顔を見て、

「はい」

と、いった。

今までしていた返辞とは、返辞の声が変っていた。

この人なら、どういうことでも、思うまま答えてもいいと、心で許している眼だった。

「おぬし、武家奉公いたしながら、武芸を嫌うそうだな。嫌いなのか」

「いいえ」

日吉は、かぶりを振った。

「——ではなぜ、折角、御家中の方たちが、親切に稽古をつけて下さるというのに、稽古をせぬのか」

「はい、それはこういう理^{わけ}でございます。——槍の修行をしても一生、剣の修行をやつても一生、その道の達人となるには、どうしても生涯かかるでございましょう」

「うム、その気でなければならぬ」

「てまえも、人なみの一生涯しか生きられないものとする——刀術や槍術も嫌いではございませんが、まあまあ、その精神^{こころ}だけを知ればよいと思っております。なぜなら、他に種々^{いろいろ}と、学びたいこと、知りたいこと、やりたいことが、沢山にございますから」

「学びたいこととは」

「学問です」

「知りたいこととは」

「世間です」

「やりたいこととは」

問答のように、小伯がたたみかけて問うと、日吉はそこで、初めてにこと笑って、

「それはいえません」

「なぜ」

「やりたいと思つても、やれなかったら、広言になりますから、また、云つてみたところで、皆さんが大笑いに笑うに過ぎません」

「ふう……ム」

変っているな——と、疋田小伯は日吉の顔をながめていたが、

「なるほど、そちのいうところは、少し分る気がするが、そちは武道というものを、小さい技の修練と、穿き違えておるらしい。武道とは、そんなものではない」

「どんなのですか」

「一能に達した者は万芸に達するという言葉もある。武は技わざでなく、心胆しんたんのものだ。心胆を深く養えば、世間を観る眼、人間を識しる眼、学問の道、経世けいせいの道、すべてに通じ得るものだ」

「けれど、この人達は、相手を突くことや撲なぐることが、何よりの芸としていきましょう。あれは、足軽どもや雑兵にとつては、役にも立ちましようが、大将には要いらないことではござ……」

云いかける横合いから、

「何だと。無礼者ツ」

家中のひとりが、拳こぶしを固めて、いきなり日吉の頬骨を撲りつけた。

「アふ！」

と、顎はさを外したように、日吉は両手で口を抑えた。

「いわしておけば、聞き捨てならぬ雑言を申す。小伯先生、お退ひきください。癖になる。ただ置おいては」

激昂げきこうしたのは、ひとり今、日吉を撲った者だけに止まらない。今の日吉の一言を耳にした者のほとんどが、

「われわれを、侮辱したものだ」

「御家憲を誹るも同じだ」

「免せぬ奴」

「いつそ、斬り捨ててしまえ。——殿も、よもや吾々の仕方を、無理とはなさるまい」
ほんとに、裏の藪へ連れて行つて、首にしてしまひそうな人々の怒気だった。

小伯も、止めるのに困った。が、極力一同を宥め、辛くもその場だけは、日吉の首をつなぎとめた。

その日。黄昏——

能八郎が、そつと小者部屋をのぞいて、壁の隅に、悄んぼり坐つて、齒の痛むような顔をしている日吉を、

「おい。おい」

小声で、外から手招きした。

「へ、何ですか」

日吉の顔は、おかしい程、腫れ上がっていた。昼間、撲られた痕が熱を持って、ひね生姜の根みたいに腫れ出したのである。

「ひどく痛むか」

「そんなでもございせん」

ぬれてぬぐい
濡手拭を、顔に当てながら答えた。

「殿様が、お召しだ。そつと、奥のお庭の中木戸を開けて通れ」

「え、殿様が。……では誰か、昼間のことを、云いつけましたね」

「あんな雑言を吐きちらして、お耳に入らぬわけはない。疋田先生が先ほどまで、お部屋で話しておられたから、多分、疋田様からお聴きになったのだろう。……お手討かもしれぬぞ」

「そうでしょうか」

「奉公人たる者は、朝夕武道怠るべからず——というのは、松下家の鉄則じや。家憲の威厳を明らかにすると仰つしやれば、もう首はないものと思えよ」

「では私は、ここから逃げ出します。こんなことで、死ぬのはいやです」

「ばかをいえ」

能八郎は、日吉の腕くびを捕えて云った。

「貴様を逃がしたら、おれが腹を切らなければならぬ。召しつれて来いという仰せをうけ

て来たからには」

「逃げることもできませんか」

「貴様は一体、口が過ぎる。少しはものを考えていうものだ。昼間の広言を聞けば、この能八郎ですら、小癪こしゃくな猿と思う。……とにかく早く来い」

日吉を先に歩かせて、能八郎は後から、刀の柄つかを握りながら尾ついて行つた。

黄昏たそがれの庭木の暗くらがりに、白い綿虫わたむしの群れがうごいていた。打ち水した書斎の縁先に、灰ほかな室内あかりの灯が流れている。

「——猿めを、召し連れて参りました」

能八郎が、ひざまずいていうと、松下嘉兵衛は、端近く姿を見せて、

「来たか」

と、いった。

その声を、日吉は、頭のうゑに聞いたまま、庭苔にわごけに、額ひたいをつけて、縮まっていた。

「猿」

「はッ」

「そちの生国の尾張には、桶皮胴おけかわどうとはちごうて、胴丸どうまるとかいう、新しい工夫の具足ぐそくが、

近頃行われておるそうな。一領買うて来い。そちの生国じや、勝手はよう弁えておるであらうが」

「はい？ ……」

「すぐ立て、今夜にも」

「何処へで」

「胴丸を買い求めに」と、嘉兵衛は、手文庫を寄せて、金をつつみ、日吉の前へ投げてやった。

「……？」

日吉は、その金と、嘉兵衛のすがたとを見くらべていた。

その眼に、涙が溜たまった。やがて頬を伝わって、ぼろぼろと手の甲へ落ちた。

「出立は急ぐがよいが、品は急いで持ち帰るには及ばぬぞ。何年でも、程よいのを探せ。よいか」

「……はい」

「能八、裏の木戸を開けて、そっと出してやれ。……そっと、宵のうちに」

尾張へ行つて、胴丸どうまるの鎧よろいを一領買つて来い——。唐突である。また、余りにも、意外

な主人のことばである。

日吉は、ぞっとした。

松下家の家憲を素^{みだ}す者として、手討になるかと思いのほか。

（今夜にも立て）

と、若^{なにがし}干かの金子^{きんす}まで、嘉兵衛は能八郎の手から、日吉へ授けて、いうのであった。

日吉が、襟すじから、ぞっとしたような顫^{ふる}えを感じたのは、嘉兵衛の情けが——人の恩義^ぎというものが——骨^ほの髄^{ずい}まで沁み入るほど、身にこたえたからだった。

「ありがとう存じまする」

主人の吩咐^{いいつけ}を、主人がまだ詳しく意中をいわないうちに、日吉にはもう分っていたので、つい、そういつてしまったのである。

こういう頭脳^{あたま}が、奉公人たちの中に混^まじっていたら、奉公人には目まぐるいであり、憎^{そね}まれ嫉^{そね}まれるのは当然である。——嘉兵衛は、そう思つて苦笑をうかべた。

「猿、何がありがたい？」

「は、わたくしを追放して下さるお氣もちと察しまして」

「その通りじゃ、だが猿」

「はあ」

「何処へ行こうと、その才智を、もちツと、内に包まぬと、そちは生涯出世がならぬぞ」

「自分も左様に存じておりまする」

「知りながらなぜ、昼のような暴言を申し、家中の者を怒らせたか」

「つくづく、至らぬ奴と、後で自分で自分の頭を叩きましてございまする」

「気がついておるならもう何もいわん。惜しい才ゆえ、助けてつかわす——なれど、今じやから申すが、日頃より、そちを嫉み憎しむ者が、筭が失せたといつては猿が盗んだとい、小刀印籠こづかいんろうが紛失したと申しては、猿の仕業しわざよと、つげ口の絶え間がない。……それ程そちは、人の嫉みそねをうける質たちじや。よく心得て人中で働けよ」

「……はい」

「きょうのことも、家憲をたてに、家来どもが怒りおるとかいいうことじやから、そちを底かぼうて助けおくわけにも参らぬ。また、公然いとま、暇をつかわせば、当家の門を十町も離れぬうちに、追討ち喰らつて、討たれるであらう。……で、先ほど、疋田小伯ひきたどのからそつと注意せられたので、まだわし自身、何も聴いておらぬことにして、そちを旅先へ使いに出すのじや。……わかつたか」

「よく分りました。ございます。胆きもに銘じて……」

日吉は、鼻をつまらせて、何度も何度も嘉兵衛の姿を伏し拝んだ。

松下家の裏門から、その晩、日吉は出ていった。

振り顧つて、

「忘れません。忘れません」

二度もつぶやいた。

人の恩の大きな愛と感激につつまれて、日吉は、いかに報いたらいいのかを――ぼんやり胸に抱きながら歩いた。

酷こくはく薄と、嘲ちやうべつ蔑のなかに、常に彷徨さまよつて来た彼だけに、人の情けは人いちばい強く感じる彼だった。

「今に……。今に」

何か、感動するか、事にぶつかると彼は行ぎようじや者の念仏のように、今に！を胸の底で繰り返した。

だが、彼の境遇は、ふたたび喪家そうかの犬いぬのように、的あてなく、職なく、彷徨さまようしかなかった。大天龍の河水は、まんまんと流れていて、人里を離れると、天地のさびしさに、日吉は

何となく泣きたくなつた。

そこから歩み出す運命の先は、彼も知らず、天地も星も水も、何の暗示もしていなかった。

信のぶ長なが

「——おじさん」

先刻さつきからこれで二度目である。何処かで、誰か、そう呼ぶような気がする。

織田家の足輕組の乙おとわか若は、昼寝の首をもたげて、

「誰だ？」

と、見まわした。

その日の彼は非番だった。

いつもなら城勤めだが、きょうは組長くみながや屋のわが家に在あって、手脚を伸ばしていたのである。

「わたしですが……」

声は生垣の外だった。からたちの葉や棘とげに、昼顔のつるが絡からんで、白っぽく埃ほこりの乾いて
いる垣根越しに人影があつた。

乙若は、縁側へ出て、

「わたしですがって、いったい何処の誰だよ。用があるなら、表からはいれ」

「表の木戸が開あきません」

「おや……？」

と、背伸びして、

「猿じゃねえか。中村の弥右衛門やえもんのせがれじゃねえのか」

「はい。そうです」

「なんだ。日吉なら日吉と云やあいいに、幽霊みてえに、元氣のない声を出しやがって、
どうしたんだ」

「表は、開きませんし、裏へ廻つて、覗いてみると、おじさんは寝ている様子。——今、
寝返りを打ったご様子なので、呼んでみたので」

「つまらねえ遠慮をしていやがる。女房が買物に出たらしいから、木戸を閉めて行つたん
だろう。待てよ、直ぐ開けてやるから」

乙若は、草履をはいた。

そして、日吉に足を洗わせ、家の中へ入れると、ややしばらく、その姿を眺めていた。
「どうしたんだ一体。いつか途中で会ったが、あれからでも足かけ三年、生きてるのか死んだのか、音沙汰もないので、中村のおふくろも、ひどく案じているようだぞ。——無事な顔を見せてやったか」

「いいえ。まだ……」

「家へは帰らねえのか」

「家へは、ちよつと、行つて来ましたが」

「——だのに、おふくろに、まだ顔を見せないとは、どういうわけだ」

「実はゆうべ、そつと、我家の外^{うち}まで行つて来ました。けれど、おふくろ様や姉の顔を、外から一目見ただけで、^{しきい}鬨^{また}がずにもどつて来たんで……」

「妙な奴だな。自分の生れた家じゃねえか。なぜ、今帰つて来ましたと、無事な姿を見せて、みんなにも^{よろこ}欣ばしてやらねえのだ」

「そうして、会いたいののは、山々ですが、家を出る時、一^{ひと}かどの男にならなければ帰らないと、誓った言葉がありますから——それに、^{おやじ}義父にはなおさら、今の姿では会えません」

今の姿——と、いう日吉のことばに、乙若はもう一遍、彼の身装を見直した。

白木綿しろもめんが、鼠木綿ねずみと紛まがうほど、埃ほこりと雨露あめつゆに汚よごれていた。油ひやけ気のない髪、日焦ひやけに瘦落やせおちている頬、どことなく、志を得ない人間の疲れと困憊こんぱいが纏まとっていた。

「何をして喰くっているのだ。この頃は」

「針売はりうりりをしていました」

「針売はりうり」

「はい」

「奉公したのじゃないのか」

「二、三軒、武家の端くれみたいな家へ、勤めてみました」

「相変あへらず、すぐに飽あきてしまうのだろう。もう幾歳いくつになった」

「十八でございます」

「鈍どんに生れついた性分なら仕方がないようなものの、阿呆あほうもいい加減にしろ、いい加減に。

——馬鹿には馬鹿なりの辛抱しんぱうづよいところがあるものだが、貴様ときたひには、その辛抱もない。これじゃあ、おふくろが嘆くのも、養父が持て余すのも、むりはねえや。……猿、いったい貴様あ、何になるつもりなんだ」

腑^ふがいなさに、乙若はつい、久しぶりに会った日吉を、会う早々、叱^{のし}つたり、罵^{のし}つたりしたもの、心のうちでは、多分に、同情をもっていた。

もともと、日吉の実父の弥^や右衛門^{もん}とは、生前、仲のよかつた間だし、その後、養父の筑^ち阿弥^{くあみ}が、弥右衛門のあとに入夫して、哀れな遺子^{いじ}たちに、辛^{つら}く振舞っていることはよく知っていたので、義憤に堪^たえないものがあつたのである。

——で、せめて、猿でも一人前になつてくれたらと、密^{ひそ}かに、亡父のためにも祈^{いの}つていたが、その日吉が、十八にもなつて、まだこんなかと思うと、腹が立つてならなかつた。「まあ、誰かと思つたら、中村のお奈加^{なか}さんの息子だね。お前さんも、そんなに自分の子みたいに怒鳴^{なみ}つてみたつて、仕方がないじゃありませんか。——可哀^{かな}そうに」

やがて。

外から戻つて来た乙若の妻は、取^とり做^なして、井戸に冷やしてある西瓜^{すいか}を上げ、日吉にも割^わつて与えた。

「まだまだ、十八ぐらいじゃ、何も分りやしませんよ。お前さんだつて、自分の十八頃を、考^{かん}えてごらんなさいな。四十を越えても、まだ足輕長屋から拔^はけられないのが、世間並じやないか」

「だまっている」

乙 おとわか 若は、ちよつと、痛いところを衝つかれた顔をして、

「おれはな。おれのように一生を凡々と終つちやならねえと思うから、これからの若い者には、よけいいうんだ。——十五、十六といえ、元服して一人前、十八といえ、男はひとかどの面構つらがまえがなくなちやあならねえ。……たとえば、勿体ないが、御主人の織田おだのぶなが信長公を見ろ。当年、お幾歳いくつだと思う。あれでいて……」

と、云いかけて、急に、また女房との争論を恐れたのか、思い出したように話を逸そらした。

「そうだ、あしたはまた、その御主人のお供で、朝から狩場巡めぐり、お帰りにはまた、庄内川で水馬や水泳のお稽古だろうて。——お鼻かかおれも野駈のがけの支度だぞ。膝行袴たつつけの紐ひもや草鞋わらじを見ておけよ」

さつき 先刻から俯向うつむいて、叱言こいを聞いていた日吉は、

「おじさん」

と、顔を上げて、訊ねた。

「なんだ、改まって」

「べつに、改まつてではございませんが、信長公は、そんなに度々狩や川遊びにお出ましになりますか」

「何しろ……申しては恐れ多いが、飛んでもない腕白坊でいらつしやるからなあ」

「暴れン坊なんですね」

「——かと思うと、ひどく、行儀の厳やかましいところもあるがね」

「どこの国へ行つても、信長公のことは、余りよく申しませんね」

「そうか。いやそうだろうな。敵国の者から見たら」

日吉は、急に腰を上げて、

「せつかく、お休みの日を、お邪魔して、申しわけございません」

「おや。帰るのか」

「また、参ります」

「なにも、そう急に、帰らなくともいいじゃねえか。一晚ぐらいは、泊って行きな。——
おれのいったことが、気に障さわつたのか」

「そんなことはございません」

「帰るなら、止めもしないが、早く、おふくろだけにでも、無事を見せてやんなよ」

「はい。見せてやります。……今夜は、中村へ帰ります」

「そうか。それならいいが」

と、乙若は、門口まで出て、日吉の姿を送ったが、心のうちでは、何か、いい気持ちがしなかった。

中村へ帰るといつて乙若の家は出たが、その晩、日吉の姿は、中村の生家には戻っていなかった。

どこへ寝たか。

恐らく、路傍の辻堂か、寺の廂ひさしか、そんな所へ、野宿したのではあるまいか。

松下嘉兵衛かへえから貰った金はあるはずだが、それは、乙若の家を訪ねる前の夜、中村の家の外まで行き、母の無事なすがたを垣間見かいまみ、そつと投げ込んで来たので、身には一銭も持っていないかったし、——夏の短夜みじかよなのでどこに明かすも、夜はすぐに白みかけた。

——その日の、朝まだきである。

日吉のすがたは、西春日井にしかすがいの部落から枇杷島びわしまのほうへ向って、のそのそ歩いていた。

彼は、何か物を喰いながら歩いていた。腰にも、飯の握ったのを、蓮はすの葉につつま、手てで拭ぬぐいいて結ゆわいつけていた。

今朝の食物と、昼の食物とを、一文の銭のない彼がどうして得たか。彼には常に、

(食物は、どこにでも得られる物だ。人間には天禄てんろくがあるから)

という信条と、

(鳥獸とりけものにすら、その天禄がある。けれど、人間たちは、世のために働けという天のご

使命をうけている者だから、働かない者は、喰えないようにできている。——だから人間は、喰うためあくせくするのは恥辱で、働きさえすれば、当然な天禄が授かるのだ)

と考えていた。

だから彼は、飢うえると、食う食慾より先に、働くことを先にする。

その場合、仕事がないということも、日吉の経験にはないことだった。働こうとする時は、町で普請場ふしんばがあれば、大工や土かつぎの手伝いでもさせてもらう。重い車を挽ひいてゆく者を見れば、後を押す。汚い門前を見れば、簞はうきを借りて掃かせてもらう。

頼まれないでも、彼は仕事を見つけ、仕事を作り、仕事を誠実にするので、一椀わんの食物や、一銭のわらし銭ぐらいは、必ず人が酬むくいてくれた。

恥とは思わなかった。

なぜなら彼は、喰うために、牛馬のごとく身を卑いやしめたとは思わないのである。少して

も、世のために働いたので、当然な天禄をもらうのだと、信念していた。

——今朝も。

春日井の部落で、早起きな野鍛冶のかじの家が開いていたのを見つけ、そこで鍛冶場の掃除を手伝い、その飼牛かいうし二匹を曳いて、草を飼わせ、また、裏へまわって、水瓶みずがめいっぱい、水汲みをしてやったので、子持ちのおかみさんに喜ばれ、朝の飯と、昼のにぎり飯とを恵まれて来たのであった。

「……きょうも暑くなりそうだ」

日吉は、朝空を仰いで、独りつぶやいた。そうして得た飯に、きょうの露命はつないでいたが、頭のなかでは、ひとの思いもよらぬことを考えていた。

「——この天気なら、きょうもきつと、信長公は、河遊びにお出ましになるにちがいない。足軽の乙若も、きょうはお供のうちに加わる番だと、きのう話していた」

やがて。

草の彼方に、庄内川のきれいな流れが見え出した。彼は朝露にぬれた姿を、草から出て、河原に立たせ、しばらく、水の美しさに見恍みとれていた。

「信長公は、毎年四月から九月の末頃まで、水馬、水泳のお稽古を欠かすことなく、この

辺の河へ出てなさるとのことだが……はてな、どの辺だろう。乙若に聞いておけばよかった」

河原の石は乾いてくる。

草くさの実みや、露によごれている日吉の着物にも、やがて、陽がかんかと照りつけてきた。

「ここらにいてみようか」

漫然と、独り云つて、日吉は河原の畔ほとりの草むらに、坐りこんだ。

信長公、信長公。

織田の腕白どの。三郎信長公とは、いったいどんなお方か。

——この日頃。

日吉の頭には、寝ても起きても、その人の名が、護符ごふのように貼はりついて、離れなかつた。

「いちど見たい」

彼の念願だった。

それを今日、果そうとして、早くからこの河原へ来て見たのだった。

亡き織田おだびんごのかみ備後守の跡目を継がれたはよいが、あのわがままで粗暴な大うつけでは、と

ても、備後守信秀のぶひでの跡は持ちこたえてゆかれまい。

とは、一般的な世評であつた。

粗野で——癩持かんもちな——

たわけ者びた若殿。

行く末の案じられる跡継あとつぎよ。

と、信長の名が出れば、必ずそこでは、そんな陰口かげぐちを聞いたものである。

日吉も、幾年のあいだ、巷ちまたのうわさを信じ、貧しい国土と、不幸な国主を持った郷土に、悲しみを抱いていたが、諸国の実情を見て来て、

（いや、底の底は、分らないぞ。——合戦のある日ばかりが、戦争ではないから）
と考えられて来たのだつた。

一国一国には、それぞれ国の性格があり、そこにはまた、虚きよと実じつがあつた。
表面、脆ぜい弱じやくに見える国でも、内部は案外、充実している国もあるし、権威富力の大きく見えている強国でも、案外、中すの腐くさえている国もある。

たとえば、日吉が歩いた範囲でいえば、美濃の斎藤、駿河の今川家のように。

そういう大国と強国のあいだに挟まって、尾張の織田、三河の松平などは、見るからに

貧しい小国だった。——けれど、その小国のうちに、何か大国にない力が潜^{ひそ}んでいなければ、厳として、存在はしてられないはずだった。

世間でいうように、信長が愚かであつたら、どうして、那古屋^{なごや}が保とう。

ことし、その信長は、ちょうど二十歳^{はたち}になると聞いている。

父の備後守信秀^{うしな}を亡^{うしな}つて、十六歳から那古屋の城に主君として立つてからでも、もう三年はたっている。その三年に、粗暴で、うつけて、何の能も才もない若大将が、どうして、小国とはいえ、亡父^{ちち}の遺産の領土を失わずに、しかも半ば、薄気味わるく思われながら、国土を持つていることができよう。

もつとも、人にいわせると、それは信長の力ではなく、家臣に偉いのがいるからだという。

平手^{ひらてなかつかさ}中務、林新五郎、青山^{よざえもん}与三右衛門、内藤^{ないとうかつすけ}勝介——などという良い家来を、

備後守も、生前から阿呆な三郎信長の末を案じて、付けておいたので、その謀臣^{ぼうしんしゅう}衆の協力が今日、織田の柱となつているので、お若い主君は、いわば置物同様にすぎない。——だから先君以来の老臣らがいるうちはよいが、ひとり逝^ゆきふたり死に、その柱がなくなる頃になると、織田の衰亡は、火をみるよりも瞭^{あき}らかであらう。

それを、誰よりも待つてゐる者は、信長の妻の父にあたる、美濃の斎藤道三であり、次いでは、駿河の今川家であると——このような見透しは、世間、どこで聞いても、一致していることだった。

「……おや？」

日吉は、草の中から、首を上げて見まわした。

聞きこえ
関の音がする——

河すじの上流に、黄いろい埃が揚つていた。

「何だろ？」

立ち上がつて、耳を澄した。そして顔いろを変えた。

「何も見えないが、凡事ではないぞ。……戦争か」

彼は、急に、草を蹴つて、走り出した。

だが、五、六町も駈けて行くと、そうでないことが分つた。彼が朝から待つてゐた織田家の家中が、上流の河原へ来て、もう合戦の稽古をしていたのだった。

川狩といい、鷹狩たかがりといい、水泳の調練といつても、この頃の大名のやることには、すべて戦備の心がけがあつた。戦争を離れては、生活がなかった。

「……ウウム、始まつている」

草間隠れに、日吉は遠くからそれを眺めながら、大きく呻いた。

河原の向う岸に、堤の蔭から上の草原にかけて、織田家の定紋のついた陣幕がめぐらしてある。三、四カ所のお小屋からお小屋へかけて、その幕は翩翻と風を孕んでるので、無数の兵たちは見えるが、信長のすがたは生憎と見えない。

眼を転じると――

幕とお小屋は、此方の岸にもあつた。馬匹がさかんに嘶いている。

わあッ――うわあッ――

という武者押しの声は、その兩岸から起つて、川波を呼び立てているのだつた。日吉が、立ち止つた時、一頭の放れ駒が河の中ほどからザブザブと駈け狂つて、下流の陸へ跳ね上がつて行つた。

「これが、水泳のお稽古か」

日吉は、頷けなかつた。

世評というものは、たいがい好い加減なものである。信長を、暗愚の殿だの、粗暴なうつけ者だのといつても、では誰がそれをつき止めたかといえ、誰も真を追つて突き止め

てはいないのである。

毎年四月頃から九月にかけて、川狩や水泳の稽古に城を出ることは誰でも見ているが、それだけを知っているに過ぎなかった。

今、彼が現地へ来て、目撃したところでは、決して、腕白な殿の水遊びや避暑ではなかった。

烈しい軍馬の教練である。

規模は大きくない。元より野駈けの軽装だし、軍馬の数も少ないが、やがて貝の音に兵が揃い、押太鼓がとどろくと、両岸の人数が、どっと河の中でぶつかった。

いちめんに河は飛沫となり、その真つ白な水煙のなかで、武者と武者、足輕隊と足輕隊とが亘になつて、合戦をはじめた。

槍はすべて竹槍であつた。大勢が旋風になつて戦うなかでは、突き合うよりは、撲り合うのだつた。外れた槍からも、白い虹が無数に立った。その歩兵群を蹴ちらして、一騎、二騎、三騎——すべてで七、八騎の騎馬の武将が采を振り、自身槍を揮い、また、声をか
らして駈け巡っている。

「大介、見参」

と、その中で、凜々^{りり}しい声を放った騎馬武者が、一きわ目^{ひと}についた。

白の涼やかな帷子^{かたびら}に具足、綺羅^{きら}やかな朱太刀を佩^はき、織田家の弓道槍術の師範で市川大介とよぶ剛の者の馬^{うま}際^{ぎわ}へ鞍を駈け寄せ、無法にも、青竹の槍で横はたきに一^{ひと}撲^{なぐ}りく
れて行つたのだつた。

「小癩^{こしやく}」

と、喚^{おめ}きあわせて、槍を引^ひつ奪^{たく}つた大介は、それを持ち直して、相手の胸いたへ突き返した。

端麗な人だつた。その若い武者は、顔を紅潮させ、大介の突いて来た槍を片手につかみ、片手を朱太刀にかけて、きかない眉を示した。が、一瞬、大介の力に引かれて、真逆さまに落馬し、姿はざんぶと河水につつまれた。

——日吉は思わず、

「あ……あのお方だ。信長公だ」

と、独り呶鳴^{なうめい}つた。

ひどい、思いきつたことをする家来もあるもの。

信長は乱暴な殿と世間ではよくいうが、乱暴なのは、信長よりは、その近臣のことでは

ないのか。

日吉は、そう思った。

——が、遠方を見たことである。果たして落馬したのが、その信長だったかどうか。

日吉はなお、われを忘れて、伸び上がっていた。渡河戦の猛演習は、まだその河の真ん中で、双方とも押し合っていた。主君の信長が落馬したのなら、他の臣下が騒いで救い上げそうなものだが、戦っている者は戦^{いくさ}のほか、わき目もふらないのである。

そのうちに。

戦場となっている辺より少し下流の向う岸へ、ざぶざぶ、這い上がった者がある。

見ると、落馬した若武者であつた。——やはり信長らしい人だつた。

「退^ひくかッ。馬鹿ッ」

濡^ぬ鼠^{ねずみ}のからだを、そこに突つ立たせるとすぐ、地だんだして、叫んでいた。

遙かに、さつきの市川大^{だい}介^{すけ}が、それを見つけて、

「東軍の御大将、あれに流れついて在^おわすぞ、つつんで、生^い擒^{けど}れや」

と指さした。

徒^か歩^ちの兵^{へい}が、

「御免ッ」

「御免」

云いつつ、しぶきを蹴立てて、信長の前面へ、駈けて来た。

信長は、渚なぎさの竹槍を拾って、ひとりの兵を、真つ向にたたき伏せ、次の群へ、抛ほうりつけた時、

「寄せはせじ」

と、味方の一隊が、駈けつけて来て、彼の身边を、敵から隔てた。

信長は、堤どてへ駈け上がると、

「弓、弓ッ」

鋭い声で呼んだ。

お小屋の幔幕まんまくのあたりから、小姓がふたり、矢と半弓を持って、転ぶように、すつ飛んで来た。

取るが早いか、

「この河、渡すな」

と、河原の兵を、叱咤しったしながら、一矢いっしをつがえると、ぶつんと切って放ち、すぐまた、

矢を嘯ませては、びゅんと弦を翻した。

鏃のついてない稽古矢ではあるが、顔の真ん中を射られて、倒れる敵もあった。そして、彼一人が射ているとは思われぬ程、たくさんな矢が急射された。

射てる間に、弦が二度も断れた。断れるたび、弓を換えて、すぐにまた、射つづけた。が、——そのうち。

必死でそこを支えている間に、上流の防ぎが崩れて、西軍の兵が、どつと堤へ駈けあがり、信長の休息小屋を、包囲して、鬨をあげた。

「敗けたッ」

信長は弓を投げ捨てた。

その時はもう、莞爾と、笑っているのである。そして、敵方の凱歌を、かえって、愉快そうに、振り向いていた。

兵学の師、平田三位と、弓槍の師範役、市川大介とが、馬をお小屋のわきへ捨てて、駈け寄って来た。

「殿、どこも、何ともございませんでしたか」

「水の中だ。何ともあるものか」

信長は、大介を見るとやはり無念そうに、

「明日は勝とう。大介、あすは憂い目を見せてくるるぞ」
と、少し眉を昂^あげていう。

平田三位が、傍^わらから、

「御帰城後、きょうの御戦法について、御講評申し上げるでございましょう」
と、いったが、信長はよくも聞かないで、その間に具足をかなぐり捨てて、水着^{ひとえ}一重になつて、河の深い所へ行つて、涼しげに独りで泳ぎまわっていた。

狂児^{きようじ}像^{ぞう}

信長は、端麗^{たんれい}だった。

彼が血をうけた遠い祖先に、よほど美しい女性がいたか、容貌^{ひよう}の秀^{ひい}でた人がいたろうと思^{おも}われる。

彼のみならず、十二男七女子という、多くの兄^{きようだい}妹^{まい}が、みな気品の香^かりを持つていたとか、目鼻^{めばな}だちがよいとか、どこか文化人らしい垢^{あか}ぬけした質^{しつ}を持っていた。

わけて信長は、色白く、びもくしゅうれい眉目秀麗で、何かにふと、きつと振り向く時など、ひとみの底から、きかない気の光が人を射ることがあった。

だが、自身が気がつくとき、

はははは。

その光をすぐ笑いつつんで、人がそれと気のつく間も措かなかった。

「またかと、うるそうきこ聞し召すやも知れませぬが、御先祖のことは、念仏申すよう、明けても暮れても、飯をは噛むまも、お忘れあつてはなりません。……そも、織田氏の御先祖様と申せば、えちぜんにゆう越前丹生氏神、つるぎ織田劍神社の神官に在しました。なお天文のそれよりも前をただせば、こまつたいらのしげもりこう小松平重盛公のお血すじ、さらに、さかのぼ溯れば、畏れ多くも、へいし平氏はかんむて桓武天皇よりわかれ給うところ、申さば、金枝玉葉の御血のしずく雲をすら、今のお身に伝えておうけなされているのでござりますぞ。……じい爺が度々申しあぐるまでもなく、よくよく御自覚なさりませねばなりませんぞ」

こう彼は常に聞かされる。

ちち亡父の織田備後守信秀が、彼を、彼が生れたふるわたりじょう古渡城から移して、那古屋の城におらしめた時から、もりやく守役として、側につけておいた四名のうちの一人、わけても忠誠な老

臣のいうところなのである。

平手ひらてなかつかさ中務なかつかさだ。

どうも信長は、その爺じいが、常に煙たくて、うるさいらしかった。

「ああ分つたよ。分つておるよ爺——」

と、横を向く。

顔を振る。

少しも沁しみ々しみとは聞かないのであつたが、平手中務は、それこそ彼自身が、念仏を申す

ように、

「亡きお父上備後守様の御生涯をよう思い遊ばせや、この尾張八郡をお伝え遊ばすには、
朝あしたに北境ほつきようの敵と戦い、夕べには東隣の国境に征馬をお向けなされ、ひと月のうち、具
足を解いて、安々と、お子たちの中にさざめいてお暮し遊ばした日は、幾日とてもござり
ませぬ。——しかも涙ぐましき御忠誠おわに在したことは、この乱国いぐさの中、四隣いぐさに戦の絶え
間もない中をも、すぐる天文十二年の頃には、この爺めを京へお遣つかわしあつて、内裏だいり四面
の築土つじの御修理をなされますやら、また、四千貫文を朝廷へ御献上遊ばし、そのほか、伊勢い
勢外宮せげくうの御造営にもお力をお尽しなされました……。そうしたお父上をおもちなされ、御

祖先には」

「爺や。もうよい。分つておるよ、何度聞いたか知れぬことを」

信長は氣に入らないと、すぐ美しい耳みみたぶ朶を鮮紅にした。

けれど、吉法師きちほうしといった幼名の頃から、何でも知っている中なかつ務かきには、さすがに、それくらいしか、不機嫌を見せられなかった。

中務もまた、彼の氣性は、よくのみ込んでいた。理窟で説くよりは、感動に訴えるほうがききめのあることを知っていた。

で、信長が耳を熱くすると、

「お口輪を取りましょうかな」

と、すぐ穂先をかえた。

「馬か」

「さればで」

「爺、そちも乗れ。一鞭ひとむちあてよう」

騎馬で駆けまわることは、信長の大好きなひとつだった。それも城内の馬場では心にもみならず、城下から三里も四里もある所を、よく一気に駆け、一気にもどって来たりした。

(——寔に人を人臭しとも思われぬ和子君で在すでなあ)

とは、信長の幼少から守役の平手中務が、何か持て余すたびに傍人へもらして来た嘆息だった。

十三歳で元服し、吉法師の字を三郎と改め、十四歳初陣して、十六で父信秀にわかれた上総介信長の、人を人臭いとせぬ面だましいは、長ずるにつれて、いよいよ、傍若無人になるばかりだった。

父の葬儀の日、その式場においてさえ、こんなことがあった。

——御焼香。

となつた折、

席から立つた信長の姿を人々が見ると、長柄の太刀脇差に、七五三縄を巻いていた。袴もはいていないのである。

「あれよ、また、狂態な跡とり殿が、何の不法法」

と、あきれていると、信長はさすが、仏前へすすんで、立居のまま、抹香をつかんで、御仏へばらつと投げ懸けて、驚く人々をしり目にさっさと帰ってしまった。

「でも、呆れたうつけ殿」

「こうまでとは思わなんだが」

情の薄い者はわらい、情の厚い者は織田家のために、眼に涙をたたえて、言葉もなく白け果てたということであつた。

「同じ兄弟でも、御舎弟の勘十郎殿は折り目正しゅう、俯目ふしめに始終謹んでおいであるに」と、なぜ跡取が、こうもあべこべに生れたものかと悔む囁きささやも聞えたが、その時、末席にあつた筑紫つくしの客僧なにかしの某が、ひとり呿くつぶやようにいつたことには、

「いやいや、彼あれこそは、行く末の国持つお人よ。おそろしいお方ではある」

沁々しみじみと、そう洩らしていたと傍にいた者が、後に家中へ語り伝えたが、誰ひとり、そうかと信じる者はなかつた。

また、十六歳の信長には、もう内室ないしつがきまつていた。父信秀が生前に、平手中なかつかさ務むが肝煎きまいりして、ようやく成立した婚約であつた。

それは、美濃の斎藤道三どうさんの娘なのである。織田家とは多年、兵火に兵火をもつて、鎬しのぎをけずり合つて来た宿年の仇敵国であつたが、その斎藤家との婚約には、勿論、戦国のならいといつてもよい、政略の意味も多分にふくまれている結婚であつた。

が、先も名に負う道三秀龍という肚ぐろいのが舅殿しゅうとである。もとより織田家の政策であ

ることをのみこんで、しかも四隣はおろか、京にまで近頃は名高い織田のうつけ息子殿に、最愛の娘をもくれるというのである。尾張八郡の将来を、その炯眼けいがんで見こしていた上の承諾であることはいうまでもない。

程なく、信秀は四十二を一期いちごに世を去った。

信長のうつけ振り、粗暴、狂態は募るばかりだとある。それも思うつぽだった。

——そして、

今年天文二十二年の四月。

上総かずさのすけ介信長はちようど二十歳はたち。

「いちど、賀むこどのの顔みたい。——双方より出向いて、富田とんだの国境で、賀むこ舅ゆうとの初対面と遂げたいが」

道三秀龍が云い出した。

「承知」

と、信長の即答。

富田とんだノ庄しょうは、美濃尾張のあいだにある一向僧こうそうの坊主領ぼうずりようであつた。戸数七百ほどの村落しょうとくじで、正徳寺という寺院がある。会見はそこでときまり、四月の下旬、上総かずさのすけ介信長は

曠^はれの人数を率^{ひき}いて、那^な古屋^{ごや}の城を出、やがて木曾川、飛驒^{ひだ}川の渡舟^{わたし}も打ち越えて、青葉

弓、鉄砲の者、約五百。三間柄の長い朱^{しゅ}檜^{やり}約四百、徒士^{かち}の郎党、足輕組の者、およそ、三百人あまりと数えられた。

肅^{しゅく}々^{しゅく}と流れて来る――

その中に、一団の騎馬隊は、騎馬の信長を囲んで前後に備え立て、いざといえ、そのまま戦隊になるような配備だった。

麦の穂は青い。もう夏めいた四月である。今、越えて来た飛驒川から、爽^{さわ}やかな風が、その長い行列の上を燦^{さん}々と渡つてゆく。

富田ノ庄は、家々豊かだった。荒土ながら、穀倉^{こくそう}のある家が多い。平和な真昼^{まがき}の籬^きに卯^うの花がうなだれていた。

「来た」

「見えた」

村端れまで出ていた斎藤方の小侍が二人、遙かに行列の先頭を見るや否、どこかへ宙を飛んで行った。

村を貫いている櫓並木に雀のさえずりが、長閑だった。

その路傍の、小やかな一軒——土民の家の前に、小侍二人は、ひざまずいて云った。

「織田どののお列彼方に見えました。やがてもう、これへさしかるでございましょう」

民家の土間には、その薄ぐらい煤だらけな壁とは、余りにもふさわしくない、綺羅び

やかな太刀、袴羽織の人々が、一群になって、潜んでいた。

「よし。——そち達も、はやく裏藪へ身をかくせ」

道三秀龍の側衆たちである。——奥には——いや、炉部屋の側の竹窓がある小さい部屋に

は、その道三秀龍が、窓べりに凭れて、往来のほうを見まもっているのだった。

初めて会う賀どの。

しかも、いろいろな風評の高い上総介信長。

「いつたい、どんな態たらくで参るか、どんな男か、公式に対面する前に、ちよつと垣間

みたい」

という道三らしい考えから、路傍の民家にかくれて、先刻から待ちぬいていたのだった。

土間、炉部屋の近臣たちが、

「大殿、尾張衆が、はや見えた由にござります」

早口に告げると、

「うむ」

道三は、頷うなずいたまま、さらに竹窓の端へ身を寄せて、じつと、眼をすえていた。

表の土間戸は、逸いちはや早く閉めきつて、家臣たちは、わずかな隙間、板戸のふし穴などへ、顔をつけていた。

皆……しいんと黙る。

並木の小鳥の声。

その小鳥の群れも、ぱつと羽音をのこして、飛び去ると、もう微そよ風かぜの音もしなかった。水を打ったように、街道はひそまり返る。

——と、程なく。

よく揃った兵隊の足なみが徐々に近づいて来た。磨みがきぬいた鉄砲の列、小隊四十名ぐらいずつ、十段に分列して、林のように流れて行く朱柄あかえの槍組などが、眼の前をゆく。

道三は、息もせずに、その武器や、兵隊の足つきや、隊伍の組み方を見入っていた。

だが、やがて続いて、その肅しゆくせん然とした足なみの次に、馬蹄の音だの、大きな話声が乱れて来たので、

「さては」

と乗り出すように、道三は眼も放たずにいた。

見ると、騎馬隊の中に、一際きやく優れた馬格の駒がさしかかった。見事な螺鈿らでんぐら鞍に、華やかな口輪を嚙ませ、紫に白をな縋い合わせた手綱を搔か把り、賀殿むこ信長は、何か嬉々ききと、うしろの家臣を振り向いて、話しかけながら見えたのであった。

「……ヤ？ あの態ていは」

道三秀龍は、喉のどのあたりで、そんな声をもらした。

ひどく驚いた眼いろだった。

行列の中に見えた信長の扮装いでたちが、彼の眼を奪ったのだ。いや、呆れさせたのである。かねて、異様な姿で押し歩くとは聞いていたが――

今、見れば、聞きしに勝まさるものだった。

逞うちひもしい駿馬しゅんめの鞍に、ゆらと、乗りこなしよく据すわって、茶筌ちやせんむすびの大將髪、萌黄もえぎの打紐うちひもで巻きしめ、浴衣染帷子ゆかたぞめかたびら、片袖をはずして着け、熨斗のしつき刀脇差かたなわきざしには例のごとく――何かの禁厭ましないのように――七五三しめなわ縄を廻している。

その刀腰にはまた、火打袋だの、小瓢箪こひょうたんだの、印籠いんろうだの、紐付扇子ひもつきせんすだの、馬の一

刀彫ほりの根々《ねじめ》だの、珠だの何だの——七、八種きんらんのものをくくりつけて、虎の皮と豹ひょうの皮とを縫いあわせた半袴はんばかまの下には、何やら金欄きんらんの衣裳がきらきらと見え、

「大介エ、大介エ」

鞍のまま、身をねじって振り向いていう。

「ここか。富田とんだノ庄しょうとやらは、はやここの村かつ」

それは、民家の窓の中に、身を潜ひそめている、道三秀龍の耳をも、突き抜いてゆくほど、大きな声だった。

騎馬隊の中に、護衛している市川大介が乗りよせて、

「されば、ここが富田ノ庄にござります。舅君しゅうとの道三様と御会見の場所、正徳寺もすぐそこでござりますれば、何かにつけお行儀ようなされませ」

「ははあ、そうか。ここがもう富田か。——本願寺の坊官どもが領分とやら、穏やかだのう。ここには戦争がないな」

そんな言葉が聞えた。

黙ると、信長は、櫂けやきの並木を仰向いて、青空をよぎった鷹の影でも見送ったのか——ゆらゆらと鳴る腰の太刀や、七つ道具を響かせて、すぐ通り過ぎてしまった。

表戸を閉て、隙見すきみしていた道三の側衆たちは、思わず、

「ぶッ……」

「うふ、ふ、ふ」

口を抑えて、おかしさを忪こらえるのに、苦しがつていた。

「皆よ」

道三は、呼び立てて、

「もはや行列は皆、過ぎたか」

「終わりました」

「見たか。聾どのを」

「よそながら」

「どう見ても、世評を裏切らぬうつけ者、容貌きりようはよし、骨柄こつがらも一ひと通りじやが、すこし足らぬ。……ここが」

と、道三は、自分の頭を、指でついて、満足そうに苦笑した。

と、裏口で、

「大殿、お早く」

と、ほかの家来たちが、急^せきたてて云った。

道三はすぐ起つて、

「おおさ、氣^けどられては、信長はともあれ、眼はしの鋭い他の家来に気まずいものになる。先を越えて、正徳寺へ参つておらねばなるまい」

どやどやと、側衆に囲まれて、その裏口から出ると、抜け道を急いで走り、行列の先頭が、正徳寺の門前で停った頃、彼は寺の裏門から奥へ駈けこんで、取り澄していた。

「——お出迎え」

「お出迎えを」

側衆たちも、あわただしく、衣裳を着かえ、廻廊や間ごと間ごとを、云い触れる声に応えて、大玄関へ出て行つた。

尾張衆の多人数が着いた。

寺門は、人に満^みちた。

お出迎えに——と美濃^{みの}衆はみな立ち払つたので、本堂、大書院、客殿は風の通るだけで、人影もなかった。

「大殿には」

斎藤家の老臣、春日丹後^{かすがたんご}は、まだ起たぬ道三に向つて、そつと意向を訊いた。

道三は、首を振つて、

「起つに及ばぬ」

と、いった。

客^{むこ}は賀^{むこ}、自身^{しゆうと}は舅。それでいいとすればよからうが、きようは初対面の儀式である。

賀^{あるじ}の信長も、一国の主。故に、対等の礼を執つて、美濃と尾張の国境にあるこの本願寺領の中立地帯まで、双方から出向いて来たのであるから、舅とはいえ、出迎への礼は執らねばならないのではないか。

そう丹後は考えたので、一応きいてみたのであるが、

——それには及ばん。

と、道三がいうので、

「はッ。……では、てまえだけでも」

「いや、その儀には及ばぬ。堀田道空^{ほったどうくう}が出ておればよい」

「左様にござりましょうか」

「丹後、そちは、対面の席に居並んでおれ。——また、そこへ行くまでの廊下に、武者ど

も、七百余名、残らず威儀を作つて並べておけ」

「すでに、着坐いたしております」

「武者かくしには、猛者どもをひそめ、賀殿が通つたら、わざと咳せきばらいさせい、庭前には、弓鉄砲の兵、肅しゆくとして立たせ、そのほか息づまるまで、威圧を」

「仰せまでもなく、美濃衆の御威勢を示し、賀どのを始め、尾張衆の胆きもを、気をもつて挫ひしぎおくこと、今日よりよい機おりはないと致して——御家中の者どもみな、腹ふくらませて待ちうけてござりますれば」

「ウム。……」

道三は、大玄関の方の気配をふり顧つて、

「思つていた以上、たわけな賀どの。何につけ張合いもない、馳走の膳部ぜんぶ、応対の礼など、まずまず、好い程でよろうぞ。……どれ、わしも客殿で待とうか」

道三は、欠伸あくびでもしたいように——軽い伸びをしながら起つて行つた。

春日丹後かすがは、主命のあるところを、もっと徹底せしめるべく、廻廊へ出て、武士たちの威儀あらたを検め、また、下役をよんで、何やら耳打ちなどしていた。

すでに。

大玄関のほうでは、その頃、信長が式台を踏んでいた。

ここにも、斎藤家の家中、老臣から目見^{めみえ}得格^{かく}の若侍まで、百名以上、所せましと、平伏して出迎えていた。

「どこじや。休息の席は！」

水を打ったように、ひそまり返っている出迎えの中で、ふいに、足を止めた信長が、無遠慮な声で云ったので、

「はッ——」

と、上目越しの顔が、一斉^{せい}にうごいた。

つつつと寄り添った斎藤家の家老堀田道空^{どうくう}が、信長の足もとに平伏したまま。

「こちらで、何はともあれ、暫時の御休息を——」

指さして、

「彼方^{むこう}か」

「はッ、御案内申しあげます。——御免を」

かがごし
屈み腰に。

信長の先に立ち、大玄関から右へ進み、橋廊下を渡る。

信長は、右を見、左を見、

「よい寺じやなあ。見よ、藤の花が真盛りじや。——風が香う」

扇おうぎ

を胸にうごかしながら、自身の近侍たちと共に、一室へはいった。

休息の時間は約半刻ときほどで、やがて信長は屏風びょうぶの内から起った。

「御案内たのむ。舅殿しゅうとにお目見得いたそう。山城やましろどのには、いずれに在すかや」

見ると、

茶筌ちやせん髪は、折鬘おりまげに結い代かえている。豹ひょう、虎の革の半袴はんばかまは捨てて、正式の折目袴

に、白綾しろあやの小袖、金糸の縫紋ぬいもん、そして濃い紫地に桐もようの袴かみしもを着け、帯びた小さ刀

も、提げた太刀も、華奢きゃしゃな風雅男みやびおのすがただった。

「……あッ」

「お……」

と、斎藤方の家臣も目をみはり、日頃の道化どうけた身装みなりの彼ばかり見つけている、織田の家
中も、びっくりした。信長は、ただ一人、ずかずかと大股に、橋廊下を踏み渡って、

「案内の者！」

と、前後を見、

「近侍たちを連れ纏まとうては寛くつろぎがならぬ。信長ひとりにて、舅殿へお目にかかるうず」
そこでまた、声を高うして云った。最前、出迎えに出た、家老の堀田道空は、信長が自分を眼にも入れていない様子に、むつとして、

「こなたへ、お早うお出いでられ候え」

と、少し子供扱いにして、それへ来合わせた春日丹後かすがたんごと共に眼くばせして、

「これは——」

と、本堂の両側に、ぴたと座を構え、わざと厳いかめしく、

「斎藤山城守が家老職、堀田道空ほったどうくうにて候。お見知りおかれませ」

「てまえは、老職春日丹後かすが。——御遠路、つつがなくお渡り遊ばし、折ふし、日もうららかにきよの御対顔、祝着にぞんじ上げ奉りまする」

左右から、こう色代しきだいしているまに、信長は、拭き磨いてある廻廊を、つつつと足を早め、

「ふム。……よう彫つてある」

欄間の彫刻へ、顔を上げ、そこらの武士——斎藤山城守道三が手飼の者ばかり数百名、ずらりと居並んでいる前を路傍の草ほどにも眼をくれず、真っ直ぐに通って行った。

そして、客殿の前まで来ると、尾いて来た道空、丹後の二家老を、後に見、

「ここか」

「御意にござります」

「うむ」

頷いて、ずかと、廻廊の板面から、一段高い畳のうえに踏み上がると、落着き払って、設けの席に坐り、そのまま縁の中柱へ、ゆつたりと背を凭せかけていた。

すこし、顔を上げ気味に。

格天井の絵でもながめているかのような風である。その眼のすずやかさ。眉目の優しさ。

室町の京公達でも、こう整った姿と面ざしは少なからう。——しかし、それにばかり見惚れていた者は、天井を見ている彼のひとみの、不敵なものを見遁していた。

——と、その客殿の隅に、立てまわしてある屏風のうしろに、人の気はいがした。山城守入道道三は、その蔭から立って、信長の上座に、鷹揚に着席した。

「……………」

信長は、そ知らぬ風情をしていた。——というよりは、うつつに、扇を袴の前で弄びな

がら、そら嘯^{うそ}ぶいていたといったほうが近い。

「……………」

じろと、道三は、横に見た。

舅からものいう法はない。そう自己を持して黙っていたらしい。

一瞬、妙な空気になった。道三の眉に、険^{けわ}しい針が立った。——堪^{かん}りかねた家老の堀田道空は、信長の側へすり寄つて、頭^{かしら}を畳へすりつけながら、

「それ^{おわ}に在^あるお方こそ、山城守道三様にござりまする。——ごあいさつを」
いと信長は、

「むう。左様にてあるか」

と、初めて、柱から背を離して、坐り直した。

一礼して、

「これは、初めて御対面つかまつる。織田^{かすさのすけ}上総介信長にてござる。お見知りおきください」

彼から、改めて、こう挨拶すると、道三も気色を柔らげて、

「わしが山城じゃ。かねがね、一度はお会いせいでななるまいと存じおったところ、今日、

宿望を果して祝^{しゅうちやく}着^く」

「信長も、近頃うれしいことの一つです。まずまず、舅殿には、老いて益、御健勝に渡らせられ、何よりでござる」

「なに、老いてとな。山城もはや、ことし六十を迎えたが、まだまだ、老いた気はせぬ。お許^{こと}らはちようど、卵の殻を出たばかりの雛^{ひなどり}鳥よ。はははは、男ざかりは、六十越えてじゃ」

「頼もしい舅殿を持ち、信長は仕合わせ者でござる」

「そうか。何せい吉^よい日^ひではある。道三もたと生きよう。次の会う日には、孫の顔など見せなされ」

「心得てござる」

「気のさくい簀^{すい}どのよ。——丹後」

「はッ」

「膳部^{ぜんぶ}のしたくを。——お湯漬でも」

眼で——道三は何か、丹後に意をのみこませた。

「心得てござります。……ただ今」

と、春日丹後は、座をすべつて行つた。

はてな？

彼は、道三の眼じらせが、何を意味したのか、ちよつと肚を酌みかねていたが、最初の氣まずい主君の顔が、途中から晴々して、むしろ信長の機嫌をとる態度に變つていたので、さては、一度粗末でかまわぬと吩咐けた膳部を鄭重にせいと、云い直したのであらうと、その通り心を配つて出してみると、道三は満足の様子に見えたので、心のうちでほつとしていた。

舅の道三と、舅の信長と。

ふたりの間に杯事があつて、はなしはなお、氣が樂になつてきた。

「そうそう」

信長は、思い出したように、突然云いだした。

「山城どの。いや舅どの。時にきようは、これへ参る途中、珍かな者に出会うてござる」

「ほ。どのような？」

「されば、舅殿と瓜二つの老いぼれが、民家の破れ窓より、信長が行列を、覗き見しておつた。——初対面の舅殿なれど、初の御見とは思えぬほど、はてさて、最前の老いぼ

れはよう似かようてござった」

ははははと、その唇を、信長は半開きの扇子で隠した。

道三は、苦汁くじゅうをなめたように、黙ってしまった。堀田道空も、春日丹後も、肌着に汗をにじませていた。

湯漬を喰べ終ると、

「いや、長坐長坐、陽の入りまでには、飛騨川ひだがわ越えて、こよいの宿舎まで退りとうござる。

——どれ、お暇を」

「帰らるるか」

道三は、一緒に立つて、

「髻どなの帰館とある、名残惜しい、そこまで、見送り申そうず」

彼もまた、その日のうち、美濃の城地へ、帰るのだった。

三間柄さんげんえの朱槍の林は、夕陽を背にして、東へと勢揃いして帰った。美濃衆の槍隊は、

それに比して、みな短く、何となく氣勢も昂あがらなかった。

「ああ、長生きもしくない。——今に見よ。この道三が子らも、あのたわけ殿の門前に、駒を繋いで、生を乞う日がやがて来よう。ぜひもない……ぜひもない儀だ」

その途中、道三秀龍は、駕籠かごのなかで口惜しげに、はらはらと落涙しながら、近侍の者にいったということであつた。

出仕

どうん。どうん――

武者太鼓が鳴る。法螺ほらの音が曠野こうやをわたる。

しぶきを上げて、庄内川に泳いでいた者、または野を駈けていた騎馬の者や、竹槍調練をしていた歩卒など、

「御帰城だ」

「引揚げ――」

と、一斉に、河原の仮屋を中心に馳せ集まつて、またたく間に、三列四列、横隊になつた軍馬が肅しゆくとして、主君のすがたが鞍に乗るのを待つていた。

半刻はんときの余も、泳いでは河原に上がつて、太陽に肌を焦やき、また、川へ躍り入つては、河童かつぱのように、存分水と戯たわむれていた信長は、

「帰ろう」

云い出すと、飯屋のなかへ駆け込んで、白の水着腹巻を捨て、肌のしずくを拭くがはいか、すぐ下着、狩衣かりぎぬを着込み、小具足つけて、

「駒を、駒を」

と、その気短な吩咐いいつけは、彼の側を追いまわすように従ついて歩いている近習たちに、いつも泡を吹かせるのだった。

何につけ、信長の手早いことと、性急なものには、日常心得ぬいている近習たちではあつたが、それでも面喰らうことがしばしばだったし、また、青年らしい壮気と茶気の満々なこの若い主君は、それを知つてわざと不意を衝くようにも思われた。

けれど市川大介は、さすがに兵法者であつた。信長がどう虚を衝いても、大介が命令一下に、貝が吹かれ太鼓が鳴ると、どんなに乱れていた兵も馬も、青田の早苗さなえのように、揃つて並んだ。

短気はいうが、信長の機嫌は、顔にあらわれ、満足そうであつた。

——きょうも。

すでに朝から二刻ふたときほども、烈しい教練をやつたので、信長は、那古屋なごやの城へ人数を向

け、自身もその中の一騎となつて、庄内川しょうないがわの河原から引き揚げて来た。

ちようど、土用の太陽は、曠野こうやの真上にあつて、火車のように灼やけていた。水に濡れたままの兵や駒は、縦隊を作つて蛻うねつて来た。キチキチキチ……と青い蝨ばったが信長の姿に飛び交う。むうつと暑い草いきれが面を撫なであげる。

水に浸ひたつて、鳥肌になつていた顔には、もう汗のすじが流れ出す。信長は時折、馬上で顔の汗を脇ひじで横にこすつた。もうそろそろ常の特色が出て、粗暴で不良性で、うつけといわれる挙動が、眼づかいにも、することにも、及んで来た。

「あれッ。何だろ。——待て待て、異いな奴が、駈かけて来るぞ」
突然。

信長がそういつて、列を振り向いた時、それより早く、何事かに気づいた後方の武者たちが、列を脱ぬけて、五、六名、ばらばらッと背よりも高い草むらの中へ、駈かけこんでいたのである。

そこに、隠れていた者がある。

それは今朝からこの附近へ立ち廻つて、信長へ近づく機会を半日も待ち構えていた日吉ひよしであつた。

さつき、密かに信長の姿を川に見て、折もあらばと、うろついているうち警固の足輕に見つかつて、脅されたので、帰城の道すじを考えて、道の辺の深い草むらの中に潜りこんでいたのだつた。

（今だツ！）

と、彼は心に奮い立つと、その意志の前には、何ものも見えなかった。

ただ馬上の青年信長のすがたが、彼のらんらんたる眸のうちに、大きくいつぱいに在つただけであつた。

——その時。

日吉は大声で、何か叫んだ。

が、何をさげんだか、自分でもわからなかつた。
生命がけである。

信長の耳へ、その声も届かず、近づきも得ないうちに、警固の者の朱柄の長槍で、突き殺されるかもしれないのである。

それを怖れては、出来ないことなのだ。彼にとってはこの一瞬が、生涯の潮へ乗るか反るかであつた。

草むらから身を起すと、信長の姿を目がけ、眼をつぶって、駈け出しながら、

「望みある者でございます。お召仕めしつかいくださいますッ。——主と仰ぎ奉って、身命なげうを抛なげうつて、働きたい望みある者でございますッ！」

自分では、

駈けつつ、それだけの言葉を、大声で訴えたつもりではあるが、非常な昂奮をしていたし、とたんに、予測していた警固の士が行列を出て、自分と信長のあいだへ、槍を把とつて遮さえぎつて来たので、気は上ずり、声は割れて、人には何と聞えたか、恐らく、意味をなしてはいなかったろうと思われる。

それになお——

彼の風体は、ただの土民より惨めみじだった。髪はよごれ、埃ほこりや草の実みがたかっていた。顔は汗のすじを描いて、黒く赤く、眼ばかりが、飛びつくように、信長のほうを見て駈けて来たのである。

「こらッ、何処へ」

「無礼者ッ、突き殺すぞ」

日吉の眼には、遮さえぎる槍も見えなかった。

が——槍の柄^えで、向う脛^{すね}を払われたので、信長の馬前から十歩ほどてまえで、一度、もんどり打って倒れた。

しかもまた、刎^はね起きて、

「——望みあんなる！ 望みあんなる！ わが君ッ。わが君ッ！」

喚^{わめ}きつつ、槍のあいだを駈^{あぶみ}け、信長の駒の鎧^{あぶみ}へ、つかまろうとした。

「穢^{むさ}い奴^{やつ}めッ」

信長が、一喝^{いつかつ}した時、日吉のうしろから追いつた士の一人が、襟^{えり}がみを把^とつて、彼の体を、大地へ抛^{ほう}りつけた。

それへ向って、

「こいつ！」

と、槍が走ろうとした時、

「突くな」

信長がいった。

見も知らぬ——そして穢^{むさ}い姿をした異様な小男が——自分へ向って、家来でもないくせに、わが君、わが君、と呶^な鳴りながら駈^{あぶみ}けよって来たのが、ふと信長の眼を注意させたの

であつた。

いや、もっと大きな理由は、日吉の満身に燃えていた、希望の焰ほのおが、信長をして、思わず、

——待て！

と、止めさせた最大な力であつたかも知れない。

「問うてやれ、何か、いわしてみい」

信長の声が、耳にはいると、日吉は体の痛みも、近侍たちの眼も、ほとんど覚えなく、その人の姿だけを仰いで、懸命にいった。

「——父は元、御先代のお館やかた、信のぶ秀ひで様の足輕組に仕えおりました、木下弥右衛門きのしたやえもんと申すもの。てまえは、弥右衛門の子日吉ひよしといい、父の亡ない後、中村で母と共に暮して来ました。年頃、ふたたび御奉公の折もがなど、伝手つてを求めておりましたが、所詮しよせん、御直訴ごじきそのほかはないと、死ぬる気で参りました。——すでにここで突き殺されて死ぬる気でございましたから、後々、御奉公には、生命いのち惜しみはしまいと、自分でも思われます。どうぞ、私の生命ひとつ、拾い取つて、お召仕めしつかい下さるなら、草葉の蔭の父も、御領下に生れた私も、共に本望にぞんじまする」

早口だった。半ばは夢中だった。けれど日吉が、

（この君ならでは）

と、見込んで、生命を賭して訴えただけの情熱は信長の心へ、十分に届いた。信長はむしろ、日吉の言葉以上に、日吉の真実を買った。

しかし、苦笑して、

「怪態^{けたい}なやつよのう」

と近侍を顧みながら云い、そして、馬上から、

「我に、仕えたいというか」

「はい」

「して、汝は、何の能^{のう}やある」

「何の能もございませぬ」

「何の能もなく、主取りして、何をいたそうと思うか」

「事ある時、死なんと思ふのほか、べつによき能も持ちませぬ」

信長は、すこし氣に入ったらしく、口ばたに、笑くぼを作った。——それからなお、じつと、見直して、

「よしッ。——したが其方^{そち}はただ今、我を目がけて、わが君と、再度まで呼ばわったが、信長はそちを、家来とゆるしたことはない。そちもまた、召仕われぬ身で、何故、我をわが君と呼ばわったのか」

「御領土の下に生れ、日頃からまた、仕えるなら彼の御方^{おかた}と、胸に思い込んでおりましたため、つい、口にも出たものと思われます」

信長は大きく頷^{うなず}いた。そして、市川大介を顧みて、

「大介」

「はあ」

「おもしろいぞ、この男」

「いかさま」

大介も苦笑した。

「望みにまかせ、拾うてくれよう。日吉とやら、きょうより出仕せい」

「……………」

日吉は、声がつまって、咄嗟^{とつさ}にその欣び^{よろこ}を、口に出せなかった。

行列の武者たちは、

「また、わが殿の、物好きな」

と、驚いた顔したが、その中へ日吉がこのこはいって来たので、

「おい、もつと、列の後の方に従つけ。荷駄の尻し尾ぽへついて来い、荷駄の尻し尾ぽへ」
と、眉をひそめた。

「はい、はい」

唯々いとして、日吉は、行列の最後方に尾ついて歩いた。それすら彼は夢心地になるほど欣うれしかった。

信長の行列がかかると、那古屋の町々は、掃はいたように、往来が開かれ、廂ひさしの下や辻には、人間の頭がたくさん土下座していた。

日吉は、初めて、そういう往来の真ん中を歩いた。そして行列の前方に、遠く主人の背なかを見ながら、

(この道だ。この道だった)

と、思った。長いあいだ探さがしあぐねた本道へ、今ようやく、出て来たという心地である。だが、その主人は、武者を率ひきいて、町を歩くにも、傍若無人だった。少しも取り澄さしてはいないのだ。家来たちと、話はするし、笑うし、喉かわが渴かわいたといったては、瓜など齧かじって、

馬上から、瓜の種を、吐きちらして歩いた。

那古屋城が、前に迫った。

濠の水は青く沸いていた。

唐橋を渡つて、行列は城門へ蜿蜒と隠れて行く。——日吉は、生れて初めての、橋を越え、門を潜つた。

秋の頃だった。

刈入れに忙しい人々を田の面に見ながら、てくてくと中村へ急いでゆく小背丈な若侍があつた。

「おつ母さんッ」

若侍は、筑阿弥の家の前まで来ると、恐ろしく大きな声で訪れた。

「まあ！ 日吉ッ……」

彼の母はその後、また、子を生んでいた。干し拵げている小豆の中で、子を抱いて、弱々しい皮膚を陽なたに曝していたが、

「おお？」

振り顧^{かえ}つて、変ったわが子の姿を、突然そこに見ると、悲しいのか欣しいのか、彼女の顔に、一瞬、つよい感情が付きぬけて、眼は涙にくもり、顔じゅうの筋はびくびくふるえた。

「わしじや！ おつ母さんッ。……みんな達者でか」

飛びつくように、母の庭^{むしろ}へ——その乳の香のする懷^{ふところ}のそばへ、日吉が坐りこむと、母は片手の乳のみ兒と同じように、日吉をも抱きよせて、

「どうしやった。どうしやったぞ？ ……」

「どうもしません。きようは、一日お暇^{いとま}が出たので、お城へ御奉公に上がってから、初めて外へ出たのです」

「あ……そうか。……それで安心しました。突然来やったので、何ぞまた、不首尾でもでかして、お城を追われて来たのではないかと、わしは、胸がどきツとして……これこのように冷汗をかいてしもうたがの」

ほつと、安心したのであろう。彼女は初めて、笑顔を見せた。

そして沁^{しみ}々、わが児の成長をながめ、また、垢^{あか}のついていない小袖や、髪^{かみ}の結いぶりや、刀、脇差などを見て、ほろほろと涙をながした。

「欣んで下さい、母上。やつと私も、信長公の御家臣の端はしに加えられ、この通り、まだ御お小人組こびとぐみの端ではありますが、どうにか侍奉公する身にはなりました」

「ようなあ。……ようまあしやったなあ」

襖つづれ褌つづれた袖口をあてたまま、彼女は顔を上げ得なかった。

その背を、今度は日吉が抱えてやりながら、

「きようは、母上に欣んで戴こうと思つて、朝から髪も結ゆい、小袖も新しいのを着て来ました。……けれど、まだまだ、これからです。私が御奉公を見せるのも、ほんとに、欣んでもらうのも、——おつ母さん、どうか、長生きして下さいよ」

「この夏の頃、そなたが、庄内川の河原で、御領主様へ向つて思いきつたことしやつたと聞いた時……わしはもう、そなたの生命いのちはないものと、泣き明していたものを……こんな嬉しい目に会おうとは」

「その後、委細は、乙若おとわかどのから、言伝ことづてがあつたでしょう」

「おお、乙若どのが来て、そなたが御領主様のお心にかない、御小人衆に抱えられたと聞かされて——もうそれを聞いてやれうれしや、死んでもよいと思ひました」

「はははは。これしきのこと、そんなにお欣びなされては、これから先、どうしますか。

——まず第一に、お聞かせしたいのは、御主君信長様から名氏みようじを名乗ることをゆるされました」

「ほ。なんと？……」

「姓は以前の木下きのした。名は藤吉郎とうきちろうと改めました」

「木下藤吉郎といやるか」

「そうです。よい名でしょう。もうしばらくは、この茅屋あばらやと檻樓つづれの御辛抱をねがいます
が、母上も、もつとお心を、確しかと大きく持つてください。——木下藤吉郎の母であるぞと」
「うれしい。こんなうれしいことはない」

母は、そればかり繰り返して、藤吉郎のいう一言ことごとに、すぐ涙してしまうのだった。
(こんなにも、欣んでくれる人がある！)

藤吉郎は、それを大きな幸福に思った。世の中に誰あつて、こんなに真実に、些細ささいなことをも、大きく欣んでくれる者が、この母を措おいてどこにあらうか。

三年、五年の漂泊さすらいも、その間の飢えや艱難うも、むしろこの一瞬ひとときの幸福を大きくするために越えて来たものようであつた。

「時に、姉上は、どうしましたか。姉上の姿が見えませんが」

「おつみか。おつみは、よそへ刈入れの手伝いに行っている」

「丈夫ですか。元気ですか」

「変りはないが、あれものう……」

と、ふと母は等しい愛を、おつみの傷ましい青春へ思いやった。

「帰つて来たら、そういつて下さい。姉上にも、長いご苦労はかけません。今に、この藤吉郎が^{ひと}かどになつたら、^{しゅちん}縹珍の帯、金紋の箆^{たんす}、嫁入りに不足はさせぬと。……ははは、相かわらず、私のいうことは、とりとめないと、母上もお思いでしょうな」

「もう帰るのかや」

「お城仕えは、いちだんと厳しゅうございます。……それにな、母上」

と、藤吉郎は、声をひそめて、

「おうわさ申しては、勿体ないですが、一国一城の御主君という身も、お側近くに仕えてみると、なかなか^{しもじも}下々の思うているようなものではありません。世間から見ている信長公と、^{なごや}那古屋城の中の信長公とは、たいへんな相違ですよ」

「そうであらうな」

「お可哀そうなくらいです。ほんどのお味方という者は幾人もありません。譜代^{ふだい}の家来も

一族も肉親までが、あらかた敵です。その中にいらつしやる信長公は、まだ二十歳はたちの孤君です。——百姓の喰えない苦しみが、一番辛いものだと思つたら、どうしてどうして、そんなものではありません」

「勿体ないのう。……まだわし達は」

「そう思えば、御辛抱もできましよう。が、人間と生れたからには、それでいいものではありません。幸福しあわせの道を切り拓ひらいてゆきます。信長公も——それから藤吉郎も行く末には」

「その気持はうれしいが、余り、功てがらに逸はつておくれでない。たとえそなたが、どれほど出世しようと、わしの欣びは、これ以上はない」

「では、御機嫌よう」

「もちつと、話して行かれぬのか」

「御奉公が大事ですから」

彼は黙つて、母の庭むしろへ、なにがしかの金を残して立つた。そして頻りと、懐かしそうに、そこらの柿の木や、籬まがきの菊や、裏の物置小屋などを、何度も見まわして帰って行つた。

その年は、それきり来なかつたが、年の暮には、足輕組の乙若が来て、

「藤吉郎から頼まれたが」

と、一反の織物と、金子きんすと、母の薬とを入れた包を届けて来た。

その折、乙若の話には、

「今は、御小人組おこびとぐみの端だが、二十歳にでもなれば、もちつと、お扶持ふちも増されようし、御城下のお長屋にでも住むようになったら、母上を側へ呼ぶのだといっている。あの息子も、ずいぶん突拍子もないところもあるが、割合に人づきあいはよいとみえ、朋輩ともぐらたちにも、そう嫌がられてはいないようだ。……何しろ、庄内川であんな無茶をしたにしては、生命いのちびろいをしたようなものさ。運のいい男だよ」

と、藤吉郎の近状を、そんな程度に伝えて帰った。

おつみは、その初春はる、初めて垢あかのつかない小袖を着たので、

「弟が送ってくれました。……お城にいる藤吉郎が」

と、どこへ行っても、弟が弟がと、口に出さずにいられなかった。

じゃじゃ馬

どうかすると信長は、無口になって、終日鬱ふさぎこんでいる日があった。非常な癩癖かんぺきを抑えるためにはまた、非常な無口と憂鬱ゆううつの現象が、自然起るのかも知れない。

そんな時である。

「卯月うづきを出せ。卯月を」

いきなり呼ばわって、城外の馬場へ駈け出して行ったりした。

先殿様の信秀時代には、一年のうち半年以上も、たえず西に攻め東に護り、一生戦争に暮くらして、居城のうちに落着いていられる暇もほとんどなかったくらいだが、そんな中でも、およそ朝は祖先の礼拝、近侍の受礼、講書や武道の稽古、それから夕刻まで領内の政務を見、また晩には、軍書に親しむとか、評議とか、寸暇くつろを寛いで家庭の良い父になって興きじるとか——一定の規律があつたものだが、信長の代になつては、そういう定規じようぎはなくなつてしまった。

というよりも、信長自身の性格が、そういう定規にあてはまらないのである。

（やろう！）

と思ひ立つことも、

（止めよう）

とする意思も、彼の心のなかでは、常に、夕立雲の如く、唐突に去って、唐突に起つてゆくので、彼自身さえ、自身を規律で制していることができないらしかった。

あわてるのは近侍であつた。

きようは珍しく、書物に親しんでおられる——きようはまた可憐らしく、亡き御先代のために、お仏間にお坐りになつた——。などと油断していると、雷の子のように、

「卯月^{うづき}ッ。卯月を曳^ひけッ」

と、声がする。

声が出た時にはもう、そこにはいないにきまつていた。時を嫌^{いと}わぬこの殿の行動に、近侍たちはあわをくつて、厩^{うまや}へ駆け、馬場へ追いかけて、それでも、

（何を愚図愚図している）

と、いわぬばかりな顔をしている主人の前へ、ようやく駒を曳いて行くのだった。

卯月というのは、彼が乗り馴れた白い愛馬だった。しかしこの馬もやや老境に入つて、旺^{さか}んな信長が乗り叩くには、彼も物足らなかつたし、馬も物憂^{ものう}くなつていた。

「……ち。ち。ちッ」

信長は、口輪を持って曳きまわしていたが、

「重いのう。水を飼え」

と命じた。

「はッ」

馬柄杓ばびしやくを把とつて、ひとり馬の口を開け、がくと水をぶっかけた。

信長は、馬の口へ手を突つこんで、馬の舌をつかんだ。

「卯月うづきめ、きようは悪い舌うづきをしておるな。これでは脚の重いはずじゃ」

「風邪かぜぎみのようでございます」

「卯月も、老いて来たか」

「大殿のおかたみでございますから、はや馬齢もだいぶ」

「馬齢か。なるほど、那古屋の城には、卯月ばかりか、馬齢のみ取ってゆく老おいぼれども何と多いことじゃ。いったいに今の時勢が馬齢の世の末じゃ。十幾代にわたる室町将軍家を始め、規律づくめ、儀礼づくめ、嘘うそづくめ。腐くさっている。老ぼれておる！」

誰にいうのでもない。天へ怒るように独り語に云い、そしてぱっと、鞍はかへあがつて、袴はかを割ると、

「風邪ひき馬を、ひと鞭むち、汗とりしてくれよう」

と、馬場を駈け始めた。

騎馬の上手は、天稟てんびんだった。市川大介が師範であつたが、近頃は独り乗りこなして、むしろ大介を後しりえに見ていた。

若い元氣いっぱいな信長にたたかれると、卯月はやがて、汗にぬれて来た。——と、彼の駒を、恐ろしい脚速で、鮮やかに追い抜いて行つた一頭の黒鹿毛くろかげがあつた。

不意に、自分の駒へ、後塵を浴びせて追い抜いて行つた黒鹿毛を見ると、信長は、

「あッ、五郎左め！」

と、躍起になり、

「小癩こしやくな鹿毛」

と、競つて行つた。

五郎左という若侍は老臣の平手ひらてなかつかさ中務の子で、城内では鉄砲頭を勤め、優れた士すぐさむらいのひとりだった。

先代信秀が、信長のために、傳役もりやくとしておいた老臣の平手中務には、三人の男子があつた。惣領そうりょうが五郎左衛門、次男が監物けんもつ、三男を甚左衛門といった。

信長の気性が、その時、無意識に駆りたてられていた。

追い抜かれる――

ひとに遅れをとる――

後塵を浴びる――

おくびにも、そういったことは、そのままではゆるされない彼の気性だった。びゅッ、びゅッ。ふた鞭^{むち}ほど、彼は、烈しい鞭を自分の駒の卯月に加えた。

もう老いかけてはいても、卯月も名馬である。

大地は、蹄^{ひづめ}に鳴り、卯月の蹄が、大地を蹴るのが見えないほど、迅^{はや}い脚で駆け出した。卯月の銀毛のような尾が、真ッ直ぐに風を曳いて、五郎左衛門の鹿毛^{かげ}のそばを、勢いよく駆け抜けて、前へ出たので、五郎左は、

「殿、殿、お馬の蹄^{ひづめ}が割れますぞ」

と、注意した。

すると信長は、

「五郎左、もう続けぬのか」

と、すこし揶揄^{やゆ}していった。

五郎左もまだ二十四、五の若気であり、主人に上手のいえない士^{さむらい}だった。心外な、とい

う顔して、

「何の！」

と、ばかり追い込むと、信長も負けない気になって、駒の鎧あぶみをたたきに叩いた。

卯月は、織田の卯月と、敵国にまで聞えた名馬であり、値あたにしても、その馬格からしても、五郎左の飼ひ使っている鹿毛などとは、本来、比較になる馬ではなかった。

けれど鹿毛は若く、鹿毛の乗人のりてはまた、平常、信長のように、主君扱いされて、驕おごっている者とはちがう。なお、馬に騎のる修行も鍛練も、ずっと違う。

五郎左は、前を駈ける信長の卯月をめがけて、遮しや二無二、迫せまって行った。

二十間ほども越された距離の差が、十馬身ぐらいにつまり、五馬身となり、一馬身となり、鼻ぐらいな差になって来た。

先人を越すは易やすく

後人に越されざるは難し

という古語のとおりに、それを越されまいとする信長は、息がきれて来た。

そして、その息を——一息抜くまに、五郎左衛門の駒は、鮮やかに彼を追い越し、ぱつと、砂塵しりえを後に浴びせて、なお、馬場を半廻りも先まで、馬の余勢なりで跳んで行った。

「ちいッ」

と、舌打ちしながら、信長は鞍をすてて、地上へとび降りていた。自分の本質をむき出して、しかも鬨い破れた苦しい気持から、その面は、喘いでいる馬よりも、悲痛だった。

「ウウム。良い脚だ。あの鹿毛は……」

信長は、自分の敗因が、ただ鹿毛の脚にあるものと思つて、独り唸っていた。

鹿毛と卯月とが、烈しい脚を競合つて駈けたのを、遠くから眺めていた家臣たちは、やがて敗れた信長が、途中で駒から降りてしまったのを見ると、

「やつ、五郎左に抜かれて、御氣色ごきしよくを損じたに違いないぞ」

と、後の不機嫌を案じながら、あわてて此方こつちへ駈け集まつて来た。——と、誰よりも早く、信長に近づいて、茫然としている信長の前へ、

「お水を。……お水を一口」

と、ひざまずいて、塗柄杓ぬりびしやくをさし出した小者があつた。

それは先頃、御小人組の中から選ばれて、信長の草履ぞうりをつかむ小者にまで昇格した藤吉郎であつた。

草履取といつても、数多い御小人組のうちから、主君の足もとまで、身近く出られる身

になったことは、破格な立身で、わずかな月日に、そこまで来た藤吉郎は、身を粉にして、現在の小者の職務に忠勤と誠意を打ちこんでいた。

——が、主人の眼というものは、常に見ているようで、そのくせ、一つや二つの気働きぐらいでは、眼もくれる風も見せない。

今も、信長は、藤吉郎が誰よりも先に駈けつけ、吩咐いいつけられぬ先に、
(お水を)

と、すすめても、信長は、彼の顔などは見もしなかったし、ウムともいわなかった。黙って、塗柄杓ぬりびしやくの柄えを取ると、一息に飲みほして、藤吉郎の手に返し、

「五郎左を呼べ。五郎左を」

と、命じた。

その答えは、近侍がした。あわててそこへ集まって来た家臣のうちから、一人がまた、彼方へ駈けて行つた。

五郎左は、馬場の柳に、駒を繋いでいたが、信長の召しを聞くと、

「ただ今、御前へ参ろうと存じているところ——」
と、答えた。

そして悠々と汗をぬぐい、襟えりをかき合わせ、刀こうがいの筭すを抜いて、乱れた髪かみの毛を撫でつけていた。

五郎左は、主君の前へ出るまでに、もう或る覚悟をきめていた。

信長の気色から推して、信長の近侍たちもまた、彼の身が、ただではすむまいと固唾かたよをのんで、差し控えていた。

「五郎左にございます。ただ今は、失礼を仕りました」

覚悟の程は、肚の底にすえていても——こういつてひざまずいた五郎左の物腰は、涼やかなものだつた。

案外、信長もまた、彼の神妙な態度に、面おもてをやわらげて、

「五郎左、よく追つたのう。そちはいつたい、いつの間に、あのような名馬を手に入れたか。あの鹿毛は、何と申すか」

と、訊ねた。

家臣たちはほつと気を安めた。

五郎左は、微笑の顔を、すこし上げて、

「お目にとまりましたか。実はてまえも、いささか誇りといったす愛馬で、南部なんぶの馬商人あきんど

が、京の貴人へ、高値に売るとて、都へ曳いて上るのを、強^たつて所望いたしたものにござ
います。——が、値^{あた}いほどな金子^{きんす}を持ち合^あわぬ身、よんどころなく、父より貰^{もら}いおきまし
た『野分^{のわけ}』と銘のある家宝の茶^ち盃^{やわん}を売り払い、それにて求めましたので、鹿毛の名もそ
のまま、野分と名づけて飼^かい馴^なれておりまする」

「ふむ……。そうか。いや道理で、近ごろ優^{すぐ}れた名馬とわしも見た。五郎左、あの野分、
信長が所望じや。信長にくれい」

「は……」

「よかろう。値はいくらでも取らすであらう。信長が貰^{もら}うておくぞ」

「……いや。恐れながら」

「なんじや」

「お断りいたしまする」

「いけないのか」

「はい」

「なぜじや。そちはまた、よい駒をさがせばよかろう」

「よい友は求め難いように、よい駒も、そうあるものではございませぬ」

「だから信長に譲れというのじや。信長とても、乗りつぶれぬ程な逸駿いつしゅんを、心がけていた折じや。強たつて望む」

「強たつてお断りいたしまする。——何となれば、てまえの愛馬は、ただてまえの自慢や遊び事の備えではございませぬ。事ある時は戦場において、男がいある御奉公も致さばやと、心がけの一として、飼い馴らしておるものです。折角、わが君のお望みにはござりますが、武士にとって大事な駒、差し上げるわけには相成りませぬ」

奉公のため、武士のたしなみのため——という彼の強きついことばに、信長もそれ以上、無下げによこせとも云い得なかつたが、なお、執着とわがまは、捨てきれなかつた。

「五郎左」

と、重ねて、

「嫌か。どうしても嫌か」

「この儀ばかりは……」

「そちの身分には、あの鹿毛は、ちと過物すぎものであろうが、そちも父の中務なかつかきほどな土にさむらいなつたら、野分ほどな駒にも乗れ。——まだ若い身に、鞍負くらまけするといふものじや」

「恐れながら、御意はそのまま、殿へお返し申しましょう。——お鞍の上で、串柿くしがきや瓜うり

など喰べて、御城下をお練りあそばすには、何も、名馬のお選みは御無用かと存ぜられま
す。むしろ五郎左の如き武士に飼わるるこそ、野分も本望の筈と覚えます」
と、いつて退けた。

五郎左は、つい、いつてしまった。馬を惜しむ心よりも、日頃の忿懣^{ふんまん}が、思わず、口
をついて出てしまったのである。

孤君^{こくん}と老臣^{ろうしん}

五郎左衛門の老父、平手^{ひらてなかつかさまさひで}中務政秀^{なかつか}は、二十日^{はつか}あまりも、門を閉じて、邸^{こも}に籠^{こも}つてい
た。

彼として、めずらしい例といわねばならない。

十年一日の如くというが、彼の奉公は、織田家二代にわたって、四十年一日の如くであ
った。

先代織田信秀から、その臨終^{りくせき}に六尺^{りくせき}の遺孤^{いこ}信長を、
(頼むぞ)

と、託されてから後は、信長の守役もりやくとして、一国の藩老として、なおさら、彼は老骨に鞭打って仕えて来た。

その日。——もう夕方。

彼は、独り鏡を眺めていた。

「……………」

自分の髪の真つ白になっていることに、今さらのように、彼は愕おどろきの眼をもつて、鏡の中の自分を見ていた。

白くもなる筈。もう齡よわいも六十いくつかであつた。

が、その年すら、数えて閑かんを思う暇もなく来たのである。年を思い、髪かみの白さに気づいたのも、門を閉じた二十日あまりを、幽居の身となつたお蔭であつた。

鏡かがみ 篋ふたの蓋をして、

「勘解由、勘解由」

ふすま越しに呼ぶ。

小侍に、燭しよく 台だいを持たせ、次に、用人の雨宮勘解由かげゆが、そつと小暗い端かしこに畏まつた。

「勘解由、使いは出たか」

「はい、もう先刻に、遣わしてござります」

「では、見えような」

「程なく、お揃いで、お出で遊ばすことと存じますが」

「酒のしたくも」

「お珍しゅう、お揃いで」

「うむ。鬱はらしじやよ」

「至極、結構に存じます。何ぞなお、温かい馳走など、作らせておきましょう」

勘解由は、去った。

二月の初めだったが、まだ梅のつぼみすら固かった。ことしはひどく寒く、池の面の厚氷は一日溶けなかった。

さつき使いを出して、呼びにやったのは、各、べつに邸を持っている三人の息子たちへであった。

本来、こういう大きな邸では、総領は元よりのこと、次男三男でも、皆、大家族的に妻から孫まで一つに住んでいるのが、世間の慣わしだったが、中務は、
(朝夕、子や孫どもの愛にひかされては、少しでも、御奉公の懈怠になる)

といつて、皆、べつに邸を持たせて早くから妻にも別れた身を、孤独で暮していた。そして、先君の遺孤、主君の信長を、主と護るのみでなく、わが子とも思いこめて、守役の大任を負いとおして来たのだった。

ところが先頃からその信長は、少しも爺^{じい}爺よと、自分を慕^むわなくなった。——のみか、面^{おもて}を横にし、耳をふさいで、自分のことばをも、厭^{いと}う風であつた。

不審に思つて、近侍の者に糺^{ただ}してみると、

「御子息の五郎左衛門殿と、お馬のことから実は——」

と、数日前、馬場であつた気まずい事件を、話してくれた。

「……さては、それで」

と、中務は、初めて解けたが、さてさて、困つたものと、当惑の顔いろだった。

不興^{こつむ}を蒙^{こう}つた五郎左衛門も、以来、出仕止めとなつて、謹慎しているらしいし、その余波で、自分の言は、まったく信長の耳へ、真つ直ぐに通らなくなつたように思われる。

柴田^{しばた}権六勝家、林^{みまさか}美作などという、常に、一方に立つ家臣はまた、

(この機に)

とばかり、信長に媚びて、甘言をすすめるため、主君と中務父子^{おやこ}の間は、なおさら濠^{ほり}を

深められた形となった。

二十日あまりの幽居のあいだに中務はしみじみ、自分の老いを知った。

君側には、柴田権六や、林美作などの、新しい勢力が興っている。

その力は若かった。

中務は、四十年の忠勤のつかれで、もうその人々と、闘う精はなかった。

だが、自分の老いを知れば知るほど——孤君信長の前途と、主家の将来は、強く案じられて来た。

なお、その老後の骨を、孤君のために、用いようとして、この二十日余りを、籠こもつていたのであった。

「お二方、お揃いで、ただ今お見えになりました」

用人の勘解かげゆ由が、やがてまた、彼の居間へ告げて来た。

「そうか。今参る」

と、答えておいて、中務は何か書きものをしていた。硯すずりの水も凍るような宵の寒さに、背を曲げて。

それは、きのうから、苦吟して書いていた、長い書面であった。きのう書いたそれへ、

また筆を入れて、謹厳に、清書しているのであった。

書院では、総領の五郎左衛門と次男の監物けんもつが、父の使いをうけて、何事かと来て、火鉢を囲んで待つていた。

「ご病気かと驚いた。不意に使いが見えたので」

監物がいうと、五郎左衛門は、顔を振つて、

「いや、わしはそうも思わなかった、いつぞやのことが、お耳にはいり、さてはお叱言こじごだなど、すぐ感じた」

「だが、あのことなら、もう二十日も前に、父上のお耳へははいっている筈。——急にお呼びつけになるからには、何ぞほかに、御用があつてのことだろう」

幾歳いくつになつても、父は怖い。兄弟は、父の姿の見えるまでが、待ち遠しくもあり、心配でもあつた。

三男の甚左衛門は、他国の縁家へ行つていたので、この宵には、来合わせなかつた。

「来たか。寒いのを」

父の中務は、やがて襖ふすまを開けて現われた。兄弟は、すぐ父の白髪と、めっきり痩せて来た面窶おもやつれに、眸を向けた。

「どこか、お体でも」

「いや、この通り、変りはないがな、お前たちの顔を見たくなったのだ。年のせいじやろ、時折、世のさびしみを、思うようになった」

「では、べつに何ぞ、急な御用というわけでも」

「そんなわけではない。久しぶりに、夕飯など共にして、鬱うきでも語ろうと思うたまでのことよ。はははは。まあ、寛くわげ」

平常と、変りはなかった。

外は、霰あられでもこぼれて来たのか、廂ひさしにたばしる音が聞え、燭しよくも、襖ふすまも、しんしんと冷えていた。

しかし、睦むつまじい父子の酒盛さかもりは、やがてその寒気も忘れさせていた。父が余りよい機嫌なので、五郎左衛門は、主君の御不興をうけたことについて父へ詫わびようと思いつつ云い出す折が見つからなかった。

そのうちに、膳も退さげ、席をも改めて、中務は好きな薄茶を一ぷく命じて、気軽に飲んでいたが、ふと、掌てにのせている茶ちや盃わんから思い出したように、

「五郎左、わしがそちへ譲った家宝の野分のわけの茶盃を、そちは人へ手放したときいたが、左

様か」

と、訊ねた。五郎左は、ありのまま、

「はい。家宝の名器と伺っておりますが、欲しい馬がございましたので、茶盃ちやわんを売り払って、馬を求めました」

と答えた。すると、中務は、

「そうか。よからう。その心がけがあれば、わしが亡ない後も、御奉公むき向に心配はない。よく売り払った」

叱言こごとかと覚悟していれば、かえってそれを、欣んでくれる父であつた。

「——だがの、五郎左」

中務なかつかさは、賞ほめておいて、屹きつと改まつた。

「茶盃ちやわんを売って、名馬を購あがなう、そちの心がけは、大いによいが、聞けば、馬場において、殿の卯月を追い抜き、君公から後に、そちの鹿毛かげをくれいと、お望み遊ばしたものを、そちは、お断りしたというではないか」

「そのため、実は、御不興をうけまして、父上にも、私のため、とんだ御迷惑をかけ、何とも」

「これ、待て」

「はッ」

「父のことなど、さておいてじや。なぜ君公の御所望に対して、物惜しみいたしたか」

「……………」

「いやしい奴め」

「……父上」

「なんじや」

「五郎左を、左様に御覧ごらんじなされますか。心外でござりまする」

「ではなぜ、折角、欲しいとお望みならば、信長公に差し上げてしまわぬか」

「生命いのちをすら——君公のお望みとあらば、いつなりと、差し出す覚悟をしておる侍の身、

何で物惜しみなど仕りましょう。——それに名馬を持つのは、私事の道楽ではございませぬ。一朝の場合、戦場で御奉公を尽そうためにござります」

「もとよりのことだ。それは分っているが」

「駒をさし上げれば、殿のお気には召しましょう。しかし臣下のそういう気持も無視して、ただ御自身の卯月より、逸いつそく足と見て、すぐお望み遊ばすわがままな御気性がてまえには、

口惜しゆうてなりません」

「……………」

「今の織田家が、危ういこと、てまえなど申すまでもなく、父上にはなおさらようくお分りでございましょう。——時折は、図抜けた御大器と思われるような場合もままございますが、所詮^{しよせん}、お幾歳^{いくつ}になられても、どうやらあのわがままと放縦な御気質は、天性かと嘆かれまする。あまりわれわれ家来達が、その御気性にはらはらして、わがままをお通し申すのも、忠義に似て、実はよくないことだと思っております。それゆえ、てまえもわざと、強情を張った次第でございます」

「いかん」

「いけませんか。てまえの心は間違っていたでしょうか」

「心底に忠義があっても、それではかえって、信長公の悪い御気性の方を、駆りたてておるようなものだ。——わしは、あの君様を、お乳^ちの頃からお抱き申し上げ、わが子のお前たちよりも多く、この手に抱いて、お育てして来た。それゆえ、よう御性質も分っておるが、自体、大器でいらつしやるだけに、細かい短所は人一倍お持ちでもある。そちが逆^{さか}つたことなどは、いわばその大器の御天性から見れば、塵^{ちり}ほどでもないことなのだ」

「そうでしょうか。申しては恐れ多うござりますが、わたくしも監物けんもつも、また家中の心ある士は皆、御奉公がいのない暗君と、嘆かぬものはありませぬ。——柴田権六、林美作まさかなどは、かえつてその暗君ぶりを、勿怪もつけの倖いと欣んでおりましようが」

「そうでない。……ひとは何といえ、わし独りはそうは信じられぬ。おまえたちも、飽くまで、あの君のままに従え。わしが亡い後は、なおさらのことぞ」

「その儀は、お案じなされますな。たとえ御不興をうけても何でも、節義にゆるぎはないつもりです」

「それ聞いて、安心した。——如何せん、わしははや老木、わしの接木つぎぎとなって、御奉公を尽してくれよ」

——後で思えば、その夜の中務の言には、思い当るふしが幾らもあつたが、五郎左も監物も、まさか父が死を決していたとは気づかず、やがて霰降あられる夜更けを帰って行つた。

平手中務の自害は、その翌朝、見出された。見事な自刃の姿であつた。

駆けつけた五郎左と監物の兄弟は、父の死顔から、何の心残りも苦悶の姿も見出せなかつた。

遺言は、昨夜の席で、生前の温い唇くちから聞いていた。遺族に対しては、だから何の遺書

もなかった。

ただ一通。

御主君へ――

と、信長へ宛てて遺書があつた。遺書はすぐ、城へ届けられた。

「何。爺じいが――？」

彼の死を聞いた時、信長の顔には、大きな愕おどろきが走つた。

遺書は長文で、言々句々が、中務の真心をこめた、苦諫くかんの文字であつた。

死をもつて、中務は、信長を諫いさめたのである。信長が天成の利器であることも、その長所をもよく知つている中務の諫言かんげんだけに、信長はそれを読んでゆくうちに、涙より先に、びしびしと、鞭打むちうちたれるような、真実の痛さを胸にうけた。

「爺よ。ゆるせ」

信長は、声をもらして泣いた。

中務に対しては、わがままの云いたい放題をいい、また、内外の苦勞をかけ通して来ただけに、君臣とはいえ、父以上な親しみを抱いていたのである。――たとえば今度のことなども、わがままを出しやすい彼へ、例によつて、知りつつわがままを振舞っていたのだ

った。

「五郎左を呼べ」

すぐ命じた。

やがて、五郎左が見えて、平伏すると、信長は席を立て、対坐になり、

「爺の云い遺^{のこ}したこと、一言もあまさず、信長の胸に沁^しみてぞ。終生忘れはおかぬぞよ。詫^わびは、それしかない。それしかない。……」

主君が臣下へ、手をつきかけたので、五郎左はあわてて、その手を取って拝み、君臣抱き合つて泣いていた。

その年、城下に一字^うの寺を建^{こんりゆう}立^{りゅう}した。爺^{じい}の菩提^{ぼだい}のために、という信長の発願からであつた。

「寺号を、何と名づけましょうか。開山の和尚に、撰^{せん}号^{ごう}の儀、お命じなされては如何なものか」

奉行が訊ねると、信長はかぶりを振つて、

「寺僧の名づくるよりも、爺は、わしがつける寺号をよろこんでくれよう。わしが撰^{えら}ぶ」筆を取つて、政^{せい}秀^{しゅう}寺とすぐ書いた。

ひらてなかつかさまざひで
平手 中務政秀 の名のりを、そのまま取ったのである。

その後。

何か思い出すと、信長はよく唐突に、政秀寺へ行つた。行つても、回向したり、読經の僧と共に坐っていることなど、滅多にない。

「爺よ。爺よ」

つぶやきながら、寺のあたりを一步きして、ぷいと帰城してしまうだけだった。そうした感情が、時には、狂人じみて現われることすらあった。

鷹狩の折、突然、小鳥の肉を引つ裂いて、

「爺ッ、爺ッ。信長の捕つた獲物ぞ。これを受けよ！」

と、虚空へ向つて、投げつけたりした。

また、川狩の日に、いきなり足で川水を蹴上げて、

「爺ッ。成じようぶつ 仏まな せよッ」

と、叫んだ声や眼まなざしのただならぬ烈はげしさに、家臣たちが、呆あつ気けにとられたこともあった。

茨を拓いばらひらいて

弘治こうじ元年。

信長は二十二歳となつた。

その年の四月、信長は、一族の織田彦五郎おだひごろうと乱かを醸かもして、彼の居城、清洲きよすを攻め、占領後、那古屋なごやから清洲城へ移つた。

やつたな！

藤吉郎は、ひそかに、そう思つて、信長の手際てぎわを見ていた。

右も茨いばら。左も茨。

孤君信長を繞めぐつて虎視眈々こしたんたんな一族がたくさんいた。それが、叔父だの兄弟だの身寄りだのという者だけに、荊棘けいきよくを拓ひらくのも、敵以上であつた。

家柄からいえば、清洲の織田彦五郎は、織田一族中の宗家そうけだつた。しかし宗家の彦五郎は、信長を、

（油断のならぬうつけ）

と、警戒していた。そして事々に圧迫を加え、信長の自滅を計つた。

清洲城には、その前から守護家の斯波義統しばよしむねが養われていた。義統の子義銀よしかねと、義統とは、信長に同情をもっていた。

それが、発覚したのである。彦五郎は、怒って、

「恩知らずの見せしめ」

と、守護家を斬ってしまった。子の義銀は、信長の所へ逃げて行った。

信長は、義銀を、那古屋の天主坊へ匿かくまつて、その日に軍馬を催して、清洲城へ殺到したのである。

「守護家を奉じて」

と、彼は将士を鼓舞した。

名のない戦いくさはしない。まして宗家を攻めるには、義と名分の旗じるしが要いる。――が彼は、その機会に荊棘けいきよくの一方を、やつと切り拓ひらいたのであった。

那古屋城へは、叔父の信光を、自分の跡に入れておいた。

が、何者にか、信光は暗殺されてしまった。

「佐渡、そちが行け。那古屋はそちららでは、信長に代って、留守する者はない」
林佐渡守へ、命が下った。

「身命をもつて」

と、おうけして、佐渡は那古屋へ赴いて、城代の任に就いた。

心ある家臣は嘆いた。

「ああ、やはり暗君はやはり暗君でいらせられる。——時折は、ぎよつとするような御

英氣の閃きをお見せあるかと思えば——あの林佐渡守などを、お信じあるようでは……」

事実、佐渡の行動には、怪しいふしが多かった。

信長の父が生きていた頃は、彼も無二の忠臣といわれたもので、そのため、先代信秀

から、平手中務と共に、遺子をたのむぞ、と死後を託された一人だったが、その信長

の放縦と、つかまえ所のない天性に、見限をつけてしまったものとみえ、専ら、信長

の弟信行と、その母堂のいる末盛城へ近づいて、折もあらば、信長を廃嫡し、信

行を主君の座に立てようと意図している男だった。

「殿には、佐渡の気ぶりを、ご存じないのであろうか」

「ご存じあれば、よも那古屋の城を、お預けにはなるまい」

眉をひそめて、憂いあう家中の者のささやきを、藤吉郎も、一度や二度でなく耳にした。

が、藤吉郎は、

（はてな。こんどの寸法は、どう遊ばすお考えかな？）

とは思ったが、他の家中のような心配は、すこしも抱かなかつた。

清洲の城で、いつも明るい顔は、孤君信長と、御小人仲間おこびとにいるひとりの草履取だけだった。

信長を、天性のうつけと見た先入観は、家臣の一部でも、なかなか脱ぬけなかつた。

林佐渡守、弟の美作みまさか守、そして柴田権六勝家などの重臣が、それだった。

「何。美濃の斎藤さいとう道三どうさんのと、智舅むじゅうの初対面をなされた時の信長公の仕方は、なかな

か平常のうつけとは違っていたとか。——はははは。あれはうつけの紛まぐれ当あたりというもの。

先が儀式張ってござったところへ、こちらが恐いもの知らずの無法と出たので、さすがの舅おやうぢのもの、度胆を抜かれたまでのことよ。例にもいう。莫迦ばかにつける薬はないとな。その後の事々、御行状、どう眺めても、救いはない」

柴田権六などの観察はわけても徹底していた。所詮しよせん、将来性はないときめているので、そういう放言も、次第に大びらになつていた。

その点で共鳴している林佐渡が、那古屋の城代になると、権六勝家は足しげく、那古屋へ往来した。そしていつか其処そこは、陰謀の苗床ひょうしょうとなつていた。

「よいのう、雨夜は」

「かえつて、茶には、^{ひと}一しおの趣^{おもむき}を添えて」

茶によせて、佐渡と権六は、城内の庭木に蔽^{おお}われた狭い一室にさし対^{むか}っていた。

梅雨^{つゆ}すぎだったが、まだはつきりしない夕空から、雨がこぼれ、青梅の実^みが、たまたま、

ぽとツと地に落ちた。

「あすは霽^{あが}りましょう」

梅若葉の下から、佐渡の弟の美作^{みまさか}守^{のかみ}が独り語のようにいった。燈籠^{とうろう}へ灯^ひを入れに

出たのである。

「……………」

灯を入れた後もしばらく、美作はそこに佇^{たたず}んで、四辺^{あたり}を見廻していた。

やがて、離れへ戻つて来ると、声を低めて、

「異状はございませぬ。家来どもも遠ざけてござりますゆえ、お心おきなく」

と、兄と権六へささやいた。

権六勝家はうなずいて、

「では、早速、本題にかかろうか。——実はきのう密^{ひそ}かに、末盛城へ伺つて、親しゅう御

母公様にもお目にかかり、勘十郎かんじゅうろう信行様とも、談合して参った。……で後は、其そこの心ひとつときまつたが」

「御母公には、何と仰せられてか」

「それはもう、異議のう御同意じや。何しても、信長公よりは、信行様のほうが、お可愛くてならぬお方じやて」

「ふム……。然らば、御舎弟信行様にはもとより御決心か」

「佐渡や権六が起つならば、織田家のため、信長公へ弓をひいても、是非あるまいと」

「専ら、お許もとが説いたのでござろうが」

「それや何しても、相手が御母公やら、気の弱い信行様のこと。そう油をかけて力説せねば、動くはずもござらぬ」

「いや、おふた方さえ、承知とあれば、名分は充分にある。信長公の暗愚を憂い、お家の末を案じている家臣はわれらのみではない」

「尾張一国のため、織田家百年のため。——と、まず旗じるしはそれでよいが、軍備は」

「折もよし、那古屋へ移されたので、それも手早う進んだ。鼓つづみを鳴らせば、いつなりと」

「そうか。……では」

権六が、一膝前ひとひざに、身を揺り出した時だった。

ばらツ、と大地に何か音を立てて落ちた。

二ツ三ツの青梅の実み。

雨は小やみであつたが、雨以上のしずくが、風のたび廂ひさしを打つ。

——犬のような人影が、床下から這い出していた。今の梅の実こずえは、梢から落ちたのでなく、その男が床下から頭だけ出して抛ほうつたのである。

室内の眼が、それへ振り向いて、気を休めた隙に、忍びの者らしい男の影は、もう風と闇まぎの中に紛まぎれていた。

忍びの者は、城主の目であり耳であり足であつた。

出るにも退ひくにも家臣に取りまかれ、城にばかり暮している城主なる者は、皆忍びの者を使う。

信長の側にも、そういう術わざに長たけている男がいた。しかし、誰がその役目をしているか、近侍にも分らなかつた。

草履取は三名いた。お小人組に属しているが、役目がら小屋を別にして、お庭近くに三名だけで交代勤めをしている、一人は又助またすけ、一人はがんまく、一人が藤吉郎だった。

「がんまく、どうした？」

藤吉郎は相役のがんまくに、友誼ゆうぎを尽して交際つきあっていた。がんまくは、蒲団をかぶって寝ていた。何ぞという、よく寝てばかりいる男だった。

「……腹が痛い」

がんまくは、顔も出さずに云った。藤吉郎は、夜具の襟を引っ張って、

「嘘をいえ。御城下まで出たついでに、美味うまい物を買って来たから起きろよ」

「なんだ」

がんまくは、首を伸ばしたが、騙だまされたと分ると、また夜具をかぶって、

「ばか、病人をからかうなよ。あっちへ行け。うるせえ」

「起きてくれ。兄貴。ちようど又助がいから、訊きたいことがあるんだ。折入って」
がんまくは、渋々起き出して、

「折角、ひとが寝ているのを」

口叱くちごと言を呟つぶやきながら、裏へ出て、奥庭の泉水から流れてくる水で、含嗽うがいしていた。

藤吉郎も尾ついて出た。小屋の中は鬱陶うつとうしいが、清洲城の奥なので、あたりは幽邃ゆうすいだし、遠くは城下を見晴らしているし、心までが大きくなった。

「なんだ、俺に訊きたいことというのは」

「ゆうべのことだが」

「ゆうべ」

「とぼけても、藤吉郎は知っている。那古屋へ行つたろう」

「え」

「お城へ忍んで、御城代の林佐渡や柴田権六の密談を、探つて帰つて来たのだらう」

「おい、おい。猿。……滅多なことをいうなよ、滅多なことを」

「じゃあ、ほんとのことをいつてくれ。友達の仲で水臭かろう。わしは疾とうから感づいていたが、黙つて、おぬしの挙動を眺めていたのだ。おぬしは、信長公の忍び役と見たがどうだ」

「藤吉、……お前の目に会つちやあ敵かなわない。知つていたのか」

「一つ釜の飯を食っているおぬしのすることを、知らないでどうするものか。——信長公はわしにとつても大事な御主人だ。蔭ながらわしらでも、案じられることもある」

「訊ねたいとはそのことか」

「神かけて、他言はせぬ。がんまく、わしを信じてくれ」

がんまくは、そういう藤吉郎の顔をじつと見ていたが、

「よし打ち明けてやろう。だが昼は人目につく、折を待て」

その後、がんまくの口から、彼は、織田家の内情について種々な知識を得た。そして主人信長の境遇に、理解と同情をもつて、よけい奉公の真^{まこと}を尽した。

けれど藤吉郎は、そうした陰謀家の家臣の中にある若い孤君の将来を、少しも危ぶみはしなかった。先代以来の老臣も重臣も、信長を見捨てかけていたが、まだ召し抱えられて年月も浅い藤吉郎のみは、深く信長に信じているものがあつた。

（ここを、わが殿は、どう切り拓^{ひら}いて行かれるだろうか）

と、身分の低い彼は、ただ遠くから祈る気持で眺めていた。

その月の末頃だつた。

いつものことで、多くの家来も従^ついていなかった。

信長は、突然、駒を曳き出させて、城外へ遠乗りに出た。

清洲^{きよす}の城下から、守山^{もりやま}まで、その間、約三里程である。彼はいつも、朝飯前に、飛ばして帰って来る。

が——その日は、先頭の信長の馬首は、守山へは向わないで、城下の十字街道から東へ

向つて駈け出した。

「やッ。殿には？」

「どこへ行かれる気——」

続く家臣の五、六騎は、また、出しぬけを喰つて、あわを喰いながら、後を追いかけていた。

徒士かちの者や、草履取は、当然途中でこぼれてしまう。

だが、がんまくと藤吉郎の二人だけは、遅れながらも、必死に飛んで、信長の駒から捨てられまいとした。

「すわ！ 事だぞ」

と、二人は互に、眼顔を見合つて、ぬかるなと励まし合つた。

なぜならば信長の馬首は、那古屋なごやへ向つているからである。藤吉郎はがんまくから、深い内情を聞いている。そこは信長を亡き者にして、弟の信行を擁立しようとしている陰謀の府ではないか。

何をしでかすか知れない信長が——何が起るか測り難い危地はかへ、——向う見ずな駒を飛ばして行くのである。

これほど危険なことはない。

「一大事」

と、がんまくや藤吉郎が、心のうちで、大變を予期したのも無理ではなかった。

だが、より以上、驚いたのは、彼の唐突な来訪をうけた、那古屋城代の林はやしきどのかみ佐渡守と、弟の美みまさか作だった。

あわただしく、本丸の一室へ駆けこんで来た家臣が、

「殿、殿、——はやく、お出迎えにお立ちなされませ。信長公のお越しにござりますぞ」と、告げても、

「何、何じゃと？」

耳を疑つて、起とうとはしなかった。——

まさか！ という氣持が邪魔していた。

「騎馬で、ただ、四、五騎のお供衆をつれたのみで、大玄関まで、いきなりお乗り着けなされました。——何か、高声で、お供衆と笑つておいでなされました。ともあれ、お早くお出迎えを」

「これこれ。まこと真か」

「はッ、はッ」

「信長公が、お越しあそばしたというのか」

「御意にござります」

「すりや大変じゃ」

佐渡守は、なぜということもなく狼狽ろうばいした。顔いろまで、さっと変った。

「弟、……何事じやろう」

「ともあれ、お迎えした上で」

「そうだ。早く来い」

大廊下を、急いで行くと、もう玄関の方から、活潑な足踏みを踏み鳴らして、信長は通つて来るのだつた。

「……はッ。これは」

林兄弟は、彼の前を避けて、ひたと廊下に平伏した。

「やあ、佐渡。美作みまさかも達者か。守山までと思うたが、どうせのことなら、先に茶のある那古屋にせいと、遠乗りの目当てに駈け参った。——辞儀など、重々しゅう、飾らずともよい。早く、茶を出せ、茶を出せ」

云いすてると、勝手を知った本丸の第一の間の上段に坐り、後から息を喘せいて追いついて来た家臣たちを顧み、

「暑いのう。暑い暑い」

と、駄々っ子のような扇使いして、襟えりに風を入れていた。

茶を。菓子を。

お褥しとねを――

と、出す物も、後あとや前さきに、城内の者は、慌あわて合う。

何しろ不意過ぎる。

林佐渡と美作の兄弟は、倉皇そうこうとして、信長の前へ、挨拶に出たが、侍女や家来たちの慌ひるどきてぶりを、見ていられない顔して、一度、中坐して退つて来た。

「午刻ひるどきでもあるし、遠乗りの御空腹もあらうで、すぐまた、お中食ちゆうじき――と仰せ出されるかも知れぬ。早く厨くりやの膳部の者へ、料理の手廻しを、申しつけておけい」

佐渡が、そう吩咐いいつしていると、弟の美作守が袖を引いて、

「兄上、――あちらで柴田殿が、ちよつとお顔を拝借したいと申されていますが」と、囁ささやいた。

うなず
頷いて、佐渡も小声に、

「うむ。今参る。……そちも先へ行つておれ」

と、いった。

その日も、柴田権六勝家は、那古屋城へ来ていたのである。何か密談をすました後、さて、帰ろうかと立ちかけたところへ、突然、主君信長の来臨という玄関の騒ぎに、出てはまずいし、帰ることもできず、度を失つて、小書院の隠れ座敷へあわててはいり込んでいたものだつた。

そこへ美作が来、林佐渡も後から来て、三名、ほつと吐息をつきながら、額を寄せ合つた。

「だしぬけだ！……いや驚いたな」

「何かにつけて、この調子だから、定^{じようせき}石で行くと手が狂う。およそ、何が測^{はか}り難いというて、うつけ者の出来心ほど怖いものはない」

「それじゃて」

と、権六勝家は、眼で奥を指しながら、

「あの喰えぬ舅^{しゆうとこ}御、山城守道三^{やましろのかみどうさん}ともある老獐^{ろうかい}なお人まで、嘴^{くちばし}の青い殿に、煙

に巻かれたといういわれは——」

「そうかも知れぬ」

「兄上……」

と、美作は先刻から、眉に険しい色を湛えて、辺りへ気を配っていたが、さらに、声をひそめて、

「今も咄嗟に、権六どのと、申し合わせたことでござるが、いつそのこと！……」

「何。いつそのこと」

「お供も、僅か五、六名で、突然お越しあられたのは、いわば天の与えた絶好な機会ではござるまいか」

「殿をか？」

「そうです。——お中食を差し上げている間に、武者隠しへ、腕ききの者を忍ばせ、てまえ御給仕に出ますれば、合図と同時に、信長公を」

「もし、仕損じては」

「何の、庭面、廊下、到る所を、人数をもつて取り囲ませ、多少の傷負を出しましょうとも、眼をつぶつて刺し奉る臍を決めてかかれば……」

権六も云い足した。

「どうじゃ、佐渡殿」

さすがに林佐渡は——じつと俯向きこんでいたが、権六と美作のつよい眸に圧されて、

「ウム。……寔^{まこと}、今が、つかめと与えられた機会かもしれぬ。では」

「御決心か」

眼と眼を見合わせて、三名が、膝を立てかけた時だった。

ずしずしと、力のある足音が、廊下を踏んで来たかと思うと、塗ぼねの大障子をさっと開けて、

「やあ、ここにおったか。佐渡、美作。茶ものんだ、菓子も喰うた。はや立ち帰るぞ」

——あつと、立てかけた膝を縮めて、三名は、居竝^{いすく}んでしまった。

信長は、その中にいる権六勝家の姿へ、じつと目をつけた。

「ほ。……権六じやの」

信長は歩み寄って、平蜘蛛^{ひらぐも}のように手をつかえた権六勝家の、頭の上から微笑^{ほほえ}んでいつ

た。

「儂^みが参る時に、そちの乗馬によう似た栗毛が、駒繋ぎにつないであつたが——やはりそ

ちのものであったか」

「はッ……。来合わせてはおりましたなれど、御覧のごとく、平常の汚い身装をいたしおりましたゆえ、君前に罷り出るも、不作法と存じ、わざとこれに差し控えて」

「はははは。存外、洒落男よのう。信長を見よ。かような粗末じゃ」

「恐れ入ります」

「これ——」

冷たい扇子の塗骨ぬりぼねが、権六の首すじを櫛くすぐるように、軽くたたいた。

「君臣の仲じやに、身なりがどうのと、儀式に囚とらわれた遠慮、水くさいぞよ。——一にも儀式、二にも儀式。あれは都の公方くぼう殿のすることよ。織田は田舎いなかざむらい侍でいい」

「以後。以後は……」

「どういたした、権六。顫おのいてるではないか」

「かえつて、御意に逆さからいましたかと、恐縮の余りに」

「はははは。許す、許す。もう顔を上げい。——いや待て待て、儂みの革足袋かわたびの紐ひもが解けておる。権六、ついでに結んでくりやれ」

「……はッ」

「佐渡」

「は」

「邪魔をいたしたのう」

「滅相めっそうもないおことば」

「したが、信長のみならず、四隣の敵国の客は、いつでも不意に来るものぞ。心して、留守をせよ」

「朝暮、心いたして、弓矢を磨みがいておりまする」

「そうか。頼もしい家来どもを持って、信長は安心。——いや信長のためばかりではない、まちがえばその方どもの首もないのじゃ。権六、よいか」

「お結びいたしました」

「大儀」

信長は、まだひれ伏している、三名の後ろを開けて、中廊下から玄關の方へ、大廻りして出て行った。

「……………」

柴田権六と、林佐渡、美作の三人は、真まつ蒼さおな顔を見合って、一瞬、茫然としていたが、

われに回ると、あわただしく、信長の後を追いかけて、再び、玄関の式台に平伏した。

——が、信長の姿はもうそこには見えない。

大手門の方へ降つてゆく幅の広い坂道の辺りに、ただ戛々と、蹄の音だけが聞えていた。

いつも置き捨てをくう近侍たちは、また不覚を重ねぬように、帰りは信長に続いていたが、小者の中の、がんまくと藤吉郎のふたりだけが、かなり遅れて、後から駈けて行つた。

「がんまく」

「おう」

「よかつたな」

「よかつた」

遅れはしたが——しかし二人は不覚とはしなかった。嬉々として、主君の姿を、先に見ながら急いでいた。

もし何らかの、兇事でも起つた場合は、すぐ清洲城へ変を知らせて——と、二人は密かに謀し合わせ、二の丸の狼煙山へ上つて、いざとあれば、狼煙番を斬り殺した上、そこから煙を上げる考えだったのである。

名塚なつかの砦とりでは、信長の手足の一部である。一族の佐久間さくまだい大学がくに守らせてある。
その年の八月だった。

まだ夜も明けぬ頃。——初秋の眠りごこちを、砦とりでの者は、不意の軍馬に驚かされて匆はね起きた。

敵は？——意外にも日頃の味方だった。

「那古屋衆の、謀叛むほんと見ゆるぞ。柴田権六の兵千人。林美作みまさかの人数七百ばかり。——不意を襲よせて来おった！」

物見やぐらで、誰かどなった。それすら、深い霧の中である。

ここは手薄。

一騎、二騎、霧を衝いて、すぐ清洲の本城へ、知らせに飛ぶ。

信長は、まだ眠っていた。

が——寢所へその注進が伝わると、彼はすぐ、具足を纏まとい、槍を把とって、城門まで駈け出して来た。

彼の後には、誰もまだ続いて来なかった。

すると、ただ一人。

信長より先に、大手の唐橋門からはしもんのそばに、駒を曳いて、待ち構えていた雑兵があつた。

「——お馬を」

と、その雑兵は、信長の前へ、駒を寄せて云つた。

信長は、意外な顔した。

自分より早い奴がいたことに驚いたらしいのである。

「誰だ？ そちは」

と、訊いた。

雑兵は、陣笠を脱とつて、ひざまずきかけた。信長は、もう鞍の上に在つて、

「それには及ばん。そちは、誰の手の者であるか」

といった。

「お草履取の、藤吉郎にござりまする」

「猿か」

信長は、また呆れた。

庭使いの草履取など、出陣の場合に、先駆けして来る筋のものではない。見れば、粗末

な物であるが、胴や脛^{すねあて}などともつけ、雑兵笠をかぶっている。——その氣負った姿が、信長には愉快に見えた。

「合戦に参る気か」

「お供、仰せつけ下さいまし」

「よし、ついて来い」

信長と彼の姿が、朝霧の中へ、二、三町も遠く淡^{うす}れて行つた頃、大手の橋を鳴り轟^{とどろ}かせて、二十騎、三十騎、五十騎——そして四、五百名の兵がどつと、霧を黒くして追いかけて行つた。

名塚^{なつか}の砦^{とりで}の者は、必死に防戦していた。信長は、単騎、寄手の陣の中へ駈け入つて、
「儂^みに弓を引く者の面^{つら}見せい。信長はこれにあるぞッ。——佐渡、美作^{みまさか}、権六^{ともがら}の輩。何ほどの力やある。何ほどの思慮やあつて儂^みに叛^{そむ}くッ。わが前へ来つてその太刀振りを見せ
いッ」

彼の声は、怒っていた。その大きな声は、寄手^{とぎ}の鬨^{こえ}の声を消した。

「不忠の臣ども、信長が成敗してくる。逃ぐるも不忠ぞ！」

林美作は、その声に恐れをなして逃げ出した。どう考えても、信長の声と思えなかった。

雷鳴^{かみなり}に追われているような心地だった。

彼の待^たみとする将兵たちにも、主君というものに対しては、先天的な観念がある。

——直接、信長の姿、信長の声、しかもその峻^{しゅん}烈^{れつ}な威風に駈^{はな}けちらされると、手も槍も出なかった。

「待てッ。逆賊」

信長は、逃げる美作^{みまさか}を見つけ、馬上から槍で突き刺した。

そして、血ぶるいしながら、美作の兵へ向って、宣言した。

「主を討つても、そちらは主とはなれぬ身ぞ。叛逆の徒に操^{あやつ}られて、百世の汚名を残さんよりは、謝して、信長の馬蹄の前に悔いよ。悔ゆる者は、助けおく」

左翼の陣が崩れ、美作が討たれたと聞くと、柴田権六^{ごんろく}は陣を消して、末盛城^{すえもりじょう}へ逃げこんでしまった。

末盛城には、信長の母公がいる。また、信長の弟、信行がいる。

「どうしようぞ」

敗軍を知って、母公は泣きおののき、信行は戦慄した。

逃げ帰った叛軍^{はんぐん}の将、柴田権六は、

「この上は、身に代えて」

と、頭を剃^そり、鎧^{よろい}をすてて、法衣^{ころも}になった。

そして、林佐渡と同道して——母公と信行をも連れて——翌日、清洲の城へ、謝罪に出た。

唯一の力は、母公の詫言^{わびごと}であつた。母公は、佐渡と権六から云いふくめられている通りに、信長へ三人の助命をすがつた。

信長は、案外、怒っていないかつた。

「免^{ゆる}します」

母公へ、あつさり云つて、それから、背に汗をして平伏している柴田権六へ、

「坊主」

と、呼んだ。

「……は」

「権六勝家ともある者が、なぜ頭など剃^そりこぼちたか。慌^{あわ}てた奴」

苦笑して——また、佐渡へ、

「そちもだ」

と、やや屹きつという。

「年がいもない奴のう。平手ひらてなかつかさ中務なかつかさの亡き後は、そちをこそ、片腕とも頼んでいたに。——今となれば、中務を死なせて口惜しゆう思う」

信長は、落涙して、しばらく黙っていたが、

「いやいや、中務を自害させ、そちをも、謀叛人むほんにんにいたしたは、皆、信長が不徳というものじゃ。——信長も以後はふかく反省しよう。そちたちも、儼みに仕えるものなれば、ふた心など持つな。武門に生きる効かいもあるまい。——武士は一道か、牢人ろうにんかじゃ」

佐渡は、眼が醒さめた。

信長の真のすがたを、今初めて仰いで、その天質をやつと知ったのだった。

ただ、恐ろしい心地に打たれた。身の程も恐ろしかった。かたく、忠勤を誓って、顔も上げ得さずに退さがった。

——が、骨肉には、かえって、分らなかつたとみえる。弟の勘十郎のぶゆき信行は、信長の寛大を、むしろ見縊みくびって、

「母がいるので、乱暴な兄も、わしをどうすることもできぬのだ」
と思つた。

母公の愛と、盲目にかくれて、信行はその後も、陰謀をやめなかった。

信長は、嘆じた。

「信行の悪戯わるさは、悪戯として、放ほつておいてもよいが、そのため、幾多の家士が、逆徒となつて、武門の身を過あやまる。骨肉なれど、家のため、家臣のため、眼をつぶらねばなるまい」
機を見て、信長は遂に、信行を捕えてこれを刺してしまった。

もう信長を、暗愚と見る家臣はなかった。

いや、むしろ近頃では、彼の明敏と鋭利なひとみに慍しやうふく伏ふくしすぎて、信長自身、

「ちと、くすりが利ききすぎた」

と、時には、苦笑を覚えるくらいなものだった。

しかし、信長の準備は、できていた。彼は毛頭、家臣や骨肉を偽るために、暗愚を装っていたわけではなかった。

父信秀の死後、自分が一国を負つて、四隣の敵国へ。

——よし。いつでも。

という構えができるまでの安全弁べんに、自己の偽装を用いていたのである。敵国はかを謀るために、自領の中に無数に入り込んでいる密偵を計るために——周囲の肉親をも家臣をも、

思い込ませて来たのだった。

が、この間に、信長は人間の表裏と、社会の機微とを、より多く学んだ。彼が年少から名君らしい名君であつたら、それは誰も用心して、露骨に示さなかつたに違いない。

ほうこういつしん
奉公一心

「猿、すぐ来い」

御小人頭おこびとがしらの藤井又右衛門ふじいまたえもんは、あたふた駈けて来て、小屋の内に休息している藤吉郎を呼びたてた。

何事かと、

「は、御用で？」

藤吉郎は、すぐ出て来た。

「お召しじや」

「え」

「殿様が、ふいに、其方そなたのことをお訊ねなされて、呼んで来いという仰せ。——何か貴様、

お叱りでも受けるような覚えはないのか」

「べつにございせんが」

「ま、早く来い」

又右衛門は、彼を促すと、思いがけない方へ、先に立つて行つた。

信長はその日、何思つたか、城内の兵糧倉から台所を一巡して、なお、薪倉炭倉などまで、検分して歩いていた。

「召し連れて参りました」

又右衛門が、信長の歩行の横へ額ぬかずいて、こう告げると、信長は足を止めて、

「あ、連れて来たか」

と、彼のうしろに控えている藤吉郎の姿に眼を止め、

「猿、前へ出い」

と、いった。

「は……」

「今日からそちを、台所役人に取り立てて得させる。よいか、台所で働けよ」

「ありがとうございます」

「台所方は、雄々しゆう、檜先の功名もならぬところじやが、戦場の華々しい場所よりは、わけて大事な陰の守りぞ。いうまでもないが、精出して勤めい」

即座に、彼の地位と扶持は、今までより一段、昇格した。台所役人といえ、もう御小人組ではなかった。

けれど、台所方へまわされることは、その頃、侍の恥か、落ち目のように思われていた。
——あいつも遂々、お台所へ落ちて行つた。

という風に見られて、そこは戦場や表方では、使い途にならない人間の捨場のように、蔑視されていた。

御小人、中間の端でも、

——台所の者。

といえ、軽く見られるし、若い者にとっては、出世の機会も、将来性もない所だけに——組頭の又右衛門は、退つて来ると、藤吉郎へ同情して、慰め顔にいつた。

「猿、つまらないお役目にまわされて、不足だろうが、その代りに、お扶持が増されたから、まあまあ出世としなければならぬまい。お草履取なら、身分は軽くても、御馬前で働く時もあるので、末は楽しみだが、その代り生命がけの御奉公も、覚悟せねばならぬ。お台

所にいれば、生命の心配はまずないからのう。二ついいことはないものじやて」

慰めれば、慰められて、はいはいと頷いていたが——しかし藤吉郎自身には、少しもそんな不服は見えなかった。

むしろ、彼は信長から、望外な見出しに預かったことを心から感激しているふうだった。さて、彼が台所方の職に就いて見ると、第一に、その薄暗いことと、陰湿なことと、不潔なことが、目についた。

昼間でも、太陽を忘れているような、生気のない膳部番や、料理人や、老いたるお賭頭が、十年一日の如く、昆布の煮出し汁のにおいの中に住んでいる。

「これはいかん」

藤吉郎には、耐えられないものがあつた。彼は、陰気が嫌いである。薄暗い——生気がない——そういう空気はすべて嫌いだった。

「そこらの壁へ、大きな窓を切つて、風と太陽を、いっぱいに入れたいものだな」

そう考えたが、台所方には台所方の組織もあり、古顔の上役もいて、その仕事一つも、実行はむずかしく見えた。——藤吉郎は、毎日、商人が納品する鰹節の蝕いを調べたり、椎茸や干瓢の記入などを、黙々とやっていた。

お城の台所方へ出入りする御用商人^{あきんど}達は、藤吉郎の係になってから、すっかり調子がくだけて来た。

「どうも、旦那のように仰つしやられると、良い品を、お安く持つて来ずにいられなくなりますよ」

「まったく、木下様にかかつては商人も跣足^{はだし}ですよ。乾物でも、干魚でも、穀類でも、時の相場はよくご存じだし、品物にお眼は鑑^きくし、手前どもを、欣^{よろこ}ばせて、安くお仕入れになることはお上手^{じょうず}だし……」

と、皆いった。

「ばかを申せ」

藤吉郎も、笑つていう。

「何も、わしは商人じゃなし、上手も下手^{へた}もあるものか。わしの利得になることではあるまいが。——ただ、そちたちのお納めする品はみな御家中方の口に入るものだ。命は食よりと申す。このお城の命は、つまるところ、お台所から上げる食物の如何にある。——少しでも良い物を上げることが、われわれの御奉公というものじゃ」

また。

折には、そうした商人たちに、茶など飲ませて、打ち寛くつろぎながら、雑談の中で説いた。

「お前らは、商人だから、御納品を運ぶたびに、すぐにこの一車で、幾らの利得と——利得を離れたことはあるまいが、もし敵国のために、お城が亡びたら何とする。長年の懸かけだ代金いきんは、元も子も失うばかりか、他国の大将が、城主となれば、他国から従ついて来た商人が、取って代って、お前らの商売まで奪ってしまう。——こう考えたら、何よりも、御当家の礎いしずえを根として、われわれもお前方も、枝や花と茂って、子孫までも共に栄え、利得することを考えずばなるまい。——だからお城へ納める品で、不当に儲もつけようなどという考えは、慾が小さいぞ」

それからまた、彼は、おまかないがしら頭まかの老人にも、誠意をもって仕えた。分りきったことでも、老人の意見を問ひ、気にそまぬことでも、一応は服従して、老人の顔を立てた。が、当然、仲間の一部には、

「目まぐるしい奴だ」

「何にでも口を出しおる」

「働きぶる猿」

などと陰口もあり、彼を、退のけもの者にしようとする気配もあった。

自分が、一つの波として起る場合、どこにでも、波にぶつけて来る波はある。藤吉郎は、ほとんど、そういうものには、無関心な顔つきだった。

まかないがしら
賄頭 と相談して、信長にまで申し出た台所方の改築は、許可された。

彼は、大工をさしずして、天井には風入れを明け、壁には大きな窓を切らせた。下水、その他、彼の理想どおりに改築した。

守護職しゅごしよくの斯波家しばけが住んでいた時以来——何十年という間、昼間も燈明で煮物するほど暗かった清洲城きよすの大台所に、朝も夕方も、かんかん太陽が映さしこんだ。爽やかな風がふき通した。

「物が早く腐すえる」

とか、

「塵ちりが目立つ」

とかいう苦情にも、彼は、耳をかさなかった。

清潔になった。

無駄が目に見えて来て、無駄がなくなつて来た。

総じて、一年も経つと、ここも、彼の性格そのまま、明るく風通しよく、活動的な機能

を持つ所と變つて來たのである。

すると、その年の冬。

今までの炭薪奉行、すみまき村井長門守むらいながとのかみは免役めんえきになつて、その跡役へ、藤吉郎が奉行に任じられた。

なぜ、長門守が、役目を罷めやさせられたのか。

そしてなぜ、自分が、炭薪奉行に登用されたのか。

藤吉郎は、信長から任命されると、同時に、それを考えてみた。

「ははあ、炭薪の費えついをもつと節約せよとお旨むねだな。いや、そのお旨は、一昨年から出ているが、村井長門の節約ぶりでは、お氣に召さぬのだな」

で——彼は、広い城内の炭火のある所、薪まきを使用している所を、新奉行として、限くまなく見て歩いた。

御用部屋、控部屋ひかえ、書院、詰の間つめ、奥、お表、どんな所にも、冬は火の氣があつたし、大きな炉ろも切つてあつた。

わけて、小者部屋だの、若侍たちの屯たむろには、山のように木炭を炉ろにあけて、冗費じようひしていた。

「木下殿だ。木下殿が見えた」

「なんだ、木下殿とは」

「新たに、炭薪奉行になつた木下藤吉郎殿。むずかしい顔して、見廻りに来たぞ」

「あ、あの猿か」

「灰をかけておけ。灰を」

若侍たちは、あわてて灰をかぶせたり、黒いのを、火消し壺へ入れたりして、仕すました顔していた。

「やあ、お揃いだな」

藤吉郎は、そこへ来ると、連中のあいだに割りこんで、自分も炉へ手をかざした。

「こんど、不肖藤吉郎が、炭薪奉行を仰せつかりました。どうかよろしく」

「や、それはどうも」

若侍たちは、むず痒い顔をし合つた。藤吉郎は、炉に挿してある大きな金火箸を持って、「ことしの冬は、ひどくお寒いではないか。このように火を埋けこんでおいては、手先ばかりで、体が温もらぬ」

と、自分で赤い火を掘り出して、

「そちらの炭籠の炭を、もつと存分に、つごうではないか。それから、今までは、一部屋について、一昼夜炭何貫と、お定めがあつたそうだが、火の気の儉約は、寒々しい。十分にお使い下さい。そしていちいち部屋頭がしうちのお手判だの、何だのと、面倒な手数も御無用、お要用いりようだけ炭倉へ取りにお越しく下さい」

足輕や中間の小屋へ行つても、藤吉郎はその調子で、節約節約と、従来、やかましくのみいわれて、萎縮いしゆくしていた人々へ、大いに炭薪を使うことを、奨励してまわった。

「こんどの奉行は、いやに大まかじゃないか」

「察するところ、猿殿、一躍炭薪奉行に引き上げられたので、すっかり気を好くしてしまい、気前を見せているつもりだろうが、猿の上調子に乗ったりしていると、今にこつちまで、飛んでもない御叱責をくうかもしれないぬぞ」

いくら寛大に放任しても、炭薪の使用などには、おのずから限度がある。家中の心理は、むしろ自誡じかいして、その限度は出なかった。

清洲城の一年間の薪炭の使用料は、約千石の余を超えていた。領内の伐木ばっぼくの面積だけでも、年々多大の量を灰にするので、その支出の金額ばかりでなく、藩政上からも、信長は、その節約を心がけていたものだった。で、二年間ほど、村井長門守に奉行を命じて、

やらせてみたが、少しも実績が上がらなかった。反対に、年費が殖えたりした。その上、節約という声の感じが、家中の心理を、萎微させたり、歪めさせたりしたのみだった。

藤吉郎はまず、その窮屈と萎縮から、家中の気もちを解放した。それから彼は、信長の前へ出て、こう建言した。

「とかく冬中は、御家中の若殿輩も、足軽などお下の者も、総じて、屋内に引き籠りがちで、菜漬を喰うて、湯茶をのんで、埒もないむだ話に、徒然の日を送りがちに見うけられます。——炭薪の節約などより先に、御賢慮をもって、この悪習をひとつお矯め直し願わしゅう存じまするが」

「むむ。そうか」

信長は、彼のことばを容れて、すぐ老臣に命じた。

彼の老臣は、一番頭や足軽頭を集めて、家中一般に、平時の日課を励行させることに
ついて、熟議をかさねた。

武具の手入れ、講習、禅の実修、領土内の交代巡視。——それから射撃槍術の奨励はもとより、城内の土木もやらせ、小者たちには、暇があると、馬の沓まで作らせた。

要は。

閑ひまを与えないことだった。

一体、武将の気もちからすると、家中の侍たちは、わが子の如く可愛かった。かたく契ちぎられた君臣のあいだは、骨肉にひとしい愛情で結ばれていた。

いざ、戦いくさとなる日には、その者どもは、自分の馬前で——眼の前で、生命いのちをすてて戦い死ぬのだった。可愛くなくては——また、その愛情や君恩を感じないでは、馬前に死ぬ勇士はない。

従つて。

平時の日には、どうしても、つい寛大に流れやすかった。

また、何日戦いくさへ。

と、思いやるからであつた。

しかし、信長は、それがかえつて家臣らのためにも良くないことを考えていた折からなので、断じて、平時といえども、寸閑の暇もないように、修養や生活を正して、嚴重に日課を励行させた。

同時に。

奥向おくむきの女性たちにも、稽古事や、掃除や、また、籠城攻戦の場合の習練などもさせて、

起きるから寝るまで、暇のない生活規律を立てさせた。

もちろん自分自身も。

そして或る時、藤吉郎が見えた折、やや得意そうな顔して云った。

「猿、どうじゃ近頃は」

「はッ。御威令の効き目は見えて参りましたが、まだまだ」

「まだ足らんか」

「もう一層」

「どこがまだ不足か」

「御城内の風が、御城下一般の民家へも、浸みわたって行きますまでは」

「む。なるほど」

信長は近頃、かなり藤吉郎のことばに、信を抱いて、聴くようになっていた。

侍側の人々は、それをいつも、苦々しい顔して、白眼視していた。

なぜならば、彼のように、短い年月の間に、小者小屋から畳の上へ昇った例すら少ないのに、君前へ出て、献策めいたことを、直接にいうなど、もつての外な——と等しく眉をひそめるのだった。

しかし、年額千石以上の炭薪の消費高は、その冬の半ばからもう目立って節約されて来た。いや、藤吉郎自身は、各部屋をまわる度に、

「冬は寒いもの、炭薪など、吝^{けちけち}々せず、十分にお費^{つか}いなさい。いちいち部屋頭^{がしら}の御判なども要らぬ。自由に、炭倉へ参つて、要るだけお持ちなされ」

と、大まかなことをいつてはいたが、一面、家中一般に、暇がなくなったので、むだな炭火を費やして、炉を囲んでいる時間などなくなってしまったのである。

また、多少暇があつても、体を動かして、絶えず筋肉に緊張を持つと、自然、炭火などは不用品になり、炊事その他の燃料もすべて簡略になって来て、一カ月の燃料が三カ月もある程、變つて来た。

が——藤吉郎は、それでもまだ、自分の職分を達したものと、満足はしなかった。

来年の冬の炭薪は、夏山のうちに、山で買入れの契約をする。彼は、お城御用の商人^{あきんど}を案内に立て、山支度して検地に出かけた。

薪山の検地などは、従来から形式だけのものに過ぎない。

あの山の櫓^{なぐら}何百本。

この山のくぬぎ何本。

と、山商人に引つ張りまわされて克明に視て歩いたところで、一山から炭薪が何石とれるか、素人目では見当もつかなかった。
しろうとめ

百姓仕事や、町のことなら、何でも心得ているつもりだが、藤吉郎にも炭薪のことなどは、仔細に分つていなかった。

「む、む。左様か。——なるほど、なるほど」

彼も、従来の慣例どおり、ざつと歩いて、形式だけで降りて来た。

あきんど

商人たちは、その晩、奉行の一行を、土地の豪家に招待して、盛宴を張る——。これも前からのしきたりであつた。

「今日は、お奉行様始め、御大儀さまにござりました」

「さだめし、お疲れのことで」

「何の設けもございませぬが、こよいは悠々と、おくつろぎの程を」
ゆるゆる

「そして、この後とも宜しくひとつ」

こもこもに挨拶やら追ついしやう従しやうやら、下へも措かない歓待である。

勿論、酌人も揃っている。どこの唄い女うためか娘か、とにかく身ぎれいに化粧もこらしたのが、奉行の側につききりで、杯を洗う、肴さかなをすすめる。漬はなといえはすぐ漬紙はながみ。

「よい酒じゃ」

藤吉郎は、悦に入っている。悪い気もちであろう筈はない。
脂粉しふんのにおいを見廻して、

「美人だな。どれもこれも」

と、いった。

商人のひとりが、

「お奉行様にもやはり、女子おなごはおすきでござりまするか」

畏る畏る戯れると、当り前なことを訊く——といわないばかりに、藤吉郎は真面目くさ
って、

「女子もすき、酒もすきじゃ。世の中にある物はみなよいな。ただ心せぬと、よいものも
仇あだになる」

「仇にならぬ程に、どうぞお氣に召しましたら、酒など、花など」

「よしよし。氣随気ままにさせて貰おう。——ところで、その方ども、商売のはなしは一
向にせんが、察するところ、遠慮しておるとみえる。では、この方から切り出すが、きよ
う歩いた山の雑木台帳ぞうき、これへ見せてくれい」

「どうぞ御覧遊ばして」

「ふム、明細じやの。木の数はこれで相違ないのか」

「相違ごいませぬ」

「これで炭薪すみぎ八百石御上納とあるが、これだけの山で、この石量になるのか」

「昨年よりは、お納めの額たかが減りましたので、今日、御検地の山の分で、左様になりますわけ」

翌朝、商人たちが、お奉行の御機嫌伺いというので来てみると、藤吉郎は、朝まだ暗いうちに起きて、山へ行つたというので、驚いて彼らは山へ追つて行つた。

見ると。

藤吉郎は、足軽や附近の木樵きせり百姓などを督励して、各に三尺ほどに断きらせた縄束なわたばを持たせ、買入れの契約をした山一帯の樹木の根に一筋ずつその縄を結び付けさせていた。縄数は最初に何千本と分つていた。それが終つて、残部の計算をしてみると、立木の数がすぐに知れる。台帳に記載してある立木の数と、実際の数とを照し合わせてみると、ほとんど、三分の一以上も、数量には懸値があつた。

「商人どもを皆ここへ呼び集めろ」

藤吉郎は、木の切株に腰をすえて、下役の者に吩咐いいつけた。

商人たちは、平伏した。

何を云い出されるかと、内心おそ惧れおののいていた。

いくら山を検分しても、立木の数など、素人しろうとに分るものでないし、実際にまた、これまでの炭薪奉行は、台帳に書いてある数量をそのまま、鵜うのみにしていたものだが、こんどの新奉行は、その手に乗らなかつた。

「商人ども」

「へい……」

「この台帳の数と、実際の木の数とは、だいぶ違うではないか」

「……はあ」

「はあではない。これは如何なるわけだ。その方どもは、多年の御恩顧を、ありがたいとは思わず、かえって利に狎なれて、御領主を欺あざむき奉り、かような嘘を書き上げて、暴利をむさばりおつたな」

「……め。滅相もない」

「然らば、何でこのように数が違うのか。このままの数で炭薪をお納めするからには、御

納庫になる品も、百石ひゃくの炭は六、七十石、千石の炭薪は、実際には六、七百石しかお納めいたさぬのであろうが」

「いえ、なかなか、そのような理わけでは」

「だまれ。多年山より炭薪を伐りき出して職とするその方どもが、かような大きな眼違いをする筈はない。心得て致したとあれば、奉行を欺あざむき、御領主の国費を騙り取たった大罪と申さねばならぬ」

「恐れ入りました」

「一同の家財を没収し、断罪にしてもよいところだが、今までの役人方の手落ちもある。この度だけは、見のがして遣わすが、石数こくすうのところは、有態ありていの通り書き直して差し出せ」

「畏りましてござります」

「——が、それだけでは、免ゆるすわけには参らぬぞ」

「へい」

「古語にもある。一本の木を伐らば、十本の木を植えよと。——昨日よりこの地方の山を見ると、年ごとに伐きる木は多いが、ほとんど、植えた跡は見ぬ。かようなことで年経

る時は、いつか麓ふもとの田野は洪水に見舞われ、ひいては国の衰えとなろう。国衰える時は、その方どもへも当然、負担や不幸はかかつて来るものぞ。真まことの利を積み、真の家富を願しあわせい、子孫の幸を願うなれば、まず国を強うせねばなるまい」

「はい……」

「その税として、また、今日まで暴利をむさぼった罰として、今後、千本の木を伐り出す時は、五千本の苗を必ず差し出すこと。固く申しつけるが、どうじゃ、不服か」

「ありがとうございます。それでお免ゆるし下さるものなら、苗木は必ず差し出します」

「うム。然らば、人足料として、台帳に書き出しの数量に、五分の割増しは認めて遣わすであろう」

それからまた、その日、手伝わせた百姓たちには、伐木の跡の植林をいつけて、苗木本について幾値いくちと手間賃をきめ、それは城内から支払うであろうと云い渡した。

「さ、帰ろう」

と、藤吉郎に促うながされて、商人たちは、ほっと生きた心地を取りもどした。そして口々に「驚いたなあ。こんどのお奉行には、うっかりできぬぞ」

「だが、分ったお方だ」

「今までのように、ぼろいわけにはゆかないが、といつて、損はしない。まあ地道にやろう」

山を降りながら、囁き合っていた。

麓へ来ると、商人たちは、もう倉皇と帰りかけたが、藤吉郎は引きとめて、

「お役が終った。今夜はわしに従いて来い。わしも今夜は寛ぐであろう」

と町の旅舎へ、一同を引つ張つて来て、ゆうべの返礼に、馳走を振舞い、お奉行の彼もいい機嫌に酔つて、すっかり砕けたところを見せた。

よねまんじゅう
米 饅頭

彼は、愉快だった。

ひどく独りで悦に入っていた。

——というわけはその日、

「猿」

と、例によつて信長に呼ばれ、信長からこういう言葉をうけたからだった。

「台所方は、そもそも、経済を旨とする所なのに、その台所に、そちのような奴を置くのは、大の不経済と申すものだ。以後うまやかた厩方うまやかたを申し付ける」

そして、知行ちぎよう三十貫、城下の侍小路に、宅地をもつかわす——という君恩を受けたのだった。

欣うれしかった。

彼は、欣うれしいことに会おうと、正直に欣うれしがる男だけに、独りニヤニヤと顔へ出て来るものをつつまれなかった。

早速、以前の同役、がんまくの小屋をたずねた。

がんまくはまだ、草履取をしていた。

「どうだ、暇はないか」

「なんで？」

「城下へ参つて、一いっこんおご献奢けんおごりたいが」

「ま。遠慮しましょう」

「どうして」

「木下殿には、今では、台所奉行というお役。このがんまくは、以前に変らぬ草履取。あ

あなたの沽券こけんにかかりましょう」

「ひがむな。——そんな氣持なら、真つ先に訪ねては来ない。実は、身に過ぎたお取り立ての上にもまた、今度は、お厩うまやかた方三十貫と仰せつかった」

「ほ……」

「小者小屋にはいても、おぬしの忠義な心底を、おれは頼もしく思っている。——で、飲のびを分ちたいのだ。どうだ、来ないか」

「それはめでたい。——だが藤吉郎殿、おぬしは俺より正直者だな」

「む。なぜ」

「おぬしは何事も、おれに打ち明けて包むことがないが、わしは実は、多分におぬしへ隠かくしていた。本当のところをいうと、わしはお草履取はしていても、例の……時折特別な御用を勤めるので、殿のお手許てもとからじかに、莫大なお手当を戴ひそいていて、それは皆、密かに国元の屋敷の方へ送っておるのだ」

「ふム……故郷こくにに屋敷など持っておるのか」

「江州ごうしゅうの柘植村つげむらへ行けば、一族もいるし召使も二十人くらいはいる」

「ははあ、甲賀こうがだな」

「柘植村は伊賀だ」

「ああ、そうか」

「だから、貴公に奢られては、こちらが面目ない。いずれお互いに、もっと立身したら、奢りもしよう。奢られもしよう」

「そうか。知らなかった」

「まだ、風雲はこれからだ」

「そうとも、これからだ」

「預けておこう。将来へ」

「いや、よからう」

藤吉郎は、そこでまた、よけいに愉快になつて来た。

実に、社会は明るい。

彼の見る眸のまえには、陰だの暗だのというものがない。

怖ろしい秘密性を持つ乱波者のがんまくすら、彼には遂に、何も隠さなかつた。織田一藩で知る者のない、身の上までを、簡単ではあるが、とうとう打ち明けてしまった。

きよう沙汰された禄は僅かに三十貫ではあるが、この三十貫のうちには、主君の信長が、

ここ二年ばかりの台所奉行としての、自分の働きを認めてくれた知己の意味がこもっている。

彼は、それが欣^{うれ}しいのだ。炭薪の消費も、一年間の額^{たか}、半分以下に減つて来たが——そんな数字よりは欣^{うれ}しいのである。

（経済を旨とする台所方に、そちのような奴を置くのは、そもそも大の不経済——）

こう信長からいわれたのは、何にしても、忘れられない歎^{なげ}びだった。——信長公もまた、うまいことを仰^{うや}つしやる大将ではある——と感心しながらも、欣^{うれ}しくて堪^たまらなかった。

いわゆる、おめでたい男に、傍^{はた}眼^めからは、見えもしよう。

独りで、にやにやと、時々、笑くぼを泛^うべながら、彼は午^{ひる}からお城を出て、清洲^{きよす}の町をぶらついていた。

町を歩くにも、得意であつた。

ここ五日は、転役を機会に、彼の体には、休日を与えられていた。——その間に、拝領した屋敷に——どうせ侍小路のうちでも最も小さい、門と垣と五間ぐらいな小屋敷だろうが——それにしても家財を備えつけ、婆^{ちゅうげん}やと中間^{ちゅうげん}の一人ぐらいは、召し使わなければならない。

「生れて初めて、一戸の主人となるのだ。その家を見ておこうか」

こう考えて、道を変えた。

附近は、お厩^{うまやもの}者ばかり住んでいる。組頭の家をのぞいて、ちよつと、挨拶をしておく。組頭はいなかったが、妻女が出て来て、

「まだ、お独りでいらつしやいますか」

と、訊くので、

「独り者でござる」

ありのままに答えると、

「では、何かと、御不便でございましょう。宅には、召使もおり、家具の余分なものもありますから、何など、お入り用なものはお持ち下さいませ」

親切な奥方であつた。藤吉郎は、いずれ充分、わがままなお願いに出るでしょう、とあらかじめ頼んで、門を出た。

すると、奥方は、自身わざわざ門の外まで出て来て、二人の中間を呼び、

「新規に、お厩^{うまや}方へ變つて来られた、木下藤吉郎様じゃ。あの、桐^{きりばたけ}畑^{てすき}の空屋敷へ、近いうちお移りになるそうな。——ちよつと、御案内して、お前方の手空の時、お掃除など

しておいてお上げなさい」

と、いいつけてくれた。

で——藤吉郎は、中間に案内されて、これからのわが家になる官舎へ行ってみた。

想像以上、大きい家なので、

「ほう……これは立派な家だ」

と、門へ向つて呟いた。

聞けば、前には、小森式部こもりしきぶという者が住んでいたとか。それも大分前のことらしく、屋

敷は荒れているが、しかし、彼の眼には大きく立派に見えてならなかった。

「裏は、桐畑でござるな。これも何やら吉兆きつちようでござる。てまえ木下家の紋が、先祖以

来、桐を用いておりますからな」

確しかとした記憶はないが——彼は何だかそんな気がしたのである。父弥右衛門やえもんの持つてい

た古い鎧よろい櫃びつか、短刀さやの鞘さやだかに、そんな紋を見た気がするので、案内してくれた中間

に向つて、ともかくそういつてしまった。

彼自身も、気がついていることであるが——とかく機嫌がよい時は調子づいて、そう必要もないことをも、また、確しかと肚にもないことでも、得意にまかせて、喋舌しゃべつたりする傾

向がある。

口から出てしまった後で、

(こいつ、いい程なことをいう)

と、自分で誡めたりすることもあるが、決して、悪い肚があつたり、軽薄でいうのではないから、自分では、さしたることとも思っていない。

しかし、専ら、

(猿めは、法螺ほらをふく)

という一部の評も、その辺に原因していた。

そして、彼自身でもまた、

(そうだ。おれは、法螺ふきでないこともないな)

と、認めていた。

だが、そのために、彼の全部を誤認してしまつたり、また、毛嫌いしたりした小心な潔癖家は、遂に、彼の大きな生涯の同伴者にはなれない人々だった。

——それからしばらくすると、彼の姿は、清洲の町の、繁華な中心地に見出された。家具なども買ったらしい。

また古着店の前で、ふと立ち止まったら、偶然、桐の紋のついた陣羽織があったので、値を訊いてみた。

「安い」

彼はすぐ買って、すぐそこで着てみた。——すこし長いがみツともない程ではあるまいと、着て歩いた。

陣羽織といつても、青木綿あおもめんのひらひらしたやつで、ただ、襟だけに金欄きんらんに似た布きれが膝かりつけてある。誰が着たのか、桐の紋は、背中に白く染め抜いてある。

「見せたいなあ、母上に」

自分の姿を——そう思う。

ここらの繁華な町を歩けば、また感慨にたえないものがあつた。

新川の茶わん屋に奉公していた頃のことだ。陶器やきものを積んだ手押し車を押して、素跣足すはだし

で、町の者や、きれいな女を見る中を——その頃のみじめな自分の姿も思い出されるのだつた。呉服屋へはいった。

そこには、京織の上等な呉服ものが、棚に並んでいた。

何を買ったか、彼は、

「では、相違なく、届けてくれよ」

と、代金をおいて、外へ出て来た。彼の懐中ふところは、常にかくの如くにして、半日の休日には、空からになるのが常だった。

——よねまんじゅう
米饅頭。

と、青貝で文字を埋めた立派な看板が、町角まちかどの屋根にかかっていた。それは、清洲の名物で、いつも旅人が大勢腰かけ、一方では土地の客が混み合っていた。

「饅頭をくれい」

藤吉郎は、今そこから着て来たばかりの、大きな桐の紋を背負って、混み合っている客の中へはいった。

あかまえだれ
赤前垂の少女が、

「いらつしやいまし。ここでおあがりなさいますか、お土産でございますか」

藤吉郎は、一つの床几しょうぎに腰かけて、

「両方だよ。先にここで喰べる分を一盆。それからべつに、使いの駄賃は出すから、中村へ行くついでに馬子にでも頼んで、中村のわしの家へ、饅頭一折——大きな折に入れてな、届けておいてもらいたいのだ」

後ろ向きに働いていた店の亭主らしい男が、

「おう、旦那様で。まいどありがとうございます」

「よう。相変らず繁昌だな。今も例のところへ、届ける折を、頼んだところだが」

「はいはい。中村へは、よくこの辺からついでの衆もございますし、中村の衆も、お寄り下さいますから」

「いつでもいい、頼んでおくぞ。——それから、この手紙を、饅頭の折の中へ、入れてやってくれ」

藤吉郎は、懷中ふとこころに用意して来た手紙を、店の者に頼んだ。

母上へ とうきちろう

と、封の上に書いてあつた。店の者は、手にとって、

「何か、お急ぎの御用でも」

「なに、早いに越したことはないが、いつでもよい。何しろ、わしの母ときては、以前からここの米饅頭よねまんじゅうというと、眼のない好物なのでな……」

云いながら、彼も、一つ頬張つた。

だが、彼にとると、その饅頭の味には、すぐ涙を催して来るような思い出があつた。

母の好きな饅頭――

買つてやりたいが。自分も喰べたいが。と喉^{のど}から手が出るほど欲しく思いながらも、買えずに、手押し車を押して、さもしい我慢をしながらこの前を通つた少年の日が――いつもここへ来れば思い出されるのだつた。

「やあ。木下殿ではないか」

若い娘づれの武士。さつきからこちらを見ていたが、彼が、盆の饅頭を空^{から}にした頃、こゝう声をかけながら立つて来た。

「おお。これは」

藤吉郎は、頭^{かしら}を下げた。

弓^{ゆみ}之衆^{のしゆう}の浅野^{あさの}又右衛門^{またえもん}長勝^{ながかつ}なのである。小者小屋に勤めていた頃から、世話になつた人なので、格別、礼を篤^{あつ}うして、いんぎんに辞儀をした。

が――場所は、城内とちがい、町の米饅頭屋の土間なので、又右衛門も、きょうは気軽だつた。

「おひとりかな」

「はい。一人で」

「こちらの床几しょうぎへ参らぬか——あれへ寧子ねねも連れて来ておるで」

「ほ。お嬢様も」

藤吉郎は、横を見た。

すぐ床几一つ隔へだてて、うしろ向きに、十七、八の小がらな麗人が、白い襟足を見せて、騒々しい辺りの客の中に、独り端然として、腰かけていた。

麗人——といったが、藤吉郎も女にかけては、かなり鋭い審美眼を備えている。あながち、彼の眼だけにそう見える女性ではなく、誰が見ても、

(美人！)

と、迷わずに云い切れる程な——それは十人並み以上の娘だった。

寧子と書いて、ねねと訓よむ。その可憐な名も、この娘の人がらにふさわしかった。小さく整った容貌かおだちに、ぱちりと、聡明らしい眸ひとみを静かに持っている。

又右衛門は、藤吉郎を誘って、その明眸の持主の前へ連れて来た。

「寧子ねね」

「はい」

「こちらは、木下藤吉郎どのというて、この度、御台所御用人から、お厩衆うまやしゅうへご登とう」

庸^うになったお方だ。お見知りおきを願っておくがよい」

「……はい。あの」

寧子は、顔を染めて、

「木下様には、初めてではございませぬ」

「何。知っておる……?」

「ええ」

「いつ、どこで」

「お手紙をいただきましたり、また、お贈物をいただいたりして」

又右衛門は、仰山に驚いた顔をして、

「これは怪^けしからぬ。手紙などを遣^やり取りいたしておったのか」

「わたくしからは、差し上げたことはございせんが」

「それにせよ、父のわしへ、黙っておるなど、不埒^{ふらち}な沙汰じゃ」

「いいえ、お母様には、いちいち申し上げてございます。お母様は、度々のお贈物などは、かたくお断りいたしていらつしやいますが、お節句の、正月のという度に、木下様からは、よく頂戴物をいたします。……お父様からも、お礼を申しあげて下さいませ」

「ふーむ」

と、又右衛門は、娘の顔と、藤吉郎の顔を見くらべて、

「いや、男親という者は、恐こわそうな眼ばかりしていて、存外、迂闊うかつなものよ。……知らなかったわい。……よく、猿殿は抜け目がないぞ、という噂は聞いていたが、まさか、わが娘にお目が止まっていようとは思わなかった。——あはははは」

「いや、どうも」

藤吉郎は、大きく後ろへ手をまわして、頭を搔いた。

非常なてれ方だった。

しかし、苦労人の浅野又右衛門が、笑ってくれたので、いささか救われた顔だったが、それにしても、真つ赤になった顔はなかなかさめなかった。

事実。

寧ね子の方では、どう思っているか知らないが、先の意志にかかわらず、藤吉郎は、寧ね子が好きだった。

——で、中村の母と共にいる姉の所へ、時折、帯や反物など求めて届けてやるついでに、寧子の許へも、身に過ぎた京きょうぞめ染だの、堺さかい織おりの錦にしきなどを奮発して、届けておくこと

も忘れなかつた。

青空文庫情報

底本：「新書太閤記（一）」吉川英治歴史時代文庫、講談社

1990（平成2）年5月11日第1刷発行

2010（平成22）年4月1日第25刷発行

初出：太閤記「読売新聞」

1939（昭和14）年1月1日～1945（昭和20）年8月23日

続太閤記「中京新聞」他複数の地方紙

1949（昭和24）年

※初出時の表題は「太閤記」「続太閤記」です。

入力：門田裕志

校正：トレンドイースト

2014年11月14日作成

2015年11月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新書太閤記

第一分冊

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>